プラトン全集 3

ソピステス

藤 沢 令 夫 訳

ポリティコス(政治家)

岩 波 書 店

編集
田中美知太郎
藤 沢 令 夫

目次

凡例

一、本全集は底本として、バーネット版プラトン全集(J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts)を用い、これと異なる読みをした箇所は注によって示す。

二、訳文上欄の数字とＢＣＤＥは、ステファヌス版全集(H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578)のページ数と各ページ内のＡＢＣＤＥの段落づけとの対応――おおよその――を示す(ただしＡは省略した)。引用は、このページ数と段落により示される(例えば『パイドロス』253Ｃ)。

三、各対話篇における章分けは、一八世紀以降フィッシャー(J. F. Fischer)の校本に由来すると見られる一般に慣用のものに従う。ただし対話篇により章別の一定していないものもあり、この場合は適宜区別を設けた。

四、対話篇名につけられている副題(ないものもある)は、ローマ時代のプラトン全集(トラシュロス)以来の、あるいはさらに古い伝承によるものである。所伝によって異同のある場合は、適切と判断されるものを選んでつけた。

五、ギリシア語の片かな表記は、ΦΧΘとΠΚΤとを同じように「プ」「ク」「ト」とし、母音の長短は普通名詞においてのみ区別し(例、ソピアー)、固有名詞においては区別しない(例、ソークラテースでなく、ソクラテス)。

六、〔 〕の括弧は訳者による文意の補足を示す。

七、略記号　DK＝H. Diels u. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*.　Diog. L.＝Diogenes Laertios.　古注＝*Scholia Platonica* (ed. W. C. Greene).

八、本全集における対話篇の収録順と各巻への配分は、右のトラシュロス編全集における九つの四部作集(tetralogia)の順序と括り方に従っている。

ソピステス

――〈あるもの〉(有)について――

藤沢令夫訳

登場人物

テオドロス
ソクラテス
エレアからの客人
テアイテトス

一

テオドロス　きのうの約束どおりに、(1)ソクラテス、われわれ自身もこうしてきちんとやって来ましたし、それに、ここにお客をひとりお連れしました――エレアの生まれで、パルメニデスとゼノン門下の仲間のひとり、大へん哲学に通じた方です。

ソクラテス　おや、テオドロス、あなたは自分でそれと知らずに、ただのお客ではなく、あのホメロスが言っ

B

ているような、ひとりの神を連れて来られたのでは？　ホメロスの言うところによれば、(2)正しい慎みの心を分けもった人間には神々が付き添ってくださるのであるが、とりわけ、異国の客を守る神がそういう人の道連れとなって、人間たちの非道と正道を見守るのだということですからね。だから、あなたといっしょに来られたこの方も、きっと何かそういう人間並み以上の存在であって、議論におけるわれわれの至らぬところを監視して論駁するためにやって来た、論駁の術に長(た)けた神なのではありますまいか。(3)

テオドロス　いや、ソクラテス、この客人はけっしてそういう傾向の方ではありません。あの論争のための論争に熱心な連中よりも、もっと訳のわかった人です。そして私は、この人が神であるとはけっして思いませんが、

C

神のような人であると思います。私としては、哲学者なら誰をでも、そのように呼んでいるのですから。

ソクラテス　ええ、それは正しい呼び方ですとも、友よ。けれども、その哲学者の種族というのは、ほとんど神の種族と同じくらい、それと見分けるのがきわめて容易でないといえるのではないでしょうか。何ぶんにもこ

の人たちは——贋(にせ)ものではなく本ものの哲学者たちのことですが、——ほかの人々が無知であるために、じつにありとあらゆる姿をとって現われながら、「国々を訪れ」(4)ては、上方から下界の生活を見守るのですからね。彼らは、或る人々からはまったく無価値の者と思われ、或る人々からは絶大な価値ある者と思われる。或るときは政治家のような外見で現われ、或るときはソフィストのような外見で現われ、また或るときは、まったく気が狂っているのだというふうに、一部の人たちに思わせるものです。

D

ところでしかし、もし御当人さえ差支えなければ、あちらの土地の人々はこうした事柄をどのように考え、どのような呼び方をしていたかということを、この客人から聞かせていただければ有難いのですが。

217

テオドロス　こうした事柄とは？

1　ソクラテス、テオドロス、テアイテトスが対話人物である『テアイテトス』は、ソクラテスがテオドロスに向かって言う「明朝早く、テオドロス、ここでもう一度われわれは出会うことにしましょう」(210D)という言葉で終っていた。ここの「きのうの約束」という言葉は、明らかにこれを受けることが意図されている。『テアイテトス』の対話の場所は、アテナイの或る体操場もしくは相撲場であった。「解説」の「対話設定年代」(三九一ページ)参照。

2　『オデュッセイア』第九巻二七〇—二七一行、第一七巻四八三—四八七行参照。

3　テオドロスがこのエレアからの客人を「パルメニデスとゼノンの門下の仲間のひとり」と紹介したので、ソクラテスは、この人物がゼノンの流れを汲む論争のための論争術または問答競技(エリスティケー)の専門家ではないかと警戒し、その懸念をテオドロスと客人への丁重な言い方に託して表明したもの。テオドロスはこれを察して、次の言葉でソクラテスの懸念を打ち消す。そしてこうしたやりとりによって、この対話篇の主役となるエレアからの客人の哲学的立場が説明されて行くのである。

4　先に216A～B(注2参照)で言及されたホメロス『オデュッセイア』第一七巻の箇所に出てくる言葉。

ソクラテス　ソフィストと、政治家と、哲学者のことです(1)。

テオドロス　何をいったい、たずねたいのですか？　その三者についてどのような点がわからなくて、質問するつもりになったのですか？

ソクラテス　こういうことです。——あちらの人々は、いま挙げた三者すべてを一つのものと考えているのか、二つのものと考えているのか、それとも、名前が三つあるのに応じて、その種族も三つに分け、それぞれに一つずつ名前を割り当てているのか、ということです。

テオドロス　いや、そのことなら、私の察するには、この方は少しも説明を惜しまれることはないでしょう。それとも、どうでしょうか、客人？

B

エレアからの客人　おっしゃるとおりですとも、テオドロス。吝(やぶさ)かな気持はまったくありませんし、お答えするのがむずかしいわけでもありませんからね——私どものところでは、それらをまさに三つのものと考えているのです。ただし、その一つ一つがそもそも何であるかを明確に規定するのは、けっして小さな仕事ではないし、容易にできることでもありませんが。

テオドロス　そういえば、まったく偶然にも、ソクラテス、あなたが取り上げたのと非常に近い問題を、じつはわれわれもここへ来る前に、この方にたずねていたところなのです。そしてこの方は、ちょうどいまあなたに向かって言ったのと同じことを、そのときもわれわれに向かって言訳けなさいました。その問題については充分に聞いて教わったことがあるし、憶えていないわけではないと、みずから認めながらですよ。

二

C **ソクラテス** それでしたら、客人よ、どうかこのわれわれの初めてのお願いごとを、拒まないでください。ただ、少しだけお聞きしておきたいことがあります。あなたの慣わしとしては、誰かに説明したいと思われる事柄を話すにあたって、ひとりあなた御自身だけで長い議論をくりひろげて論じるのがお好きですか？ それとも、質問を介して論じるやり方のほうをとられますか？ たとえば、いつかパルメニデスもそういうやり方で、大へん見事な議論を展開されたところに、私は若いときに同席したことがあります。あの人のほうはそのとき、もうずいぶんのお年でしたがね。(2)

D **エレアからの客人** それは、ソクラテス、対話の相手が面倒のない、素直な人間である場合なら、相手があって論じるほうがらくですし、そうでなければ、自分だけで話すほうがらくですね。

ソクラテス それでしたら、あなたはここにいる人たちのなかから、誰でもお望みのままの人を選んでくださって結構ですよ。誰でもがみな、おとなしくあなたに応答することでしょうから。しかし、私の意見をとり入れ

---

1 こうしたソクラテスの言葉は、この『ソピステス』——および次に来るべき『ポリティコス（政治家）』——の執筆の背後にある大きな構想とモチーフを示唆している。「解説」（三九二—三九四ページ）参照。

2 『パルメニデス』篇への言及である。同対話篇では、パルメニデスは「およそ六五歳くらい」（127B）、ソクラテスは「その時ごく若かった」（127C）というふうに年齢が設定されている。同じ『パルメニデス』篇への言及は、『テアイテトス』183Eにも見られる。

ていただけるなら、若い人たちのなかから誰かを選ぶのがよいでしょうね——このテアイテトスでも、あるいはほかの誰か、あなたがこれはと思われる者でも。

エレアからの客人　ソクラテス、こうしていま初めてお会いしたというのに、短い言葉のやりとりで討論を進めることをしないで、まるで弁論を披露するような調子で——自分だけで話すにせよ、他の人を相手に話すにせよ——長々と長広舌をくりひろげるのは、私としては何となく憚(はばか)られるところです。というのも、ほんとうのところ、いましがた話題にされた事柄は、あのように質問された場合にひとが期待するかもしれない程度の簡単な問題ではなく、非常に長い議論を必要とするものなのですからね。そうかといってまた、あなたをはじめ、ここにおいでの方々のお頼みを聞き入れないというのも、とくにあなたが先ほどのようにおっしゃってくださった手前、客として礼を失した粗野な態度であると私には思われます。げんに、テアイテトスに私の対話相手となってもらうということは、私が先に自分でこの人と話し合った経験からいっても、あなたがいますすめてくださったことからいっても、私としては大歓迎なのですから。

E

テアイテトス　それならぜひ、お客人、そのようになさってください。そうすればあなたは、ソクラテスが言われたように、ここにいるみなの者の願いをかなえて歓ばせることになるでしょう。

218

エレアからの客人　おそらくそうした点に関しては、もうこれ以上何も言うべきことはないだろうね、テアイテトス。いまやこれから後は、どうやら、君を相手に議論が行なわれることになるようだ。しかし、もしかして議論が長くなるために君が苦労して、つらい思いをするようなことがあったら、その責任はこの私にあるのではなくて、ここにいる君の仲間の人たちにあるのだと思ってくれたまえ。

B

テアイテトス　いや、いまのところ私は、そう簡単には、へこたれないだろうと思っています。しかし、もしひょっとしてそういうことにでもなったら、ここにいるソクラテスに加わってもらうことにしましょう。彼は、こちらのソクラテスと同じ名前ですが、私と同年齢で、体育の仲間です。いろいろと多くのことで私と苦労を共にすることには、よく慣れています。(1)

三

エレアからの客人　それは結構。そのことについては、議論が先へ進んで行くうちに、君が自分でよく考えて決めることにしたらよい。だがさしあたっていま、君は、まずソフィストのことから始めて――それが順序だと私には思われるのだが――、私といっしょに考察してもらわなければならない。ソフィストとはそもそも何であC るかを探求し、それを言論(定義)によって明らかにして行きながらね。というのは、いまのところ、このソフィストについて私と君とが共通にもっているのは、ただその名前だけであって、われわれがその名前で呼んでいる当の事柄については、おそらくわれわれは、めいめいが自分だけの勝手な仕方で了解しているのかもしれないのだからね。けれども、およそつねに何ごとにつけても、それを規定する言論(定義)をはなれて、ただ名前についてだけ合意しているべきではなく、むしろ、言論(定義)を通じて、当の事物そのものについて意見の一致をみる

1　この若いソクラテスは『テアイテトス』においても、テアイテトスとともに無理数の規定を試みた仲間として名指されているが(147D)、本篇と同様に、傍にいるだけで発言はしていない。しかし『ポリティコス(政治家)』では、テアイテトスに代ってエレアの客人の対話相手となる。

ようにしなければならない。

ところで、われわれがいま探求しようと意図している種族、つまりソフィストのことだが、これがそもそも何ものであるかということをつかまえるのは、なかなかもって容易なことではない。しかしまた、およそ重大な仕事が首尾よくなしとげられなければならない場合には、そのような事柄については、当の最も重大な事柄に入る前に、まず些細で比較的容易な事柄においてそのやり方を練習しなければならないというふうに、古来からすべての人に考えられている。そこでいま、テアイテトス、私としては、われわれ自身もそういう行き方をとることを提案したい。つまり、ソフィストの種族というのは厄介で、狩猟して捕えることのむずかしい相手だと考えたうえで、その前にまずほかのもっと扱いやすいものにおいて、ソフィストを追求する方法をあらかじめ練習するということだ。もし君のほうで、何かほかにこれよりももっとらくな道を、教えてくれることができなければね。

D

テアイテトス　いいえ、できません。

エレアからの客人　それならば、何かつまらぬもののなかから追求の対象を選んで、それをもっと重要なもののための範例とすることを、試しにやってみようか？

テアイテトス　ええ。

E

エレアからの客人　では、何をいったいそのような例として立てたらよいだろうか――それはわかりやすくて、些細なものでありながら、しかもそれを定義するには、もっと重大なもののどれにも劣らぬだけの言論を要するものでなければならないのだが？　たとえば、〈魚釣師〉(魚を釣る人)というのは、どうだろう。これなら、

219

誰にでもよく知られているものだし、それほど何かあらたまって重大視するほどのものでも、ないのではないかね？

テアイテトス　そのとおりです。

エレアからの客人　しかもそれは、われわれの目的とするもののためにけっして役に立たぬとはいえないような、探求の方法と定義をわれわれに提供してくれるものと、私には期待できるのだ。

テアイテトス　そうだとよいでしょうね。

四

エレアからの客人　さあそれでは、次のようにしてそれに取りかかることにしよう。では答えてくれたまえ。――〈魚釣師〉とは、技術を身につけた者とみなすべきだろうか、それとも、技術をもたぬ者であって、ただ何かほかの能力をもつだけだとみなすべきだろうか？

テアイテトス　技術をもたぬ者とは、けっしていえないでしょう。

エレアからの客人　しかるに、およそすべての技術は、ほぼ二つの種類に分かれるといってよい。

テアイテトス　どのようにですか？

エレアからの客人　農業、およびすべての死すべき身体(生きもの)を世話して育てる仕事、さらにまた、組み

B

立てられたり形づくられたりする、われわれが道具と呼ぶところのものに関わる仕事、そして、真似て描写(再現)する技術、――これらすべては、きわめて正当にこれを一つの名前で呼ぶことができるだろう。

テアイテトス　どんなふうにして、何という名前で呼ぶのでしょうか？

エレアからの客人　あるものがそれまでは存在しなかったのを、ひとが後で存在へともたらす場合、そのようなすべてのものについて、存在へともたらす人は「作る」のであり、もたらされるものは「作られる」のであると、こうわれわれは言うはずだ。

テアイテトス　正しい言い方です。

エレアからの客人　しかるに、われわれがいま挙げた仕事はどれもみな、この作るということへ向けて、自己自身の力をはたらかせるものであった。

テアイテトス　ええ、たしかにそういう仕事ばかりでした。

エレアからの客人　したがってわれわれは、それらを一つにまとめて、〈作る技術〉と呼ぶことにしよう。

テアイテトス　そういたしましょう。

c

エレアからの客人　ではその次に、こんどは、ものを学ぶことや知ることを業とする種類のものの全体、また、金儲けや競争や狩猟に関わる種類のものを、全体として取り上げてみよう。これらのどれ一つとして、ものを作り出すのではなくて、すでに存在していたり生じてしまったりしているものを、言葉や行動により手に入れたり、あるいは他面、他人が手に入れるのを許すまいとするものなのであるから、これらすべての部門をつらぬいて〈獲得の技術〉といった呼び方がなされるならば、最も適切であるといえるだろう。

テアイテトス　ええ、たしかに適切でしょう。

五

D

エレアからの客人　では、技術の全体は〈獲得の技術〉と〈作る技術〉とからなるとして、問題の〈魚釣りの技術〉を、テアイテトス、そのどちらに入れたらよいだろうか？

テアイテトス　それはむろん、〈獲得の技術〉のほうでしょう。

エレアからの客人　ところで、その〈獲得の技術〉には、二つの種類のものがあるのではないか？　そのひとつは、合意にもとづいてお互いに交換することに関わるものであり、贈物や賃銭や購買を介して行なわれる。あとのひとつは、行動によるにせよ言葉によるにせよ、力ずくで手に入れることを仕事とするもののすべてであって、これは捕獲に関わるものということになるだろう。

テアイテトス　たしかに、おっしゃることから考えて、そうなるように思われます。

エレアからの客人　ではどうだろう、――その〈捕獲の技術〉を二つに分けるべきではないだろうか？

テアイテトス　どのようにしてですか？

E

エレアからの客人　捕獲のうち、公然と行なうもの全体を闘い取る行為となし、相手に気づかれないように行なうものすべてを狩猟行為となすことによって。

テアイテトス　はい。

エレアからの客人　しかしまた、その〈狩猟の技術〉を二つに分けないでおくのは、理に合わぬことだ。

テアイテトス　どのように分けるのか、おっしゃってください。

エレアからの客人　ひとつは無生物の狩猟、もうひとつは生物の狩猟、というふうに分けることによって。

テアイテトス　たしかにそうなります。もしも、その両方が共に存在するならば。(1)

220

エレアからの客人　当然存在してしかるべきだろう。そしてわれわれとしては、無生物の狩猟のほうは、潜水術の若干の部分(2)やその他それに類する些細なものを除いて、特定の名称をもっていないことでもあるし、取り上げずにおくことにして、もうひとつのほうは、生命ある動物の狩猟であるから、これを〈動物狩猟術〉と呼ばなければならない。

テアイテトス　そういたしましょう。

エレアからの客人　しかるに、その〈動物狩猟術〉には二つの種類のものがあると、正当に言いうるだろう。そのひとつは、陸上を歩行する種族を相手とするもので、多くの種類と名前によって分類されているけれども、〈陸上動物狩猟〉であると言えばよいし、もう一方の、泳ぐ動物を相手とするすべては、〈水棲動物狩猟〉と呼ぶことができる。

テアイテトス　ええ、たしかに。

B

エレアからの客人　さらに、泳ぐ動物には、翼をもった種族(3)と、水中に棲む種族とがあるのをわれわれは見るのではないかね。

テアイテトス　ええ、むろん。

エレアからの客人　そして、翼をもつ種族の狩猟の全体は、〈鳥猟〉というふうに言われているはずだ。

テアイテトス　たしかにそう言われています。

エレアからの客人　他方、水中に棲む種族のそれは、ほぼその全体が〈魚猟〉（漁）だ。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　ではどうだろう、――この後者の猟（漁）をさらに、われわれはその最も主要な部門別に従って、二つに分けることができるのではなかろうか。

テアイテトス　どのような部門別に従ってでしょうか？

エレアからの客人　一方には、囲いこむことだけによって猟（漁）を行なうやり方があり、他方には、打って傷つけることによるやり方があるという、この区別に目を着けるのだ。

テアイテトス　それはどのような意味でしょうか？　どのようにその二つをそれぞれ区別して、そうおっしゃるのですか？

C

エレアからの客人　一方についていえば、獲物を逃がさないために取り囲んで閉じこめるようにするものはすべて、囲みこむものと名づけてよいからだ。

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　だから、さまざまの籠だとか、投げ網だとか、羂や網などによる仕掛だとか、その他この類いのものは、囲いこむものと呼ぶほかはないだろうね？

1　「無生物の狩猟」というものが認められるならば、ということ。

2　たとえば、海綿の採取。

3　水鳥の類。

テアイテトス　ほかに呼びようはありません。

エレアからの客人　そうすると、われわれは、猟（漁）のこの部門を〈囲み漁〉とか、あるいは何かこれに類する名で呼ぶことになるだろう。

テアイテトス　ええ。

D **エレアからの客人**　他方、さまざまの鉤(かぎ)や三叉の銛(もり)を用いて、傷つけることにより行なわれるものは、いま言ったのとは異なるやり方であるが、われわれとしてはこれを、いまは一つの言葉で、〈傷つける漁〉とでも呼ばなければならない。それとも、テアイテトス、何かもっとうまい言い方があるだろうか？

テアイテトス　名前のことには気をつかわないでおきましょう。いまおっしゃったので、じゅうぶん間に合いますから。

エレアからの客人　それでは、その〈傷つける漁〉のうち、夜間に火の光のもとで行なわれるものは、思うに、その猟（漁）にたずさわる人たち自身によって、〈篝火漁(かがりびりょう)〉と呼ばれるようになっているはずだ。

テアイテトス　たしかに。

エレアからの客人　これに対して、昼間に行なわれるものは、銛にもその先端に鉤がついているというので、全体として〈鉤漁(かぎりょう)〉と言われている。

E **テアイテトス**　たしかにそう言われています。

六

エレアからの客人　さらに、打って傷つけるやり方で行なう漁のうちの、その〈鉤漁〉に属するものでは、まず、上から下へと打ちつけて行なわれるものは、とりわけ銛がそういう仕方で使われるというところから、〈銛漁(もりりょう)〉と呼ばれていると思う。

テアイテトス　たしかに聞いたことがあります。

エレアからの客人　それに対する残りのものとしては、あと一つの種類だけだと言ってよいだろう。

テアイテトス　どのような種類のものでしょう？

エレアからの客人　打って傷つけるやり方がいま言ったのと反対の方向のもので、鉤針を使って行なわれ、銛を用いる場合のように、魚のからだのどこでもかまわずに打って傷つけるのではなく、いつも必ず獲物の頭と口のあたりを傷つけ、そして下から上へと反対の方向に、竿(さお)や枝によって引き上げるというやり方のものだ。——

221

どうだね、テアイテトス、その名は何と呼ばれるべきだと、われわれは言ったものだろうか？

テアイテトス　私の察するところでは、先ほど私たちが見出すべき課題として立てた、まさにそのことがいま、なしとげられたということだと思います。

七

エレアからの客人　してみると、いまや君と私とは、〈魚釣師の技術〉ということについて、ただその名前についてだけ合意しているのではなく、その事柄自体を規定する言論(定義)をも、充分に捉えたことになる。すなわ

B

ち、技術全体のうちで、その半分は〈獲得〉に関わるものであったが、獲得に関わるものの半分は〈捕獲〉に関わる

ものであり、捕獲に関わるものの半分は〈狩猟〉に関わるものであり、狩猟の半分は〈動物の狩猟〉を行なうものであり、動物の狩猟の半分は〈水棲動物の狩猟〉を行なうものであり、水棲動物の狩猟が分割された結果の下側の全体は、〈魚猟〉(漁)を行なうものであり、魚猟(漁)のうちの半分は〈打って傷つける〉やり方のものであり、打って傷つける漁のうちの半分は〈鉤漁〉であった。そしてそれのうち、下から上へと引き上げるやり方で傷つけるもの C は、そのやり方そのものにあやかった名前のもの(1)、すなわち、目下探し求められていた、その名も〈魚釣師の技術〉だったのである。(2)

テアイテトス ええ、まったくおっしゃるとおり、そのものは充分に明らかとなりました。

八

エレアからの客人 さあそれでは、この範例に従って、ソフィストについても、その何であるかを発見することを試みようではないか。

テアイテトス ええ、ぜひそういたしましょう。

エレアからの客人 さてそこで、先の場合最初にたずねられた問題はほかでもない、魚釣師とはただの素人(しろうと)であるとすべきか、それとも、何らかの技術を身につけた者であると考えるべきか、ということだった。

テアイテトス ええ。

D **エレアからの客人** それではいまの場合も、われわれはこのソフィストを、テアイテトス、ただの素人であるとすべきだろうか、それとも、まったくほんとうの知恵者(ソフィスト)であると考えるべきだろうか。

テアイテトス　絶対に素人とは考えられません。おっしゃることの意味は、私にもわかりますからね。つまり、そんな名前をもっている以上、どんなことがあっても素人などであるはずがない――。

エレアからの客人　すると、どうやらわれわれは彼を、何らかの技術をもった者としなければならないようだ。

テアイテトス　そうすると、いったいその技術とは、何の技術でしょうか？

エレアからの客人　神々に誓って、いったいわれわれは、この人がこの人と同族の間柄だということを、すっかり見のがしていたのだろうか。

テアイテトス　誰が誰とですか？

エレアからの客人　魚釣師がソフィストと。

テアイテトス　どうして同族なのですか？

エレアからの客人　両者とも私の見るところ、狩猟家であることは明らかだ。

E

テアイテトス　どのような狩猟をするのですか、一方の人は？　もうひとりのほうの人のことは、私たちがすでに話しましたけれども。

1　〈魚釣師〉(aspalieus)や〈魚釣師の技術〉(aspalieutikē)という名前が、「引き上げる」(anaspaō)という言葉に似ていて、そこから由来したものであるということ。

2　〈技術〉から出発して〈魚釣師の技術〉に到達するまでの分割の経過については、補注A（一七二ページ）の分割一覧表を参照。〈水棲動物の狩猟〉を〈鳥猟〉と〈魚猟〉（漁）とに分けるところだけが、とくに「下側の」という言い方を用いて復習されている。この分割だけは横に（水平に）切り分ける分割であったということか。266A 参照。あるいは、鳥は上に棲み、魚は下に棲むということも、こめられて言われているのかもしれない。

エレアからの客人　われわれはさっき、たしか狩猟の全体を二つに分けたはずだ。ひとつは泳ぐ動物の狩猟、もうひとつは陸上を歩行する動物のそれ、というふうに切り分けて。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　そして一方の、水中に棲む泳ぐ動物を相手とするかぎりのものを、われわれはくわしく述べたのだった。これに対して、陸上動物のほうのは、多くの種類があるとだけ言って、そのまま分割せずにほっておいた。

テアイテトス　そうでした。

222

エレアからの客人　で、そこのところまでは、ソフィストと魚釣師は、〈獲得の技術〉から出発して、同じ道を連れ立って来ているわけだ。

テアイテトス　たしかに、そのようですね。

エレアからの客人　しかし、その〈動物狩猟の技術〉のところから、二人は別れ別れになって、一方は海や河や湖のほうへ向かう。そのなかにいる生きものを狩猟するためにね。

テアイテトス　ええ、そうですね。

エレアからの客人　それに対してもう一人のほうは、陸地へ向かい、河は河でもこれは違った種類の河へ、富と若さのいっぱいある、いわば豊かな牧場のようなところへと向かうのだ。そのなかで育ったものを捕獲するためにね。

B

テアイテトス　とおっしゃると、それはどういう意味でしょうか？

エレアからの客人　陸上の狩猟には、その最も主要な部門として、二つのものがある。

テアイテトス　何と何ですか？

エレアからの客人　なれておとなしい動物を相手とするものと、野生の荒々しい動物を相手とするものだ。

九

テアイテトス　いったいまた、なれておとなしい動物の狩猟というようなものが、あるのでしょうか？

エレアからの客人　そう、もし人間がおとなしい動物であるとすればね。だがそこは、君の好きなように考えてくれたまえ。いかなる動物もおとなしくないとするもよし、おとなしい動物はほかにいるけれども、人間はしかし荒々しい動物だとするもよし、あるいはまた、人間はおとなしい動物だと認めるけれども、しかし人間の狩猟というようなものはないと考えるのでもよい。このうちのどれでも、君の気に入る言い方だと考えるものを、われわれのために決めてくれたまえ。

c

テアイテトス　いやそれでしたら、お客人、私としては、われわれがおとなしい動物であると考えますし、人間の狩猟というものがあることも認めます。

エレアからの客人　それではさらに、その〈おとなしい動物の狩猟〉にも、二通りのものがあると言うことにしよう。

テアイテトス　何にもとづいてそう言えるのでしょうか？

エレアからの客人　一方では、盗みや、人さらいや、独裁支配や、それにすべての戦争の技術などを、全部一

まとめにして、〈力ずくによる狩猟〉と規定するのだ。

テアイテトス　立派な規定の仕方です。

エレアからの客人　他方これに対して、法廷弁論や、民衆相手の演説や、個人的なつき合いなどに関係するもの**D**のを、このほうもまた全体を一まとめにして、〈言いくるめ(説得)の技術〉というふうに、一つの技術としてこれを呼ぶ——。

テアイテトス　正しい呼び方です。

エレアからの客人　ではその〈言いくるめ(説得)の技術〉には、二つの種類があると言おう。

テアイテトス　どのような？

エレアからの客人　一方は、個人を相手に私的に行なわれるものであり、他方は、公衆を相手に公的に行なわれるものだ。

テアイテトス　たしかにその二つは、それぞれが一まとまりの種類をなしていますからね。

エレアからの客人　では、さらにその〈私的な狩猟の術〉のなかには、報酬を受け取るものと、贈物を与えるものとがあるのではないか。

テアイテトス　よくわかりませんが。

エレアからの客人　どうやら君は、恋する人たちが行なう狩猟のことに、まだ注意を向けたことがないとみえるね。

テアイテトス　どんな点についてですか？

E
エレアからの客人　彼らは、狩猟しようと目ざす相手に、他のことに加えて、贈物を与えるということだ。
テアイテトス　それは、まさにおっしゃるとおりです。
エレアからの客人　ではこのほうのは、恋の技術という種類であるということにしよう。
テアイテトス　はい、結構です。
エレアからの客人　これに対して、報酬を受け取るほうの種類のものはといえば、そのうちのひとつは、もっぱら相手を喜ばせ楽しませながら、それを餌としてつき合い、報酬としては、ただ自分が食べさせてもらうことだけを求めるものであって、これは、私の思うに、〈へつらいの技術〉であり、あるいは、甘味をつける技術とでもいうべきものであると、われわれのすべてが言うことだろう。(1)

223
テアイテトス　ええ、そう呼びますとも。
エレアからの客人　それに対してもうひとつは、徳を授けるために交際するのだと公称し、お金(貨幣)のかたちで報酬を要求するものだが、この種類のものは、また別の名前で呼ぶのが当然ではないだろうか。
テアイテトス　むろん、そうするのが当然です。
エレアからの客人　では、その名前とは？　言ってごらん。

1　ここで「甘味(うまみ)をつける技術」と訳した「料理術」と「へつらいの技術」との関係については、『ゴルギアス』(464B〜466A, 501A〜503A, 517B〜522C)を参照。そこでは、医術(栄養学)に対する料理法は、体育術に対する化粧法とともに(さらに立法術に対するソフィストの術、司法術に対する弁論修辞の術とともに)、すべて「へつらい・おべっか」として規定され、ほんとうの〈技術〉ではないとされている。

テアイテトス　それはもう明らかでしょう。私たちはこれで、ソフィストを見つけ出したように思えるからです。ですから私としては、いま私が口にした名前を言えば、そのような人を適切な名前で呼ぶことになると考えます。

一〇

B **エレアからの客人**　そうすると、テアイテトス、いまの議論に従えば、どうやらこういうことになるようだね。——つまり、〈獲得の技術〉のなかの〈捕獲の技術〉、そのなかの〈狩猟の技術〉、そのなかの〈動物の狩猟〉、そのなかの〈陸上動物の狩猟〉、そのなかの〈人間の狩猟〉、そのなかの〈言いくるめ(説得)による狩猟〉、そのなかの〈私的な狩猟〉、そのなかの〈報酬を受け取るかたちでの狩猟〉(1)、そのなかの〈現金と引きかえの狩猟〉、そのなかの〈教育と称されている狩猟〉、そのなかの金持ちで名家の青年たちを相手とする狩猟——これが、いまの議論がわれわれに示す結論によれば、〈ソフィストの術〉と呼ばれるべきだということになる(2)。

テアイテトス　まったくそのとおりです。

C **エレアからの客人**　だがさらに、次のようなやり方でも見ることにしよう。なにぶんにも、われわれがいま探し求めている相手が身につけている技術というのは、けっして並たいていのものではなく、きわめて複雑多彩なものだからね。げんに、先ほどの話のなかでも、それはわれわれがいま主張しているようなものではなくて、もっと何か別の種族のものではあるまいかと思わせるような姿を、ちらつかせているのだから。

テアイテトス　どのようにでしょうか？

エレアからの客人　〈獲得の技術〉にはたしか、二通りの種類があったはずだ――ひとつは、狩猟に関わる部門を含むもの、もうひとつは、交換によるもの。

テアイテトス　ええ、たしかにそうでした。

エレアからの客人　それでは、その〈交換の技術〉には二つの種類があると言うことにしようか――そのひとつは、贈物によるもの、もうひとつは、商いによるものであると。

D

テアイテトス　そういたしましょう。

エレアからの客人　そしてさらにわれわれは、その〈商(あきな)いの技術〉は二つに切り分けられると言うべきだろう。

テアイテトス　どのようにですか？

エレアからの客人　自分で作った物を売る直売業と、他人の製品を取引する交易業とに区別される。

テアイテトス　たしかに。

エレアからの客人　ではどうだろう、――その〈交易業〉のうち、売買が一都市内で行なわれるものが、ほぼその半分をなしているのであるが、これは、小売業と呼ばれているのではないかね。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　これに対して、ひとつの都市から他の都市へと売り買いによって取引を行なうものは、通

1　底本がシュライエルマッハーの提案に従って原文から削除している諸語のうち、223B4 の μισθαρνικῆς は、キャンベル、ディエス、ファウラーなどとともに、写本のまま残す。

2　補注A（一七三ページ）における分割一覧表を参照。

商業だね。

テアイテトス　もちろんです。

E **エレアからの客人**　しかるに、その〈通商業〉には次のような区別があることに、われわれは気づいていないだろうか——つまり、お金と引き換えに売る物として、一方には、身体の糧食その他の必要に供されるものがあり、他方には、魂のためのそれがあるということに？

テアイテトス　それはどういう意味でしょうか？

エレアからの客人　魂に関係するものというのが、おそらくわれわれにわからないのだろうね。もう一方のは、理解できるはずだから。

テアイテトス　ええ。

224 **エレアからの客人**　それなら、われわれはこのように言うことにしよう。——あらゆる種類の音楽・文芸が、そのときどきに都市から都市へと、ここで買われては別のところへもたらされて売られる、というような場合[1]、また絵画や奇術やその他多くのものが、そのあるものは魂の慰みのために、他のものは魂の真剣な目的のために、もち運ばれて売られるような場合、魂に関係するこれらのものは、それをもち運んで売る人に対して、売られるのが飲食物である場合に少しも劣らず、通商業者と呼ばれるべき正当な資格を与えるだろう、と。

テアイテトス　まったく、おっしゃるとおりです。

B **エレアからの客人**　だからまた、いろいろの学識を買い集めては、都市から都市へと運んでお金と交換する人をも、君は同じ名前で呼ぶことになるだろうね？

テアイテトス　ええ、そう呼びますとも。

一一

エレアからの客人　では、そのような〈精神的通商業〉のうち、そのひとつの部門は公演の術と呼ばれるのが最も正しいだろうし、もうひとつの部門は、いま言った名前に劣らずおかしな名前になるけれども[2]、しかし学識の販売である以上、その行為に類縁の名前で呼ばなければならないのではないか？

テアイテトス　たしかにそうです。

エレアからの客人　それでは、それを〈学識販売業〉とするとして、そのうちの、他のさまざまの技術に関する

c

学識を扱うものと、徳に関することを扱うものとは、それぞれ別の名前で呼ばれなければならない。

テアイテトス　むろんそうすべきでしょう。

エレアからの客人　さてそれで、徳以外のものを扱う前者のほうは、技術販売業と呼ばれるのが適切だろうが、徳を扱う後者については、ひとつ君のほうでその名を言うようにつとめてくれたまえ。

テアイテトス　いったい、ほかのどんな名前を口にして過ちなきをえましょうか――それこそまさに目下おた

1　写本のまま καὶ πιπρασκομένην を読む（バーネット以外のすべての校訂者）。

2　つぎに命名される〈学識販売業〉という名前が、すぐ前で言われた〈精神的通商業〉という言葉に劣らずおかしい、ということ。〈精神的通商業〉（ψυχεμπορική）も〈学識販売業〉（μαθηματοπωλική）も、プラトンが半ばたわむれにつくり上げた造語である。

ずね者の、ソフィストの種族であると言う以外に？

エレアからの客人　それ以外の何ものでもないね。さあそれでは、ここでわれわれは、それを次のように言うことによって総括することにしよう。——すなわち、〈獲得の技術〉のなかの〈交換の技術〉、そのなかの〈商いの技術〉、そのなかの〈通商業〉、そのなかの〈精神的通商業〉、そのなかの〈徳〉に関する言論と学識を扱う販売業が、〈ソフィストの術〉にほかならないことが第二番目に判明したのである、と。(1)

D

テアイテトス　そのとおりですとも。

エレアからの客人　第三番目にしかし、ひとつの都市に定住している場合であっても、同じそうした事柄に関する学識を、他の人から買い取ったり、自分で考案したりして販売し、それによって生計を立てることを企てる者がいるならば、思うに、君はその人のことを、まさにいま言ったのと同じ名前で呼ぶほかはないだろう。

テアイテトス　むろん、同じ名前で呼びますとも。

エレアからの客人　そうするとまた、〈獲得の技術〉のなかの交換によるもの、その〈交換〉が商いにより行なわれるもの、その〈商い〉が〔他人の作品を売る〕小売業であっても、自分の作品を売る直売業であっても、その両方を含めて、およそ先に言ったような事柄を扱う〈学識販売業〉として成立する営みであるならば、どうやら君としては、それをつねに〈ソフィストの術〉と呼ぶことになるようだね。(2)

E

テアイテトス　そう呼ばざるをえません。議論の示すところには、従わなければなりませんから。

一二

225

エレアからの客人 それではさらに、目下われわれが追い求めている種族が、これから言うようなものに似ているかどうかを、しらべてみることにしよう。

テアイテトス いったい、どのようなものにですか？

エレアからの客人 〈獲得の技術〉のなかの一部門として、闘い取る技術というものがあるのをわれわれは見た。(3)

テアイテトス ええ、たしかにそうでした。

エレアからの客人 それでは、その後者を二つに分けても誤りではないはずだ。

テアイテトス どのような分け方をするのか、おっしゃってください。

エレアからの客人 それのなかのひとつを競争によるもの、他方を戦闘によるもの、とするのだ。

テアイテトス けっこうです。

エレアからの客人 ではさらに、その〈戦闘の技術〉のなかで、身体によって身体を相手に行なわれるものには、力技（ちからわざ）といったような名前をつけるのが、しかるべき適切な呼び方であるといえるだろう。

テアイテトス ええ。

1 直売と交易の区別がここでは省略されている。補注A（一七四ページ）における分割一覧表を参照。ソフィストを学識の商人として規定することについては、『プロタゴラス』313C～314Bを参照。

2 この第三の規定は、後に231Dにおいて、「第三番目」と「第四番目」とに分けて復習されている（同箇所の注1を見よ）。補注A（一七四ページ）における分割一覧表を参照。

3 219E.

(225)

B

エレアからの客人 他方、言論によって言論を相手に行なわれるものに対しては、テアイテトス、論争と呼ぶ以外にどんな名前を言えばよいのだろうか。

テアイテトス それ以外にありません。

エレアからの客人 しかるに、その〈論争〉に関わるものには、二通りあるとしなければならない。

テアイテトス どのようにして、でしょうか?

エレアからの客人 まず、論争が長い演説によって反対側の長い演説を相手になされ、そして正しいことや不正なことをめぐって公の場で行なわれるかぎり、それは法廷弁論的な論争であることになるからだ。

テアイテトス ええ。

エレアからの客人 他方これに対して、個人のあいだで私的に行なわれ、一問一答のかたちに細かく分けられるものについては、われわれが呼び慣わしている名前として、言い返すこと(反論)という呼び方以外に何もないだろうね。

テアイテトス 何もありません。

C

エレアからの客人 そしてその〈反論〉的な論争のうち、さまざまの契約をめぐる論争として行なわれながら、その進め方には一定の規則も技術もないようなものは、われわれの議論がそれを他とは異なったものとして識別する以上、たしかにそれらを一まとまりの種類をなすものと考えなければならないけれども、しかし特定の名前を先人たちによって与えられているわけでもないし、いまわれわれからあらためて名前を与えられるほどのものでもないのだ。

テアイテトス　おっしゃるとおりです。じっさいその類いのものは、あまりにも細かく種々雑多なものに分かれていますからね。

エレアからの客人　他方しかし、ちゃんとした技術をもっていて、正と不正それ自体について、またその他の問題についても全般的な仕方で論争を行なうもの、このほうは、われわれは討論的な論争というふうにこれを呼び慣わしているのではないかね。

テアイテトス　間違いなく、そう呼んでいます。

D

エレアからの客人　ところで、そのような〈討論〉には、お金を失わせるような性格のものと、金儲けになるものとがある。

テアイテトス　まったくそのとおりですね。

エレアからの客人　では、そのそれぞれをどのような名前で呼ぶべきか、命名を試みることにしよう。

テアイテトス　そうしなければなりません。

エレアからの客人　それなら、思うに、そういったことに時を過すことの楽しさのあまり、自分自身の仕事がなおざりになるもの、ただしその語り方に関しては、聞いている多くの者にはいっこうに楽しくもないようなものは、私の考えでは、無駄なおしゃべりと呼ばれているものにほかならないのだ。

テアイテトス　たしかに、そんなふうに言われていますね。

E

エレアからの客人　ではそれと反対のもの、私的な討論によって金儲けをするものを何と呼ぶか、こんどは君の番だから、ひとつ君から言ってみてくれたまえ。

(225)

テアイテトス　こんどもまた、いったいほかのどんな名前を口にして誤りなきをえましょうか――いままた第四番目に、私たちが追い求めているあの不可思議な輩、ソフィストがもう一度現われた、と言う以外に？

226

エレアからの客人　するとどうやら、ソフィストとは、〈討論の技術〉の専門家のなかの金を儲ける種族にほかならず、その討論の技術は〈反論の技術〉の一種類であり、後者はさらに〈論争の技術〉の一種類であり、それはさらに〈戦闘の技術〉の一種類であり、それはさらに〈闘い取る技術〉の一種類であり、それはさらに〈獲得の技術〉の一種類にほかならないのであると――これが、われわれの議論がいままた告げ知らせたところなのだ。(1)

テアイテトス　まさしくそのとおりです。

一三

エレアからの客人　これでわかるだろうね――この獲物が一筋縄では行かぬ複雑な相手だと言われ、諺にもあるように、「片手では捕えられない」しろものだというのが、いかにほんとうのことであるかが？

テアイテトス　では、ぜひとも両手でつかまえなければなりませんね。

B

エレアからの客人　そうだとも。そしてわれわれは、そうすることにできるだけの力をつくさなければならないのだ――もうひとつ次のようなこの獲物の足跡を、追いかけて行くことによってね。では、答えてくれたまえ。――家事の仕事に関係のある言葉のなかに、われわれがふだん使っているものがいくつかあるね？

テアイテトス　たくさんありますとも。しかしいったい、そのたくさんのなかで、とくにどのような言葉のことをおたずねなのでしょうか？

エレアからの客人　次のようなものだ。われわれはたとえば、濾すとか、篩うとか、簸るとか、選り分けるとかいったことを言う。

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　また、それらのほかさらに、梳くとか、ほぐすとか、梭するとか[2]、そのほかこれに類する言葉が数えきれぬほど、さまざまの技術において用いられているのをわれわれは知っている。そうだろう?

c **テアイテトス**　そうした例を挙げて全般的におたずねになろうとしたのは、それらの言葉について、とくにどのようなことを明らかにしたいというおつもりなのでしょうか?

エレアからの客人　いま挙げた言葉はすべて、ものを区別することに関係しているはずだ。

テアイテトス　はい。

エレアからの客人　そこで、私の推論するところでは、われわれはそれらすべてのなかに共通して、そうした仕事に関わる一つの技術が含まれているものとみなして、その技術を一つの名前で呼んでしかるべきだろう。

テアイテトス　何と呼ぶのでしょうか?

エレアからの客人　分離の技術と。

1　補注A(一七五ページ)における分割一覧表を参照。これまでに見られた総括の仕方と異なって、いまの場合は、逆に終りから始めに向かって系統がたどられている。ソフィストに対する本対話篇最後の規定も同じ仕方で総括され、そこ(268C)ではとくにそのことが注意されている。

2　『クラテュロス』388A において、「梭する」(はたおり機で織る)とは「入り混じっている経と緯を区分する」ことであると言われている。

テアイテトス　そう呼ぶことにいたしましょう。

エレアからの客人　ではその技術のなかに、こんども何らかの仕方で二つの種類を見てとることができるかどうか、考えてみてくれたまえ。

テアイテトス　この私のような者に、敏速な考察をお命じになるのですね。

D　**エレアからの客人**　しかし、先に挙げたいくつかの分離の仕事のなかには、より良いものからより悪いものを引き離す仕事と、相似たものどうしを引き離す仕事とがあったはずだ。(1)

テアイテトス　いまそう言われてみますと、そのとおりであることはほぼ明らかです。

エレアからの客人　それでは、一方の分離の仕事が何という名前で呼ばれているか私は知らないけれども、もうひとつの、より良いものを残して、より悪いものを捨て去るほうの分離ならば、その名前を言うことができる。

テアイテトス　何という名前ですか、おっしゃってください。

エレアからの客人　そのような分離の仕事はすべて、私の理解しているところでは、浄化（浄め）というふうに一般に呼ばれているはずだ。

テアイテトス　たしかにそう呼ばれていますね。

E　**エレアからの客人**　では、その〈浄化〉の仕事がまた二通りの種類に分かれることを、誰でもが見ることができるのではなかろうか。

テアイテトス　ええ、時間をかけて考えれば、おそらくわかるでしょうね。しかしいまは、私は見てとることができません。

一四

エレアからの客人　しかし、少なくとも身体を対象とする浄化の仕事は、それにはいろいろと多くの種類のものがあるけれども、本来一つの名前によってこれを包括してしかるべきだ。

テアイテトス　どのような種類のものがあって、何という名前で包括すべきなのでしょうか？

227 **エレアからの客人**　まず生物を対象とするものとしては、体育術や医術が身体内部のものを正しく分離することによって達成する浄化があるし、身体の外部についても、口で言えばつまらぬものに聞こえるが、入浴の世話をする仕事が行なうような浄めがある。また無生物を対象とするものとしては、衣服仕上げの仕事や、一般にすべて衣服の美装に関わる仕事がさまざまの細かい面に分かれてその配慮を受けもつところの浄めがあって、滑稽だと思われている名前がいろいろとたくさんつけられているのだ。

テアイテトス　ええ、大いに。

エレアからの客人　まったくそのとおりなのだ、テアイテトス。しかしながら、言論の探求(方法)にとっては、海綿で身体を洗う技術であろうと、薬の服用を扱う技術であろうと、たとえ一方の浄化がわれわれに与える有益さは小さなものであり、他方のそれは大きなものであるとしても、両者に寄せる関心の程度に大小の差はいささ

B かもないのだ。なぜならそれは、洞察を得るためにこそ、あらゆる技術の間の親近性と非親近性をしっかりと見

1　「濾す」「篩う」「簸る」が前者に当り、「梳く」「ほぐす」「梭する」が後者に当る。

てとることに努めつつ、この目的のために、すべての技術を平等に尊重するのであるから。そして、或るものと他のものとの間に類似性が存在するかぎり、そのどちらかのほうが滑稽であるなどとは少しも考えないし、狩猟の術を説明するための例として用兵統帥の技術をもち出す人のほうが、虱取り（しらみ）の技術をもち出す人よりも威信があるなどとは少しも認めず、かえって多くの場合、より緻密さに欠ける人とみなすのだ。

こうしていまの場合も、君が質問していたこと、すなわち、生物の身体であれ生命なき物体であれ、それを浄めるという役割を引き受けるかぎりのすべての機能を、全体としてわれわれはどういう名前で呼ぶべきか、という問題に関しては、どのような名がいちばん聞えがよいだろうかというようなことは、探求の方法にとって少しも関係のないことだろう。その名前はただ、およそ魂以外のものを浄めるかぎりのすべての仕事を一括して、それを魂の浄めから区別するような名前でありさえすればよいのだ。というのは、心に関係する浄めを他の浄めから引き離して区切り取ること、これが、いままでのところ、この探求の方法が企ててきたことにほかならないのだから。——それの意図するところを、もしわれわれが理解しているとすればね。

C

テアイテトス　はい、よく理解できました。そして浄めには二つの種類があって、その一つは魂に関わるところの種類であり、それは身体（物体）に関わる浄めの種類から区別されるべきものであることに、賛成いたします。

エレアからの客人　それは何よりもうれしいことだ。ではどうか、この後につづく問題点をよく聞いて、いま言われたものをさらに二つに切り分けることを試みてくれたまえ。

D

テアイテトス　あなたのお導きのままに従って、その分割の仕事に協力してみるつもりです。

一五

エレアからの客人　われわれは魂における劣悪さ（悪徳）というものを、優秀さ（徳）とは異なった何ものかとして認めるだろうね。

テアイテトス　はい、もちろん。

エレアからの客人　しかるに、浄めとは、その一方のものを残して、劣ったもののほうを――それが何でありどこにあるにせよ――捨て去ることであった。

テアイテトス　たしかにそうでした。

エレアからの客人　そうすると、魂の場合においても、何らかの仕方による欠陥の除去ということを見出すかぎり、われわれがそれを〈浄め〉と呼ぶことは、宜しきを得た言い方となるだろう。

テアイテトス　大いにそうですとも。

エレアからの客人　魂に関係する欠陥には、二種類あると言わなければならない。

テアイテトス　何と何でしょうか？

228

エレアからの客人　そのひとつは、いわば身体における病気に当るもの、もうひとつは、いわば醜さに当るものだ。

テアイテトス　わかりませんが――。

エレアからの客人　きっと君は、病気と内乱とが同じものであるとは認めていないのだろうね。

テアイテトス　そのことに対してもまた、私は何とお答えすべきかわかりません。

エレアからの客人　いったい君は、内乱とは、同族親近の間柄で本来あるべきものが何らかの堕落が原因となって争うこと以外の何かであると、考えているわけなのかね？

テアイテトス　いいえ、けっしてそれ以外のこととは考えていません。

エレアからの客人　他方しかし、醜さとは、あらゆる場合に不恰好な姿として現われるような、均衡の欠如という種類以外の何かであろうか。

B

テアイテトス　けっしてそれ以外のものではありません。

エレアからの客人　ではどうだろう、――劣悪な人々の魂のなかでは、さまざまの判断が欲望と、気概が快楽と、理性が苦痛と、そしてすべてこれらのものがお互いどうしに対して、不和の状態にあることに、われわれは気づいていないだろうか。

テアイテトス　ええ、はげしい不和の状態にあることに気づいています。

エレアからの客人　しかしながら、それらのものはすべて、同族の間柄でなければならぬものとして、生まれついたものなのだ。(1)

テアイテトス　むろん、そうでなければなりません。

エレアからの客人　してみると、悪徳とは魂における内乱であり、病気であると言えば、正しい言い方となるだろう。

テアイテトス　たしかに、この上なく正しい言い方です。

C **エレアからの客人** ではどうだろう、──およそ何であれ動きにあずかるものが、或るひとつの目標を定めて、それにぴったりと行き当るように努めながら、動きを起すたびごとにその目標から逸れて、うまく行き当らないような場合、そのような結果となるのは、そのものがもっている内的な均衡のためであるとわれわれは言うだろうか、それとも逆に、均衡の欠如のためであると言うだろうか。

テアイテトス それは明らかに、均衡の欠如のためです。

エレアからの客人 ところで、魂はすべて、それが何ごとについてであれ無知である場合には、意に反して無知におちいるのだということをわれわれは知っている。

テアイテトス 間違いなくそのとおりです。

エレアからの客人 しかるに、無知ということは、魂が真理をめざして進みながら、その理解から逸れる場合の、理解(知)の逸脱(2)にほかならない。

D **テアイテトス** ええ、たしかに。

エレアからの客人 そうすると、無知で愚かな魂とは、醜くて不均衡な魂であると考えなければならない。

テアイテトス そういうことになるようです。

---

1 理性、判断、気概、欲望、快苦などは、すぐれた人間の魂においては、理性の指導下にすべてが互いに友愛と協調の関係にあり、このような友愛と協調が後に(228E)挙げられる諸悪徳と反対の、〈正義〉〈節制〉〈勇気〉などの諸徳の基礎をなす。『国家』IV. 442A～D, 443D～E参照。

2 「パラプロシュネー」。この語はふつう「錯乱」の意味にもなるが、ここでは、「理解から逸れる」(パラポロス・シュネセオース)との語呂合せのもとに用いられている。

エレアからの客人　こうして、魂の内にある欠陥には、どうやら、以上のような二つの種類のものがあるということになるようだ。つまり、そのひとつは、一般に悪徳と呼ばれているものであって、これが魂の病気であることはきわめて明らかだ。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　もうひとつのほうは、一般に無知と呼ばれてはいるけれども、しかし多くの人々は、この種の欠陥〔醜さ＝不均衡〕が魂のなかだけにしか生じない場合には、これをひとつの欠陥であるとは認めようとしないのだ。(1)

E

テアイテトス　さっきあなたが最初に言われたときにはよくわからなかった事柄を、私は全面的に承認しなければなりません。すなわち、魂の内にある欠陥には二つの種類があること、そして、臆病や放埒や不正はすべて、われわれの内なる病気であるとみなすべきであり、他方、多種多様の無知の状態は、醜さであると考えるべきである、と。

一六

229

エレアからの客人　ところで、身体の場合には、いま言われた二つの悪い状態を扱うものとして、二つの技術が生まれたのではないか。

テアイテトス　その技術とは、何と何でしょう？

エレアからの客人　醜さのためには体育術、病気のためには医術。(2)

テアイテトス　なるほど、そのようですね。

エレアからの客人　かくてまた、ちょうどそれに対応して、傲慢や不正や臆病のためには、懲戒の技術が、あらゆる技術のなかでも、本来最も正義の女神と関係の深いものとしてあるわけだ。

テアイテトス　当然そのはずでしょうね――人間の思わくに従って言うとすれば。

エレアからの客人　では他方においてどうだろう、――あらゆる無知に対処するための技術としては、教授する技術のほかに、もっととくに挙げてしかるべきものが何かあるだろうか。

テアイテトス　何もありません。

B

エレアからの客人　さあそれでは、その〈教授する技術〉には、はたしてただ一つの種類だけしかないと言うべきだろうか、それとも、もっとたくさんの種類があって、そのなかでとくに二つのものが、最も重要であると言うべきだろうか？　考えてくれたまえ。

テアイテトス　考えてみます。

エレアからの客人　私には、解決のためのいちばんの早道は、次のようにしてしらべることだと思われる。

テアイテトス　どのようにしてですか？

1　身体的な醜さや不均衡は明らかに欠陥とみなされるが、魂の〈醜さ〉や〈不均衡〉は身体のそれと一緒にならないかぎり、あるいは、外に表われて目立つ結果を伴わないかぎり、それだけでは欠陥とは見なされないのが普通であるということ。

2　この身体に関わる二つの技術のことと、およびそれぞれに対応する技術を魂の場合に求めることについては、『ゴルギアス』464B〜Cを参照。

エレアからの客人　〈無知〉というものが、何とかしてその真中から分けられないものかどうかを、まずしらべてみるのだ。というのは、無知には二通りのものがあるということになれば、明らかにまた、教授する技術のほうにも、必ず二つの部門がなければならないことになるからだ――二通りの無知のそれぞれに一つずつが対応する仕方でね。

テアイテトス　それで、どうなのでしょうか？　いまおたずねの点が、あなたにはおわかりなのでしょうか？

C **エレアからの客人**　そう、私には少なくとも、無知の或る大きくて厄介な種類のものが他から区別されて、見えるような気がするのだ――無知の他のすべての部分を合わせたものと、重さのうえで釣合うだけの重大なるものがね。

テアイテトス　それはいったい、どのような種類の無知なのでしょうか？

エレアからの客人　何ごとかを実際には知らないのに、知っていると思いこむことが、それだ。[1]おそらくはこれによってこそ、われわれが思考においておかすすべての過ちが、すべての人々にとって起るのだといえよう。

テアイテトス　おっしゃるとおりです。

エレアからの客人　そしてまた、思うに、この種の無知にだけは、無学（無智）という名前がつけられているのだ。

テアイテトス　たしかに。

エレアからの客人　では、〈教授する技術〉のうちで、この種の無知を取り除くことを役目とする部門は、何という名前でこれを呼ぶべきだろうか。

D

テアイテトス　私の考えでは、お客人、その他の部門は職人的な専門技術の教授と呼ばれていますが、おたずねのその部門については、教育(教養)という呼び方が、われわれを通じてこの土地では用いられています。

エレアからの客人　じじつまた、テアイテトス、ほとんど全ギリシア人の間でそう呼ばれているのだよ。しかし、それはともかくとして、われわれはさらに次のことをしらべなければならない――すなわち、その部門は、もうこれで一つの不可分の全体であるのか、それとも、名前を与えるだけの重要性をもった特定の部門へと、さらに分割されうるものなのか、ということを。

テアイテトス　ええ、しらべなければなりません。

一七

エレアからの客人　それでは、私にはこの部門もまた、さらに何らかの仕方で分けられるように思われる。

テアイテトス　どのような観点からでしょう？

E

エレアからの客人　言論による教授のうち、そのひとつの道はより険しいものであるように見えるし、もうひとつの部分は、より平坦なものであるように見えるのだ。

テアイテトス　とおっしゃると、そのそれぞれとはいったい、どのようなもののことなのでしょうか？

1　『ソクラテスの弁明』(21C～D, 23A, 29A)以来の一貫した基本思想であること、いうまでもない。『メノン』84A～C、『饗宴』204A、『パイドロス』275B、『テアイテトス』210C、『ピレボス』48D～49Aなどを参照。

エレアからの客人　ひとつのほうは、父祖以来古くから承けつがれてきたやり方であって、とくに息子たちに対して用いられてきたし、いまでもなお多くの人たちによって用いられているものだ——自分の息子たちが何か過ちをおかしたとき、ある場合にはつよく怒り、ある場合にはもっとおだやかに諭す、というやり方でね。しかし要するに、これを全体として訓戒と呼ぶならば、いちばん当を得ていることになるだろう。

230

テアイテトス　たしかにそのとおりです。

エレアからの客人　これに対するもうひとつのやり方だが、なかには自省の結果、こう考える人たちも出てくるように思われるだろう——すなわち、無知無学はすべて心ならずのことであるが、自分を賢いと思っている者は、自分が有能であると思いこんでいるその当の事柄については、何ごとをも学ぼうという気持にけっしてならないだろうし、これに対しては訓戒という種類の教育は、いたずらに労多くして功少ないだけなのだ、と。

テアイテトス　たしかに正しい考えです。

B

エレアからの客人　そこでそのような人たちは、また別のやり方によって、そうした思いこみを捨てさせる仕事に取りかかるのだ。

テアイテトス　別のやり方とは、いったいどのような？

エレアからの客人　その人たちは、誰かがある事柄について、実際には何ら意味のあることを語っていないのに、ひとかどのことを言っているつもりでいるような場合、それについてくわしく問をかけるのだ。次いで、もともと確実不動の見解をもっている相手ではないから、彼らはその者の考えを容易に吟味して行き、言論の力によって、そうしたさまざまの考えを一点に導いて相互につき合わせてみる。そして、そのようにしてつき合わせ

たうえで、それらの考えが同じ事柄について、同一のものとの関係において、同一の側面において、同時に、互いに相反する主張をなすものであることを示す。これに対して相手の者たちは、この事実を見せつけられて、自分自身に対して腹を立てる一方、他人に対してはおだやかになり、かくてこのやり方によって、自分にまつわる大それた頑固な思いこみから解放されることになるのだが、まことにこのような解放のされ方こそは、あらゆる解放のなかでも、傍で聞いていて最も楽しいものであるとともに、その処置を受ける当人にとって、最も永続的な効果をもつものである。(1)

じっさい、わが若き友よ、彼らをこのようにして浄化する人たちの考えは、ちょうど身体を扱う医者たちが考えることと同じなのだ。つまり、医者たちは、身体の内部にある障害となるものを放下させるまでは、栄養となる食物が与えられても、身体はそれによって益されることができないと考えるが、それと同じことをこの人たちは、魂についても考えるわけなのだ――誰かが論駁を行なうことによって、論駁を受ける者を恥じ入らせたうえで、学びの妨げとなるいろいろの思いこみを取り除き、浄らかにして、ただほんとうに知っている事柄だけを知っていると思い、それ以上のことはそう思わないような人間にしてやるまでは、魂は、授けられるさまざまの学問から利益を受けることはないであろう、と。

テアイテトス たしかに、そのようになった人の魂の状態こそは、最もすぐれた、最も思慮ぶかいものといわねばなりません。

---

1 ここで言われている事柄については、『テアイテトス』168A, 210C、『ソクラテスの弁明』23C などを参照。

E

エレアからの客人 だから、われわれとしてはこうしたすべての理由によって、テアイテトス、この論駁こそはあらゆる浄化のうちで、最も重要で最も効果的な浄化であると言うべきだし、また逆に、論駁を受けない者は、たとえその人がペルシア大王であったとしても、最大の汚れを浄められていない者にほかならず、ほんとうに幸福になろうとする者が最も浄らかに、最も美しくなっていなければならないその肝心のところが、無教育で醜いままでいる人間なのだと、考えなければならないのだ。

テアイテトス ほんとうにおっしゃるとおりです。

一八

231

エレアからの客人 ではどうだろう、――われわれは、いま言われたような技術を行使する人々とは、何者であると言うべきだろうか？ 私としては、ソフィストであると言うことを恐れためらうのでね。

テアイテトス なぜですか？

エレアからの客人 彼らに、あまり大きすぎる栄誉を与えることになりはしないかと恐れるのだ。(1)

テアイテトス でも、いま語られた事柄は、ソフィスト的なものに似ていることはたしかですね。

エレアからの客人 そう、そして狼が犬に――最も猛々しい動物が最もおとなしい動物に――似ていることもたしかだね。しかし、大事をとる人が何よりもつねに警戒しなければならないのは、この似ているということについてなのだ。これほど滑って把捉困難な種類のものはないからね。さもあらばあれ、いま言われた人たちを、

B

一応ソフィストであるとしておこう。私の思うには、やがてこの人たちが充分よく警戒するときが来たならば、

そのとき起るはずの境界(区別)についての争いは、けっして些細なものではないだろうからね。(2)

テアイテトス　それは当然、些細なものではないはずです。

エレアからの客人　では以上のようにして、まず〈分離の技術〉の一部門として、浄化の技術があるとしよう。そしてその〈浄化の技術〉のなかから、魂に関わる部門が区別されて取り出されたとしよう。さらにそのなかから、教授する技術が、そしてその〈教授する技術〉のなかから、教育(教養)の技術が、区別されて取り出されたとしよう。そしてその〈教育(教養)の技術〉のなかの、自分だけでそう思っている空しい知恵を相手に行使される論駁ということこそが、いまこうして脇に現われたこの議論において、まさに氏素姓の高貴な〈ソフィストの術〉と呼ばれるものにほかならないと、われわれに認められたものとしよう。(3)

1　「彼ら」というのは、前文の「ソフィスト」(複数)を受けると解するのが自然であるが、「論駁の技術の行使者たち」を指すと見る解釈もある。その場合は、これまでに語られたような論駁の技術の行使者はほんとうは「知の探求者」(哲学者)であって、「知者」「知の専門家」を意味する「ソフィスト」という大それた名前はふさわしくない、という反語的な意味となる。↓補注B(一七七ページ)。

2　先に語られたような論駁の技術(それは事実上、ソクラテスの方法そのものである)の行使者たち自身と、ソフィストたちとの実際の仕事の差異は大きいということ。ソクラテスは世の人々からしばしばソフィストと混同されたが(216Dで、哲学者は「あるときはソフィストのような外見で現われる」と言われていたことを参照)、この箇所の議論は、この混同を表向き一応承認するという手続きによって、両者の真の重大な差異を逆照明する意図をもつといえようか。↓補注B(一七七ページ)。

3　補注A(一七五ページ)における分割一覧表を参照。「脇に現われた議論において」と言われているのは、この「論駁の行使者」というソフィストの規定を導き出す議論が、これまでの四つの規定を導き出した議論の直接線上から外れているからである。これまでの議論はいずれも〈獲得の技術〉から出発していたが、この議論はそれとまったく無関係に、まず〈分離の技術〉を一種の総合の手続きによって導出することから出発した。

C **テアイテトス**　そういたしましょう。しかしこうなると、ソフィストがこれまであまりいろいろの姿で現われたので、いったいソフィストとは、ほんとうのところは何であると言えば、正しい規定として確信をもって主張できるのか、私としては困惑せざるをえません。

エレアからの客人　その困惑はもっともだ。しかしね、ここまで来ればもう、ソフィストのほうでも、この上どのようにしてわれわれの議論をくぐり抜けたらよいのかと、すっかり困惑しているものと考えなければならないだろう。じっさい、「あらゆる攻め手を逃れるのは容易でない」という諺は正しいからね。だからいまこそは、彼に対する攻撃の手を最も強めるべきときなのだ。

テアイテトス　よくおっしゃってくださいました。

一九

D **エレアからの客人**　では、まずはここで立ちどまって、いわば一息入れることにしよう。そして休息しながら、いったいこれまでソフィストがどれだけの姿でわれわれの前に現われたかを、われわれ自身に向かって数え上げてみることにしよう。——私の思うに、ソフィストとはまず第一に、〈報酬を受け取って金持ちの若者たちを狩猟する者〉であることが判明した。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　そして第二番目には、〈魂のための学識を扱う通商業者〉であることがわかった。

テアイテトス　たしかに。

エレアからの客人　第三番目には、同じそれらのものを扱う〈小売業者〉として現われたのではなかったかね。

テアイテトス　はい。そして第四番目には、〈学識の自作直売業者〉としてわれわれの前に現われました。(1)

エレアからの客人　君の記憶はたしかだ。第五番目には何であったかは、私のほうで思い出すように努めてみよう。——ソフィストとは、〈闘い取る技術〉の分野に属する言論の選手であり、〈討論の技術〉を自分の専門領域とする者であった。

E

テアイテトス　たしかにそうでした。

エレアからの客人　そして第六番目のものは、疑問のあるところではあるが、しかしとにかくソフィストのために一歩ゆずって、〈学びの妨げとなるさまざまの思いこみを取り除いて魂を浄める人〉であると、われわれは彼を規定したのだった。

テアイテトス　たしかにそのとおりでした。

エレアからの客人　さて、君は気がつくかね、——ある人がたくさんの領域の事柄に知識をもつ者として現われながら、しかし、その人がじっさいにその名で呼ばれているところの呼称はただ一つの技術を指す名前であるような場合には、そのような現われ方(見かけ)は、どこか間違っているのだということに？　そして明らかに、

232

1　先には(224D～E)、ここで挙げられている第三の〈小売業者〉と第四の〈自作直売業者〉とは、一つにまとめられて共に「第三番目」の規定のなかで語られていた。したがって、規定の数がここでは一つふえて、225E～226Aにおいて「第四番目」の規定として語られた〈討論の技術〉の専門家は、ここでは第五番目のものとして語られる結果となっている。

或る技術に関してそのような印象を受ける者は、そうしたさまざまの知識のすべてがそこへと収斂されるところの、その技術のもつ肝心のものをよく見きわめることができないでいるのであって、だからこそまた、それらの知識の所有者を、一つの名前でなく、たくさんの名前によって呼ぶことになるのだということに？

テアイテトス おそらく、いまの状況における最も本質的な点は、そういったところにあるのでしょう。

二〇

B

エレアからの客人 それでは、少なくともわれわれだけはこの探求において、怠惰のためにそのような状態におちいることのないようにしよう。そこでまず、ソフィストについて言われた事柄の一つを、もういちど取り上げてみることにしよう。私には、ある一つの点がとくに、ソフィストの正体を告げ知らせるもののように見えたのでね。

テアイテトス どのような点がですか？

エレアからの客人 われわれはソフィストのことを、反論を事とする論争の専門家であると言ったはずだ。(1)

テアイテトス ええ。

エレアからの客人 ではどうだろう、——ソフィストはまた、まさにその論争の技術を、他の人々に教える人であるとも言われたのではないか？(2)

テアイテトス ええ、たしかに。

エレアからの客人 では、考えてみよう——この種の人たちは、そもそもどのような事柄について、人々を論

C 争に長けた者とすると主張しているのだろうか。われわれはその考察を、第一歩からはじめるつもりで、次のようにして取りかかることにしよう。答えてくれたまえ、――彼らは、一般の人々の目には見えない神的なものについて、そのような論争の能力を人々に授けるだろうか？

テアイテトス　ええ、とにかく彼らについてそのように言われていることは、たしかです。

エレアからの客人　では、大地や、天空や、その種のものをめぐる諸現象などの、目に見えるものについてはどうだろうか？

テアイテトス　ええ、もちろんのことです。

エレアからの客人　ではまた、私的な集まりにおいて、生成と存在について全般的に何ごとかが論じられるような場合、われわれは、彼ら自身が反論して渡り合う達人であるだけでなく、他の人々にも自分と同じ能力を授けるということを、知っているのではないか。

テアイテトス　まったく、おっしゃるとおりです。

D **エレアからの客人**　さらにはまた、法律その他国家社会に関わるすべての事柄については、どうだろうか。彼

1　225B参照。ただしそこでは、ここで「反論を事とする論争の技術」と訳されたἀντιλογικος(225Bでは中性形)という語は、私的な場で一問一答を行なうという狭い意味で用いられ、公の場で長い演説を行なう「法廷弁論」と並んで、「論争」ἀμφισβητητικόνの二部門をなすとされていた。ここではἀντιλογικόςは広い意味に用いられて、ἀμφισβητητικόςとほぼ同義となる(232D2照参)。このような広義のἀντιλογικός ἀντιλέγειν、ἀντιλογικήについては、『パイドロス』261C～Eを参照。

2　225D～Eにおいて言われた「金を儲ける」ということの内に、このことが含意されているといえる。

らはこの領域でも、人々に論争の能力を授けることを約束しているのではないか。

テアイテトス　それはもう、もしその約束がなかったら、彼らと話し合う者など、まず一人もいないと言ってよいでしょう。

エレアからの客人　そして、技術全般についても、個々の技術についても、それぞれの専門家自身を相手に反論して渡り合うのに必要な事柄は、それを学びたいと望む者のために、書物に書かれて公表されているはずだ。

テアイテトス　相撲(1)やその他の技術について書かれたプロタゴラスの書物のことを、おっしゃっているのでしょうね。

E

エレアからの客人　そして、君、ほかの多くの人たちの書物のこともね。だがそれはともかく、こうなると、反論を事とする論争の技術というのは、どうやら、要するに、あらゆる事柄について論争するに足るだけの一種の能力である、ということになりそうではないか。

テアイテトス　ええ、たしかにほとんど何ひとつとして、その範囲の及ばないものはないように見えます。

エレアからの客人　神々に誓って、若き友よ、いったい君は、そんなことが可能だと思うかね？　たぶん、君たち若い者はそのことに対して、より鋭い目を向けることができるだろうからね。われわれの視力は、鈍っているけれども。

233

テアイテトス　どのようなことが可能か、とおたずねなのでしょうか？　またいったい、何に目を向けるとおっしゃるのでしょうか？　どうも、いまたずねられたことが、よくわからないような気がするのですが。

エレアからの客人　誰にせよ人間の身でありながら、あらゆる事柄を知るということが可能であるかどうか、

ときいているのだ。

テアイテトス　それが可能なら、お客人、私たち人間は、さぞや幸福な種族だったことでしょうにね。

エレアからの客人　それなら、ある人が自分は知識をもたずにいながら、知識をもっている人を相手にして、何かまともなことを論じながら反論して渡り合うということが、そもそもどのようにしてできるのだろうか。

テアイテトス　どのようにしてもできません。

エレアからの客人　そうすると、ソフィストがもっている不思議な能力の秘密は、いったい何なのだろうか？

テアイテトス　とおっしゃると、どのような点についてでしょうか？

B

エレアからの客人　いったい彼らはどのようにして、自分たちこそはあらゆる事柄について誰よりも知者なのだと、若者たちに信じこませることができるのだろうか、という点だ。というのは、明らかに、もしも彼らの反論が正しいものでなかったとしたら、あるいは、若者たちに正しいものと見えなかったとしたら、さらにはそう見えたとしても、もしそういう論争のゆえに知恵があると思われることがいっこうになかったとしたら、君がいみじくも言ったように、まさにそのことを習いに金まで払って彼らの弟子になろうと望む者は、ほとんど誰一人としていないだろうからね。

テアイテトス　たしかにそのとおりでしょうね。

エレアからの客人　ところが現実には、若者たちはそうしようと望むわけだね。

1　Diog. L. IX. 55 に見られるプロタゴラスの著作目録を参照。

C

テアイテトス　ええ、大いに。

エレアからの客人　ということはつまり、思うに、ソフィストたちは、彼らが反論して渡り合うその当の事柄にかけては、自分でもちゃんと知識をもっているというふうに思われているからなのだ。

テアイテトス　もちろんそうです。

エレアからの客人　しかるに、彼らがそのことを行なうのは、あらゆる事柄にわたってなのだと、われわれは主張するわけだね？

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　してみると彼らは、あらゆる事柄について知者であるように、弟子たちには見えるわけなのだ。

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　ほんとうはそうでないのにね。なぜなら、そんなことは不可能だと、明らかになったのだから。

テアイテトス　それはどうしても、不可能でなければなりません。

二一

エレアからの客人　そうすると結局、ソフィストとは、あらゆる事柄について何か見かけだけの知識をもつ者であって、真理(真の知識)をもつ者ではないということが、われわれに判明したことになる。

D

テアイテトス　完全に、おっしゃるとおりです。そしておそらくは、いま言われたことは、彼らを規定するのに最も正しい言い方ではありますまいか。

エレアからの客人　それでは、こうした事柄をもっとはっきりさせるための例をひとつ、取り上げてみることにしよう。

テアイテトス　どのようなおたずねでしょうか？

エレアからの客人　次のようなものだ。どうか、よくよく注意しながら私に答えるよう、努めてくれたまえ。(1)

テアイテトス　どのようなものでしょうか？

エレアからの客人　もしある人が、自分はただ一つの技術によって、語ったり論争したりすることではなく、ありとあらゆるものを作ったり為したりすることができると主張するとしたら——

E

テアイテトス　あらゆるものとおっしゃるのは、どのような意味のことでしょうか？

エレアからの客人　私が言ったことの肝心な点が、君には、そもそも最初からわかってもらえないのだね。「ありとあらゆるもの」と言ったのが、どうやら、わからないらしいのだから。

テアイテトス　ええ、そのとおりなのです。

エレアからの客人　では説明するが、私の言う「あらゆるもの」とは、君や私や、加えてさらにその他の動物や樹々などを含めたものなのだ。

1　以下の箇所については、『国家』X. 596C～E を参照。

テアイテトス　さて、どういう意味でしょう?

エレアからの客人　もしある人が、私や君やその他すべての自然物を作るだろうと主張するとしたら——

テアイテトス　いったいその「作る」というのは、どういうことなのでしょう? 農夫のような人のことを言おうとなさっているのでないことは、たしかですからね。なにしろ、その人は動物をも作るとおっしゃったのですから。

エレアからの客人　そうとも。それにまた、海や、大地や、天空や、神々や、その他ありとあらゆるものをね。それだけではない、その人は、そうしたひとつひとつのものをすばやく作っては、ごくわずかの金で売るのだよ。

テアイテトス　何かの遊びごとのことをおっしゃっているのですね。

エレアからの客人　ではどうだろう、——あらゆることを知っていて、それをわずかの値段でわずかの時間のうちに、他の人に教えることができると言う人についても、その人のすることは遊びごとであると考えてはいけないだろうか?

テアイテトス　それはどうしても、そう考えざるをえないでしょう。

B

エレアからの客人　ところで〈遊びごと〉の種類として、ものを真似ることほど、技巧が必要なものや、あるいは面白いものを、君は何か挙げることができるかね?

テアイテトス　いいえ、けっして。何ぶんにもあなたは、全部を一つの種類として一括したうえで、きわめて広い範囲にわたる、そしておそらく最も多種多彩なものを挙げられましたからね。

二二

エレアからの客人　では、自分は一つの技術によって、あらゆるものを作ることができると約束する人については、われわれには次のことがわかっているはずだ。すなわち、その人は要するに絵画の技術によって、実物と同じ名で呼ばれる似姿を作るわけなのであって、そうして描かれた像を遠くから見せるならば、知恵の行かない幼い子供たちをだまして、自分は何でも思いどおりのものを実際に作り上げる能力を完全にそなえているのだというように、思いこませることもたしかにできるだろう、とね。

C

テアイテトス　もちろんです。

エレアからの客人　さあ、それではどうだろう、——言論に関しても何かこれと対応するような技術があると、期待してはいけないだろうか？　すなわちこの領域においても、その技術によって、あらゆる事柄についての言葉による影像を示すことにより、ものごとの真相からまだ遠く離れたところにいる若者たちを、耳を通して言論の力で欺いて、真実を語っているように思わせ、論じ手をすべてのことについて誰よりも最も知者であると思わせることができるのではないだろうか？

D

テアイテトス　何かそのような別の技術が、当然あるに違いありません。

エレアからの客人　ところで、テアイテトス、そのときに話を聞いた者たちの多くは、充分な時がたち、彼らの年齢が進むにつれて、ものごとの実相に近接し、さまざまのつらい経験を通じて、ありのままの事実にはっきりと触れざるをえなくなると、必ずや先に植えつけられていた考えを改めることになり、その結果、重大に見え

(234)

ていた事柄が些細なことに見え、容易に見えていた事柄は困難なことに見えるというようにして、言葉のなかで

E の見かけの姿は、実際行動のなかで出会う事実によって、すべてが完全にひっくり返されてしまうということが、避けがたく起るのではないか？

テアイテトス　はい、私がこの年で判断できるかぎりでは。——ただしこの私もまた、まだものごとの真相から遠く離れたところにいる者のひとりだと思いますけれども。

エレアからの客人　だからこそ、われわれここにいる者はみんな、何とかして君がつらい経験なしに、ものごとの真相にできるだけ近づくようにしてあげようと努めるつもりだし、また現にこうして努めているのだ。——しかしそれはそれとして、ソフィストについて次の点を答えてくれたまえ。ソフィストとは実物を真似てその似姿を作るところの、一種のいかさま師であるということは、もはや明らかだろうか？ それとも、反論して渡り

235 合う能力があると思われているすべての事柄について、ほんとうにソフィストは知識をもっているのではあるまいかという疑いが、まだわれわれに残っているだろうか？

テアイテトス　どうしてそんなことがありえましょう、お客人。いや、これまで言われたことから考えて、ソフィストとは、〈遊びごと〉にたずさわっている者たちのひとりであることは、もはや明らかだといってよいでしょう。

エレアからの客人　そうすると、彼は一種のいかさま師であり、物真似師であると考えなければならない(1)。

テアイテトス　もちろん、そう考えなければなりません。

二三

エレアからの客人　さあそれでは、いまやもうわれわれの仕事は、この獲物をもはやけっして逃さないようにするということだ。われわれはこのソフィストという獲物を、議論のなかでこの種の狩に使う道具のひとつである網の中に、ほぼ囲みこんでしまったのだからね。彼はもう少なくともこのことだけは逃れられないのだ。

テアイテトス　どのようなことを、ですか？

エレアからの客人　手品師たちの種族に属する者のひとりである、ということだ。

テアイテトス　そのことなら、この私も彼について同じように考えます。

エレアからの客人　ではこれで、われわれのなすべきことは決まった。すなわち、われわれはできるだけ速やかに、〈影像（似像）作りの技術〉を分割しなければならない。そして、われわれがこの技術の領域の中へ踏みこんだときに、もしそこで直ちにソフィストがわれわれを待ち伏せして抵抗してくるのであれば、われわれの王なる理（ことわり）の命ずるところに従って彼を逮捕し、王に引渡してこの獲物のことを告げ報さなければならない。またもし彼が、この〈真似る技術〉のなかのさまざまの部分のどこかに潜伏の場所を求めるようであれば、彼をかくまっている部分をそのつど分割しながら、彼がつかまるまで、あとをつけて追跡して行かなければならない。いずれに

B

C

1　『国家』X. 598Dで、画家や詩人が同じく「いかさま師・物真似師」と呼ばれている。——なお、235A7 の μερῶν は削除して訳した。

せよ、このソフィストにしても他のどのような種類の者にしても、このように個別的でしかも包括的な追求をなしうる人たちの行なう探求を、逃れおおせたと自慢するような事態には、けっしてならないだろう。(1)

テアイテトス　ごもっともなお言葉です。おっしゃるようなことを、その手順によって行なわなければなりません。

D

エレアからの客人　これまで行なってきた分割の仕方に従えば、こんどもまたこの私には、〈真似る技術〉には二種類のものがあることを見てとれるように思われる。ただしかし、われわれが探し求めている形態のものを、そのどちらの中に見出すことができるかということは、いまのところまだ、私には見きわめることができないようだ。

テアイテトス　とにかくまずあなたから、その二つの種類とは何と何のことなのかを、分割したうえで言ってくださいませんか。

エレアからの客人　私がこの技術のうちに見るものの一つは、似像(模写物)を作る技術なのだ。これが成立するのは、とりわけ次のような場合である。すなわち、似たものを作り上げるにあたって、長さと幅と深さにおいて原物がもっている釣合いにこれを合致させ、さらに加えてそれぞれの部分にふさわしい着色をほどこすというやり方をとる場合が、それだ。(2)

E

テアイテトス　しかしどうでしょう、──そのことなら、何かを真似てかたどろうとする人たちのすべてが、そうするのではありませんか？

エレアからの客人　いや、少なくとも、何か巨大な作品を塑像として作ったり、画に描いたりする人たちは、

236 そうではないはずだ。なぜならそういう場合、もし美しい原物のもっている真実の釣合いをそのまま作品に与えるならば、君も知っているとおり、上方の部分は本来よりも小さく見えるだろうし、下の方の部分は大きく見えすぎることになるだろうから。一方はわれわれによって遠くから見られ、他方は近くから見られるためにね。

テアイテトス　たしかにそうですね。

エレアからの客人　そこで製作者たちは、真実にはおさらばをして、この場合は実際にあるがままの釣合いではなく、美しいと思われるような釣合いを、彼らの作る像のうちに与えるのではないか？

テアイテトス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　そうすると、先に挙げたもののほうは、実際に原物に似ているのであるからして、〈似像〉

1　エレアからの客人のこの言葉の全体は、ヘロドトス『歴史』第六巻(三一)が「引き網式の掃蕩・住民狩り」と呼んだものを念頭に置いて語られていることが、注釈家たちによって指摘されている。プラトンの『メネクセノス』240A〜C、『法律』III. 698C〜Dによれば、ペルシア王ダレイオス一世は、エレトリア人とアテナイ人を捕え奴隷にして連れ帰るようにと指揮官ダティスに命じて、大軍をまずエレトリアに送った。この命をうけたダティスの兵たちは(本文中の「われわれの王なる……の命ずるところに従って」という言い方を参照)、エレトリアに到着後、住民を一人も逃さぬよう、海から海までの間に手をつないで並び、全国土を地引網で浚(さら)えるようにして通りぬけたという。

2　ここで言われる「似像」(模写物)(エイコーン)を、通常よりも狭い意味——原物の完全な複製と再現、レプリカ——と考える(コーンフォード)必要はない。「似像」は依然「影像」(エイドーロン)の一種類であり、エレアの客人の次の言葉から推察できるように、絵画においても同様に考えられるものである。或るものの完全な再現はもはや「似像」(エイコーン)とは呼ばれえないことは、『クラテュロス』432B〜Cで言われているとおりであり、プラトンがこの考えと用語法を変えたとみなすべき理由は何もない。

と呼んでしかるべき、ではないかね。

テアイテトス　ええ。

B

エレアからの客人　そして、〈真似る技術〉のなかのこれに対応する部分は、先にわれわれが言ったように、〈似像を作る技術〉と呼ばれるべきだろうね。

テアイテトス　そう呼ばれるべきです。

エレアからの客人　ではどうだろう、――正しくない視点から見ているために、美しい原物に似ているように見えるけれども、実はしかし、人がそれだけ巨大な対象を充分に見てとる力を得たならば、似ていると称されるその当のものに似ても似つかぬものであるような、そのようなものをわれわれは何と呼んだらよいだろうか？　似ているように見えるけれども、実際には似ていないのであるからには、見かけだけの像と呼ぶべきではないだろうか？

テアイテトス　そのとおりです。

C

エレアからの客人　そしてこの種のものは、絵画においても、さらにはまた〈真似る技術〉のすべてにわたって、ずいぶんたくさんあるのではないかね。

テアイテトス　ええ、むろん。

エレアからの客人　そこで、〈似像〉ではなく〈見かけだけの像〉を作り出す技術は、これを見かけだけを作る技術と呼ぶのが最も正しいのではないだろうか。

テアイテトス　ええ、大いに。

エレアからの客人　それでは、〈影像作りの技術〉の二種類と私が先に言っていたのは、以上述べた二つのもののことだったのだ。すなわち、〈似像を作る技術〉と〈見かけだけを作る技術〉。

テアイテトス　正しい御指摘です。

エレアからの客人　ところがしかし、先ほども私が困惑していた点、つまり、そのどちらの技術のほうにソフィストを入れるべきかという問題については、いまでもまだ私は、はっきりと見てとることができずにいるのだ。

D いやはや、ほんとうにこのソフィストという男は不可思議な人間で、見きわめの至難な人間であることよ！　なにしろ、いまもまた、いともうまくまた巧妙に、探索の道に窮するような種類のものの中へと、まんまと逃げこんでしまったのだからね。

テアイテトス　そのようですね。

エレアからの客人　いったい君は、事柄がちゃんとわかっていて賛成してくれるのかね？　それとも、君が議論によって習慣づけられているために、いわば一種の惰性の力に引きずられて、そんなに早く賛成したのかね？

テアイテトス　どのような意味で、またどのようなこととの関連で、そう言われたのでしょうか？

二四

エレアからの客人　心したまえ、君よ、ほんとうのところわれわれは、まったく困難きわまりない考察のなかE に、はまりこんでいるのだよ。というのは、先ほどから問題の、そう見えたり思われたりするけれども、実際にはそうでないということ、また、何ごとかを語ってはいるけれども、真実を語っているのではないということ、

——こういったすべてのことは、昔も今も、つねに困難な問題に満ち満ちているからだ。じっさい、どのような言い方のもとに、虚偽がほんとうに存在すると語ったり考えたりすべきかということ、また、そのことを口にしたうえで、どのようにして矛盾に巻きこまれないようにするかということは、テアイテトスよ、まったくもって困難なことだからね。

237

テアイテトス　いったい、どうしてですか？

エレアからの客人　そのような言説は、大胆にも、あらぬもの（非有）があるということを前提している。なぜなら、この前提のもとでなければ、虚偽というものの存在は成立しえないだろうから(1)。しかしながら、君よ、かの偉大なパルメニデスは、われわれが少年だったころ、徹頭徹尾、このことに対する反対をわれわれに証言していたのだ。散文によりまた韻文によって、いつも次のように言いながらね。いわく——

なぜならばこのこと　あらぬものがあるということは　けっして証されぬであろう
いな　汝すべからく　探求にあたってこの道から想いを遠ざけよ(2)

B

こうして、あの人からの証言もあるし、それに何よりも、問題の言説そのものが、適度の吟味にかけられるならば、おのずから真実を明らかにすることだろう。だからわれわれは、まず最初にこの問題点自体を、よく考えてみることにしようではないか。君に異存がなければね。

テアイテトス　私のことなら、どうぞお好きなようになさってください。そして議論については、どのように進むのが最善の道であるかをお考えくださって、御自分が先に立ち、私にもその道をお伴させてください。

二五

エレアからの客人　いやそれなら、そうしなければなるまい。では答えてくれたまえ。――「まったくあらぬもの」ということを、われわれはためらわずに口にするだろうね。

テアイテトス　ええ、もちろん。

エレアからの客人　それでは、言葉の上の争いのためでもなければ、たわむれのためでもなしに、もしこの議論の聴き手のうちの誰かが、いったいこの〈あらぬもの〉(非有)という言葉をどこに向けて適用すべきか、という質問に対して、真剣に考えたうえで答えなければならないとしたら、われわれはどのように考えるだろうか？　その人は何に向けてまたどのような対象に対して、この言葉をみずから使用し、また質問者に対してその使用の仕方を示すだろうか？

C

テアイテトス　それはむずかしい御質問です。私のような者には、まったく答えるすべがないと言ってよいくらいです。

エレアからの客人　しかし、とにかくこのことだけは明らかなはずだ――すなわち、〈あらぬもの〉というのは、あるもののなかの何かに適用されてはならない、ということは[3]。

1　このことの意味は、240D～241Bにおいて説明されている。

2　Fr. 7. 1-2(DK.).

3　以下の議論については、『テアイテトス』188C～189A、『国家』V. 478Bを参照。

テアイテトス　ええ、どうして適用することができましょう。

エレアからの客人　そして、あるものに適用してはならないとすれば、さらに、それを何か或るものに適用するのもまた、正しくないことになるだろう。

テアイテトス　どうしてでしょうか？

D

エレアからの客人　このこともわれわれには明白だろうしね――すなわち、この〈何か或るもの〉という語もまた、われわれはそれをいつも〈あるもの〉に対して関連づけて語るということ。なぜなら、この語をただそれだけで、いわばすべてのあるものから孤立させ裸にして語るということは、不可能なことだから。そうだろう？

テアイテトス　不可能です。

エレアからの客人　君が賛成してくれるのは、〈何か或るもの〉を語る人は、必然的に、何か一つのものを語っているのでなければならぬ、というふうに考えるからではないかね？

テアイテトス　そうです。

エレアからの客人　じっさい、〈何か或るもの〉〔単数形 ti〕とは一つのものを表わすしるしであり、〈何か或るものと或るもの〉〔双数形 tine〕とは二つのものを表わし、〈何か或るものども〉〔複数形 tines〕とは多くのものを表わすしるしであると、君は言うだろうからね。

テアイテトス　ええ、むろん。

E

エレアからの客人　これに対して、〈何か或るもの〉を語らない人は、全面的に一つもないものを語っているのだということは、どうやら、全き必然であるということになるようだ。

238

テアイテトス　ええ、全き必然ですとも。

エレアからの客人　その場合われわれは、そのような人は語ってはいるけれども、しかし〈一つもないもの〉を語っているのだ、ということさえも承認すべきではなく、語ることすらしていないのだ、[1]と主張すべきではないかね――いやしくも、〈あらぬもの〉を口にしようとこころみる人は。

テアイテトス　たしかに、問題の言説がもっている困難は、ここに窮まったことになるでしょう。

二六

エレアからの客人　「まだ大きなことを言うなかれ」！　まだあるのだよ、君、――しかも、困難のなかでも最大にして第一の困難がね。なにしろこの困難は、この言説の出発点そのものに関係するものだから。

テアイテトス　おっしゃるのは、どのような意味のことでしょうか？　どうか、ためらわずに話してくださいませんか。

エレアからの客人　〈あるもの〉に対しては、あるもののなかの別の何かが、付け加わることができるだろう。

テアイテトス　ええ、むろん。

エレアからの客人　しかし〈あらぬもの〉に対しては、あるもののなかの何かが付け加わるということが、そも

1　〈一つもないもの〉を語る（μηδὲν λέγειν）というギリシア語は、一つも語ることがない、全然何も語らない、という意味にもなる。μηδέν は前者の場合のように名詞的にも、また後者の場合のように副詞的にも用いられるからである。『テアイテトス』189A 参照。

そも可能であるとわれわれは言うだろうか？

テアイテトス　どうしてそのようなことが言えましょう。

エレアからの客人　しかるに、われわれは数というものの全体を、あるもののなかに入ると考えている。

B

テアイテトス　ええ、数はあるものです――いやしくも他の何かをあるものとみなすべきならば。

エレアからの客人　それならば、われわれは〈あらぬもの〉に対しては、数の上での多をも一をも、適用しようと試みることさえしないようにしよう。

テアイテトス　どうやらたしかに、そのような試みは正しくないことになるようですね――議論の示すところによれば。

エレアからの客人　とすれば、どのようにして人は〈あらぬものども〉や〈あらぬもの〉を、数から切り離して、口を通して発言したり、あるいは、そもそも思考によってとらえたりすることができるだろうか？

テアイテトス　おっしゃることの意味を、説明してください。

エレアからの客人　「あらぬものども」とわれわれが言うとき、われわれは、数の上での多（複数性）ということを、そこに付け加えようとしているのではないかね。

C

テアイテトス　そのとおりです。

エレアからの客人　他方、「あらぬもの」と言うときには、こんどは数の上での一（単数性）ということを付け加えようとしているのではないかね。

テアイテトス　そのことは、まったく明らかです。

エレアからの客人　しかるに、われわれの主張では、〈あらぬもの〉に対してあるものを適合させようと試みるのは、不当なことであり、間違ったことであるのだ。

テアイテトス　おっしゃることは、まことにそのとおりです。

エレアからの客人　では、以上をまとめて君にわかるだろうね、――〈あらぬもの〉をそれ自体として単独には、正しい意味で口に出すことも、語ることも、考えることもできないのであって、それは、思考されえないもの、語りえないもの、口に出されえないもの、論じえないものであるということが。

テアイテトス　まったくそのとおりです。

D

エレアからの客人　そうするとしかし、ついさっき私は、この問題について最大の困難を話すことになろうと言ったのだが、あれは間違いだったのだろうか。ほんとうは、ほかにももっと大きな或る困難を、挙げることができるのだろうか？

テアイテトス　どのような困難を、でしょうか？

エレアからの客人　これは驚いた！　いったい君は、いままで語られた事柄それ自体のうちに、こういうことに気づかないのかね――つまり、〈あらぬもの〉というのは、反駁しようとする側の者をさえも、困難な行き詰りの中へ追いこむものであって、そのために人は、それを反駁しようと試みるたびに、それについて自分で自分に矛盾したことを語らざるをえなくなるということに？

テアイテトス　それはどのような意味でしょうか？　もっとはっきりとおっしゃってくださいませんか。

エレアからの客人　もっとはっきりしたものを、けっしてこの私の内に探してはならないのだよ。げんに私は、

(238)
E
〈あらぬもの〉は一にも多にもあずかるべきではないと前提しておきながら、ついさっきも、またいまもこのとおり、それを一つのものとして語ったではないか。なぜなら、〈あらぬもの〉〔単数〕というふうに言っているのだから。——わかってもらえるだろうね。

テアイテトス ええ。

エレアからの客人 さらにまた、私は少し前に、それは口に出されえないもの、語りえないもの、論じえないものであると言った。ついて来られるだろうね?

テアイテトス はい、もちろんです。

エレアからの客人 すると、この〈ある〉ということをそれに加え与えようと試みたことによって、私は、先に言われたことに相反することを語っていたのではないかね?(1)

239

テアイテトス そのように見えます。

エレアからの客人 さらにどうだろう、——そのことを加え与えたとき、私は〈あらぬもの〉のことを、あたかも一つのものを相手とするようにして語っていたのではないかね?(2)

テアイテトス ええ。

エレアからの客人 さらにいえば、「論じえないもの」「語りえないもの」「口に出されえないもの」〔単数形の形容詞〕という言い方をすることによって、私は、言葉を向ける相手が一つのものであるかのようにして、論をなしていたのだった。

テアイテトス まったくそれに違いありません。

エレアからの客人　しかるに、われわれの主張では、いやしくも正しい語り方をしようとするならば、それを一つのものとも多くのものとも限定してはならないし、またそもそも「それ」と呼ぶことさえ、けっしてしてはならないのだ。なぜなら、この呼び方によっても、それは一つのもの〔単数〕の形で呼ばれることになるのだから。

テアイテトス　まったくそのとおりです。

二七

B

エレアからの客人　こういう次第なのだから、この私のことなど語って何になるだろう？　私がずっと前からも、いまのいまも、〈あらぬもの〉への反駁に関して打ち負かされていることがわかるだけだろうからね。だから、さっきも言ったように(3)、〈あらぬもの〉についての正しい語り方を、この私の語ることのなかに探すのはやめることにしよう。さあ、いまこそは、それを君のなかに求めてしらべることにしようではないか。

テアイテトス　どのような意味で、そうおっしゃるのでしょうか？

エレアからの客人　さあ、君は若いのだから、どうかわれわれのために立派に堂々と、君にできるだけの力をつくして試みてくれたまえ――あるということも、数の上での一をも多をも、〈あらぬもの〉に付け加えることな

1　〈あらぬもの〉に対してはあるもののなかの何かが付け加わることは不可能である、という原則（238A）を指す。

2　「そのこと」（＝〈ある〉ということ）とは、この場合、「〈あらぬもの〉は思考されえないもの、語りえないもの……である」（238C）と言われたときに用いられた、三人称単数形の動詞「ある」（ἔστιν）を指している。

3　238D.

しに、それについて正しい仕方で何ごとかを発言するようにね。

C

テアイテトス　しかしその試みのためには、私はさぞかし大きな、そして場違いの熱意にとらえられなければならないでしょうね――ほかならぬあなたがいまのような目にあっておられるのを見ながら、自分自身がそれを試みるのだとしたら。

エレアからの客人　いやそれなら、もしよければ、君とか私とかのことは、これ以上構わないことにしよう。そして、誰かそれのできる人に出会うまでは、さしあたって、こう言っておくことにしよう――ソフィストはこれ以上ないほどのずる賢さで、探索不可能な場所へ潜伏してしまった、と。

テアイテトス　ええ、大いにそのように見えます。

エレアからの客人　こういうわけだから、もしわれわれが、ソフィストがもっているのは一種の〈見かけだけを作る技術〉であるなどと言おうものなら、彼はやすやすと、このような言葉の使い方を逆手(さかて)にとってわれわれに

D

摑みかかり、議論を反対にこちらに向けてくることだろう、――彼のことを〈影像の作り手〉とわれわれが呼ぶとき、いったい全体「影像」とは何のことを言っているのかと、問い返すことによってね。だから、テアイテトス、そういう質問に対して、この元気のよいしたたか者に何と答えたらよいのか、考えてみなければならないのだ。

テアイテトス　むろんわれわれは、こう答えるでしょう――水や鏡にうつった像、さらにまた絵に描かれた像や彫刻につくられた像、その他すべてこれに類するもののことを言っているのだ、と。

E

エレアからの客人　疑いもなく君は、テアイテトス、まだソフィストというものに実際に出会ったことがないようだ。

テアイテトス　いったい、どうしてですか？

エレアからの客人　彼はきっと君に、目を閉じているかのように、あるいは、目などまったくもっていないといったように、見せかけることだろう。

テアイテトス　どのようにしてですか？

エレアからの客人　君がいまのような答え方をして、鏡や塑像などに見られるもののことを語るならば、彼はきっと、君のそういう論じ方をあざ笑うことだろう、――君がそのように、相手の目が見えることを前提にして

240

彼に語りかけると、自分は鏡も水も知らないし、またそもそも見るということさえも知らないのだ、といったふりをしてね。そして、純粋の推論の結果得られるものだけを要求して、君に質問してくるだろう。

テアイテトス　それは、どのようなものでしょうか？

エレアからの客人　君がいま挙げたさまざまの例の、すべてを貫いている肝心のもののことだ、――つまり、そうした多くの例を挙げながらも、君はそれらをただ一つの名前で呼ぶのが正当だと考え、そのすべてに対して「影像」という言葉を共通に口にしたわけだが、このことは、君がそれらを結局は一つのものとして取り扱っていることを意味するのだからね。さあ、それが何であるかを言って、一歩も退かずにあの男に対して、自分の立場を守りたまえ。

テアイテトス　それならば、お客人、われわれは〈影像〉というものを、真実のものに似せられた別のそのよう

(240)

なものである、と言うよりほかに、どのように言うことができるでしょうか？

B

エレアからの客人　「別のそのようなもの」と君が言うのは、もうひとつの真実のもののことかね、それとも、この「そのようなもの」という言い方で、君は何のことを言ったのかね。

テアイテトス　けっして真実のものではないけれども、しかしそれに似てはいるもの、のことです。

エレアからの客人　その場合、真実のものと君が言うのは、ほんとうにあるもののことだろうか。

テアイテトス　そうです。

エレアからの客人　ではどうだろう、――真実ではないものとは、真実とは反対のものだろうね。

テアイテトス　ええ、むろん。

エレアからの客人　そうすると、「似ているもの」と君が言うのは、ほんとうにあるのではないもののことなのだね――いやしくもそれを、真実ではないものと言うつもりならば。

テアイテトス　しかし或る仕方では、たしかにあるのです。

エレアからの客人　しかし、けっして真実にあるのではない、と君は主張するわけだ。

テアイテトス　ええ、たしかにそのとおりです。ただし、ほんとうに似像であることはたしかです。

エレアからの客人　そうすると、それは、ほんとうにあるものではないけれども、われわれが似像と呼ぶものでほんとうにあるのだ、ということになるわけだね？

C

テアイテトス　おそらくは、何かそのような結合の仕方で、〈あらぬ（ない）もの〉は〈あるもの〉と絡み合わされているのでしょうね――まことに奇妙なことには。

エレアからの客人　まったく奇妙なことだとも。とにかく、君の見るとおり、いまもまたソフィストというこの多頭の怪物は、〔〈ある〉と〈あらぬ〉との〕そのような交錯・接合を通じて、われわれをして不本意ながらも、〈あらぬもの〉が何らかの仕方であるということを、むりやりに認めさせたのだ。

テアイテトス　ええ、見ていますとも、大いに。

エレアからの客人　それではさらに、どうだろう、——われわれは、彼のもっている技術を何と規定したならば、自己矛盾をおかさずに筋を通すことができるだろうか？

テアイテトス　いったいどういう意味で、またどのようなことを恐れて、そのように言われるのですか？

D

エレアからの客人　ソフィストは見かけだけの像を扱って人を欺くのであり、彼の技術は一種の欺瞞の術であるとわれわれが主張するとき、われわれは、われわれの魂が彼の技術のために、虚偽を思いなす(誤った判断をする)のだと主張することになるのだろうか。それとも、どのようなことを言うのだろうか？

テアイテトス　いまおっしゃったことです。ほかにどのようなことが言えましょう？

エレアからの客人　そしてさらに、虚偽の判断とは、実際にそうであるのとは反対のことを思いなすような判断のことだろうね。それとも、どういう意味だろうか？

テアイテトス　おっしゃるとおり、反対のことを思いなす判断です。

エレアからの客人　そうすると君は、虚偽の判断とは、あらぬもの(ありもしない物事)を思いなすことであると、こう言うわけだね？

テアイテトス　必然的に、そういうことになります。

(240)
E

エレアからの客人　ということは、あらぬものをあらぬと判断していることだろうか、それとも、いかなる仕方でもあらぬものが、何らかの仕方であると判断していることだろうか。

テアイテトス　あらぬものが何らかの仕方であると判断しているのだ、と言わなければなりません、――そもそも人が、何らかの虚偽(誤り)を少しでもおかしているということであれば。

エレアからの客人　ではどうだろう、――たしかにあるものがまったくあらぬと判断することも、あるのではないか？

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　そのこともまた、虚偽だね？

テアイテトス　ええ、そのこともまた。

エレアからの客人　そして思うに、語られる言葉もまた、これと同じようにして、あるものをあらぬと語ったり、あらぬものをあると語ったりする場合に、虚偽の言表とみなされることになるだろう。

テアイテトス　どうしてそれ以外の仕方で、虚偽のものとなることがありえましょう。

エレアからの客人　まったくありえない、といってよいだろうね。しかしソフィストは、こうしたことを承認しないだろう。そもそもどうして、物のよくわかった人ならば、前に同意された事柄[1]がここであらためて別に同意確認されるとするならば、いまのことに賛成することができるだろうか？　われわれには、テアイテトス、ソフィストが言おうとすることがわかるだろうね？

テアイテトス　むろん、わからなくてどうしましょう。彼は、こう主張するでしょうね――われわれは、判断

のなかにも言表においても虚偽があるのだと、あえて語ったことによって、先ほど言った事柄と相反することを
B 言っていることになる、と。なぜなら、われわれはその場合何度も、〈あらぬもの〉に対して〈あるもの〉を付け加えることを余儀なくされているが、これが何にもまして不可能なことだということは、われわれが先ほど同意確認したところではないか、と。

二九

エレアからの客人　正しく思い出してくれた。しかしいまこそは、ソフィストを扱うのにどのようにすべきかを、熟考しなければならない時だ。(2) なぜなら、われわれが彼を、欺瞞師やいかさま師たちの技術のなかに位置づけて探索を進めて行くならば、いかに容易にまた数多くの反論と困難が生じてくるかということは、現に君が見るとおりなのだからね。

テアイテトス　ええ、大いに見ていますとも。

エレアからの客人　そしてそのような反論と困難は、無際限にあるといってよいくらいなのに、われわれはこ
C れまで、そのなかのわずかな一部分を述べたにすぎないのだ。

テアイテトス　もしそれがそのとおりなら、ソフィストを捕えることは、どうやら、不可能だということにな

1　テアイテトスの次の答えのなかで言われているように、238A, Cで用意された、「〈あらぬもの〉に対して〈あるもの〉が付け加わることは不可能である」ということを指す。

2　バーネット以外のほとんどの校訂者・訳者とともに、241B4において ὥρα(W) を読み、βουλεύεσθαι(B) を削除しない。

りそうですね。

エレアからの客人　それならどうしよう——われわれは、こうしていまここで、意気阻喪して引き下るべきだろうか？

テアイテトス　いいえ、私としては、けっしてそうしてはならないと申します——もしたとえ少しでも、私たちが何とかしてあの男を摑むことのできるてだてがあるのでしたら。

エレアからの客人　それなら君は、大目に見てくれるだろうね、——いま君が言ったように、もしわれわれが何とかして、かくも強力な言説[1]を相手に、たとえわずかでも有利な地歩をかち取ることができるなら、それでよしとしてくれるのだろうね？

テアイテトス　もちろんですとも。

D

エレアからの客人　それならもうひとつ、いまのこと以上にぜひ君に頼んでおきたいことがある。

テアイテトス　どのようなことですか？

エレアからの客人　どうか私が、いわば父親殺しのような人間になろうとしていると、とらないでくれたまえ。

テアイテトス　いったいそれは、どういうことですか？

エレアからの客人　われわれは自衛のためにどうしても、父なるパルメニデスの言説を吟味にかけて、〈あらぬもの〉（非有）が何らかの点であること、他方逆に〈あるもの〉（有）が何らかの仕方であらぬということを、力ずくでも立証しなければならないことになるだろう。

テアイテトス　そういったことを主張するために言論のなかで戦い抜かなければならないことは、明らかです。

エレアからの客人　むろん、明らかだとも――よく言われるように、盲人にさえもね。なぜなら、いま言ったことが反駁もされず同意もされないならば、誰にせよ、虚偽の言表や虚偽の判断について――その関連するところが〈影像〉であれ、〈似像〉であれ、〈似姿〉であれ、〈見かけだけの像〉であれ――論じながら、あるいはまた、これらのものを扱う技術について論じながら、自己矛盾したことを言わざるをえなくなって笑い者になるという事態を免れることは、そもそも不可能だといってよいだろうからね。

E

テアイテトス　まったくおっしゃるとおりです。

エレアからの客人　そういう理由によって、われわれはいまや勇を鼓して、あえて父親の言説に対して、攻撃を加えなければならないのだ。それとも、もし何らかのためらいがそうすることを妨げるのであれば、全面的に手を引かなければならない。

242

テアイテトス　いや、このことに関しては、けっして何ものもわれわれを妨げることがあってはなりません。

エレアからの客人　それではもうひとつ、三番目のお願いとして、ほんのちょっとしたことを君に頼んでおきたい。

テアイテトス　どうぞ、おっしゃってください。

1　すなわち、〈あらぬもの〉にまつわる困難を盾にとるソフィストの議論。――なお、παραστασώμεθα 241C8 の解釈は、アーペルト、ディエス、テイラーの線に従う。

エレアからの客人　さっき私はたしか、議論の途中でこう言ったはずだ[1]――こうした事柄に関する反駁には、いつも私はほとほと参っているし、いまもまたそうなのだと。

テアイテトス　おっしゃいました。

エレアからの客人　そこで、自分がそのように言ったことが、どうも気がかりなのだよ――そのために私が、一歩あるくとたちまち態度が豹変するというので、気違いじみた男だと君に思われはしないかとね。じっさい、B われわれがこの言説を――もし反駁できるなら――反駁することを試みようとするのは、ほかならぬ君のためなのだからね。

テアイテトス　それでしたら、あなたがその点についての反駁と論証に立ち向かって行かれても、少なくともこの私は、けっしてあなたが突拍子もないことをなさると思ったりはいたしませんから、どうかそのことに関するかぎり、安心して存分におやりください。

三〇

エレアからの客人　さあそれでは、危険多き議論に取りかかるにあたって、まずどのようにして始めたらよいだろうか？　ぼくには、君よ、われわれとしてどうしてもとらなければならない道が、ここにひとつあるように思えるのだ。

テアイテトス　どのような道でしょうか？

エレアからの客人　まず最初に、いまのところ自明であるように思われている事柄を、よくしらべてみるとい

C うことだ。そういう事柄についてわれわれの考えが、実際にはまったく混乱しているのに、明確に理解しているつもりで、お互いに気安く同意し合うようなことがないようにね。

テアイテトス　おっしゃることの意味を、もう少しはっきりと説明していただけませんか。

エレアからの客人　私にはね、パルメニデスにしても、またその他誰にせよこれまでに、ある(実在する)ものがどれだけの数あって、どのような性質のものであるかを規定し裁定するという仕事に立ち向かった人はみな、どうも気楽すぎる仕方でわれわれに語りかけてくれたように思えるのだよ。

テアイテトス　どのような点でですか?

エレアからの客人　つまり、どの人もどの人も、まるで子供に語り聞かせるような具合に、何か物語(ミュートス)めいたことをわれわれに話しているという感じがするのだ。すなわち、或る人によれば、ある(実在する)

D ものは、三つであって、そのうちの或るものは時には互いに戦い合い、時にはまた互いに親しくなって、結婚し、子供を産んで、その子供たちを養い育てるのだという。[2] また別の人は、ある(実在する)ものは二つであって、〈湿ったもの〉と〈乾いたもの〉、または〈熱いもの〉と〈冷たいもの〉がそれであると言い、それらをいっしょに住まわ

1　239B.

2　最初期の哲学者たちは、宇宙・万有がもと何からいかにして生じたかを問うたが、そのいわゆる宇宙創成説(コスモゴニアー)は、このような性と結婚の観念、および相反する勢力間の戦いと争いの観念に、大きく依存していた。ここで言われる「或る人」が誰を指すかは、これだけの言葉では不明と言うほかはないが、最初期哲学者に関するわれわれに残されたとぼしい資料のなかに、万有の始原・原理としてこのように三元を立てた人をしいて探すならば、ゼウスとクロノス(時)とクトニエー(大地)を宇宙創成の最初に置いたシュロスのペレキュデス(前六世紀)が、該当者ということになろう。

せ、結婚させている。(1) これに対して、われわれのところのエレア族は――これはもとクセノパネスから、またさらにそれ以前から始まるのであるが――、万物と呼ばれているものは実は一つのものである、という考えに立って、その立場から彼らの物語において話を展開しているのである。(2)

E

他方、何人かのイオニアのムゥサ(詩神)たち、またこれより後れてシケリアのムゥサたちは、両方の考えを結び合わせるのが、――そしてあるもの(実在)は多であるとともに一であって、憎しみと愛とによって統合されているのだと語るのが、最も安全であると考えるにいたった。すなわち、「それはつねに、仲違い(分裂)することによって和合している」と、このムゥサたちのなかでも、より張りつめた調べをもつ者たちは主張する。(3) これに対して、より緩やかな調べのムゥサたちは、そのあり方がつねにそうであるという点を弛めて、万有はむしろ交互に、あるときはアプロディテ(恋の女神)の力によって一となり互いに親しくなるが、あるときは一種の争いのために多となり互いに敵対し合うのである、と語っている。(4)

243

これらすべての事柄について、以上挙げたうちの誰かの説がはたして真実であったか、それとも誤っていたかということは、判定のむずかしい問題であるし、名の高い古人たちに対して、そのような重大なことで言い掛りをつけるのは、場違いなやり方というべきだろう。ただし、この点だけははっきりと表明しても差障りあるまいが……

テアイテトス　どのような点でしょうか？

エレアからの客人　この人たちはあまりにも、われわれ一般大多数の人間に対して超然と構えて、さっぱり顧慮してくれなかったという点だ。(5) なぜといって、彼らは、われわれが彼らの言うことについて行けようと、つい

B　て行けずに取り残されようと、そんなことにはまったくお構いなしに、めいめいが勝手に自分の話をどんどん片づけてしまうのだからね。

テアイテトス　どのような意味で、そうおっしゃるのですか？

エレアからの客人　彼らのうちの誰にせよ、その説のなかで、「多くのもの」、あるいは「一つのもの」、あるいは「二つのもの」が、「ある(実在する)」とか「生じた」とか「生じつつある」とか、そうかと思えばまた、別のところでは「分離」と「結合」とを前提として立てたうえで、「熱いもの」が「冷たいもの」と混合するとか、こういったことを口にしているとき、テアイテトスよ、神かけてきくが、君はそうした発言のどれかについて、そのときどきに彼らがいったい何を言っているのか、理解できるかね？　げんにこの私は、もっと若かったころ

1　「結婚」については前注参照。これも誰の説か特定することはできない。万有を熱・冷、乾・湿という「反対のもの」の相互対立や組合せによって説明する考え方は、ギリシア哲学において非常に古くまた根づよい伝統をもった考え方である。火・水・空気・土といういわゆる四元も、これら熱・冷、乾・湿の組合せと解することができる。

2　エレアの人パルメニデスとゼノン、およびサモス島のメリッソス(前四四〇年ころ)は、万有は唯一不変不動の実在であるとなし、エレア派と総称される。このエレア派が、「神はただ一つ」(Fr. 23, DK.)と言ったコロポンの人クセノパネス(前五七〇—四七五年ころ)および「さらにそれ以前」に起原が溯ると言われているのは、ちょうど『テアイテトス』179E(cf. 152E)において、ヘラクレイトスの万物流転説がホメロスおよびさらに古い起原をもつと言われているのと同じように、必ずしも厳密な意味での歴史的記述を真面目に意図したものと解する必要はないであろう。

3　ヘラクレイトス(前五〇〇年ころ)派を指す。相対立するものの不断の抗争と分裂が、そのまま世界の根本的な調和と和合をなすという、その中心思想については、Frr. 51, 10(DK.)、『饗宴』187A などを参照。

4　エンペドクレス(前四九二—四三二年ころ)の説を指す。Frr. 17, 20, 22, 26(DK.)などを参照。

5　アリストテレス(『形而上学』第三巻 $1000^{a}9$ sqq.)がこの言い方をそっくり踏襲している。

は、いまわれわれを困惑させているこの〈あらぬもの〉ということを誰かが語った場合でも、それを正確に理解できると思ったものだ。しかしいまでは、そのことについてわれわれがどれほどまでの困惑におちいっているかは、君の見るとおりなのだ。

C

テアイテトス たしかに見ています。

エレアからの客人 だから、おそらくはそれに劣らず〈あるもの〉に関しても、われわれの心の中には同じそういう状態があるのだが、われわれはこのほうについては、何らの困惑もないと称し、誰かがこの説を口にするときに理解できると主張して、ただ他方についてはわからないと言っているだけなのだろう――ほんとうは、両方どちらに対しても同様の状態にありながらね。

テアイテトス ええ、おそらく。

エレアからの客人 そして、われわれがいま挙げたそのほかのいろいろのこと(1)についても、同じくそう言わなければならないだろう。

テアイテトス たしかに。

三一

D

エレアからの客人 それでは、そうした他の多くのことについては、もしよければ、また後にでも考察することにして、いまはまず、最も重要で主導的なものについての考察を行なわなければならない。

テアイテトス それは、何のことでしょうか？ いやむろん、まず第一に〈あるもの〉(有)について考究しなけ

ればならぬとおっしゃるのでしょうね――それを口にする人々は、この語によってそもそも何を示しているつもりでいるのかということを？

エレアからの客人　立ちどころに、テアイテトス、わかってくれたね。いかにも私は、それがわれわれの進まなければならぬ探求の道であると言っているのだ――つまり、あの人たち自身がここにいるものと想定して、次のように質問しながらね。

「さあ、答えてください、あなた方はみな、万物は〈熱いもの〉と〈冷たいもの〉、あるいは何かこれに類する二つのものであると、主張される。しからば、その両方およびひとつひとつがあるとあなた方が語るとき、両者に適用して口にされるそのことは、いったい何を意味するのですか？　あなた方の言われるこの〈ある〉(有)ということを、われわれはどのように受け取ればよいのでしょうか？　それは、その二つのものと並ぶ第三のものであり、したがって万有は、あなた方によれば、もはや二つ(二元)でなく三つのもの(三元)であることになると、こう考えるべきなのでしょうか？　じっさいあなた方としては、その二つのもののどちらか一方を〈あるもの〉(有)と呼びながら、両者がともに同様の資格であるのだと言うはずはないでしょう。なぜなら、もしそうだとしたら、どちらの場合にも一つのものがあるだけで、二つのものがあることにはならないでしょうからね[2]」。

E

1　すなわち、「生じた」「生じつつある」「分離」「混合」など。

2　〈熱いもの〉=〈あるもの〉(有)とすれば、〈冷たいもの〉は(〈熱いもの〉とは異るから)あるもの(有)ではないことになる。同様にして、〈冷たいもの〉=〈あるもの〉(有)とすれば、〈熱いもの〉はあるもの(有)ではないことになる。かくて「どちらの場合にも」、〈熱いもの〉と〈冷たいもの〉のどちらか一つだけがあることになって、二元論はくずれる。

テアイテトス　おっしゃるとおりです。

エレアからの客人　「しかしそれなら、両方をいっしょにして〈あるもの〉(有)と呼ぶつもりですか？」

テアイテトス　ええ、おそらくは。

エレアからの客人　「しかし、親愛なる方々よ」とわれわれは言うだろう、「そのようにしてもやはり、あなた方はその二つのものを一つのものであると言うことになるのは、きわめて明白です[1]」

テアイテトス　まったく正しい御指摘です。

244

エレアからの客人　「それなら、われわれのほうはすっかり困惑に行き詰っているのですから、あなた方はぜひそうした点について、われわれに対して充分に明らかにしていただきたいのです――あなた方が〈ある〉ということを口にされるとき、そもそも何を指し示そうと望んでおられるのかを。なぜなら明らかに、あなた方のほうはこうした事柄を、とっくのむかしから知っておられるのに対して、われわれは、以前には知っていると思っていたのに、いまはまったく困惑に行き詰っているのですから。だから何よりもまず、いま言ったまさにその点をわれわれに教えてくださいませんか――われわれがあなた方の言われることを、理解していると思いこんでいな

B

がら、実際はそれとまったく正反対であるというようなことにならないために」

さあ、以上のようにわれわれが言って、この人たちに、またその他およそ万有が一つ以上のものからなると説くすべての人たちに、説明を求めたとしても、君よ、よもやわれわれのしていることが、どこか調子はずれに聞えるようなことはあるまいね？

テアイテトス　まったくそんなことはありません。

三二

エレアからの客人　では次にどうだろう、――万有は一つのものであると説く人たちから、彼らの説では〈あるもの〉(有)とはいったい何を意味するのかを、できるだけ聞き出すことに努めるべきではないかね？

テアイテトス　ええ、もちろん。

エレアからの客人　それでは彼らに、次の問に答えてもらうことにしよう。「あなた方は、ただ一つのものだけがあると主張なさっているはずですね？」――「いかにも、それがわれわれの主張である」と、こう彼らは言うだろう。そうだね？

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　「ではどうでしょう、――あなた方は何かを、〈あるもの〉(有)と呼ぶのですね？」

テアイテトス　ええ。

c

エレアからの客人　「その何かとは、〈一つのもの〉(一者)とそのまま同じものですか？　つまり、同じものに対して二つの名前を適用しているわけですか？　それとも、どうなのでしょうか？」

テアイテトス　いったいそのあとに来る彼らの答は、お客人、どのようなものでしょうか？

1　〈熱いもの〉＋〈冷たいもの〉を一まとめにして〈あるもの〉(有)と同一視するならば、この「〈熱いもの〉＋〈冷たいもの〉」という一つのものだけがあることになって、ふたたび二元論はくずれる。

(244)

エレアからの客人　明らかに、テアイテトス、先のような根本前提を立てた者にとっては、いまの質問に対しても、また他のどのような質問に対しても、答えるのは必ずしもまったく容易ではないだろう。

テアイテトス　どうしてでしょうか？

エレアからの客人　まず、一つ以上のものは何もないと前提しておきながら、二つの名前があるということに同意するのは、おかしな話だろう。

テアイテトス　おかしくなくてどうしましょう。

D

エレアからの客人　またそもそも、何らかの名前なるものが存在すると誰かが言うとき、それを容認するということ自体が、理に適いえないことなのだ。

テアイテトス　どういう意味でですか？

エレアからの客人　まず、その場合の名前というのが、事物とは別のものであるという前提をとれば、その人は二つのものがあると言っていることになるはずだ。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　しかしまた、もしその名前が事物と同じものだという前提をとるならば、それはまったく何ものの名前でもないと言わざるをえなくなるか、それとも他方、それが何ものかの名前であると主張しようとすれば、その名前はたんに名前の名前であるだけで、他の何ものの名前でもない、という帰結になるだろう(1)。

テアイテトス　そのとおりです。

エレアからの客人　そうなると、かの〈一者〉(一つのもの)なるものも、一者の名前でありながら、逆にまた名

前の一者であるというようなことになるだろう。(2)

テアイテトス　それは必然です。

エレアからの客人　では次にどうだろう、——彼らは〈全きもの〉(全体)というものを、〈あるところの一なるもの〉(実在する一者)と別のものであると言うだろうか、それとも、同じものであると言うだろうか？(3)

E

テアイテトス　もちろん同じものであると言うでしょうし、またげんに、そう言っています。

エレアからの客人　では、もしそれ〔実在する一者〕がひとつの全体であるとすればどうなるか。ちょうどパルメニデスも、こう言っているようにね——

　どの側からみても　まんまるい球の塊に似ていて
まんなかからあらゆる方向に均衡を保つ。ここあるいはかしこにおいて

1　以上、「ただ一つのものだけがある」という一元論者の根本前提を最も厳格に、文字通りの意味にとった場合に生じる困難の指摘である。(1)同じものを〈あるもの〉(有)および〈一つのもの〉(一者)という二つの名前で呼ぶことは、そのかぎりにおいて、二元を認めたことになり、一元論の建前と相反する。(2)またそもそも何らかの名前の存在を認めることと自体が許されない。なぜなら、(a)名前≠名づけられる事物、とすれば、名前と事物との二つのものの存在を認めたことになるし、(b)名前＝名づけられる事物、とすれば、その名前は何ものの名前でもないか、名前の名前でしかないかの、どちらかとなる。

2　このエレアの客人の言葉(テクストは底本のまま読む)は、名前と事物とが同じという前提をとった場合の、エレア派一元論者の〈一者〉(一なる実在)に関して生じる不合理な帰結を述べたものと解されるが、写本によってテクストが異なり、さまざまの読み方が提案されていて、原義を確定することはできない。

3　一元論者の立てる〈あるもの〉(有)が、ひとつの全体であるという点から見た場合の批判が、これからおこなわれる。

より大きくまたより小さいということは　あってはならぬことだから[1]〈あるもの〉(有)がここで言われているようなものであるとすれば、それは中心と端をもっているわけであるし、そしてもしそうとすれば、まったく必然的に、もろもろの部分をもっていることになる。それとも、どうだろうか？

テアイテトス　そのとおりです。

245

エレアからの客人　ところでたしかに、このように部分に分けられるものが、一つのものであるという状態をそれら諸部分全部の上に与えられてもっているということは、何ら不可能なことではないし、かくてそれはまさにそのような仕方で、総体であり全体であるとともに、一つのものであっても何ら差支えないだろう。

テアイテトス　もちろんその点は、いっこうに差支えありません。

エレアからの客人　けれども、そのような状態を受け取ってもっているものは、それ自体が〈一なるもの〉(一者)自体であるということは、不可能なのではないかね？

テアイテトス　どうしてでしょうか？

エレアからの客人　真の意味における〈一なるもの〉(一者)は、正確に論じるならば、絶対的に部分に分かたれえないものと言わなければならないはずだ。

テアイテトス　たしかにそうでなければなりませんね。

B

エレアからの客人　しかるに、いま問題にしているような、多くの部分からなるものは、この定義に合致しないだろう[2]。

テアイテトス　わかりました。

エレアからの客人　それならば、いったい〈あるもの〉(有)は、一つのものであるという状態をもっていることによって、そのような仕方で一であり全体であるのだろうか？　それともわれわれは、〈あるもの〉(有)がひとつの全体であることを、全面的に否定すべきだろうか？

テアイテトス　むずかしい選択を提出されましたね。

エレアからの客人　まさに君の言うとおりなのだ。というのは、〈あるもの〉(有)が、何らかの仕方で一つのものであるという状態を受け取ってもっているだけなら、それは〈一なるもの〉(一者)と同じものではないことが明らかになるだろうし、したがってまた、「万物」は一つより多くの数のものとなるだろうからね。(3)

テアイテトス　ええ。

c

エレアからの客人　しかしまた、もし〈あるもの〉(有)が、一つのものであるという状態を受け取ってもつこと

1　Fr. 8 (ll. 43-45) (DK.).

2　以上において、目下の批判のための前提が確立されたことになる。すなわち、諸部分からなる全体は、一つであるという状態をもつけれども、〈一なるもの〉自体(「部分に分かたれえないもの」と定義される)と同じではありえない。一つであるという状態または性格(パトス)をもつものと一者自体との区別が注目される。

3　いま確立された前提にもとづくディレンマの前半。〈あるもの〉(有)は、(1)諸部分からなる全体であるか、(2)そうでないか、のいずれかである。(1)とすれば、(先の前提により)〈あるもの〉(有)は〈一なるもの〉自体と同じでありえないから、〈あるもの〉(有)と〈一なるもの〉という二つのものが存在することになり、一元論はくずれる。——ディレンマの後半(すなわち、(2)とした場合の帰結)が、以下において、(i)〈全体者〉が別に存在するとした場合と、(ii)存在しないとした場合との、従属的ディレンマのかたちで述べられる。

による全体ではないとするならば、そして他方、〈全きもの〉(全体)そのものはあるとするならば、〈あるもの〉(有)は自分自身に不足するところのある不完全な存在である、という帰結が生じることになる。

テアイテトス たしかに。

エレアからの客人 そして、この議論によれば、〈あるもの〉(有)は自分自身を奪われていることになるから、あらぬものであることになるだろう。(1)

テアイテトス そのとおりです。

エレアからの客人 さらに、「万物」はまたしても、一つより多くの数のものとなる。〈あるもの〉(有)と〈全きもの〉(全体)とが、それぞれ別々に、固有の本性をもっているのだから。

テアイテトス ええ。

D **エレアからの客人** 他方しかし、〈全きもの〉(全体)というものはまったくないのだということにすると、同じそのことが〈あるもの〉(有)について言えることになるし、(2) さらにそれは、あらぬ(存在しない)だけでなく、あるものになる(生成する)ことさえ、けっしてできないことになるだろう。

テアイテトス いったい、どうしてでしょうか?

エレアからの客人 生成したものは、つねに、それの全体が生成したのでなければならない。したがって、もし全体というものをあるもののなかに入れないならば、存在も生成も、これをあるものとして語ってはならないことになる。(3)

テアイテトス たしかにどう見ても、そのとおりであるように思えます。

エレアからの客人　さらにまた、ひとつの全体をなしていないようなものは、けっしていかなる量のものでもあってはならない。なぜなら、何らかの量のものは、それがどれだけの量であるにせよ、必ず、全体としてそれだけの量のものであるのでなければならないからだ。

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　そして、ひとが〈あるもの〉(有)を二つであると言うにせよ、ただ一つであると言うにせよ、

E

そのような説をなす者にとっては、このほかにもまだ無数の事柄が、そのひとつひとつが計り知れぬ困難な問題をはらみながら、立ち現われてくることだろう。

テアイテトス　いま垣間(かいま)見られた諸点からも、そのことは明らかだといえましょう。まったくのところ、ひとつの問題はただちに他の問題につながっていて、そのつどその前に語られた事柄について、さらに大きくさらに困難な迷いをもたらすのですからね。

1　すなわち、この場合、〈全体者〉という別のあるものが、〈あるもの〉(有)のなかに含まれていないことになるから、〈あるもの〉(有)はそれだけ自分自身(すなわち、〈ある〉ということ)に不足するところがあり、「自分自身を奪われている」ことになる。したがってそれは、それだけ「あらぬ」という記述を許すことになる。

2　「同じそのこと」とは、直前に〈全きもの〉(全体)について言われた「ない」(あらぬ)ということを指すと解する(ブラック)のが、最も簡単であろう。〈全体〉ということ自体が全面的に否定されると、いっさいの〈ある〉(存在)も否定される結果になることについては、次に説明が与えられている。複数形(ταὐτὰ ταῦτα)が単一の事柄を指すことには困難はない。

3　何かが生成し終えたということは、それの一部が生成したことではなく、それの全体が出来上ったことを意味する。したがって、全体性自体が否定されるなら、生成も、生成の結果としての存在も考えられないことになる。

三三

246

エレアからの客人　それでは、以上においてわれわれは、〈あるもの〉(有)と〈あらぬもの〉(非有)のことを厳密に細かく論じている人たち[1]について、必ずしもそのすべての人々を詳しく取り上げたわけではないけれども、しかし一応これで充分だとしておこう。われわれはこんどは、問題を別の仕方で論じている人たちに、注目しなければならない。〈あるもの〉(有)は〈あらぬもの〉(非有)に少しも劣らず、それが何であるかを規定するのにてこずるものだということを、あらゆる人々の場合からよく見ておくためにね。

テアイテトス　ええ、その人たちのほうへも、向かって行かなければなりません。

エレアからの客人　まことに彼らの間では、実在についての相互の論争のために、いわば神々と巨人族との戦いにも比すべきものが行なわれているように思われる。

テアイテトス　どのようにですか？

エレアからの客人　一方の側の人たちは、すべてのものを、天上の目に見えない世界からこの地上へと、引きずりおろそうとする、——文字通り岩々や木々を両手で抱きかかえながらね。というのは、この人たちは、すべてのそのような事物をしっかりとつかまえながら、何らかの手ごたえと手触りを与えるもの、ただそのようなものだけがあるのだと、強硬に主張しているのだから。つまり彼らの規定によれば、物体と実在とは同じものなのであって、もし彼ら以外の誰かが、物体性をもたないような何らかのものがあることを主張しようものなら、彼らは頭から軽蔑して、もはやその他のことにはいっさい耳を貸そうとしないのだ。

B

テアイテトス　まったくのところ、あなたのおっしゃったのは、恐ろしい人たちですね。というのは、この私もこれまでに、たくさんのそういった人たちに、出くわしたことがありますので。

エレアからの客人　そう、だからこそ、彼らを相手に論争する人たちは、きわめて用心深い態度で、どこか上方高く目に見えない世界を拠点として身を守ろうとするのだ、──真の実在とは、思惟によってとらえられる非物体的な或る種の〈形相〉であることを、何としてでも認めさせようとがんばりながらね。そして、先の人たちが奉じるもろもろの物体、彼ら反対派が真実在と説くところのものを、議論のなかでばらばらに粉砕して、それは実在ではなく、動きつつある成り行き（生成）の過程にすぎぬもの、と呼んでいる。両陣営の間には、こうした論点をめぐって果てしない闘いが、テアイテトス、つねにたたかわれてきているのだ。(2)

C

テアイテトス　ええ、ほんとうに。

エレアからの客人　それでは、これら両種族の人たちから、順番に、彼らが実在として立てるものについての、説明を求めることにしようではないか。

テアイテトス　ではわれわれは、どのようにしてその説明を求めるべきでしょうか？

1　先に「ある（実在する）ものがどれだけの数あって、どのような性質のものであるかを規定し裁定するという仕事に立ち向かった人」（242C）と言われて、その後紹介されたすべての論者たちを指す。

2　この「闘い」における両陣営のそれぞれが歴史上の誰を、あるいはどの学派を指しているかを問うのは、むしろ無用のせんさくであって、われわれはここに語られている相対立する主張の内容そのものをそのまま、まともに受けとめればよいであろう。ただ、一方の〈形相〉論者の主張が、『パイドン』『国家』などに表明されたイデア論と合致する──けっして全面的にではないが──ことだけは、重要な点である。「解説」四一八─四二三ページ参照。

D

エレアからの客人　実在をもろもろの形相のうちに置く人たちからは、比較的容易に説明を聞き出せるだろう。このほうは、より穏やかな人たちだからね。しかし、あらゆるものを強引に引きずりおろして物体に帰せしめる人たちから説明を求めるのは、もっと困難だろうし、おそらくはまた、ほとんど不可能でさえあるかもしれない。だがこの人たちについては、こういう仕方で取り扱うべきだと私には思われる。

テアイテトス　どのような仕方で？

エレアからの客人　まず、もし何とかしてできることなら、彼らを実際に、いまよりも善良ですぐれた人間につくり変えるのが、いちばん望ましいことだ。しかし、もしそれがわれわれの力を超えることならば、せめて言論のうえでそうすることにして、彼らがいまよりももっと法に適った答え方をする気持になってくれるものと、想定することにしよう。何ぶんにも、よりすぐれた人々から同意された事柄のほうが、劣った人々から同意された事柄よりも、重みがあるだろうからね。とはいえ、われわれとしては、とくにこの人たちのことを気にかけているわけではない。われわれは真実をこそ求めているのだ。

E

テアイテトス　まったくおっしゃるとおりです。

三四

エレアからの客人　それでは、善良になったこの人たちに、君に答えるよう命じてくれたまえ。そして彼らが言うことを、君が通訳となって取り次いでくれたまえ。

テアイテトス　そういたしましょう。

247

エレアからの客人　では、彼らに言わせてくれたまえ――死すべき生きものというものがあることを、彼らは認めるかどうかを。

テアイテトス　むろん、認めます。

エレアからの客人　それは魂を内にもった物体（身体）にほかならないということに、彼らは同意しないだろうか？

テアイテトス　たしかに同意します。

エレアからの客人　ということはつまり、彼らは〈魂〉というものを、あるものに属すると考えているわけだね？

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　ではどうだろう、――魂には、正しい魂もあれば不正な魂もあり、また、思慮ある魂もあれば無思慮な魂もあるということを、彼らは認めないだろうか。

テアイテトス　認めます。

エレアからの客人　しかるに、そうした魂のそれぞれは、正義をもつこと、そなえていることによってこそ、それに応じた性格の魂になるのであり、また、それと反対のものをもつこと、そなえていることによってこそ、反対の性格の魂となるのだということは、認めないだろうか。

テアイテトス　ええ、そのことにも、彼らは賛成します。

エレアからの客人　しかるに、或るものにそなわるようになったり、離れ去ったりすることのできるものは、

間違いなく何ものかであることを、彼らは認めることだろう。

テアイテトス　認めますとも。

B　**エレアからの客人**　そうすると、〈正義〉や〈思慮〉やその他の徳、およびこれと反対のものがあるとして、さらにはまた、これらが内にそなわるところの〈魂〉があるとして、いったい彼らは、これらのもののどれかが目に見えるものであったり、手で触れられるものであったりすると主張するだろうか？　それとも、こうしたものはすべて、目に見えないものであると言うだろうか？

テアイテトス　それらのうちのどれひとつとして、とうてい彼らは、目に見えるものだとは主張できないでしょう。

エレアからの客人　では、そうした目に見えないものの場合どうだろう、——それらのものが何らかの物体をそなえているとは、よもや彼らは言わないだろうね？

テアイテトス　その点になると、彼らはもはや、全部について一律に同じ答え方をいたしません。まず〈魂〉そのものについては、これはやはりひとつの物体的なものであると自分たちには思われる、と言うでしょう。しかし、〈思慮〉その他、あなたがおたずねになったようなそれぞれのものについては、彼らは気おくれを感じて、そ
C　ういったものはあるもののなかにはまったく入らないのだと認めることにも、さりとてまた、それらはすべて物体であると強硬に主張することにも、どちらにもあえて踏み切ることができないのです。

エレアからの客人　それなら、テアイテトス、この人たちが善良な人間になってくれたことは明らかなわけだ。なぜって、彼らのうちでも、蒔かれて地から生まれた生粋の大地族の連中(1)なら、そんなことぐらいには少しも気

おくれしないで、何であれ自分たちが手で握りしめることのできないようなものは、そんなものはみな、全然何ものでもないようなものにすぎないのだと、あくまで頑強に言い張ることだろうからね。

テアイテトス　おっしゃることは、いかにも彼らが考えそうなことですね。

D

エレアからの客人　ではあらためて、彼らに対する質問をつづけることにしよう。とにかく、あるもののなかには、たとえそのほんの僅かな一部分にせよ非物体的なものが含まれるということを、彼らが承認する気になってくれさえすれば、それで充分なのだからね。というのは、そういった非物体的なものにも、また物体をもっているものにも、どちらにも本来共通にそなわっているもの――そのものに彼らは目を向けて、両者のどちらもあると言うわけだが、それはいったい何であるかを、彼らは言わなければならなくなるからだ。そうするとおそらく、彼らは答に窮して困惑することになるかもしれない。そこで、彼らがそういう状態になったとした場合、はたして彼らは、われわれのほうからの提案を受け入れて、〈あるもの〉を次のように規定することに同意しようとするだろうか、ひとつ考えてくれたまえ。

テアイテトス　いったい、どのような規定でしょうか？　おっしゃってください。そうすれば、おたずねの点はすぐにわかるでしょう。

エレアからの客人　では、私の言うのはこういうことだ。つまり、他の何らかのものに対して働きかけるとい

1　すべてを地上に引きずりおろす（246A）と言われた物体主義者のうち、善良な人間となりえない強硬派を指す。「蒔かれて地から生まれた」とは、テバイの祖カドモスが龍を退治してその歯を地に蒔き、そこから戦士たちが生まれてきたという伝説との関連で言われる言葉である。

う仕方にせよ、あるいは他から働きかけられるという仕方にせよ——それはどんな取るに足らぬものからどんな僅かな働きを受けるだけでも、しかもたとえただ一度だけ受けるのでもよいのだが——、とにかく、そういった何らかの仕方による能動的あるいは受動的な機能(力)というものを自然本来的にそなえているもの、すべてそのようなものはほんとうにあるのだ、ということだ。すなわち、存在とはつまるところ機能にほかならないというのが、私がここで提案するひとつの規定なのだ。

テアイテトス　いや、彼ら自身はさしあたっていま、それよりもすぐれたことを言えないのですから、その規定を受け入れますよ。

エレアからの客人　それで結構。おそらく後になれば、われわれもこの人たちも、また別の見方をするようになるかもしれないからね。とにかくこの人たちに対しては、いまのことをわれわれとの間の同意事項として、ここでさしあたってのところ、有効のまま存続させることにしよう。

テアイテトス　そういたしましょう。

三五

エレアからの客人　それではこんどは、もう一方の人たちに向かうことにしよう——すなわち、形相の友である人たちだ。この人たちの考えをわれわれに取り次ぐ役は、こんども君にやってもらいたい。

テアイテトス　そういたしましょう。

エレアからの客人　諸君は、〈生成〉(成り行き)というものと、他方〈実在〉とを区別して、別々のものとして語

っているはずだね。そうではないか？

テアイテトス　そうです。

エレアからの客人　そして、われわれは身体により、感覚を通じて、〈生成〉と関わりをもち、他方、魂により、思惟を通じて、真の〈実在〉と関わりをもつのだ、と。その〈実在〉はつねに恒常不変のあり方を保つのであるが、他方〈生成〉は刻々に変転するものであると、こう諸君は主張する。

B

テアイテトス　たしかにそれが、われわれの主張です。

エレアからの客人　さてしかし、その関わりをもつということだが、類いなくすぐれた諸君よ、そのことを諸君が両方どちらの場合にも語るとき、それはどのような意味のことであるとわれわれは言うべきなのだろうか。いったいその意味は、いましがたわれわれが言ったことにほかならないのではないか？

テアイテトス　とおっしゃいますと？

エレアからの客人　ものが互いに出会うときに何らかの機能にもとづいて、働きかけられたり働きかけたりすることだ。ところで、もしかしたら君は、テアイテトス、こうした点に関する彼らの答をよく聞き取ることができないかもしれないが、私なら慣れているから、おそらくわかるだろう。

テアイテトス　いったい彼らは、どのようなことを言うのですか？

C

エレアからの客人　彼らはね、大地族の人たちに向けていましがた実在について語られた事柄を、われわれに対して承認しないのだ。

テアイテトス　どのような事柄をですか？

エレアからの客人　働きかけられたり、あるいは——どれほど些細なものとの関係においても——働きかけたりする機能が、或るものにそなわっている場合、そのことをもってわれわれは、〈ある〉ということの充分な規定としたはずだね？

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　ところが、これに対して彼らはこう言うのだ、——すなわち、たしかに〈生成〉のほうは、働きかけられたり働きかけたりする機能にあずかるけれども、しかし〈実在〉に対しては、そのどちらの機能も適合しえないのだと、こう主張するわけだ。

テアイテトス　その言い分には、一理あるのではないでしょうか？

エレアからの客人　そう、少なくともそれに対して、われわれとしては、さらにもっとはっきりと彼らから聞かせてもらいたいことがあると、言わなければならないからね——すなわちそれは、〈魂〉は知り、〈実在〉は知られるということを、はたして彼らはさらにつけ加えて認めるかどうかということだ。

D

テアイテトス　そのことならば、間違いなく彼らは肯定します。

エレアからの客人　ではどうだろう、——いったい諸君の主張では、知ること、あるいは知られるということは、働きかけることなのか、あるいは働きかけられることなのか、あるいはその両方であるのかね？　それとも、一方は働きかけられることであり、他方は働きかけることなのかね？　それとも、どちらもがそのどちらとも、まったく関係がないのかね？

テアイテトス　明らかに、どちらもどちらとも関係ありません。そうでなければ、彼らは先に言ったことと相

反することを、言うことになるでしょうから。

E

エレアからの客人　わかった。つまり彼らは、きっと次のように言うことになるわけだね。――もし知るということが、ひとつの働きかけにほかならないとするならば、知られるもののほうは、働きかけられるのでなければならないことになる。そうすると、この論に従えば、〈実在〉は認識の対象となって知られるものなのであるから、それが知られるのに応じて、ちょうどそれだけ、働きかけられることによって変動をこうむることになる。そのようなことはしかし、静止しているものには起りえないことだとわれわれは主張する、と。

テアイテトス　そのとおりです。

249

エレアからの客人　しかし、ゼウスに誓って、はたしてどんなものだろう？　いったいわれわれは、ほんとうに動や生や魂や思慮が、全き意味での実在にそなわっていないというようなことを、そう簡単に信じてよいものだろうか――それが生きてもおらず、思慮をはたらかせることもなく、厳かな聖像さながらに、知性をもたずに不動のまま立っている、などということを？

テアイテトス　それはたしかに、お客人、われわれは恐ろしい説を容認することになるでしょうね。

エレアからの客人　ところでしかし、知性をもっていながら、生命はもっていないということを、われわれは主張できるだろうか。

テアイテトス　どうしてそんなことが主張できましょう。

エレアからの客人　では、その両方ともが実在にそなわっていると言いながら、それらを魂の内にもっているのではないというようなことを、われわれは主張できるだろうか。

テアイテトス その両者を、ほかのどのような仕方でもつことができましょう。

エレアからの客人 しかしそれなら、それが知性と生命と魂をもっていながら、しかし――魂を内にもつものであるのに――まったく不動のまま静止しているということは？[1]

B

テアイテトス それらのことはみな、理に反しているように私には思われます。

エレアからの客人 そうとすれば、動くものも動そのものも、あるものとして認めなければならない。

テアイテトス ええ、どうしても。

エレアからの客人 いずれにせよ、テアイテトス、まず、もしすべてが不動のものであるとするならば[2]、知性というものが、何ものの内にも、何ものに関しても、どこにも、まったく存在しないという帰結になる。

テアイテトス まさしくそのとおりです。

エレアからの客人 他方また、もしすべてが運動し変動しつつあるということを認めるとするならば、この論によってもやはり、われわれは同じく知性を、あるもののなかから排除してしまうことになるだろう。

テアイテトス どうしてでしょうか？

エレアからの客人 ものごとが恒常的に同一の局面のもとに、同一のあり方で、同一のものに関わってあるということが、静止ということなしに、そもそも起りうると君には思えるかね。

C

テアイテトス いいえ、ぜんぜん。

エレアからの客人 ではどうだろう、――そういった条件なしに、いずこにおいてにせよ知性の働きが存在したり、生じたりするのを、君は見ることができるだろうか。

テアイテトス　いいえ、けっして。

エレアからの客人　そしてわれわれは、もし知識や思慮や知性を否定し抹殺しておきながら、何らかの考えを強硬に主張する者がいるならば、あらゆる議論をもってその人と戦わなければならないのだ。

テアイテトス　ええ、大いに。

エレアからの客人　こうして、哲学者として知識その他いま挙げたものを何よりも尊重する者としては、どう

D　やら、以上の理由によって、一者あるいは多くの形相を説く人々から万有は静止しているという説を受け入れてもならないし、他方また、あるものはあらゆる仕方で動いていると説く人々にも、絶対に耳をかしてはならないというのが、ぜひともとらなければならぬ必然的な道であることになるようだ。いや彼は、子供たちの祈りの言葉にならって、あるものと万有は、動かぬもののすべてと動いているもののすべてとの、その「両方とも」であると言わなければならない。

テアイテトス　ほんとうにそのとおりです。

三六

エレアからの客人　さてどうだろう、――これでもうわれわれは、〈あるもの〉(有)を議論によってうまくとら

1　魂は動の原理であることについては、『パイドロス』245C～246Aにおける魂不死の論証や、『法律』X. 895A sqq. を参照。

2　テクスト(249B5)は、アーペルト(訳)やコーンフォードとともにバッダムの提案(ἀκινήτων τε ὄντων πάντων)に従う。

えることができたように見えるのではないかね？

テアイテトス　ええ、たしかにそうですね。

エレアからの客人　ああ、ところがね[1]、テアイテトス、われわれは、〈あるもの〉(有)についての考察がどんなに困難であるかを、いまにして知らされることになるだろうと、ぼくにはそんなふうに思えるのだよ。

E

テアイテトス　いまさらまた、どうしてなのですか？　なぜそうおっしゃるのですか？

エレアからの客人　幸せな子よ、君は気がつかないのかね——われわれはいまこそ、この問題について最もひどい無知のなかにいるのであって、ただ自分ではかなりのことを論じているように思っているだけだ、ということに？

テアイテトス　ええ、少なくとも私はそう思っています。それなのに、こんどはまたどうしてわれわれが、おっしゃるような状態にあることにまったく気づかずにいるのか、その点がさっぱりわかりません。

250

エレアからの客人　それでは、もっと明確にしらべてみてくれたまえ、——われわれはいまの結論に同意したことによって、こんどは当然、先ほど万有は〈熱いもの〉と〈冷たいもの〉であると規定する論者たちに対して、われわれ自身がたずねていた[2]のとちょうど同じ質問を、つきつけられてしかるべきではないか、ということをね。

テアイテトス　どのような質問でしたでしょうか？　思い出させていただけませんか。

エレアからの客人　いいとも。そして私は、あのとき彼らに質問したのと同じ仕方で君に質問することによって、思い出してもらうようにつとめよう。そうすればまた、われわれは同時にいくらかでも前進することができるだろうからね。

テアイテトス　結構です。

エレアからの客人　さあ、それではたずねよう。――〈動〉と〈静〉とは互いに正反対であると、君は言うのではないかね。

テアイテトス　ええ、もちろん。

エレアからの客人　しかるに君は、その両方ともが、またそのそれぞれが、同等にあるのだと主張するのだね。

B

テアイテトス　たしかにそう主張します。

エレアからの客人　そのあるということを君が認めるとき、それらの両方ないしはそれぞれが動いているということを、君は言っているのかね？

テアイテトス　いいえ、けっして。

エレアからの客人　しかしそれなら、それらの両方があると君が言う場合、君は、それらが静止しているということを意味しているのかね？

テアイテトス　どうしてそんなことがありえましょう。

エレアからの客人　してみると君は、〈有〉（あるもの）ということを、それらと並ぶ第三の何かとして心の内で

1　ここの部分テクスト破損。さまざまの復元案が提出されているが、成功していないように思われる。

2　243D～Eを見よ。

考え、その〈有〉(あるもの)のもとに〈静〉と〈動〉とが包みこまれるというかたちで、それらを包括し、〈有〉性に対するそれらの共通の関与に目を着けたうえで、まさにそのような意味において、両方があるというふうに語ったわけなのだね？

C **テアイテトス**　たしかにほんとうのところ、われわれが〈動〉と〈静〉があるというふうに語るとき、われわれはおそらく、〈有〉(あるもの)が第三の何かであることを予知しているのでしょうね。

エレアからの客人　してみると、〈有〉(あるもの)は、〈動〉と〈静〉との「両方とも[1]」ではなくて、それらとは別の何かであることになる。

テアイテトス　そのようです。

エレアからの客人　そうすると、〈有〉(あるもの)は、それ自身の本性においては、静止もしていないし、動いてもいないのだ。

テアイテトス　そのとおりでしょうね。

エレアからの客人　ではいったい、この〈有〉(あるもの)について何らかの明確な考えを自分の内に確実にもちたいと願う者は、このうえなお、どこに思考を向けたらよいのだろうか？

テアイテトス　ほんとうに、どこに向けたらよいのでしょうか？

エレアからの客人　思うに、もはやどこを向いても容易な道はないだろう。なぜって、もし何かが動いていな
D いとしたら、どうして静止していないはずがあろうか？　あるいは、ぜんぜん静止していないものが、どうしてこんどは動いていないはずがあろうか？　しかるにいま、〈有〉(あるもの)は、この両方どちらの場合からも外れ

たものとして、われわれの前に現われたのだ。いったいそんなことが、可能であろうか？

テアイテトス　いいえ、何にもまして不可能なことです。

エレアからの客人　それでは、こうした機会に思い出しておいてしかるべきことが、ここにひとつある。

テアイテトス　どのようなことですか？

エレアからの客人　われわれは、〈あらぬもの〉(非有)という名前がそもそも何に適用されるべきかとたずねられて、困難のために完全な行詰りにおちいった(2)、ということだ。憶えているかね？

テアイテトス　ええ、もちろん。

E

エレアからの客人　ところで、いま〈あるもの〉(有)についてわれわれをとらえている困難は、よもやあれよりも小さなものだとはいえないだろうね？

テアイテトス　この私には、お客人、もしこう言うことが可能なら、さらに大きなものに見えます。

エレアからの客人　それではいまのことが、ひとつの完全な困難をかたちづくるものとして、ここに提示されたものとしよう。しかし、〈あるもの〉(有)も〈あらぬもの〉(非有)も等しい程度に困難にあずかっているというこ

1　249Dを参照。〈有〉(あるもの)または〈あるもの〉(有)と訳されているギリシア語の τὸ ὄν は、「あるということ」(有)それ自体をも、「ある(存在する)ところのもの」をも意味しうる。ここの議論では前者の意味が前面に出されているので、先の249Dで言われた事柄と相反するような結論が導き出された。次のエレアの客人が言っている「それ自身の本性においては」という条件が、この点を解明する重要な鍵である。

2　237C～239Cを見よ。

251

とであれば、いまにして期待できることは、そのどちらか一方が今後、比較的不明瞭な現われ方にせよ明瞭な現われ方にせよ、とにかくその姿が判明してくるならば、それに応じて他方のものもまた、同じようにその姿を現わすだろうということだ。他方また、たとえわれわれが両者のどちらをも見ることができないとしても、少なくともわれわれは、われわれにできるかぎりの手際よい仕方で、同時に両方のために議論を押し進めることになるだろう。

テアイテトス　結構でしょう。

エレアからの客人　それではここで、われわれはいったいどのような仕方で、それぞれの場合に同じ一つのものを多くの名前で呼ぶのであるか、という問題を論じることにしよう。

テアイテトス　たとえばどのようなことですか？　例を挙げてください。

三七

エレアからの客人　われわれは、ある人間のことを語るのに、いろいろと多くの言い方でその人を呼ぶはずだ——色のことや、姿形のことや、大きさのことや、悪徳や徳のことなどをその人について、付け加えて語ること

B

によってね。いま挙げたものすべての場合、また他の無数の場合において、われわれは、その人が「人間」であるとだけ言うのでなく、さらに「善い」とも言うし、ほかにも数かぎりないいろいろのものであると言うわけだ。そしてその他のものについても同じことであって、われわれはそれぞれのものを一つのものと前提しておきながら、こんどは逆にそれを多くのものとして語り、多くの名前によって語るのだ。

テアイテトス　おっしゃるとおりです。

エレアからの客人　思うに、そのことによってわれわれは、若者たちだけでなく、老人のうちでも晩学の者たちに、楽しい御馳走を提供してきたのだ。というのは、多が一であったり、一が多であったりすることは不可能だと言って、直ちに文句をつけることぐらい、誰にでもすぐできることだからね。そこで彼らは、人間のことを「善い」と語ることは許されない、善いものだけを「善い」と語り、人間は「人間」であるとだけ語るべきだ、と主張しては悦に入っているようだ。げんに君も、テアイテトス、ぼくの思うには、こういったことに大まじめで熱中している連中に、何度も出会っているはずだからね。彼らは時には、もういい年をした人たちであって、ただ知的な財産が貧困であるがために、この種のことにすっかり感心してしまって、ただそれだけのことを、まるで何か大へんな知恵の宝庫を発見したように思いこんでいるのだ。(1)

C

テアイテトス　たしかにそうですね。

1　アリストテレスの『形而上学』第五巻二九章（1024b32–33）に「何ものもそれに固有の言葉によってしか語られえない。すなわち、一つのものについては一つしか語られえない」ということが、プラトンと同時代のアンティステネス（前四五五—三六〇年ころ）の主張として紹介され批判されている。しかし、ここでエレアの客人が言及している人人は、アンティステネスだけに限定される必要はなく、われわれはプラトンの他の対話篇からも、同様の主張がかなり広く行なわれていたであろうことを知る。たとえば『エウテュデモス』303D～Eでは、エウテュデモスとディオニュソドロスについて同様のことが言われている（しかも彼らは272B～Cにおいて年を取ってから学んだと言われている）。また（「一と多」という問題の側面から）『ピレボス』14D, 15D～E,『パルメニデス』129C～Dなどを参照。

(251)
D

エレアからの客人　それでは、われわれの議論が、かつて〈有〉(あるもの)について少しでも論じるところのあった人々のすべてに対して向けられるために、これから質問として述べることは、いま言った人たちに向けてだけでなく、先にわれわれが議論を交したかぎりの他の人々に向けても、語りかけられるものだと考えてくれたまえ。

テアイテトス　その質問とは、いったいどのようなものでしょうか?

エレアからの客人　そもそもわれわれは、〈有〉(あるもの)を〈動〉や〈静〉と結びつけるべきでもなく、また他の何ものをも別の何ものとも結びつけるべきでもなくて、それらは相互に混じり合わないもの、分取し合うことの不可能なものとみなし、そのような想定のもとに、それらをわれわれの議論のなかで取り扱うべきなのであろうか。それともわれわれは、すべては互いに関係をもち合うことができると考えて、何もかもすべてを一つに集めていっしょにすべきだろうか。それとも、或るものは互いに関係をもち合うことができるが、或るものはできないというふうに、すべきだろうか。——これらの想定のうち、テアイテトス、彼らはいったいどれを選ぶだろうと、われわれは言うべきだろうか?

E

テアイテトス　私としては、それらの点に関して、彼らに代ってどう答えたらよいか、何とも申せません。

エレアからの客人　それならどうして、たずねられたことの一つ一つに順次答えながら、それぞれの場合にどういう帰結が生じるかを、しらべてみないのかね?

テアイテトス　それはもっともな御注意です。

エレアからの客人　そこで、もしよければまず、何ものも他の何ものとも、関係し合う可能性をいっさいまっ

252

たくもっていない、という説を彼らがとるとしてみよう。そうすると、〈動〉と〈静〉とは、まったく〈有〉(あるもの)を分有しないことになるだろうね？

テアイテトス ええ、けっして。

エレアからの客人 ではどうだろう、――〈有〉(あるもの)に関与しないとすれば、それらのうちのどちらかがあるということが、可能だろうか？

テアイテトス いいえ、あることはできません。

エレアからの客人 そうすると、どうやらこの容認によって、すべてはたちまちくつがえってしまったことになるようだ――万有は動きのうちにあるとする人たちの説も、また一者として静止しているとする人たちの説も、それからまた、実在はもろもろの形相に則して恒常不変のあり方を保ちつつ、つねにあるのだと主張する人たちの説も、みんな一挙にね。なぜなら、これらの人々はすべて、〈ある〉ということを〔動きや静止に〕結びつけているのだから。或る人々は、ほんとうに動きのうちにあるのだと説き、或る人々は、ほんとうに静止してあるのだと説くことによってね。

テアイテトス まさしくそのとおりです。

B

エレアからの客人 さらにはまた、万物は時には結合し、時には分離すると説くかぎりの人たちも、同じことになる。それは、無限数のものが一つに結合しては、また一つのものから分かれて出てくると説くのでもよいし、有限の構成要素に分かれたうえで、それらの要素から構成されるとするのでもよい。そのことが交替に行なわれると考える場合でも、つねに行なわれると考える場合でも変りはない。いずれにせよすべてこうした点において、

この人たちは無意味なことを語っていることになるだろう——いやしくも、およそいかなる〈混じり合い〉[1]もありえないとするならば。

テアイテトス　正しい御指摘です。

エレアからの客人　そしてさらに、もし何ものに対しても、それが他のものの性質・状態に関与することによって他のものの名前で呼ばれることを、まったく許さないとすれば、そういう主張をする人々自身が、誰よりもいちばん滑稽な仕方で自分の説を追求することになるだろう。

C

テアイテトス　どうしてですか？

エレアからの客人　彼らは何ごとにつけても、「ある」という語をはじめ、「離れて」とか「他のものども」とか「それ自体だけで」とか、その他無数の語を、どうしても用いざるをえないはずだ。[2] 彼らがこれらの語を排して、議論のなかで結びつけて使用しないでいることができない以上、他の人々から反駁されるのを待つまでもなく、まさに諺に言われるように「敵はわが家の中に」いるわけであって、その敵が彼に反対を唱えるだろうし、彼らは、ちょうどあの奇妙なエウリュクレス[3]のような、内から声を出す敵対者をいつも連れまわって歩いているわけなのだ。

D

テアイテトス　まさにぴったりの譬えですし、おっしゃることは真実です。

エレアからの客人　では次に、すべてのものが互いに関係をもち合う力をもつことを容認するとしたら、どういうことになるだろうか？

テアイテトス　その問題なら、私でも解決することができます。

エレアからの客人　どのようにして？

テアイテトス　〈動〉そのものが完全に静止することになるでしょうし、逆にまた〈静〉そのものが動いていることになるでしょうから。もしもこの両者が、互いに重なり合うものとすればですね。

エレアからの客人　しかるにそのことは、最大の必然性によって、不可能なことだ――〈動〉が静止し、〈静〉が動くということは。

テアイテトス　もちろんです。

エレアからの客人　そうすると、残るのは第三の可能性だけだということになる。

テアイテトス　ええ。

三八

E

エレアからの客人　そしてたしかに、想定される三つの場合のうちの、少なくともどれか一つは必ず真でなければならないのだ――すなわち、すべてのものが混じり合おうとするのであるか、それとも、何ものもそうしな

1　〈有〉〈動〉〈静〉その他の間の相互関与、分有のこと。とくに〈有〉への関与。いっさいの結合と相互関係の可能性を全面的に否定する立場との矛盾を露呈している、ということ。

2　「それぞれのものは、他のすべてのものから離れて、それ自体だけである」という彼らの主張の言葉そのものが、このようにいくつかの語を結合させていることによって、

3　アリストパネス『蜂』(一〇一九行)にも言及されている、腹話術の得意な占師。腹話術を使って、占いを求めた人自身の中から声が聞えるような感を与えたという。

いのであるか、それとも、或るものはそうするが、或るものはそうしないのであるか、このうちのどれか一つがね。

テアイテトス　必ずそうでなければなりません。

エレアからの客人　しかるに、そのうちの二つは、不可能であることがわかった。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　したがって、問題に正しく答えようと望む者は誰でも、三つのうちの残る一つを立てることになるだろう。

テアイテトス　まさしくそのとおりです。

エレアからの客人　ところで、或るものは混じり合おうとするが、或るものはそうでないということであると、253 これはちょうど、文字（アルファベット）の場合と同じ事情にあるといえるだろう。なぜなら、文字もまた、その或るものは互いに適合するが、或るものは適合しないからだ。

テアイテトス　むろんそうですね。

エレアからの客人　なかでも母音は、他の文字よりも際立った仕方で、すべての文字の間に行きわたっていて、いわば繋（つな）ぎのような役を果している。だから、母音のうちのどれかがなければ、それ以外の文字も互いに適合することができないのだ。(1)

テアイテトス　たしかにそのとおりですね。

エレアからの客人　ところで、どのような文字がどのような文字と関係をもち合うことができるかということ

は、誰でもが知っていることだろうか、それとも、人がそのことを充分になしうるようになるためには、技術を必要とするだろうか？

テアイテトス　技術が必要です。

エレアからの客人　何の技術が？

テアイテトス　読み書きの技術です。

B

エレアからの客人　ではどうだろう、——さまざまの高音や低音についても、同じことがいえないだろうか。融合し合う音とそうでない音とを識別する技術をもっている者は、音楽家であり、それを知らない者は、音楽の心得のない者なのではないかね。

テアイテトス　そのとおりです。

エレアからの客人　そして、その他のさまざまの領域における技術の有無に関しても、同じようなことをわれわれは見出すだろう。

テアイテトス　もちろんです。

エレアからの客人　ではどうだろう、——われわれは、混じり合いに関する〈類〉[2]相互間の関係のあり方もまた、

1　子音だけでは音節（シラブル）を形づくることができないということ。各音節には、必ず一つの母音がなければならないからである。

2　ここで初めて、〈有〉〈動〉〈静〉などに対して、〈類〉（ゲノス）という呼称が用いられ、少し先で（253D）、さらに〈形相〉（エイドス）や〈イデア〉がこれと同義語として用いられることになる。

これらと同じであることを同意したのであるから、どのような〈類〉がどのような〈類〉と共鳴し合い、どのような類がお互いを受けつけないかを正しく示そうとする者は、言論のなかを進み行くにあたって、必ず何らかの知識の助けを必要とするということにならないだろうか？　とくに、すべての〈類〉の間に行きわたってそれらを結び合わせ、それらが混じり合うことを可能にするような、何らかの特別の〈類〉[1]があるかどうか、また逆に分割が行なわれる場合、全体をなすものをつらぬきつつ分割を行なわしめる原因となるような、別のいくつかの〈類〉[2]があるかどうか、ということを正しく示すためには？

C

テアイテトス　それはむろん、知識が必要ですとも——それもおそらく、最大の知識といってよいものが。

三九

エレアからの客人　ではこんどは、テアイテトス、われわれはその知識を、何と呼ぶべきだろうか？　それとも、ゼウスに誓って、われわれは知らぬまに、自由人たちのもつ知識に行き当ったのだろうか？[3]　そしておそらくはソフィストを探し求めながら、その前に哲学者を見つけ出してしまったのではあるまいか？

テアイテトス　それはどのような意味でしょうか？

D

エレアからの客人　もろもろの〈類〉に従って分割すること、そして同じ〈形相〉を異なった〈形相〉と考えたり、異なった〈形相〉を同じ〈形相〉と考えたりしないこと、——これはまさに、哲学的問答法（ディアレクティケー）の知識に属する仕事であると、われわれは主張すべきではないだろうか？[4]

テアイテトス　ええ、そう主張すべきです。

エレアからの客人　ところで、そのことをなしうる人は、(1)一つの〈イデア〉が多くのもの――その一つ一つは離ればなれにあるのだが――をつらぬいて、いたるところに延び拡がっているのを、(2)そして互いに異なっている多くの〈イデア〉が、一つの〈イデア〉によって外側から包みこまれているのを、(3)そしてさらに、一つの〈イデア〉が、全体をなすものの多くをつらぬきながら一つに統一されているのを、(4)そして多くの〈イデア〉が、離ればなれになって完全に区別されているのを、充分に感知しているのだ。(5) このことはすなわち、いかにしてそ

1　すなわち、先に述べられた文字(アルファベット)の場合における、母音に相当する役割を果す〈類〉のこと。それが何であるか、またそういう特別の〈類〉があるかどうかさえも、ここではまだ問題のまま残されているが、これが〈有〉(→「ある」「である」)を指し示している(少なくともそれを含む)ことはたしかであろう。

2　これもまた、それが何であるかはいまのところ語られていないが、〈異〉(→「と異なる」)を指し示している(少なくともそれを含む)ことはたしかであろう。「全体をなすもの」とは、分割される対象となる複合体としての〈類〉のこと。例えば、「人」「牛」「馬」……からなる(そして「人」「牛」「馬」……へと分割される)「歩行動物」とか「動物」とかいった全体としての〈類〉。

3　哲学が「自由人たちのもつ知識」と呼ばれることの意味については、『テアイテトス』172D sqq. を見よ。

4　『パイドロス』265D～266B 参照。「分割」と「総合」(総観)とはディアレクティケーの両面をなす。

5　ここで言われていることの全般的な意味は、すぐ前で語られた「分割」としてのディアレクティケーの能力をもつ者は、〈イデア〉界におけるいわゆる類―種関係のヒエラルキー構造を見てとることができる者でもある、ということである。しかし、訳本文に便宜上番号をつけた(1)(2)(3)(4)のそれぞれで言われている事柄が具体的に何を意味するかについては、テクストのこれだけの言葉からは確定しがたく、さまざまの異なった解釈が行なわれている。(1)(2)を「総合」、(3)(4)を「分割」の手続きに関連させる解釈(コーンフォード)もあるが、最も簡単で筋の通った解釈は、(1)と(2)と(3)における「一つの〈イデア〉」を、それぞれこの順番に一段階上位の(より包括的な)イデアを意味すると解するブラックの解釈であると思われる。(1)における「多くのもの」が個物かイデアかという問題点も含めて、さらに詳しくは→補注C(一八〇ページ)。

(253)
E

れぞれのものが関係をもち合うことができるか、またいかにしてできないかを、〈類〉に則して識別することを知っているということにほかならない(1)。

テアイテトス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　しかるに、哲学的問答法(ディアレクティケー)の能力といえば、思うに君は、純粋にかつ正しく哲学する人を除いては、他の誰にもこれを認めないことだろう。

テアイテトス　どうしてそれ以外の者に認めることができましょう。

エレアからの客人　こうしてわれわれは、哲学者というものを何かこのような領域のうちに、いまも今後も見出すことになるだろう——もし彼を探し求めるならばね。たしかに哲学者もまた、その正体を明確に見とどけることはむずかしい。しかしそのむずかしさは、ソフィストの場合と哲学者の場合とでは、異なったあり方のものなのだ。

254

テアイテトス　どのようにですか?

エレアからの客人　ソフィストのほうは、〈非有〉(あらぬもの)の暗闇のなかへと逃げこんで、手さぐりの勘によってその暗闇に身を寄せているのであり、まさにその場所の暗さのために、正体を見きわめることがむずかしいのだ。そうではないか?

テアイテトス　そのようですね。

エレアからの客人　これに対して、哲学者のほうは、思惟の働きを通じて、つねに〈有〉(あるもの)のイデアに身を置いているのであって、こんどは逆にその場所の明るい輝きのために、こそ、けっして容易には見られな

B いのだ。なぜなら、多くの人々の魂の目は、神的なもののほうを望見しつづけることには、堪えられないからだ。[2]

テアイテトス そうした点も先のことに劣らず、当然おっしゃるとおりだろうと思われます。

エレアからの客人 それでは、この哲学者については、われわれがなおそうしたいと望むのであれば、やがてすぐにでも、もっと明確に考えてみることになるだろう。他方、ソフィストについては、言うまでもないことだろうが、われわれはけっして追求の手をゆるめてはならない。彼の正体を充分に観てとるまではね。

テアイテトス まさしくそのとおりですとも。

四〇

エレアからの客人 さてそれでは、もろもろの〈類〉のうちで、或るものは互いに関係をもち合おうとするが、或るものはそうでないということ、そして、関係をもち合う範囲が僅かなものもあれば、多くの範囲にわたるものもあり、さらにまた或るものは、すべての〈類〉の間に行きわたってすべてと関係をもち合うことにも何ら差支えないということ、これだけのことにわれわれは同意したのであるから、次にわれわれは、これから言うような

1 この文章も、「それぞれのもの」を〈イデア〉や〈類〉でなく個物を意味すると解するならば(ブラックの主張するように文法的にはそのほうが自然)、〈イデア〉もしくは〈類〉相互間の関係構造と、個物相互間の関係のあり方との連絡が、ここで垣間見られていることになろう。

2 『国家』第七巻の洞窟の比喩において語られていた事柄を想起させる。とくにⅦ. 515E～516A, 518A～B 参照。

C 仕方で考察を進めることによって、議論の示すところについて行くことにしよう。——すなわちわれわれは、あまりたくさんのものを相手にして混乱することのないように、すべての〈形相〉を取り扱うことはせず、最も重要と言われているもののうちから若干のものを選び出して、まず第一に、そのそれぞれはいかなるものであるかを、次には、それらは互いに関係をもち合う力に関してどのようなあり方を示すかということを、しらべてみることにしよう。そうすることの目的は、われわれが〈有〉(あるもの)と〈非有〉(あらぬもの)とを、よし全き明瞭性のうちにとらえることはできないとしても、少なくともそれらについて議論を尽くすことにかけては、いまやっている考察の仕方が許す範囲において、何ひとつ不足するところのないようにするためであり、そうすることによっ
D てわれわれは、もしかしたら、〈非有〉(あらぬもの)がほんとうにあらぬものであるのだと語っても、何とか無罪放免してもらえることが可能になるかもしれないからなのだ。

テアイテトス　ええ、そうしなければなりません。

エレアからの客人　ところで、〈類〉のうちでは、いましがたわれわれが論じていた、〈有〉(あるもの)そのものと〈静〉と〈動〉は、きわめて重要なものだ。

テアイテトス　ええ、大いに。

エレアからの客人　そして、そのうちの二つは互いに混じり合わないものであると、われわれは主張する。

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　他方しかし、〈有〉(あるもの)は、その両方ともと混じり合うことのできるものだ。なぜなら、両者とも、あるはずだから。

テアイテトス　もちろんです。

エレアからの客人　こうして、これらは三つあることになる。

テアイテトス　たしかに。

エレアからの客人　だから、それらのひとつひとつは、あとの二つとは異なるものであり、自分自身とは同じものであるわけだ。

E

テアイテトス　そうです。

エレアからの客人　いったい、われわれがいまそのように、同じもの〈同〉とか異なるもの〈異〉とか言ったのは、これはこれでまた何のことなのだろうか？　これらは特定の二つの〈類〉であって、先の三つのものと別のものではあるが、しかしいつも必ずそれらと混じり合っているものと言うべきであり、したがって、われわれが考察すべき対象は、三つではなく、五つあると考えなければならないのだろうか？　それとも、この「同じもの」とか「異なるもの」とかいうのは、われわれが自分でそれと気づかずに、先の三つのもののうちのどれかをそのまま、そういう名前で呼んでいるだけのものなのだろうか？

255

テアイテトス　そうかもしれませんね。

エレアからの客人　しかしね、〈動〉と〈静〉は、けっしてそのまま〈異〉であるのでもないし、〈同〉であるのでもないはずだ。

テアイテトス　どうしてでしょうか？

エレアからの客人　われわれが〈動〉と〈静〉の両方を共通に何であると呼ぶとしても、両者のどちらも、そのも

のであることはできないのだ。(1)

テアイテトス　いったいなぜですか？

エレアからの客人　〈動〉は静止することになるだろうし、また他方では、〈静〉が動くことになるだろう。なぜならその場合、両者のうちどちらでも一方のものが、両方と関係をもつことになって、こんどは他方のものをそれ自身の本性と反対のものへと——反対のものを分有したがために——変化させずにはおかないだろうから。(2)

B

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　しかるに、両者とも、〈同〉および〈異〉を分有するのだ。(3)

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　したがってわれわれは、〈動〉はすなわち〈同〉であり、あるいは〈異〉であると、他方また〈静〉がそうであるとも、言わないことにしよう。

テアイテトス　ええ、言わないことにしましょう。

エレアからの客人　しかしそれなら、われわれは、〈有〉(あるもの)と〈同〉を一つのものとして考えるべきだろうか？

テアイテトス　ええ、おそらく。

C

エレアからの客人　しかし、もし〈有〉(あるもの)と〈同〉の両者が何ら違った意味をもたないとしたならば、ふたたびこんども、われわれは〈動〉と〈静〉が両方ともあると言うとき、そのことによって、その両者が同じものであると言っていることになるだろう。

テアイテトス　しかしそれは、不可能なことです。

エレアからの客人　してみると、〈同〉と〈有〉が一つのものであることは、不可能なのだ。

テアイテトス　間違いないでしょう。

エレアからの客人　ではわれわれは、先の三つの〈形相〉に加えて、この〈同〉を第四番目の〈形相〉として立ててよいだろうね？

テアイテトス　ええ、ぜひとも。

エレアからの客人　では次にどうだろう、――〈異〉というのを、はたしてわれわれは第五番目のそれと言うべきだろうか？　それとも、この〈異〉と〈有〉とは、一つの〈類〉につけられた二つの名前にすぎないと、考えなければならないだろうか？

テアイテトス　おそらくそうかもしれません。

1　〈動〉と〈静〉の両方が共にx（例えば〈同〉または〈異〉）であると言える（すなわち、少し後の**255B**で言われるように、両者ともxを「分有」する）場合、〈動〉はそのままxと同一ではないし、〈静〉はxと同一ではない、ということ。

2　すなわち、前注のごとく〈動〉と〈静〉が共にx（例えば〈同〉または〈異〉）であると呼ばれうる場合、つまり、〈動〉と〈静〉の両者が共にxを分有する場合、かりにもし一方の〈静〉がxと同一であるとすると、前提により〈動〉も〈静〉もxを分有し、またx＝〈静〉であるから、〈動〉も〈静〉も〈静〉を分有することになる。すなわち、「両者のうちどちらでも一方のもの（いまの場合は〈静〉）が両方と関係をもつことになる」。したがって、〈動〉が〈静〉（「反対のもの」）を分有することにより、〈動〉は静止することになる。同様にして、他方ではまた（αὖ）、〈動〉がxと同一であるとした場合には、〈静〉が動くという帰結が生じる。

3　すなわち、〈動〉も〈静〉も、自己自身と同じであり、自分以外の他のものと異なっている。

エレアからの客人　しかし、もろもろのあるもののうち、或るものはそれ自体だけで語られるが、或るものはつねに他のものと相関的に語られるということを、君は認めるだろうと思うがね。

テアイテトス　もちろんです。

D

エレアからの客人　そして〈異〉（異なるもの）というのは、つねに他の異なったものと比べてそれと相関的にそう語られるものだ。そうだろうね？

テアイテトス　そうです。

エレアからの客人　しかし、もし〈有〉と〈異〉とがあまり大して違わないとしたならば、そうはならなかっただろう。もし〈異〉が〈有〉と同様に、いま挙げた二つの部類のもの(1)の両方にあずかるものだとしたら、異なるもののなかには、ときとして、他のものとの比較・相関を抜きにして異なるようなものも、あるはずだろう。しかし実際には、われわれが無条件的に見出すのは、何であれ、いやしくも異なるものであるならば、それがまさにそれであるところのものたりうるのは、必ずや他のものとの比較・相関においてでなければならぬ、という事実である。

テアイテトス　まさにあなたがおっしゃるとおりです。

E

エレアからの客人　ではこの〈異〉の本性というものを、われわれが選びつつある〈形相〉のなかに入る第五番目のものとして、挙げなければならない。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　そしてそれは、それらのすべてに行きわたっていると、われわれは主張すべきだろう。な

ぜならば、どれをとってみてもその一つ一つは、他のもろもろのものとは異なっているが、このことは、自己自身の本性によるのではなく、〈異〉の〈イデア〉を分有することによるのであるから、と。

テアイテトス　まさにそのとおりです。

四一

エレアからの客人　それでは、以上の五つについて、それを一つづつ取り上げながら、次のように語ることにしよう。

テアイテトス　どのようにですか？

エレアからの客人　まず〈動〉についてだが、それは〈静〉とは全面的に異なるものである。――それとも、どのように言うかね？

テアイテトス　おっしゃるように言います。

エレアからの客人　したがってそれは、〈静〉ではない。

テアイテトス　ええ、けっして。

1　すなわち、「それ自体だけで」語られるものと、「他のものと相関的に」語られるもの。ここの言葉は、「いま挙げた二つの〈形相〉を分有するとしたら」（テイラー、ブラックなど）とも訳されうる。しかしそうすると、プラトンが関係性（τὸ πρός ἄλλο）と非関係性（τὸ καθ' αὑτό）ともいうべきもののイデア（〈形相〉）を認めたことになるが、そのようなイデアの例はプラトンの著作のなかに他に例はないし、事柄自体としてもかなり疑問である。

エレアからの客人　しかしそれは、〈有〉を分有することによって、あるのだ。

テアイテトス　あるものです。

エレアからの客人　ではもう一度出直して、〈動〉は、〈同〉とは異なるものである。

テアイテトス　間違いないでしょう。

エレアからの客人　したがってそれは、〈同〉ではない。

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　しかしまた、〈動〉は、すべてのものがさらに〈同〉を分有することによって、同じものなのであった。(1)

テアイテトス　ええ、まったく。

エレアからの客人　だからわれわれは、〈動〉が同じものであるとともに同じものでないということに、同意するのをいやがってはならない。なぜなら、それが同じものでありまた同じものでないと言うとき、われわれはこの二つのことを同様の意味で言ったのではないからだ。そうではなくて、「同じものである」とわれわれが言うときには、〈動〉がそれ自身との関係において〈同〉を分有しているがゆえに、そのように言うのであり、他方、「同じものでない」と言うときには、それはこんどは、〈異〉への関与のゆえにであって、〈動〉がその関与によって〈同〉から引き離されて、同じものではなく異なったものとなったがために、したがってこんどは逆に、「同じものでない」と正しく言われることになるわけなのだ。

テアイテトス　たしかにそのとおりです。

B

エレアからの客人　そして、もしかりに〈動〉そのものが何らかの仕方で〈静〉を分取するとしたら、それを静止しているものと呼ぶことも何ら奇妙なことではなかっただろう。(2)

テアイテトス　ええ、それはまったく正しいことです、——いやしくも〈類〉のうちの或るものは互いに混じり合おうとし、或るものは混じり合おうとしないということを、われわれが承認すべきだとするならばですね。

C

エレアからの客人　しかるにわれわれは、いまの問題に入る以前に、そのことの証明には到達してしまっていたのだ。そのようにあるのが自然本来のあり方であるということを、反駁によって論証することによってね。(3)

テアイテトス　もちろんです。

エレアからの客人　では、われわれの論題に戻ることにしよう。〈動〉は、〈異〉とは異なるものであるのかね——ちょうどそれが、〈同〉や〈静〉と別のものであったように。

テアイテトス　そうでなければなりません。

1　254Dを参照。——ここのテクストをαὕτη(写本)の代りにαὐτῇまたはἑαυτῇ(Schanz, Madvig)と読めば、意味がはっきりするであろう(「しかしまたそれは自己自身とは同じものであった」)。

2　この言葉と、次のテアイテトスの答とのつながりがおかしいように思えるので、ハインドルフ(およびシュライエルマッハー)やコーンフォードは、原文を補足する提案を行なっている。他方、このままで読む場合には、言われている事柄自体をいかに解するかが問題となるが、これは、この対話篇における〈形相〉〈イデア〉の性格の解釈にまで波及しうる。↓補注D(一八一ページ)。

3　251E〜252Eにおいて、(i)「いかなる〈類〉も他のいかなる〈類〉とも混じり合わない」、(ii)「すべての〈類〉が互いに混じり合う」という二つの想定を反駁することによって、ここで言われる第三の可能性が真として論証された。

エレアからの客人　そうすると、いましがた論じたところによれば、[1]〈動〉はある意味で異なるもの（〈異〉）ではないとともに異なるものである、ということになる。

テアイテトス　そのとおりです。

エレアからの客人　それでは、次はどういうことになるだろうか？　われわれはこんどは、〈動〉が三つのもの〔〈静〉〈同〉〈異〉〕とは異なるものであると主張しながら、第四のもの〔〈有〉〕と異なるものであることを、否定すべきであろうか？　われわれがそれについて、またその範囲内でしらべることを課題とした〈類〉は、五つあることに同意しておきながらね。

D

テアイテトス　どうしてまた、そんなことができましょう。その数が、さっき示されたのよりも少ないと容認することは、できませんからね。

エレアからの客人　それならわれわれは、〈動〉は〈有〉と異なるものであるということを、恐れることなく、強硬に主張しつつ論じてよいわけだね？

テアイテトス　少しも恐れることはありませんとも。

エレアからの客人　したがって明らかに、〈動〉は、ほんとうにあらぬもの（〈有〉でないもの）であるとともに、また〈有〉を分有する以上、あるものでもあることになるだろうね？

テアイテトス　ええ、それは完全に明らかです。

エレアからの客人　そうすると、必然的に、あらぬもの（非有）があるということが、〈動〉についても、さらにはすべての〈類〉に関しても、可能でなければならないのだ。なぜならば、すべての〈類〉に関して、〈異〉の本性が

E　それぞれを〈有〉とは異なるものに仕上げることによって、あらぬもの（〈有〉でないもの＝非有）とするからであり、かくてわれわれは、同じ原則に従って、それらすべてをその意味において「あらぬもの」と正しく呼びうるとともに、逆にまた、それらが〈有〉を分有するがゆえに、それらが「ある」と言い「あるもの」であると正しく言えることになるだろうから。

テアイテトス　ええ、おそらく。

エレアからの客人　してみると、ひとつひとつの〈形相〉について、数多くの〈ある〉が成立するとともに、他方、無数の〈あらぬ〉が成立することになるわけだ。(2)

テアイテトス　そのようです。

1　多くの訳者はこの句（κατὰ τὸν νυνδὴ λόγον）を、次の「〈動〉は……異なるものでない」にかけることを避けて、とくに「（〈動〉は）異なるものである」というほうだけにかけて訳しているが、原文章の自然な読み方とはいえないように思われる。内容的にみても、「いましがた論じたところ」、すなわち、255E～256Aの議論によれば、「（〈静〉や〈同〉と）異なるものである」ということから「（〈静〉や〈同〉では）ない」が導き出されていた。この「xと異なる」→「xではない」におけるxが、ここで〈異〉そのものについて適用されたものと解される。――ただしいまの場合は、「〈異〉とは異なるものである」という言い方そのものが、(i)「異なるもの（〈異〉）ではない」、(ii)「異なるものである」を共に含んでいる。

2　どのような〈形相〉または〈類〉（x）についても、「xは……である」と言える場合が多数成立し、他方、x以外のものは無数にあるから、「xは……でない（……と異なる）」と言える場合は無数に成立する、という意味に解される。〈ある〉〈あらぬ〉の成立ということは、直前のエレアの客人の言葉では、その当の〈形相〉または〈類〉（x）が「〈有〉を分有する」ことと「〈有〉と異なる」ことによって、「x（それ自身）はある」と「〈有〉ではない＝あらぬ」が成立する、というかたちでしか説明されていないけれども、全般的な主題である〈類〉または〈形相〉間の結合・非結合関係一般を大前提として補足して考えればよいであろう。

257

エレアからの客人　そして〈有〉（あるもの）それ自身も、他のもろもろのものとは異なるものであると言わなければならない。

テアイテトス　そのことは必然です。

エレアからの客人　そうすると、われわれにとって〈有〉（あるもの）もまた、他のさまざまのものがあるだけ、ちょうどそれだけの局面にわたって、あらぬということになる。なぜなら〈有〉（あるもの）は、それら他のものではないのであるから、それ自身一つのものでありながら、他方ではしかし、数のうえで無限にある他のものではあらぬからだ。

テアイテトス　そのとおりでしょうね。

エレアからの客人　それでは、そうした結論に対してもわれわれは、けっしてこれをいやがってはならないのだ——いやしくも〈類〉というものが、相互に関係をもち合うことをその本性とする以上はね。もし誰かがこうした結論を容認しないというのであれば、その人はまずわれわれの先の議論を論駁したのち、そのうえではじめて、それに続くこうした帰結の論駁を試みるようにしてもらわねばならない。

テアイテトス　おっしゃることはまったく正当です。

B

エレアからの客人　それではさらに、次のことも見とどけておくことにしよう。

テアイテトス　どのようなことをですか？

エレアからの客人　われわれが〈非有〉（あらぬもの）のことを語るとき、どうやらわれわれは、〈有〉（あるもの）と反対のもののことを言っているのではなく、たんに、それと異なるもののことを言っているだけのように思わ

れる。

テアイテトス　どうしてでしょうか？

エレアからの客人　例えば、われわれが或るものを「大ではない」(非大)と言うとき、われわれがその言い方によって示そうとするのは、等しいもののことであるよりもむしろ、小さなもののことでなければならぬというように、君には思えるかね？

テアイテトス　いいえ、けっして。

エレアからの客人　そうとすれば、否定は反対を意味するのだと言われるとき、われわれはそのことを承認しないだろう。われわれが認めるのは、ただ次のことだけだ。すなわち、「あらぬ」や「ない」を示す否定詞「非」(μή や οὐ)が前に付せられる場合、この否定詞は、あとに続く語とは別の——むしろ、否定詞のあとに発音される語に対応するところの事物(事柄)とは別の——さまざまのもののうちの何かを告げているのである、と。 c

テアイテトス　まったくそのとおりです。

四二

エレアからの客人　ところで、これから言うことについて、君にも賛成してもらえるかどうか、よく考えてみることにしよう。

テアイテトス　どのようなことをですか？

エレアからの客人　〈異〉の本性は、ちょうど知識というものがそうであるように、細かく分割されているよう

に私には見えるのだが。

テアイテトス　どのような意味でそうなのでしょうか？

エレアからの客人　知識というものもやはり、一つのものであるはずだが、しかし、或る特定のものを対象として成立するそれの部分は、そのひとつひとつが切り離されて、それ自身に固有の特定の名前をもつことになる。

D　そのために、多くの技術や知識が語られて存在しているわけなのだ。

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　そして、もともと一つのものである〈異〉の本性の諸部分も、それと同じ事情にあるのだ。

テアイテトス　ええ、たぶん。しかし、どのような仕方でそうなのかを、われわれは言うべきではありませんか？

エレアからの客人　〈美〉（美なるもの）に対置される〈異〉の部分が、何かあるだろうか。

テアイテトス　あります。

エレアからの客人　その部分は名前のないものと言うべきだろうか、それとも、何か特定の名前をもったものと言うべきだろうか。

テアイテトス　名前をもったものです。というのは、われわれがそれぞれの場合に、美ではない（非美）という言い方で呼ぶところのものは、まさにほかならぬ〈美〉（美なるもの）の本性と異なるもののことなのですから。

エレアからの客人　さあそれでは、次の点に答えてくれたまえ。

E　**テアイテトス**　どのような点にですか？

258

エレアからの客人　そもそも〈非美〉（美ならぬもの）とは、あるもののうちの一つの特定の〈類〉から切り離されて、そして他方ふたたび、あるもののうちの特定の何かと対置させられることにより、その存在が成立することになるのではないかね？(1)

テアイテトス　そうです。

エレアからの客人　するとどうやら、〈非美〉（美ならぬもの）とは、あるものに対するあるものの一種の対置であるということになるようだ。

テアイテトス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　すると、どういうことになるだろう、――この議論によると、〈美〉（美なるもの）があるものに属する程度はより多く、〈非美〉（美ならぬもの）のほうはより少ないということが、はたしてわれわれにいえるだろうか？

テアイテトス　いいえ、少しも。

エレアからの客人　してみると、〈非大〉（大ならぬもの）と〈大〉（大なるもの）自体とは、同等の資格においてあるのだと言わなければならないわけだね。

テアイテトス　ええ、同等の資格において。

1　第一の「あるもののうちの一つの特定の〈類〉」とは〈異〉を指し、第二の「あるもののうちの特定の何か」とは〈美〉を指す。

エレアからの客人　だからまた、〈非正〉(正ならぬもの)も〈正〉(正なるもの)に対して、一方が他方よりも少しもより多くあるのではないという点においては、同列に置かれるべきではないかね。

テアイテトス　たしかにそのとおりです。

エレアからの客人　そしてその他のものについても、われわれはそのように言うことになるだろう。いやしくも〈異〉の本性があるものに属することが明らかとなった以上、そして、それがあるからには、それのもろもろの部分もまた、何ものにも劣らずあると考えなければならない以上はね。

テアイテトス　もちろんです。

エレアからの客人　そうすると、どうやら、〈異〉の本性の一部分と〈有〉(あるもの)の本性とが相互に対置させ

B

られるとき[1]、この対置は、もしこう言うことが許されるなら、〈有〉(あるもの)そのものに少しも劣らず、実在するものなのだ。この対置は、〈有〉(あるもの)と反対のものを指し示すのではなく、〈有〉(あるもの)と異なるものという、ただそのかぎりのものを指し示しているのだから。

テアイテトス　ええ、完全に明確に。

エレアからの客人　ではそれを、われわれは何と呼ぶべきだろうか？

テアイテトス　明らかに、それこそまさに、われわれがソフィストのために探し求めていたところの、〈非有〉(あらぬもの)にほかなりません。

エレアからの客人　では、君が言ったように、そのものは、実在性にかけては他の何ものにも劣ることのないものであり、いまやわれわれは、心安んじてこう言うべきだろうか。――すなわち、〈非有〉(あらぬもの)は確固

C としてそれ自身の本性をもっているものであって、それはちょうど、〈大〉（大なるもの）が大きくあり、〈美〉（美なるもの）が美しくあり、また〈非大〉（大ならぬもの）が大でないものであり、〈非美〉（美ならぬもの）が美でないものであるのだったのと同様なのである、と。そしてその意味において、〈非有〉（あらぬもの）もまた同じように、あらぬものであったし、またあらぬものであるのであって、それは多くのあるもののなかの一つの〈形相〉として数え入れられるべきものである、と。それとも、テアイテトス、われわれはこのことに対して、なお何らかの疑念をいだくだろうか？

テアイテトス　いいえ、ぜんぜん。

四三

エレアからの客人　さて、君はわかっているだろうか――われわれはパルメニデスに従わずに、彼が禁止したことを大きく踏み越えてしまった、ということを？

テアイテトス　いったい、どうしてでしょうか？

エレアからの客人　あの人が考察してはいけないと言ったのよりももっと以上のことを、われわれは、さらにその先へと探求を進めることによって、あの人に証明してみせたのだ。

1　何と何とが「対置させられる」のかについて、諸家の訳し方および内容上の解釈が非常にまちまちである。→補注E（一八三ページ）。

(258)

D

テアイテトス　どのようにしてですか？

エレアからの客人　つまり、パルメニデスはたしか、こう主張しているはずだ――

なぜならこのこと　あらぬものがあるということは　けっして証されぬであろう

いな　汝すべからく　探求のこの道から想いを遠ざけよ(1)

テアイテトス　ええ、たしかにそのように言っていますね。

エレアからの客人　ところが、われわれのほうは、さまざまのあらぬものがあるということを証明しただけでなく、さらに、その〈あらぬもの〉(非有)の〈形相〉がまさに何であるかということまでも、明らかに示したのだ。なぜならわれわれは、〈異〉というものの本性が実在すること、そしてそれはあらゆるあるものに対応しつつ細かく分割されて、およそあるものが相互に関係し合うところ、そのすべてに行きわたっていることを証明したうえで、それぞれのあるものに対置させられるところの〈異〉の部分を、まさにこれこそがほんとうに〈あらぬもの〉(非有)にほかならないと、あえて言明したのであるから。

E

テアイテトス　そして、お客人、われわれのその言明は、この上なく完全に真実であるように思えます。

エレアからの客人　それでは、われわれが〈あらぬもの〉(非有)とは〈あるもの〉(有)の反対であるという見解を表明しつつ、その意味での〈あらぬもの〉(非有)があるのだとあえて語っているというふうに、人に言わせないようにしよう。なぜなら、われわれとしては、〈あるもの〉(有)に対する何らかの反対のものについては、とうの昔におさらばを告げているのだから(2)。それがあるかないか、説明可能なものであるか、まったく説明不可能なものであるか、といったことについてはね。

259

けれども、〈あらぬもの〉(非有)が何であるかについていまわれわれが語った説明に関しては、人はそれを論駁してわれわれの説が間違っていることを説得してくれるか、それとも、それができないでいるかぎりは、その人もわれわれの説と同じことを語らなければならない。すなわち、それはこういうことである。——もろもろの〈類〉は、互いに混じり合うこと。そして〈有〉(あるもの)と〈異〉(異なるもの)とは、すべての〈類〉をつらぬき、またお互いどうしをつらぬき合いつつ行きわたっていて、〈異〉は〈有〉を分有することにより、まさにその分有のゆえにあるのであるが、しかしそれが分有するところの当のものであるのではなく、異なるものであって、そして〈有〉と異なるものであるからには、まったく明らかに、必ずやそれがあらぬもの(有ならぬもの＝非有)であることが可能でなければならない、ということ。

B

他方また、〈有〉は〈異〉を分取することによって、他のもろもろの〈類〉と異なるものであることになり、そしてそれらのすべてと異なるものであるからには、〈有〉(あるもの)はそれらのひとつひとつのものでない(あらぬ)し、また他のものの全部でもない(あらぬ)のであって、ただそれ自身であるだけである。したがって、こんどもまた疑いもなく、いくらでも無数の場合に〈有〉(あるもの)はあらぬのであり、そしてその他のものも同様にして、ひとつひとつをとってみても、全体としてみても、一方では多くの仕方であるとともに、他方では多くの仕方であらぬのである、ということ。

1　Fr. 7. 1-2(DK.).——先に237Aで一度引用された。先の「探求にあたって」(διζήμενος)がここでは「探求の」(διζήσιος)となっている。後者のほうが、パルメニデス自身の使った表現とみなされている。

2　238Cを参照。

テアイテトス　ほんとうです。

エレアからの客人　そして、こうした相反する言い方に対して、もし誰か不信をいだく人があれば、その人は問題をよく考察して、いま語られたのよりもすぐれた説明を何か述べなければならない。またもし人が、これをC もって何かむずかしいことを考えついたつもりになって、議論をあるときは一方へ、あるときは他方へと引きまわしては悦に入るとしたら、その人は大して真剣になるだけの価値のないことに大真面目になっているのであって、それはいまのわれわれの議論が告げているところなのだ。というのは、そのことなら何もこみ入ったことでも発見の困難なことでもないのであって、次のことにしてはじめて、困難であると同時に立派なことなのだから。

テアイテトス　とおっしゃると、どのようなことがですか？

エレアからの客人　前にも言われたこと、すなわち、そういったことに……[1]かかずらうのをやめて、語られた事柄に、そのひとつひとつの点を吟味しながらついて行く能力をもつことだ――異なるものがある意味で同じもD のであると主張されるときにも、また同じものが異なるものであると主張されるときにも、どのような意味で、またどのような観点で、そのどちらかであると主張されるのかということを、よくしらべながらね。しかしながら、どんな意味においてであろうとおかまいなしに、ただ同じものが異なるとか、異なるものが同じであるとか、大きいものが小さいとか、似ているものが似ていないとかいったことを示すだけのことなら、そしてそのようにして、議論のなかにいつも相反するものを持ち出しては悦に入るというだけのことなら、そんなのはほんとうの論駁でもないし、たったいまあるものに触れたばかりの者が産み出した、生まれたての赤子のようなものにすぎないことは明白だ。

テアイテトス　まさしくそのとおりです。

四四

エレアからの客人　そう。それからまた、よき友よ、すべてのものをすべてのものから引き離そうと試みるの

E

も、一般的にいって当を得たやり方でないというだけでなく、これはもう、まったくの無教養な、哲学と無縁な者のすることなのだからね。

テアイテトス　いったい、どうしてですか？

エレアからの客人　それぞれのものを何もかも、すべてのものから切り離してしまうということは、およそあらゆる言表(言論)の最も完全な抹殺にほかならないのだ。なぜならわれわれにとって、言表とは、〈形相〉相互の組合せにもとづいて成立するものであるから。[2]

テアイテトス　そのとおりです。

260

エレアからの客人　それなら、考えてみてくれたまえ——われわれがさっき、その種の主張をする者たちと戦って、或るものが他のものと混じり合うということを許容せざるをえないように追いこんだのが、[3] どれほど時宜

1　テクストの ὡς δυνατά はこのままでは意味をなさないので、写本の誤記と思われる。ὡς ἀνήνυτα (Badham——「無益・甲斐なきこととみなして(かかずらうのをやめる)」)、ὡς παντὶ δυνατά (Diès——「誰にでも出来ることとみなして」)などの修正案がある。

2　このことについては補注F(一八四ページ)を見よ。

3　251E～252C.

を得たことであったかを。

テアイテトス　いったい、どのようなことのためにですか？

エレアからの客人　われわれにとって言表というものが、あるものの〈類〉のなかの一つであることを保証するために。――というのは、もしそれを奪われるならば、まず最も重大な結果として、われわれは哲学を奪われることになるだろうからね。さらにまた、さしあたっていまわれわれは、言表とはそもそも何であるかということについて、合意に達しなければならないのだが、もしわれわれが肝心の言表そのものを取り去られ、それがまったくありもしないということにでもなるならば、われわれはもはや、何ひとつ論じることもできなくなるはずだ。

B そしてもしもわれわれが、いかなるものも、いかなるものともけっして混じり合わないということを容認させられるとしたら、まさにそのように言表そのものを取り去られる結果となるだろう。

テアイテトス　その点は、たしかにそのとおりです。ただ、なぜ私たちがいま、言表とは何かについて合意に達しなければならないのか、そこがよくわかりませんでした。

エレアからの客人　いや、それならきっと、これから言うことについてきてくれるなら、いちばん容易にわかってもらえるだろう。

テアイテトス　どのようなことにですか？

エレアからの客人　まず〈非有〉（あらぬもの）は、もろもろの〈類〉のなかの一つの〈類〉であって、あるもののすべてにわたってばらまかれているものだということが、われわれに明らかになったのだった。

テアイテトス　そうです。

エレアからの客人　そこで、次にしらべなければならないのは、はたしてその〈非有〉(あらぬもの)が、判断(思いなし)や言表と混じり合うものかどうか、ということだ。

テアイテトス　どうしてでしょうか？

C　**エレアからの客人**　もし〈非有〉(あらぬもの)がそれらと混じり合わないのならば、すべては必ず真でなければならないことになるし、もし混じり合うとすれば、虚偽の判断や虚偽の言表が生じることになる。なぜなら、ありもしない物事を判断したり語ったりすること、それが、思考や言表の内に生じる虚偽ということにほかならないだろうからね。

テアイテトス　そうです。

エレアからの客人　しかるに、虚偽があるとすれば、欺くということがあるはずだ。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　そして、欺くということがあるとすれば、そうなればもうすべては必ずや、〈影像〉や〈似像〉や〈見かけだけのもの〉といったものに満ち満ちている、ということにならざるをえないのだ。(1)

テアイテトス　むろん、そうならざるをえません。

D　**エレアからの客人**　しかるに、われわれの語っていたところでは、(2)問題のソフィストが逃げこんでいるのは、まさにどこがそのあたりの領域なのであって、ただ彼は、そもそも虚偽などというものは全然ありえないのだと、

1　241Eにおいて語られていたことを参照。

2　239C〜241B.

(260)

否認していたのだった。なぜなら、あらぬもの（非有）を考えたり語ったりする者など、誰もいるわけがないではないか、あらぬもの（非有）はどんな仕方でも、けっしてあるということ（有性）を分有することはないはずだから、とね。

テアイテトス　そのとおりでした。

エレアからの客人　しかしいまでは、それは〈有〉（あるもの）を分けもつということが明らかになった。したがって、おそらくそういう仕方では、彼はもはや抵抗することはできないだろう。しかし彼は、きっとこう主張してくることだろう。——さまざまの〈形相〉のうちには、〈非有〉（あらぬもの）を分有するものと、分有することのないものとがあって、言表や判断は、分有しないほうのものに属するのだ、と。したがって、〈影像作りの技術〉や〈見かけだけを作る技術〉[1]というものは、われわれはソフィストがそのなかにいると主張するけれども、しかし E 判断や言表が〈非有〉（あらぬもの）に関与しない以上、そんなものはまったくありえないのだというふうに、彼はもう一度強硬に言い張ることだろう。なぜなら、まさにその関与が成り立たないとすれば、およそ虚偽なるものがはじめからありえないわけだからね。

そこでこのような理由により、われわれはまず第一に、〈言表〉や〈判断〉や〈現われ〉というものがそもそも何であるかを、たずね求めなければならないのだ、——これらが明らかになったならば、それらのものが〈非有〉（あ 261 らぬもの）に関与するということを見きわめるために。そしてその見きわめにもとづいて、虚偽がありうることを証明するために。そしてその証明にもとづいて、もしソフィストがそこで逮捕されるだけの罪があるならば、彼をそこへ縛りつけ、あるいはもしそうでなければ、彼を釈放して、また別の〈類〉の内に探し求めるために。

テアイテトス　まったくそれにしても、お客人、最初にソフィストについて、この種族は狩猟して捕えることのむずかしい相手だということが言われましたが、[2] あれはどうやら、まさにほんとうのことだったようですね。じっさい、見受けたところこのソフィストという種族は、防壁となる問題をいっぱいもっているらしく、そのどれか一つを前に置いて防がれると、私たちは彼自身のところに達するまでに、まずその防壁を突破するために戦わなければならないのですからね。げんにいまも、やっとのことで「〈非有〉(あらぬもの)はあらぬ」という問題を乗り越えて防壁を突破したところなのに、彼はまたもや別の防壁を前に作ってしまって、ために私たちは、「言表や判断についても虚偽はある」ということを証明しなければならないのです。そしてこれのあとには、おそらくまた別の防壁が作られるでしょうし、さらにそのあとにはまた別のがというふうにして、どうやらこの様子では、いつまでたっても、終りはいっこうに見えないということになりそうですね。

B

エレアからの客人　元気を出さなければ、テアイテトス。たとえほんの少しでも、そのつど前へ進むことができる者ならね。なぜって、そういう場合にすら気落ちするようでは、そんな人間が、ほかの場合にいったい何をなしうるだろう――まったく何ひとつ成果のあがらない場合や、逆にうしろに押し戻されさえするような場合には？　諺に言われるように、そんな人間には、とうてい国は取れぬことだろう。いまはしかし、君よ、君が言っているその問題が乗り越えられたからには、われわれにとっては、まさに最大の障壁が攻略されてしまったことになるだろうし、残る他のものはもはや、もっと攻めやすく、もっと小さなものなのだ。

C

1　236C参照。

2　218C～D(さらに223B～C, 226A)を参照。

(261)

テアイテトス　よくおっしゃってくださいました。

四五

エレアからの客人　それでは、いましがた言われたように、まず〈言表〉と〈判断〉を取り上げることにしよう。いったい〈非有〉（あらぬもの）はこれらのものと関わりをもつのか、それとも、これら両者ともいかなる場合にも真なのであって、どちらもけっして偽であることはないのか、ということをもっと明確に考察するためにね。

テアイテトス　正しい手続きです。

D

エレアからの客人　さあそれでは、ちょうどもろもろの〈形相〉と文字について先に論じたようにして[1]、もう一度同じことをこんどは、もろもろの語（単語）についてしらべてみることにしよう。というのは、いま求められていることは、そういった仕方で明らかになるはずだから。

テアイテトス　いったい語について、どのようなことにお答えしなければならないのでしょうか？

エレアからの客人　すべての語が互いに適合し合うのか、それとも、いかなる語も適合し合わないのか、それとも、適合しようとするものもあれば、そうでないものもあるのか、という点だ。

テアイテトス　その点なら明白です――適合しようとするものもあれば、そうでないものもあります。

E

エレアからの客人　君の言うのは、おそらくこういうことなのだろうね――いくつかの語が続けて語られて、それで何ごとかを明らかにしているならば、それらの語は適合し合うものであるし、他方、語が連続していても、それによっていかなる意味をも示さない場合は、それらの語は適合し合わないものである、と。

テアイテトス　いったいそれはどういうことなのでしょうか？

エレアからの客人　おや、まさにいまのことを了解したうえで君は同意してくれたものと、思っていたのだが。

262

つまり、われわれにとって、音声(言葉)による物事のあり方の表示には、二種類のものがあるはずだからね。

テアイテトス　と言いますと？

エレアからの客人　ひとつは名詞(名指し言葉)、ひとつは動詞(述べ言葉)と呼ばれているものだ。

テアイテトス　それぞれについて説明してくださいませんか。

エレアからの客人　一方は、さまざまの行為に対応してそれを表示するものであり、これをわれわれは動詞(述べ言葉)と呼んでいるはずだ。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　これに対して、行為しているその当の者たちに対応してつけられた音声による表示記号は、名詞(名指し言葉)と呼ばれる。

テアイテトス　まさにそのとおりです。

エレアからの客人　そこで、名詞だけが連続して語られても、そのことからけっして言表は成立しないし、他方また、名詞なしに動詞だけを続ける場合も同じだ。

テアイテトス　それはどういうことか、わかりません。

1　253A.

(262) B

エレアからの客人　明らかに君は、ついさっき私に同意してくれたとき、何か別のことに目を向けていたのだね。なぜって、私が言いたかったのはまさにそのこと——つまり、名詞や動詞がこんなふうに連続して語られても言表とはならない、ということだったのだから。

テアイテトス　どんなふうにですか？

エレアからの客人　例えば、「歩く、走る、眠る」というふうに、さらには、さまざまの行為を意味するその他の動詞をかき集めて、たとえその全部を続けて語ったとしても、それが言表をつくり上げないことにいささかも変りはないのだ。

テアイテトス　もちろんそうですね。

エレアからの客人　そしてまた他方、「ライオン、鹿、馬」と言われる場合、さらにこれに加えて、こんどは

C

行為をしている者たちを名指す他のさまざまの名詞が並べられるとしても、このような仕方での語の連続によっては、やはり、いかなる言表もまだ成立しないのだ。なぜなら、いまの例においても、先の例においても、声に出された言葉は、どのような行為がなされているか、またはなされていないかということも、そこにあるものまたはないものが何であるかということも、何ひとつ明らかにしていないからだ——人が名詞と動詞をいっしょにして語るまではね。そうしたときにこそ、はじめてそれらの語は適合し合うのであり、そしてそのような最初の組合せが、ただちに〈言表〉となるのであって、それは言表のうちでも最初の、また最小のものといえるだろう。

テアイテトス　それは、どのようなもののことをおっしゃっているのですか？

エレアからの客人　誰かが「人が、学ぶ」と言うとき、これが最も短い最初の言表であることを、君は認める

だろうね？

テアイテトス　ええ、たしかに。

D

エレアからの客人　なぜかというと、その場合はすでに、物事が現にあり、あるいは起りつつあり、あるいは起ってしまったり、これから起ろうとしたりすることについて、何ごとかを明らかにしているからであり、たんに名づけるだけではなく、名詞に動詞を組み合わせることによって、或る事柄にけりをつけているからなのだ。このゆえにわれわれは、その人が、たんに名づけるだけではなく、語っている（何ごとかを言い表わしている）と言うのであり、そして、この〔名詞と動詞の〕組合せに対して、これを〈言表〉という名称で呼ぶことになったのだ。

テアイテトス　なるほど、そのとおりですね。

四六

エレアからの客人　このようにして、ちょうど事物の或るものが互いに適合し合い、或るものは適合し合わなかったのと同じように、音声による表示記号のほうも、またその或るものは適合し合わないが、或るものは適合し合って〈言表〉をつくり上げるのだ。

E

テアイテトス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　ではもうひとつ、こういうちょっとしたことに注意しておきたい。

テアイテトス　どのようなことにですか？

エレアからの客人　言表というものは、それが成立している場合には、必ず、何ものかに関わる言表でなければ

ばならないのであって、何ものかに関わらないということはありえないのだ。

テアイテトス　そのとおりです。

エレアからの客人　そしてまた、言表は、一定の性格をもったものでなければならないのではないかね。(1)

テアイテトス　もちろんです。

エレアからの客人　それではここで、われわれ自身のことに注意を向けよう。

テアイテトス　そうしなければなりません。

エレアからの客人　そこで私は、君にひとつの言表を示すことにしよう――名詞と動詞を介して、事物を行為に結びつけることによってね。その言表が何に関わるものであるかを、君からぼくに言ってくれたまえ。

テアイテトス　できるだけやってみましょう。

エレアからの客人　「テアイテトスは坐っている」――どうだね、べつに長い言表でもないだろうね？

テアイテトス　いいえ、適当な長さです。

エレアからの客人　では、これが何についての言表であり、何ものに関わる言表であるかを言うのが、君の仕事だ。

テアイテトス　むろん、この私についての言表であり、私に関わる言表です。

エレアからの客人　ではこんどは、こういう言表はどうだろう？

テアイテトス　どのような？

エレアからの客人　「テアイテトスは――いま私が話し合っているこのテアイテトスのことだが――飛んでい

る」。

テアイテトス　これもまた、私に関わる言表であり、私についての言表であると言う以外には、誰にせよ答えようがありますまい。

エレアからの客人　しかるに、われわれの主張では、それぞれの言表は、必ず一定の性格をもつものでなければならないのだ。

B

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　それなら、いま挙げた二つの言表のそれぞれは、どのような性格のものと言うべきだろうか？

テアイテトス　一方は偽であり、他方は真であると言うべきでしょう。

エレアからの客人　そして、そのうちの真なる言表のほうは、君について、じっさいにあること（もの）をあるがままに語っている。

テアイテトス　そのとおりです。

エレアからの客人　他方しかし、虚偽の言表は、じっさいにあるのとは異なったものを語っている。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　したがってそれは、あらぬものをあるものとして語っているのだ。

1　少し後の問答（263B）から知られるように、真であるか偽であるかということ。

テアイテトス　そういえましょう。

エレアからの客人　しかしまたそれは、君について、じっさいにあるのとは異なっているところの、あるものを語ってはいるのだ。というのは、それぞれのものについて多くのあるものとともに、他方多くのあらぬものがあるのだと、われわれは主張していたはずだから(1)。

テアイテトス　まさにそのとおりでした。

C

エレアからの客人　こうして、君について私が語った後のほうの言表は、まず第一に、われわれが〈言表〉とは何であるかを規定したところからいって、まったく必然的に、最も短い言表の一つであることになる。

テアイテトス　たしかに私たちは、いましがた、そのように同意し合いましたからね。

エレアからの客人　次にそれは、何ものかに関わるものでなければならない。

テアイテトス　そうです。

エレアからの客人　そして、もしあの言表が君に関わるものでないとしたら、他の何ものに関わるものでもないのだ。

テアイテトス　もちろんです。

エレアからの客人　しかるに、何ものにも関わらないとしたら、そもそもそれは言表ですらないことになろう。なぜなら、われわれの表明した見解によれば、言表でありながら何ものにも関わらない言表であるということは、不可能なことであったから。

テアイテトス　完全に正しい見解です。

D

エレアからの客人　こうして、君について語られてはいるが、しかし異なるものが同じものとして、あらぬものがあるものとして語られている場合、動詞と名詞からなるこのような結合は、まさしくどう見ても、ほんとうにまた真実に、虚偽の言表となるように思われる。

テアイテトス　ええ、まったくそのとおりですとも。

四七

エレアからの客人　さあ、それではどうだろう。〈思考〉(ディアノイア)と〈判断〉(ドクサ)と〈現われ〉(パンタシアー)と――これらのものはすべて、それがわれわれの魂のなかに生じる場合、偽であることもあれば真であることもあるということは、もはや明らかではないだろうか。

テアイテトス　どうしてでしょうか？

エレアからの客人　こうすれば君の理解は容易になるだろう――つまり、まずはじめに、それらはそもそも何であるか、またそれぞれは互いにどのように違っているかということを、君にわかってもらうことだ。

E

テアイテトス　どうかわからせてください。

エレアからの客人　ではまず、〈思考〉と〈言表〉とは同じものではないかね。違う点はただ、一方は魂の内において音声を伴わずに、魂自身を相手に行なわれる対話(ディアロゴス)であって、これがわれわれによって、まさ

1　256E, 259B 参照。

(263)

にこの〈思考〉という名で呼ばれるにいたったということだけではないか[1]？

テアイテトス　たしかにそのとおりです。

エレアからの客人　これに対して、魂から発し口を通って音声を伴いながら出てくる流れが、〈言表〉と呼ばれているのだね？

テアイテトス　おっしゃるとおりです。

エレアからの客人　そしてまた、言表のなかでは、さらにこのこと[2]が行なわれているのをわれわれは知っている。

テアイテトス　どのようなことですか？

エレアからの客人　肯定と否定だ。

テアイテトス　知っています。

264

エレアからの客人　そこで、そのことが魂の内で、思考において沈黙のまま行なわれた場合、君は〈判断〉という名以外に、何かそれを呼ぶ名称を知っているかね？

テアイテトス　いいえ、他にどんな呼び方ができましょうか。

エレアからの客人　では他方、そのことが誰かに、それだけ単独にではなく、感覚を介して起る場合には、こんどもそのような状態を〈現われ〉（そう見えること、知覚判断）と呼ぶ以外に、何か別の名で正しく呼ぶことができるだろうか？

テアイテトス　いいえ、けっして。

エレアからの客人　それでは、〈言表〉には真なるものと偽なるものとがあることがわかったからには、そして他方、いま見てきたいくつかの心的過程のうち、まず〈思考〉とは魂が自己自身を相手に行なう対話であり、〈判断〉とは思考の結着にほかならず、「そう見える」とわれわれが言うところのもの（〈現われ〉）は、感覚と判断とが混じり合ったものであることが明らかになったからには、いまや必然的な帰結として、これらのものもまた、いずれも〈言表〉と同族のものである以上、その或るものは時によって偽であることになる。

B

テアイテトス　ええ、疑いもなく。

エレアからの客人　さあ、君は気づいているかね——虚偽の判断と虚偽の言表は、われわれが予期していたよりも早く発見されたということに？　ついさっきわれわれはこの探求に乗り出すことによってまったく果てしない仕事を自分に課することになるのではないかと、恐れたのだったが(3)、あのとき予期していたのよりも早くね。

テアイテトス　ええ、気がついています。

四八

エレアからの客人　さてそれなら、残された仕事に対しても、勇気を失わずに立ち向かって行くことにしよう。

1　〈思考〉〈判断〉〈言表〉に関するこうした点については、『テアイテトス』189E～190A, 206D、『ピレボス』38C～Eなどを参照。

2　テクストは底本以外の大部分の校訂者（シュタルバウム、キャンベル、ディエス、ファウラーなど、およびコーンフォードの訳注）とともに、263E10において写本のまま αὐτὸ を読む。

3　261A～B.

(264)
C
すなわち、以上の事柄が明らかになったからには、いまや、前に行なっていた種類ごとへの分割を思い出すことにしよう。(1)

テアイテトス どのような分割だったでしょうか。

エレアからの客人 われわれは、〈影像作りの技術〉の種類として、二つのものを区別していた――すなわち、そのひとつは〈似像を作る技術〉、もうひとつは〈見かけだけを作る技術〉。

テアイテトス ええ。

エレアからの客人 そしてソフィストを、そのどちらに入れるべきかがわからずに、困惑におちいったと言っていた。

テアイテトス そうでした。

エレアからの客人 そして、われわれがその点の困惑のために行き詰っていた折も折、さらに大きな昏迷がわれわれを襲ったのだった。ほかでもない、すべてに異議を唱える言説が立ち現われて、〈似像〉も〈影像〉も〈見かけだけの像〉も、そんなものはまったく何ひとつありはしないのだ、そもそも虚偽ということがいかなる意味でも、いかなるときにも、どこにも、けっしてありえないのだから、と主張したからだ。
D

テアイテトス おっしゃるとおりです。

エレアからの客人 しかしいまや、虚偽の言表もあれば虚偽の判断もあることが明らかになった以上、実物を真似たものがありうることになるし、そしてそうした状態にもとづいて、人を欺く技術というものがそこから生じて来ることが可能だということになる。

テアイテトス　可能です。

エレアからの客人　そしてまた、少なくともソフィストが、いま挙げた技術のどちらかを身につけた者であるということは、前の議論のなかで、われわれによってすでに同意確認されたところなのだ。[2]

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　それでは、もう一度あらためて仕事に取りかかることにしよう。われわれは、われわれの前に置かれた種類を二つに分けながら、そのつどつねに、分割されたものの右側の部分に沿って進み、ソフィストが関与しているものから離れずにたどって行って、最後には、ソフィストが他のものと共通にもっている性格をすべて取り除いて、その固有の本性だけを残したうえで、それをまず誰よりもわれわれ自身に、さらにはまた、このような探求の方法に種族的に最も近く生まれついている人たちに、示すことにしよう。

E

265

テアイテトス　正しいやり方です。

エレアからの客人　さて、前にはわれわれは、最初、〈作る技術〉と〈獲得の技術〉とへの分割から始めたのではなかったかね。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　そして〈獲得の技術〉のうちの、狩猟の技術や闘い取る仕事や通商業や、その他これに類す

1　議論はここでようやく、先に236D以来大きく中断せざるをえなかったソフィスト規定のための技術の分割を、ふたたび取り上げて続行することになる。

2　〈似像を作る技術〉（エイカスティケー）と〈見かけだけを作る技術〉（パンタスティケー）のこと。

るいくつかの形態のものの中に、ソフィストはわれわれにその姿をのぞかせたのだったね。

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　しかしいまは、ほかならぬ〈真似る技術〉の中に彼は包囲されたのだから、こんどは最初に戻ってまず、〈作る技術〉そのものを二つに分けることから始めなければならないのは明らかだ。なぜなら、真似ることは作ることの一種であると、いってよいだろうからね——ただし、作られるのはそれぞれの実物そのものではなく、その影像であると、われわれは言うけれども。そうだね？

B

テアイテトス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　それでは、まず、〈作る技術〉には二つの部門があるとせよ。

テアイテトス　何と何ですか？

エレアからの客人　ひとつは神的なもの、もうひとつは人間的なものだ。

テアイテトス　まだ理解できません。

四九

エレアからの客人　そもそも作る働きとは——はじめのほうで言われたことをわれわれが憶えているならば——それまでは存在しなかったものが後に生じてくることの原因となるような、すべての力のことにほかならないと、われわれは言っていた。(1)

テアイテトス　ええ、憶えています。

C **エレアからの客人** それでは、すべての死すべき動物およびすべての自然物――種子や根から地上に生えてくるものも、また地中にかたちづくられる、溶解されまた溶解されえないすべての生命なき物体も共に含めて――いったいこれらのものが、それまでは存在しなかったのに後で生じてくるのは、まさにほかならぬ神の製作活動によるものであると、われわれは主張すべきではないだろうか？　それとも、多くの人たちの通念と言い方を採用して……

テアイテトス といいますと、どのような？

エレアからの客人 自然がそれらのものを、ひとりでに働いて思考なしにものを生じさせるような何らかの原因によって、産み出すのだという考えだ。それともわれわれは、それらのものを産み出す原因は、神に由来する神的な原因であり、理（ことわり）と知識を伴ったものであると主張すべきだろうか？(2)

D **テアイテトス** 私としては、たぶん年が若いからでしょうが、何度も考えが変って、その両方の見方の間を往き来していきます。しかしいまは、こうしてあなたを見つめながら、あなたはそれらのものが神によってこそ生じてくるのだと思っておられることを了解して、私自身もまた、そのようにきっぱりと考えを決めました。

エレアからの客人 よく言ってくれた、テアイテトスよ。これでもしわれわれが、君という人間を、後になってまた何か違った考えをもつようになるかもしれない人たちのひとりだと思っているとしたら、われわれはいま、

1　219Bを参照。
2　この問題はプラトンの後期著作のなかで、『ピレボス』28D～E、『ティマイオス』28A～29A、『法律』X. 888A sqq. などにおいて前面に持ち出されて取り上げられている。

有無を言わせぬ説得力をもった議論によって、君を同意させようと試みるだろう。しかし、君のもって生まれた
E 素質は、われわれからの議論をまたずとも、いま君が惹かれていると言っている結論へとおのずから向かうだろうことは、私によくわかっているので、その労ははぶくことにする。時間が無駄になるだけだろうからね。そしてこう決めることにしよう――すなわち、自然の産物と呼ばれているものは、神の技術によって作られるものであり、人間たちがそれらから組み立てるものは、人間の技術によって作られるものである、と。またしたがって、この論によれば、〈作る技術〉には二種類あって、そのひとつは人間的なもの、もうひとつは神的なものである、と。

テアイテトス　正しい規定です。

エレアからの客人　それでは、その二つある技術のそれぞれをもう一度、二つに切り分けてくれたまえ。

テアイテトス　どのようにですか？

エレアからの客人　いわば、さっきは〈作る技術〉の全体を横に切り分けたのに対して、こんどはそれを縦に切り分けるのだ。

266 **テアイテトス**　切り分けられたものといたしましょう。

エレアからの客人　その結果として、〈作る技術〉には全部で四つの部分があることになる。そのうちの二つは、われわれの側のもの、すなわち人間的な部分であり、他方の二つは、神々の側のもの、すなわち神的な部分である。(1)

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　これに対して、こんどはもうひとつの仕方で分けられたものについていえば、いまのそれ

ぞれの部分〔神的な部分と人間的な部分〕から切り分けられる一つずつの部分は、実物の製作であり、残る二つの部分は、影像の製作と呼ばれるのが、おそらく最もよいだろう。そしてこのようにして、〈作る技術〉はもう一度、二つに分けられることになるのだ。

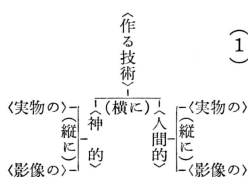
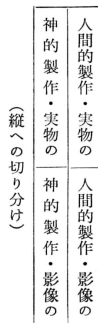
B

テアイテトス　あらためて、そのそれぞれの技術がどのように分けられるのか、説明してくださいませんか。

五〇

エレアからの客人　まず一方において、われわれ自身やその他の動物や、また、自然物がそれから構成されているところの火や水や、それに類するものなど——これらのものはすべて、そのひとつひとつが神の産み出した実物として作り出されたものであるということは、われわれの知るところである。それとも、どうかね？

テアイテトス　そのとおりです。

1　これはすでに265Bで行なわれ265Eで確認された「さっき」の切り分け方と同じものであるから、「横」への切り分けを意味し、次に「もうひとつの仕方で」と言われるものは「縦」への切り分けを意味する。横への切り分け（神的と人間的）と縦への切り分け（実物と影像）の結果を併せて図示すると、次の（1）または（2）のようになる。

エレアからの客人　他方、それらのもののひとつひとつには、実物ならぬ影像が伴うのであって、これもまた、人知を超えた霊妙な工夫によって生じたものである。

テアイテトス　どのようなものですか？

エレアからの客人　眠りのうちに現われる像や、昼間自然に生じると言われているすべての影像――すなわち、火の光の中に暗い部分ができるときに出来る影や、自分のものである光と他者のものである光とが明るく滑らかな物の表面で出会って一つになり、直接向き合ったときの通常の姿とは逆の知覚を与えるような形象を作り出す場合の、反映像などがそれだ。(1)

C

テアイテトス　なるほど、たしかにそうした二つのものが、神の製作が作り出す作品としてあるわけですからね――つまり、実物と、ひとつひとつの実物に伴う影像とが。

エレアからの客人　では他方、われわれ人間の技術の場合はどうだろう？　われわれは、建築の技術によって実物としての家を作り、絵画の技術によって別の或る種の家を作ると言うべきではないだろうか――いわば、目覚めている人たちのために作り出される人工の夢としての家を。

D

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　そしてその他のものについても同様にして、われわれの製作行為が作り出す作品には、これはこれで二種類のものが対(つい)をなしてあるのであって、われわれの主張では、そのひとつは実物、もうひとつは影像だということになる。

テアイテトス　こんどは前よりもよくわかりました。そして〈作る技術〉は、二通りの仕方で二種類に分けられ

ることを認めます。すなわち、一方の分け方によると、神の行なう製作と人間の行なうそれとがあり、もう一方の分け方によると、実物の創造と一種の似像の創造とがあることになります。

五一

エレアからの客人　それではここで、その〈影像〉を作る技術について、次のことを思い起すことにしよう。すなわち、この技術には、似像を作る種類のものと、見かけだけの像を作る種類のものとがあるはずだったという

E ことだ――もし虚偽というものがほんとうに虚偽としてあり、それは本来、あるもののうちの一つであるということが明らかになるならばね。(2)

テアイテトス　たしかにそうでした。

エレアからの客人　しかるにそのことは、ちゃんと明らかになったのだから、それにもとづいてわれわれは、その二つを、いまや異論の余地なく、二つの種類として区別して数えてよいだろうね。

テアイテトス　はい。

267 **エレアからの客人**　それでは、その〈見かけだけを作る〉種類のものを、あらためて二つに区分することにしよう。

1　左右が逆に見えるこの鏡像その他の知覚については、『ティマイオス』46A～Cにそのさらに詳しい説明が見られる。

2　236C～Eを参照。

テアイテトス　どのようにですか？

エレアからの客人　ひとつは、道具を使って行なうものであり、もうひとつは、見かけだけの像を作り出す人が、自分で自分自身を道具として提供することによって行なうものだ。

テアイテトス　それは、どのような意味でしょうか？

エレアからの客人　思うに、誰かが自分自身の身体を使って君の姿かたちに似たものを再現し、あるいは、自分の声によって君の声に似たものを再現するような場合、〈見かけだけを作る技術〉のうちでもこのやり方のものは、とくに物真似というふうに呼ばれているはずだ。

テアイテトス　ええ。

エレアからの客人　それでは、〈見かけだけを作る技術〉のこの部分を、〈物真似〉的なものと呼んで、われわれのために取っておくことにしよう。そしてこれ以外の部分はすべて、われわれとしてはこれを見送ることにしよう——それを一つにまとめて何か適切な名称を与えるという仕事については、気ままな態度をきめこんで、他の人にそれをまかせてしまってね。

B

テアイテトス　その部分を取っておくことも、他は放置することも、おっしゃるとおりにいたしましょう。

エレアからの客人　ところでまた、その〈物真似〉にもさらに、テアイテトスよ、二通りのものがあると考えてしかるべきなのだ。なぜそうなのか、しらべてみてくれたまえ。

テアイテトス　説明していただけませんか。

エレアからの客人　真似をする人たちのなかには、自分が真似ようとするものを知っていてそうする人たちも

いるし、知らずにそうする人たちもいる。ところでしかし、無知と知の区別よりもさらに大きな区別たりうるものとして、いったい何があると考えるべきだろうか？

テアイテトス 何もありません。

エレアからの客人 では、たったいま例に挙げられた物真似は、知っている人たちが行なう物真似ではなかったろうか。というのは、君の姿かたちや君という人を知っているからこそ、真似ることができるのだろうからね。

C **テアイテトス** ええ、むろん。

エレアからの客人 では正義をはじめ、一般にすべての徳の姿かたちといったものについては、どうだろう？多くの人々がその知識をもたずに、ただ何らかの思わくをもっているだけの状態でありながら、徳であると思われているその当のものが、自分たちの内にほんとうにあるように見せかけようと、きわめて熱心な努力を試みているのではなかろうか——行動と言葉によってできるだけそれを真似ながらね。

テアイテトス ええ、そういう人々はじつにたくさんいます。

エレアからの客人 その場合、そういう人々のすべてが、実際にはぜんぜんそうでないのに正しい人だと思われるということに、失敗するわけではないだろうね？ いやむしろ、実情はまったくその正反対ではないだろうか？

テアイテトス 正反対です。

D **エレアからの客人** こうして、思うに、同じく真似る人であっても、そういう人は先の場合の人とは——すなわち、知識をもたない者は、知識をもっている者とは——異なると言わなければならない。

テアイテトス　ええ。

五二

エレアからの客人　さてそれなら、この両者のそれぞれに適した名前を、どこから取ってきたらよいのだろうか？　いや、これがむずかしい仕事だということは、あまりにも明らかだ。なぜなら、もろもろの〈類〉をその〈形相〉〈種〉に従って分割するということについては、どうやらわれわれの先人たちの間には、むかしから無考えな怠惰のようなものが支配してきたらしく、誰ひとりとして分割することを試みさえしなかったほどだからだ。そのためにどうしても、われわれには手持の名前がふんだんにあるというわけには行かないのだ。それでもしかし、われわれとしては、たとえ少し大胆すぎる呼び方になるとしても、両者を識別するために、思わくをもって

E

行なう物真似のほうを〈思わく的物真似〉と呼び、知識をもってする物真似のほうを〈探求的（学的）物真似〉とでも呼ぶことにしよう。

テアイテトス　そういたしましょう。

エレアからの客人　それでは、そのうちの一方を取り上げなければならない。つまりソフィストは、知識をもった人々のなかにはいなくて、ただ真似るだけの人々のなかにいたのだから。(1)

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　ではこの〈思わく的物真似師〉を、ちょうど鉄をしらべるようにして、それが無きずであるか、それとも、何らかの割れ目をまだそれ自身の内にもっているものかをしらべてみよう。

テアイテトス　しらべてみましょう。

エレアからの客人　もっている、もっている、大へんに大きな割れ目をね。というのは、そうした人たちのうちでも、一方には、自分が思わくしているにすぎない事柄をほんとうに知っていると思いこんでいる、無邪気なお人好しもいるけれども、しかし他方には、さまざまな議論のなかを徘徊(はいかい)しているために、自分が他の人々に対して知っているかのように格好をつけている事柄をほんとうは知ってはいないのだという、多大の疑いと恐れを、その態度・様子に示している者もいるからだ。

268

テアイテトス　ええ、あなたのおっしゃったような二通りの人たちの、それぞれの人間の種族がたしかにありますね。

エレアからの客人　ではわれわれは、その一方の者を単純な物真似師と、他方の者をしらばくれる物真似師というふうに規定しようか。

テアイテトス　そんなところでしょうね。

エレアからの客人　さらにこんどは、後者の種族は、一種類だけだと言うべきだろうか、それとも、二種類あると言うべきだろうか。

テアイテトス　あなたのほうで、見ていただけませんか。

B

エレアからの客人　しらべている、そして私にははっきりと、二通りの人間がいるように見える。すなわち、

1　233Cでこのことが確認されていた。

私が見てとる一方の者は、公の場で長い演説によって、多数の人間を相手にしらばくれることのできる人であり、他方の者は、私的な場で短い議論によって、討論の相手が自己矛盾したことを言わざるをえないように追いこむ人なのだ。

テアイテトス　まったくおっしゃるとおりです。

エレアからの客人　そこでわれわれとしては、そのうちの長い演説をするほうの人を、何者であると表明すべきだろうか。政治家だろうか、それとも、大衆演説家だろうか？

テアイテトス　大衆演説家です。

エレアからの客人　では他方の者を、何と呼ぶべきだろうか。知者（ソポス）だろうか、それとも、ソフィストだろうか？

テアイテトス　知者と呼ぶことは、ちょっとできないでしょう。何ぶんにも私たちはその者を、知識をもたない者と規定したのですからね。ただし、知者を真似る者である以上、その者は明らかに、何か知者という語から派生した名前をもつことになるはずです。そしていまはもう、私にもよくわかりました――この者こそはほんとうに、ほかならぬ、かの完全に正真正銘のソフィストと呼ぶべき人間である、と。

c

エレアからの客人　では、まさにこの場でわれわれは、前にやったのと同じように[1]、終りのほうから始めのほうへと彼の名前をつなぎ合わせて行ったうえで、一つに結びつけてまとめるべきではないか。

テアイテトス　ええ、ぜひとも。

エレアからの客人　それでは、いまの〈矛盾を作り出す言論の技術〉に至る系譜はといえば、この技術は〈しら

ばくれ〉という部分の一系統であり、後者は〈思わくにもとづく仕事〉の一系統であり、これらはみな〈物真似〉という仕事としてあるのだが、これは〈見かけだけを作る仕事〉という種類の一系統であり、後者はさらに〈影像作りの技術〉の出であり、それも、〈製作〉のうちの〈神的〉ならぬ〈人間的〉な部分として区別されたものであり、言論の領域において〈手品的な仕事〉(2)をする部分である——「このような系統(よすじ)と血統(ちすじ)」(3)にこそ、まことのソフィストは属すると主張する者がいれば、その人は、どうやら、最も真実のことを語ることになるだろう。　D

テアイテトス　全面的におっしゃるとおりです。

1　226Aにおける、ここと同じく「終りのほうから始めのほうへ」という逆の順序による分割のまとめを指すと思われる。

2　この表現は、以前の分割による規定の試み(235B)のなかで用いられていたものである。——なお、エレアの客人によるこの最後の総括の言葉は、「終りのほうから始めのほうへ」という逆の順序のためもあって、きわめて訳出困難な原文となっているが(何人かの外国語訳の訳者もそのことを断わっている)、総括の内容そのものについては補注A(一七六ページ)の分割一覧表を参照されたい。

3　ホメロス『イリアス』第六巻二一一行に見られる表現。

『ソピステス』補注

A 分割一覧表。――すなわち、「分割」(ディアイレシス)の方法による〈魚釣師の技術〉、および〈ソフィストの技術〉の規定一覧表。

凡　例

一　ソフィストに対する第一(1)から第六(6)までの規定の数え方は、231D～Eで行なわれている復習における数え方に従う。(そこで「第三番目」(3)と「第四番目」(4)というふうに二つに分けて復習されているソフィストの規定は、実際の経過における224D～Eでは、たんに「第三番目」として両方一括して語られている。231D～Eに対する注1参照。)

その231D～Eにおいて要約的に復習されたソフィストの六つの規定内容は、次のとおりである。

1　〈報酬を受け取って金持ちの若者たちを狩猟する者〉。
2　〈魂のための学識を扱う通商業者〉。
3　同じそれらのものを扱う〈小売業者〉。
4　〈学識の自作直売業者〉。
5　〈闘い取る技術〉の分野に属する言論の選手であり、〈討論の技術〉を自分の専門領域とする者。
6　〈学びの妨げとなるさまざまの思いこみを取り除いて魂を浄める人〉。

これら六つの規定を総観することによって第七(7)の最終的規定が試みられ、その作業は、そこに伏在する根本問題への対処のために大きく中断されて、巻末の265A～268Dに至って、ようやく再開され完成される。

二　〈魚釣師〉の規定および〈ソフィスト〉の七つの規定は、それぞれの作業が一応終った段階で総括を与えられている(221B～C(魚釣師)、223B(ソフィスト1)、224C～D(ソフィスト2)、224E(ソフィスト3・4)、226A(ソフィスト5)、231B(ソフィスト6)、268C～D(ソフィスト7))。

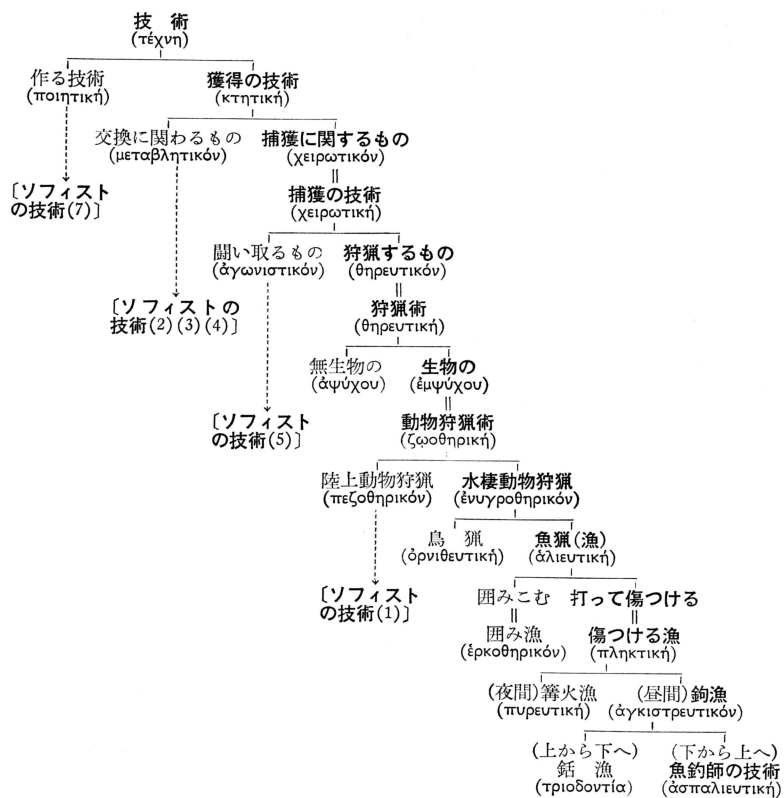
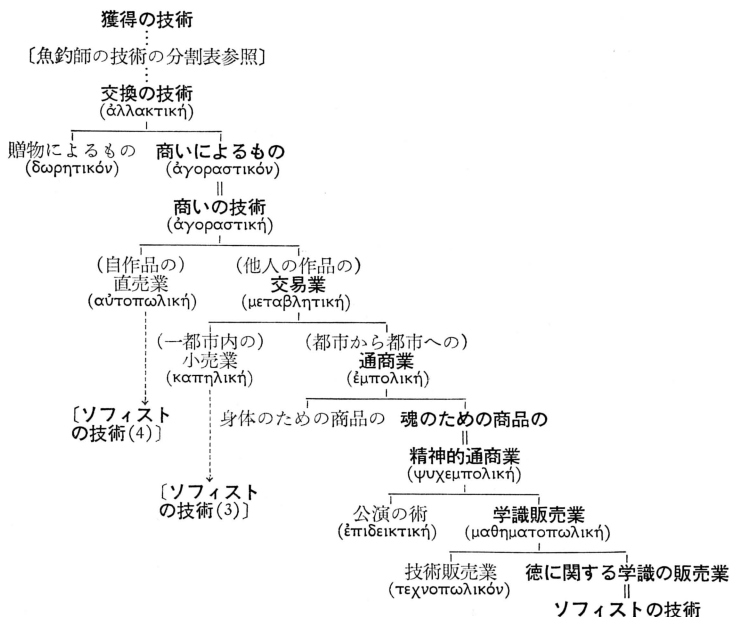
しかしこれらの総括は、分割における一部の段階が省略されたり、用語も時に若干の変更がみられるなど、必ずしも、そこに至るまでの実際の「分割」の手続きと正確に対応していない。ここに示した分割表は、それぞれの総括でなく、そこに至るまでの実際の「分割」の経過を表示したものである。この点は、括弧の中に示したギリシア原語についても同様である。

三　〈魚釣師〉を規定するための分割は、「分割」(ディアイレシス)の方法一般の「範例」として行なわれるとされているが、実際には、たんに「範例」であるだけでなく、以下に続く〈ソフィスト〉のそれぞれの規定の作業のための出発点、土台として使われている(第六の規定だけは別)。この点も表に示した。

魚釣師の技術：219A〜221C

ソフィストの技術(1):221C～223B

獲得の技術
⋮
〔魚釣師の技術の分割表参照〕
⋮
狩猟術

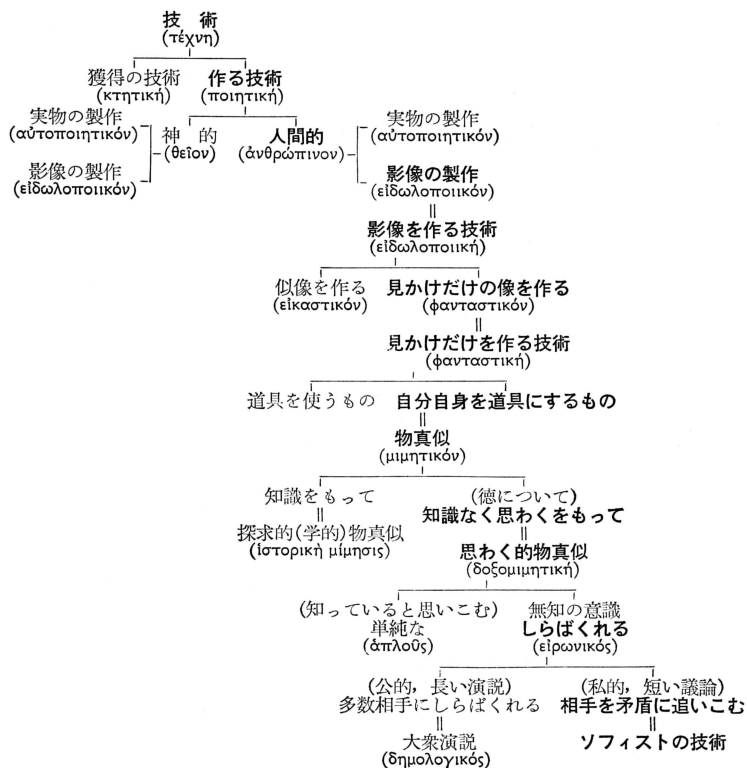
- 泳ぐ動物の(νευστικοῦ)
- **陸上歩行動物の**(πεζοῦ)
  - 野生の荒々しい動物の(τῶν ἀγρίων)
  - **なれておとなしい動物の**(τῶν ἡμέρων)
    ‖
    おとなしい動物(人間)の狩猟(ἡμεροθηρική)
    - 力ずくによる狩猟(βίαιος θήρα)
    - **言いくるめ(説得)の技術**(πιθανουργική)
      - 公　的(δημοσίᾳ)
      - **私　的**(ἰδίᾳ)
        ‖
        私的な狩猟の術(ἰδιοθηρευτική)
        - 贈物を与えるもの(δωροφορικόν)
          ‖
          恋の技術(ἐρωτικὴ τέχνη)
        - **報酬を受け取るもの**(μισθαρνητικόν)
          - 相手を楽しませる
            ‖
            へつらいの技術(κολακική)
          - **徳を授ける**
            ‖
            教育と称されている狩猟(δοξοπαιδευτική)
            ‖
            ソフィストの技術

ソフィストの技術(2)：223C～224C

ソフィストの技術(3)(4)：224D～E

ソフィストの技術(5)：224E～226E

- **獲得の技術**
  - 〔魚釣師の技術の分割表参照〕
    - **闘い取る技術**(ἀγωνιστική)
      - 競争によるもの(ἁμιλλητικόν)
      - **戦闘によるもの**(μαχητικόν) ＝ **戦闘の技術**(μαχητική)
        - (身体による)力技(βιαστικόν)
        - (言論による)**論争**(ἀμφισβητητικόν)
          - (公的，長い演説)法廷弁論(的論争)(δικανικόν)
          - (私的，一問一答)**反論(的論争)**(ἀντιλογικόν)
            - さまざまの契約をめぐっての(規則・技術なし) ＝ (無名)
            - **正・不正その他をめぐっての** ＝ **討論(的論争)**(ἐριστικόν)
              - 金を失わせるもの(χρηματοφθορικόν) ＝ 無駄なおしゃべり(ἀδολεσχικόν)
              - **金儲けになるもの**(χρηματιστικόν) ＝ **ソフィストの技術**

ソフィストの技術(6)：226B～231B

- **分離の技術**(διακριτική)
  - 似たものどうしを引き離すもの ＝ (無名)
  - **良いものから悪いものを引き離すもの** ＝ 浄化(καθαρμός)
    - 身体の浄化
      - (病気を扱う) ＝ 医術(ἰατρική)
      - (醜さを扱う) ＝ 体育術(γυμναστική)
    - **魂の浄化**
      - (不正・放埒等を扱う) ＝ 懲戒の技術(κολαστική)
      - (無知を扱う) ＝ **教授する技術**(διδασκαλική)
        - 専門技術の教授(δημιουργικαὶ διδασκαλίαι)
        - **教育(教養)**(παιδεία)
          - 訓戒(νουθετητική)
          - **論駁**(ἔλεγχος) ＝ **ソフィストの技術**

ソフィストの技術(7): 265 A ～ 268 D (cf. 235 B ～ 236 D)

B　231A〜B.——論駁により魂を浄化する技術の行使者としてのソフィストの規定(第六の「分割」)について。

この箇所については、次のような諸点をめぐって議論が行なわれている。

(1)「彼らに、あまり大きすぎる栄誉を与えることになりはしないかと恐れるのだ」(μὴ μεῖζον αὐτοῖς προσάπτωμεν γέρας, 231A3)というエレアからの客人の言葉における、「彼らに」(αὐτοῖς)とは、誰のことを言っているのか。この代名詞はソフィストたちを受けるのか、それとも、論駁の技術の行使者たちを受けるのか。

(2)「私の思うには、やがてこの人たちが充分よく警戒するときが来たならば、……けっして些細なものではないだろうからね」(οὐ γὰρ περὶ σμικρῶν ὅρων . . . ὁπόταν ἱκανῶς φυλάττωσιν, 231A9〜B1)という文章の訳し方。

そして、最も大きな問題として——

(3)ソフィストに対するこの第六の規定は何を意味するのか。これをほんとうにソフィストの規定と解するには、(この箇所のエレアの客人の言葉そのものが強い疑念を表明しているように)その規定内容が他の六つのそれとあまりにも違いすぎるけれども、しかしそれならプラトンはなぜ、このような規定を他のそれと並べてここに入れたのであろうか。

これら三つの点のほかに、「犬と狼」の譬えの意味や、この「分割」の途中に見られる、魂の内にある欠陥の二種類として悪徳(臆病、放埒、不正等)と無知をはっきり区別する考えが、プラトンの倫理思想の発展においてどのような位置づけと意味をもつか、といった点も、議論の対象とされている。しかし前者(「犬と狼」の譬え)は本文を素直に読めば何も問題は起らないようなことと思われるし、後者はここで簡単に扱うことのできない問題であるので、いまはいずれも取り上げない。

コーンフォード以後、これらの論点についての、コーンフォードの解釈に対する異論や再反論は、主として次の人々によって行なわれた。

G. B. Kerferd, Plato's Noble Art of Sophistry, *The Classical Quarterly*, n. s. 4 (1954), pp. 84 sqq.

J. R. Trevaskis, The Sophistry of Noble Lineage, *Phronesis* 1 (1955), pp. 36 sqq.

N. B. Booth, Plato's *Sophist* 231a, etc., *The Classical Quarterly*, n. s. 6 (1956), pp. 89–90.

R. S. Bluck, *Plato's Sophist* (ed. G. C. Neal), 1975, pp. 40 sqq.

(1)「彼らに」(αὐτοῖς, 231A3)という代名詞は何を受けるか。

シュタルバウム、キャンベル、アーペルト、ディエス(他にツェラーやバーネット)などの伝統的解釈は、ソフィスト(たち)を受けると解してきたが、コーンフォードがジャクソンに従い、またテイラーも、本文注1(四七ページ)に示したような皮肉をこめた反語的意味において、「彼ら」を論駁の技術の行使者たちととる。これに対して、カーファードがあらためて伝統的解釈の正しさを主張し、この点については、

トレバスキスやブラックもカーファードを支持している。本文注1で述べたように、原文の読み方として、このαὐτοῖςは直前の文章の「ソフィストたち」を受けると解するほうが自然であろう。ことさらにコーンフォードやテイラーの言うような、皮肉または反語的な意味を読み取る必然性はないと思われる。

(2)οὐ γὰρ περὶ σμικρῶν ὅρων τὴν ἀμφισβήτησιν οἴομαι γενήσεσθαι τότε ὁπόταν ἱκανῶς φυλάττωσιν(231A9〜B1)の読み方。

従来の標準的な訳例は次のとおりである。

'When they begin thoroughly to guard their confines, the contest will be for no trifling boundary.' (Campbell)

'.... for should they ever set up an adequate defence of their confines, the boundary in dispute will be of no small importance.' (Cornford)

'.... car ce ne sera point minime conflit de termes qui s'élèvera, sitôt qu'ils observeront une garde rigoureuse.' (Diès)

ここでもカーファードは、これらの訳例のようにοὐをσμικρῶνにかけることを拒け、この否定詞をοἴομαιにかけて読み('.... for I do not think there will be dispute about distinctions which are of little importance.')、古い解釈(アスト、シュタルバウム)の正しさを主張したが、トレバスキスとブースから正当な批判と反論を受けた。カーファードのこの点に関する議論は明らかに誤っている。

ただし、ὁπόταν ....φυλάττωσιν(φυλάττωμεν, Shanz)の意味については、テクストですぐ上に「大事をとる人が……警戒しなければならぬ」(τὸν δὲ ἀσφαλῆ δεῖ .... ποιεῖσθαι τὴν φυλακήν, 231A6〜8)と言われているので、右のキャンベルやコーンフォードのように、このτὴν φυλακήνと違った意味(「境界・領域を守護する」)に解するよりも、カーファードが主張しブラックが支持するように、それを受けて同じく「(類似性への)警戒」の意味に解する('when men are sufficiently on guard in the case of resemblances', Kerferd; 'when people are sufficiently on their guard', Bluck)ほうが自然で正しいであろう。この場合、φυλάττωσινという動詞の文法的主語は、「論駁の技術の行使者たち」としても意味は通るが、より適切には、οἱ διαλεγόμενοι(Stallbaum)やοἱ ἀσφαλεῖς(Kerferd)や'people' in general(Bluck)が考えられる。シャンツの修正案(φυλάττωμεν)は、この点をさらにスムースにするためのものであろう。

(3)「論駁の技術により魂を浄化する人」というソフィストの規定の意味。

この規定を導き出す第六の「分割」は、それまでの五つと明白にその趣きを異にしている('In the sixth Division satire is dropped. The tone is serious and sympathetic; towards the close it becomes eloquent', Cornford)。「分割」の出発点として取られた技術も、他のそれのように〈獲得の技術〉ではなく〈分離の技術〉である。とくに230B〜Dで語られている事柄は、疑いもなく、『ソクラテスの弁明』その他前期対

話篇以来描かれてきたソクラテスの方法を思わせるものである。'inferior imitators of the Socratic dialectic' の記述であるという、ことさらに異を唱えた感のある解釈（Taylor, Burnet）もあるけれども、これをソクラテスのことを念頭に置いた記述（'a description which (as Jackson and others have seen) applies to Socrates and to no one else', Cornford）であると見るのが、まず自然な受けとり方というべきであろう。

しかしそうすると、実際にはソクラテスの方法を指すような事柄が、なぜソフィストの技術の規定としてわざわざここに入れられなければならなかったのかが問題となる。この点を、『ソピステス』『ポリティコス（政治家）』につづく『ピロソポス（哲学者）』という三部作構想から由来したものとするコーンフォード（p. 182）の説明には、あまり説得性がない。また、この後でそれまでに得られた六つのソフィストの規定が復習され、その総覧にもとづいて、すべての規定内容に共通するソフィストの肝心の本質的性格（εἰς ὃ πάντα τὰ μαθήματα ταῦτα βλέπει, 232A4〜5）を求めて議論が第七の「分割」へと進んで行くにあたって、とくにこの第六の規定だけはその総覧から除外されること（Cornford, p. 190; Sayer, *Plato's Analytic Method* (1969), p. 154）を積極的に告げるものは、テクストのなかには見出されないのである。

カーファードは、こうした疑問のゆえに、この第六の規定はソクラテスの方法ではなく、額面通りソフィスト（とくにプロタゴラス）の方法を記述したものであると主張した。しかしこれはやはり、結局は無理な主張と議論であって、ブースおよびとくにトレバスキスによって、その論拠は詳細に論駁否定された。

本文注2（四七ページ）で述べたように、おそらくこの第六の規定は、ソクラテスが世の人々からソフィストと混同された事実を背景にして、この混同を表向き一応承認するという手続きにより、両者の間の重大な差異を逆照明する意図をもつと考えられる。

同時にまた、ブラックが注意するように、この箇所全体の思想が、ソフィストの技術とは身体における体育術に対応して、魂の醜さ（＝無知）を癒す真の技術（ソクラテス的方法）を真似た贋物であるということにあるとすれば、同じ考え方は『ゴルギアス』463D にすでに見られるところであり、そのような贋物としてのソフィストの技術を記述する最良の道は、それが真似るところの本物を記述することである、という理由もあるであろう。

事実また、本物と贋物を区別する重大な一点を除いて、ソフィストが標榜するところとその実際のやり方を形の上で見るかぎりでは、この箇所で語られている事柄はソフィストのそれと合致するといえる。だからこそテアイテトスも、「いま語られた事柄は、ソフィスト的なものに似ていることはたしかですね」と言ったわけだし、またこの第六の規定が他の五つとともに、第七の規定の試みへと進むにあたって、やはりソフィストの規定として復習・総覧される対象となることもできたわけである。内容的にも、第七の最終規定の中で言われる「討論の相手が自己矛盾したことを言わざるをえない

ように仕向ける」(ἀναγκάζοντα . . . . ἐναντιολογεῖν αὐτὸν αὑτῷ, 268B4～5; cf. ἀντιλογικόν, 232B6)ということは、この第六の規定の箇所で言われる「それらの考えが……互いに相反する主張をなすものであることを示す」(ἐπιδεικνύουσιν αὐτὰς αὑταῖς . . . . ἐναντίας, 230B7～8)ということと、確実につながっている。ただしそれとともに、この箇所でエレアからの客人が、充分に警戒するならばこの論駁の技術の行使者とソフィストとの重大な違いが明らかになるだろう、と警告した点は、最終規定の268Cにおいては、ソフィストとは「知者を真似る者」である、という言葉で明記されることになる。

C　253D～E――ディアレクティケの一課題について。

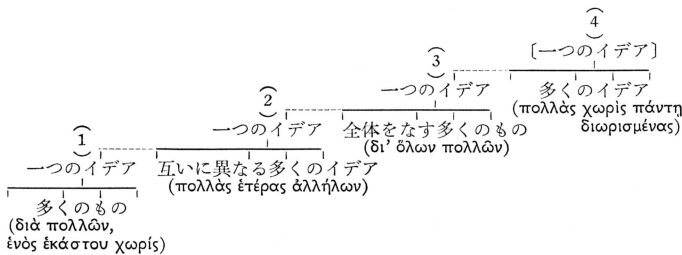
この箇所については、コーンフォード(pp. 266–268)が一部シュテンツェルとディエスにもとづいて提出した解釈(本文注5(一一九ページ)参照)が有力であったが、その後もなお、テイラー(p. 157, n.)のほか、

J. M. E. Moravcsik, Being and Meaning in the *Sophist*, *Acta Philosophica Fennica*, 14(1962), p. 40.

I. M. Crombie, *An Examination of Plato's Doctrines*, vol. II, p. 418.

H. Meinhardt, *Teilhabe bei Platon*, 1962(大部分がこの箇所の解明のための論述).

K. M. Sayer, *Plato's Analytic Method*, 1969, pp. 186 sqq. (基本的にコーンフォードを支持).

などによって、さまざまの解釈が行なわれた。

本文注5(一一九ページ)に挙げたブラック(pp. 125–131)の解釈は、コーンフォード、テイラー、モラブシクを批判しつつ提示されたものであるが、無用の繁雑に陥ることなく、最もすっきりと筋が通っているように思われる。その要点は次のとおりである。

(この表示は、ブラック自身によるものと完全に同じではなく、番号とギリシア語が補足的に加えられている。この(1)(2)(3)(4)の番号は、訳本文中に便宜上つけたものと対応するものとする)。

(4)　〔一つのイデア〕
多くのイデア
(πολλὰς χωρὶς πάντῃ διωρισμένας)

(3)　一つのイデア
全体をなす多くのもの
(δι' ὅλων πολλῶν)

(2)　一つのイデア
互いに異なる多くのイデア
(πολλὰς ἑτέρας ἀλλήλων)

(1)　一つのイデア
多くのもの
(διὰ πολλῶν, ἑνὸς ἑκάστου χωρίς)

例をあてはめて説明すると、(1)における〈人間〉という一つのイデアは、(2)における〈陸上歩行動物〉という一つのイデアに「包みこまれ」るところの、〈牛〉〈馬〉等々の「多くのイデア」のうちの一つであり、そしてその〈陸上歩行動物〉という一つのイデアは、(3)における〈動物〉という一つのイデアに「統一され」ると

ころの、〈水中動物〉〈翼をもつ動物〉等々の「全体をなす多くのもの」のうちの一つであり、さらにその〈動物〉というイデアは、(4)における或る一つのイデア(これはテクストに語られていない)の下にある〈植物〉〈鉱物〉等の「多くのイデア」のうちの一つである。記述の全体は、一貫して、「総合」の手続きによる「上昇」の過程に沿った記述であることになる。

(3)において言われている「全体をなすもの(をつらぬいて)」(δι' ὅλων)という表現は、少し前(253C3)にも出てきたものであるが、この解釈によれば、どちらの場合もまったく同じように、「全体をなすもの」とは複合体としてみられた〈類〉を意味する。例えば、〈陸上歩行動物〉〈水中動物〉……からなる(そしてそれらへと分割される)〈動物〉という全体としての〈類〉のことである(本文注2(一一九ページ)を参照)。コーンフォードの解釈の一つの大きな難点は、この「全体をなすもの」という、相前後して出てくるまったく同一の表現の言葉に、まったく異なった意味内容を与えなければならない点にある。

(1)において語られている「多くのもの」を、コーンフォードは(多くの)イデア(Forms)ととり、これを(多くの)個物(individuals)と注記したキャンベルの解釈を拒ける。しかし、ブラックの言うように、原文の言葉(πολλῶν)は、同格に置かれた「その一つ一つは離ればなれにある」(ἑνὸς ἑκάστου χωρίς)が明らかに示すごとく、中性であり、他方、この文章全体を通じてイデア(ἰδέα)はすべて女性形の単数または複数で語られていて、明確にそれとして区別されている。したがって、中性の形で語られるこの「多くのもの」「その一つ一つ」は、個々の多くの事物を指すと解するのが、少なくとも原文に則した解釈であろう。コーンフォードがこれをイデアととったのは、'The whole procedure deals with Forms only' (p. 267, n. 2) という理由からであるが、しかし、「総合」の手続きの最初の段階もしくは前段階には当然、多くの個物(例えば、ソクラテス、カリアス、プラトン等)を総合(総観)して一つのイデア(例えば〈人間〉)を立てるという手続きがなされてしかるべきである以上、ここで「多くの個物」が語られてならない理由は何もないのである。

この点は、一般に、このような多くの(感覚的)個物を総観して一なるイデアを立てるという、プラトンにおいて前期以来の関心の中心であった事柄が、『パイドロス』以後に現われる後期的なディアレクティケーにおける「総合」の手続きといかに関係するか、という問題に関わる。後者の手続きはイデアだけに関わり、感覚的個物の総観は視野に入らないというのがコーンフォードの立場であるが、必ずしも正当とは思えない。R. Hackforth, *Plato's Examination of Pleasure*, pp. 142-143 や、私の『プラトン著作集・パイドロス』(昭和三二年、岩波書店)一〇四―一〇六ページを参照されたい。

D 256B

この箇所のテクストをこのままで読むと、〈動〉が〈静〉を分取することによって静止しているものと呼ばれるという事態が、二人の受け答えによって、可能であると認められている

ことになる(この点を否定しようとするシュタルバウムの試みは成功していない)。しかし〈動〉と〈静〉が分有し合わないことは、252D, 254D, 255Aにおいて一貫して確認されてきたことである。そこで、対処の途としては、(一)このままでは意味をなさないとして、テクストの欠落を想定し、原文の補足を提案するか、そうでなければ、(二)テクストをこのまま読んで、何らかの解釈によって「〈動〉が〈静〉を分取または分有することによって静止していると呼ばれる」ということに、これまでとは違った意味を与えるかの、どちらかとなる。

(一)の線による提案のなかでは、コーンフォードのこの箇所の議論の筋道に対する解釈(ブロシャールに準拠)と、それにもとづく原文補足が最も明確である。彼の提案する原文補足を訳によって［ ］の中に示すと、次のとおりである(議論の筋道の解釈はこの補足のうちにおのずから示されよう)。

エレアからの客人　そして、もしかりに〈動〉そのものが何らかの仕方で〈静〉を分取するとしたら、それを静止しているものと呼ぶことも何ら奇妙なことではなかっただろう。［しかし実際には、〈動〉は〈静〉をけっして分取することがないのだ。

テアイテトス　ええ、たしかに。

エレアからの客人　けれどもそれは、〈同〉と〈異〉をたしかにともに分取するのであるから、〈動〉を同じものであり、かつ同じものでないと呼ぶことは、正しいのである。］

テアイテトス　ええ、それはまったく正しいことです。……

(二)の線による解釈としては、〈動〉が〈静〉を分有するところで言われていることの意味を、例えば、同一場所における円の斉一な回転運動や、あるいは、軸を中心とする球の周転のような、特別の場合のことと解する解釈の仕方(ディエス、クロンビイ等)は受け容れがたい。またアーペルトは、249C～Dで言われていたこと――〈あるもの〉は動くものと不動のものの両方であること――によってここの言葉を説明しようとするが、これも、この箇所の言葉がほかならぬ〈動〉そのもの(αὐτὴ κίνησις)についてのことである以上、認めがたい。

ブラック(彼はテクストの欠落の可能性については一言も触れさえしない)のこの点をめぐる考察は、この箇所を含む255E～256Dの全体に提出されている論点の注意ぶかい分析をふまえ、この対話篇における〈イデア〉〈類〉をいかに解釈するかという根本問題に関係するので、(二)の線をとる諸解釈のなかでは最も興味ぶかい。彼は、〈動〉や〈静〉といった〈イデア〉を、普遍概念としての機能と、範型(パラデイグマ)としての機能を合わせもつ性格のものと解し、しかしプラトンはこの両機能の区別を必ずしも明確に意識していないとみなす。〈イデア〉がパラデイグマであるかぎり、〈動〉が静止したり〈静〉が動いたりすることはありえないし、これまで252D, 254D, 255Aにおいてまさにそのことが表明されてきた(これらの箇所の解釈に苦しんでいる論者も多い)。しかしこのことは、もし問題が普通概念間のattributionだけのことであるならば、不可能とされる理由はないはずである。ブラックは、〈イデア〉のもつこの二つの機能の区別にプラトンが明確に気づいていないことが、この箇所のエレアの客人の言

葉において、「〈動〉が〈静〉を分有する」ことが或る意味では可能ではないかという、迷いながらのヒントとなって現われたものと解する('This inserted question seems intended to suggest that there must, in fact, be a sense in which Change participates in Rest.... but probably, as no explanation of this important point is offered, he was himself somewhat puzzled, pp. 153, cf. p. 115)。

しかし、〈動〉が静止し〈静〉が動くということは、252D9 において、まさに「最大の必然性によって不可能なこと」(ταῖς μεγίσταις ἀνάγκαις ἀδύνατον)という強い言葉で、きっぱり否定されていること、そしてそれに対応して現在の箇所も、「かりにもし……としたら、……なかったであろう」(εἴ πῃ μετελάμβανεν ..., οὐδὲν ἂν ἄτοπον ἦν κτλ.)という、完全に非現実的な想定(unreal condition)による表現がとられていること、を想えば、ブラックの解釈を受け容れることは結局困難である。

このようにして、(二)の線での解釈のもとに、他に新たな説得性のある論点が提出されないかぎり、私としては、(一)で見たようなテクストの大々的な欠落がなぜ生じたかの説明は困難ではあるけれども、しかしやはり何らかの欠損を想定せざるをえない。

E 258A～B

οὐκοῦν, ὡς ἔοικεν, ἡ τῆς θατέρου μορίου φύσεως καὶ τῆς τοῦ ὄντος πρὸς ἄλληλα ἀντικειμένων ἀντίθεσις οὐδὲν ἧττον .... αὐτοῦ τοῦ ὄντος οὐσία ἐστίν, κτλ.

「対置」(ἀντίθεσις)が何と何との対置であるかについて、訳者や注釈家たちの見方がいろいろ分かれている。対置される二つの項のうち、第一のもの(本文訳では「〈異〉の本性の一部分」μορίου τῆς θατέρου φύσεως＝1(b))を1とし、第二のもの(本文訳では「〈有〉の本性」τῆς τοῦ ὄντος〈φύσεως〉＝2(b))を2として、諸家の見方を示すと次のとおりである。(E. N. Lee, Plato on Negation and Not-being in the *Sophist*, *The Philosophical Review*, 81(1972), pp. 282-283 の調査にもとづき、若干の補足を加える。)

1 (a) 「〈異〉の(一)部分の本性」──Fowler, Deutschle, Müller, Wiehl
 (b) 「〈異〉の本性の一部分」──Cornford, Diès, Taylor, Campbell, Apelt, Robin, Frede, Bluck, Lee

2 (a) 「〈有〉の一部分」──Taylor, Apelt
 (b) 「〈有〉の本性」──Fowler, Deutschle, Müller, Stallbaum, Heindorf, Wiehl, Owen, Lee
 (c) 「〈有〉の本性の一部分」──Cornford, Diès, Campbell, Robin, Frede, Bluck

これらの見解のうち、1については、(b)が正しいことは明らかである。「〈異〉の本性」「〈美〉の本性」といった言い方は、〈異〉や〈美〉を丁寧に表現した(ほとんどこれと同義の)言い方として、この前後で(またプラトンのイデア論の一般的な用

語法として）一貫して用いられている。とくに、257D4の「〈異〉の本性の諸部分」(τὰ τῆς θατέρου φύσεως μόρια)という言葉は、(b)をほとんど決定的に支持する。これに反して、「……の部分の本性」という観念はない。

2については、(a)はそもそも原文(καὶ τῆς 〈sc. φύσεως〉 τοῦ ὄντος)と合わない。選択は、(b)と(c)の間にあり、両者の違いは、τῆς τοῦ ὄντος の前に μορίου という語を補って読むかどうかという点にある。これを補わなければならないという積極的な論拠を提出しているのはブラック(p. 164, n. 1)であるが、前記リーの論文は、257C7において「知識」(およびその諸部門)とのアナロジーが導入されて以降のテクストの入念詳細な分析をふまえて、ここに「部分」という語を補ってはならないことを主張し、その論旨は諸家のうち最も強力である。

コーンフォード(p. 292, n. 1)その他多くの人々は、やや無造作に、〈美〉〈正〉などの各イデアを〈有〉の(本性の)部分と考えている。しかしリーの言うように、ここでは「〈異〉の部分」の観念は「知識の諸部門」とのアナロジーによって細心に確立されているけれども、「〈有〉の部分」の意味は何も定められていないし、知識の諸部門とのアナロジーに沿うかぎり、定められえないと思われる。「部分」という用語は、この前後では入念に規制されている。ここの文章の中で次に語られている「〈有〉そのもの(αὐτοῦ τοῦ ὄντος)に少しも劣らず実在する」という言葉からみても、「対置」される二つのもののうちの一つは、「〈有〉の(本性の)部分」ではなく、やはり「〈有〉(の本性)」そのものと考えるべきであろう。

F　259E

議論が虚偽の言表についての考察に入ろうとするこの箇所で、

「なぜならわれわれにとって、言表とは、〈形相〉相互の組合せにもとづいて成立するものであるから」(διὰ γὰρ τὴν ἀλλήλων τῶν εἰδῶν συμπλοκὴν ὁ λόγος γέγονεν ἡμῖν)

と言われている。

たとえば「人が、学ぶ」(262C)という言表のなかには、〈人〉および〈学ぶ〉という二つの〈形相〉が含まれていて、これらの組合せにもとづいて「人が、学ぶ」という言表が成立する。このように、すべての言表は二つ以上の複数の〈形相〉が組合わされて成立するものである、というのが、右の言葉の自然な受け取り方であろう。

しかし、言表には、(感覚的)個物についての言表もある。たとえば、「これは馬である」とか、実例として挙げられている「テアイテトスは坐っている」(263A)という言表がそれである。そしてこの場合、〈馬〉や〈坐る〉は〈形相〉であるが、「これ」とか「テアイテトス」とかいった個物の〈形相〉はない。右の言葉は、この種の言表の場合には、どのように解されなければならないのであろうか。真なる言表と偽なる言表についての考察が、まさにこの種の個別命題的な言表を例として行なわれているだけに、この点をどう解釈するかは重要な問題となる。

コーンフォード(p. 300)は、右のエレアからの客人の言葉

を、言表は〈形相〉だけから成り立っているという意味ではなく、すべての言表は少なくとも一つの〈形相〉を含むという意味であると解した('It is not meant that Forms are the only elements in the meaning of all discourse. We can make statements about individual things. But it is true that every such statement must contain at least one Form.')。ロス(D. Ross, *Plato's Theory of Ideas*, p. 115)の解釈もほぼ同様である。

しかしこの解釈は、「〈形相〉相互の組合せにもとづいて」(διὰ ... τὴν ἀλλήλων τῶν εἰδῶν συμπλοκήν)という、はっきりとしたテクストの言葉と明らかに相容れない。言表が成立するために「組合わされる」べき〈形相〉は、けっして「少なくとも一つ」ではなく、二つ以上でなければならないのである。

R・ハクフォース(*Class. Quart.* 39(1945), pp. 56 sqq.)、R・ロビンソン(*Phil. Rev.* 59(1950), pp. 3 sqq.)、J・L・アクリル(1955——現在 Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaph.*, pp. 199 sqq. に収録)、R・S・ブラック(*Journal of Hellenic Studies* 77(1957), pp. 181 sqq.)などは、いずれもこのコーンフォード(およびロス)の解釈の致命的ともいえる難点の指摘の上に立って、別の解釈を試みている。

たとえばハクフォースは、少し先の262Dにおいて、言表とは名詞と動詞を「組合わせる」ことによって成立すると言われていることに着目して、この箇所(259E)で「〈形相〉相互の組合せ」と語られるときの〈形相〉というのも、イデアとしての〈形相〉のことではなく、名詞や動詞といったいわゆる'parts of speech'のことであろうと解釈する。しかしこれは容認できない。「それぞれのものを何もかも、すべてのものから切り離してしまうということは、およそあらゆる言表(言論)の最も完全な抹殺にほかならないのだ。なぜならわれわれにとって、言表とは……」というこの箇所全体の言葉は、明らかに、すでに251E sqq. において論じられた〈類〉〈形相〉〈イデア〉の結合関係との関連で語られている以上(260Aに対する注3(一四一ページ)を参照)、ここで言われる〈形相〉だけをハクフォースのようにまったく別のものであると解することは許されないからである。

アクリルの解釈。——「テアイテトスは坐っている」という言表がほんとうに informative な言表として成立するのは、この言表がたとえば「テアイテトスは坐っていない」「テアイテトスは立っている」といったことを排除しているからこそである。ということはつまり、二つの概念(「坐る」と「坐らない」、あるいは「坐る」と「立つ」)の間に非両立性(incompatibility)が存在しているということにほかならない。哲学者は、こうした諸概念の間の関係を研究し、そこから言語の使用を導く諸規則を引き出す。そのような incompatibilities の規則が諸概念(concepts)の間に存在するということが言表成立の必要条件である、ということを、この箇所でエレアの客人は言っているのである('In studying the relations among concepts a philosopher elicits the rules governing the use of language; that there are some such relations,

some such rules, is a necessary condition of there being a language at all: διὰ τὴν ἀλλήλων τῶν εἰδῶν συμπλοκὴν ὁ λόγος γέγονεν ἡμῖν.' p. 205)。

このアクリルの解釈によると、「〈形相〉相互の組合せ」というのは、或る言表のなかに実際に含まれる〈形相〉の間の関係ではなく、実際に含まれているそれ(例えば〈坐る〉)と別の可能な述語に対応する〈形相〉(例えば〈立つ〉)との間の関係のことを言っていることになる。つまり、われわれが或る言表のなかで何と何とを組合わせるかは問題でなく、言表成立の前提条件となるイデア(アクリルの言うconcepts)界の関係構造のことが言われていることになる。

しかし、「人が、学ぶ」という「最も短い最初の言表」(262C)を例として、いかに名詞と動詞の「組合せ」によってそれが成立するかを説明して行く議論の内容は、やはり、この箇所の「〈形相〉相互の組合せ」もまた、そうした名詞や動詞に対応する二つ以上の〈形相〉を、われわれが或る言表の内で組合わせることを指して言われていることを告げるであろう。それにまた、アクリルの言う概念の間の非両立性(concept-incompatibilities)ということが、ここの「〈形相〉相互の組合せ(συμπλοκή)」という言葉で示されているとするのは——ἀσυμπλοκήν(というギリシア語の用例はないが)とでも言われているのならばともかく——、少しおかしいといわなければならぬ。

このようにして、「〈形相〉相互の組合せによって成立する」ということが、またそもそも、〈類〉〈形相〉〈イデア〉の相互関係について先に論じられた事柄全般が、どのような意味で「テアイテトスは坐っている」というような個物についての言表にあてはまるかは、むずかしい問題である。しかし、プラトンがここの虚偽の言表について論じている箇所において、そうした〈形相〉間の関係についての考察の結果を、まったく何の断わりもなしに、何らの特別の議論もなしに、いわゆる「個物」についての言表に適用しているということ自体、意味のあることではないだろうか。私としては、『ソピステス』が指し示している基本思想(「解説」三の3を参照)から考えて、いわゆる「個物」そのものが〈形相〉の集合または結合にもとづいて成立するものと考えられているという点に、目下の問題を解決する方向を求めたい。これはハムレン(D. W. Hamlyn, The Communion of Forms and the Development of Plato's Logic, *The Philosophical Quarterly*, 5(1955), pp. 290 sqq.)の提出している解釈('My general conclusion.... is that Plato considered that whether we make statements like "Man is good" or statements like "Socrates is good", the doctrine of the communion of forms is presupposed, and that this is so in the first case because the proper-name "Socrates" is only an abbreviation for, or a desguised version of, a collection of names of forms.', p. 295)の線と——この点に関するかぎり——同じであり、またブラックのそれ(False, Statement in the *Sophist*, *Journal of Hellenic Studies*, 77(1957), p. 182)とも部分的に一致する見方である。

ポリティコス（政治家）

——王者の統治について——

水野有庸訳

登場人物

ソクラテス
テオドロス
エレアからの客人
若いソクラテス

一

257

ソクラテス　テオドロス、あなたにはまことに深い感謝の気持を私は抱かなければなりません。あなたのおかげで、テアイテトスとはもちろん、この異国のかたとまでも、こうして知りあいになることができたのですから。

テオドロス　いや、ソクラテス、その感謝のお気持を、やがてその三倍も大きなものにして、私に捧げていただけることでしょう。ここにおみえのかたがたは、政治家とそれから哲学者との完全な姿を、描きあげてお目にかけることになるでしょうから。

ソクラテス　ほほう、すると、テオドロス、いま拝聴したのが、数論における計算や幾何学における図形のことにかけての最高権威者のお言葉なのだ、とわれわれは申すべきなのでしょうか。

B

テオドロス　それは、ソクラテス、どういう意味ですか。

ソクラテス　問題の三種類の人物(1)のそれぞれが等しい数値に相当する、とあなたが見ておられることを指して私は言ったのですが、ほんとうは、これらの人物はその真価が相互のあいだでひどく隔っているので、あなたがた数学者が専門技術的に活用なさっている比例関係によっては、その差異は表現されえないはずなのです。(2)

テオドロス　私どもの地方での神アンモン(3)に誓って申しますが、ソクラテス、それはりっぱで適切なご指摘です。たしかに、計算の面で私がつい犯した誤謬を、あなたはその同じ面でのじつに正確な記憶力を働かせながら、いま論駁なさいました。そこでですが、あなたのほうにたいしては、いま遣込められたことの返報をいずれその

うちにさせていただくつもりです。——それから、こちらの異国のかたのほうですが、あなたは、ぜひともこれまでどおり、こころよく私どもにご好意をお示しくださいますよう。そして、さきほどの論究(4)にとうぜん続くべきお仕事として、政治家たるにふさわしい人物のほうであれ、哲学者のほうであれ、あなたが先に選びたいとお

C 考えになるほうを選んで、それについての詳論をなさってみてください。

エレアからの客人　その仕事は、テオドロス、実行しなければなりません。私どもは、一連の考察作業にこうしてひとたび手を染めてしまった以上、仕事が完成をみるにいたるまでは手を引くべきではありません。さて、それよりも、いまの私としては、ここにいるテアイテトスをどのように扱うのが適当でしょうか。

テオドロス　どんなことを念頭において、そうおっしゃるのですか。

エレアからの客人　テアイテトスをしばらく休息させてやろうか、とも思うのです。これの学友のここに来ているソクラテスを代役に使うことにしまして。それとも、なにかよいご忠告をしてくださいますか。

テオドロス　お言葉どおりの代役をお使いください。ともかく二人は若いのですから、ときどき休息をとるよ

1　ソフィストと、政治家と、哲学者とのこと。

2　ソフィスト、政治家、哲学者の三者がまったく同値である、とテオドロスが仮定したため、この三者全部の定義がやがて完了すれば、それにたいするソクラテスの感謝の大きさも、先行の対話篇『ソピステス』におけるソフィストだけの定義完了によるソクラテスの感謝の大きさのちょうど三倍になる、とテオドロスが単純に計算している点を、ソクラテスは論難したわけである。

3　テオドロスの出身地である北アフリカのキュレネ地方で尊崇されていたエジプト伝来の神。ギリシアでのゼウスに相当する。

4　本篇の対話とたぶん同じ日の、この直前のなん時間かにわたっておこなわれた『ソピステス』での論究を指す。

うにすれば、どんな難業にもらくに耐えることでしょうし。

D **ソクラテス** 異国のかた、そればかりではありません。この二人は両者とも、どういうわけか、私との親近関係のようなものを持っているように思えるのです。つまり、まず一方の青年は、みなさんの説によれば、顔だちのつくりが見た目には私とともかく似ているそうですし、他方の青年については、その名前が私のと同じなのですから、その呼び名だけを考えても、ある意味で私と同族の関係にある男だ、と言えるようではありませんか。

258 さあそこで、親近関係にある人たちをそれと知るためにならば、私どもは、その人たちを相手にしていろいろな論究をおこなうことに熱意を抱く必要がおおいにあるはずなのです。そこでですが、テアイテトスとは、まず昨日、私がこれを親しく論究の相手とすることによって交わりを深めもしましたし(1)、さらに、ついさきほどのことでしたが、この者が返答するところをも、私はすでにあのとおり聞いたのでした(2)。ところがソクラテスと私とのあいだには、こういう二種類の経験のどちらもまだまったくないのです。それでもやはり、ソクラテスをも吟味する必要はあるのです。ですから、私の問いに答える役をいずれそのうちにこの青年に課することにしましょう。けれども、このたびはあなたを相手にして答えさせるのがよいでしょう。

エレアからの客人 仰せのとおりにいたしましょう。――これ、ソクラテスくん、きみは聞いていただろうな、ソクラテスさんが話されるのを。

若いソクラテス はい。

エレアからの客人 では、そのご意向に同意するだろうな。

若いソクラテス ええ、しますとも。

B

エレアからの客人　では、きみのがわに支障となる点はないようだ。まして私のがわに、ことを始めるにのぞんでの障害など、あってはならぬはずだ。さあそこでだが、われわれはソフィストについての考察をすませている以上、そのつぎには、政治家について徹底的に探究してみる必要が私ときみとの両名にある、と私は考えるのだ。そこでひとつ答えてくれたまえ。われわれとしては政治家をもまた「知識」を持っている人々の一団のうちに含まれる[3]、と見るべきではないだろうか。それともどうだろうか。

若いソクラテス　そのとおりに見るべきです。

二

エレアからの客人　すると、さきほどソフィストを考察したときと同じように、いろいろな知識のあいだに区別をたてなければならぬだろう？

若いソクラテス　ええ、たぶんそうすべきでしょう。

エレアからの客人　けれども、ソクラテス、分割[4]のしかたはさきのばあいと同じではない、と私は思うのだが。

若いソクラテス　とおっしゃいますと？

1　『テアイテトス』において、ソクラテスの対話の相手はテアイテトスであったことを指している。

2　『ソピステス』における対話が、エレアからの客人とテアイテトスとのあいだでおこなわれたのを、ソクラテスがその対話の現場で聞いていたからである。

3　この出発点にたえず注意しておくことが、本篇を理解するためにはもっとも大切である。以下の 292B sqq. を参照。

4　以下の分割については、補注A(三八五ページ)参照。

(258)
C

エレアからの客人　ちがった分けかたになるのだ。

若いソクラテス　ええ、どうもそうなるようです。

エレアからの客人　うん、それでは、当の政治家を探索するための道は、どの場所で発見できるだろうか。ともかく、そういう探索路を発見すべきであることに間違いはない。だからわれわれは、他のすべての道からこの探索路だけを別箇に切り離して、これが一貫性を持った特有な性格のものであることを示す印形のようなものを、そのうえにはっきりと捺（お）しつけておくことにしなければならない。また、これ以外のあらゆる横道（よこみち）にも、これらがまたべつの一まとまりの種類であることを示す目印をつけて、種々の知識の全体がこの二種類のものになるのだということを、われわれの精神に理解させるようにしなければならない(1)。

若いソクラテス　そういう内容の仕事なら、これはもう先生がなさるべきものだと思います。私の出る幕などではありません。

D

エレアからの客人　けれどもやはり、ソクラテス、明瞭なことをわれわれが言える段階がくるばあいには、この仕事にたいするきみの協力も、とうぜんそこに含まれていることになる。

若いソクラテス　それはありがたいお言葉です。

エレアからの客人　さあでは、数論の技術をはじめとして、これと同類の専門技術がほかにもいろいろあることはきみも知っているとおりであるが、これらは、生活行動にはかかわりあいを持たず、ただ純然たる知識だけを提供してくれるのではないだろうか。

若いソクラテス　それはそのとおりです。

E

エレアからの客人 ところがこんどは、大工仕事などのような手仕事の部門の全部に関係する種々の専門技術について言えば、これらが所有している知識は、いわば生来的に生活行動そのものの一部となってそのなかに溶けこんでいる。そして、無形の状態から生活行動が作りだそうとしている製品を、そういう技術が手を貸して完成してやるわけなのだ。

若いソクラテス たしかにそのとおりです。

エレアからの客人 よし。それでは種々の知識全部を、いま見たとおりに分割したまえ。つまり、その一方を行動に密着した知識、他方をたんなる純知的知識(2)、と名づけることにしたまえ。

若いソクラテス 先生のそのご提案に賛成です。ですから、われわれとしては、知識の全体は一まとまりのものであるが、これは二種類から成っているのだ、と見ることにしましょう。

エレアからの客人 うん、では政治家と王と主人と、それからさらに家長とのことであるが、これらを、こうしてその呼び名はいろいろ異っているけれども、実質上はまとまった一団をなすものだとわれわれは見なすべきであろうか。それとも、これら各種の人々が使う専門技術はいま私が口にした名称の数だけあるのだ、と主張することにしようか。いやむしろ、私がつぎのようなかたちで設問を進めてみるから、きみは私の進むほうへついてきたまえ。

1 本篇の全体にわたって、政治家というものの真の姿の探究は、この目標物を狩猟の獲物のようにして追跡するというかたちでおこなわれている。本篇の論旨をたどるためには、この姿勢を忘れてはならない。たとえば、以下の264Aや285Dなどを参照。

2 詳しくは、「知ることだけを目的とする知識」

若いソクラテス　どこへですか。

エレアからの客人　いまから私が話すような問題へだ。つまり、たんに私人の立場にある者が、公認の医者としての座にあってその活動をおこなっている人々のうちのだれかにむかって、助言を与える能力を持っているばあい、この者は、助言を受けるほうの者に当てられている名称と同じ専門技術の名称で呼ばれるのがとうぜんではないだろうか。

若いソクラテス　はい、そうです。

エレアからの客人　さらにまた、王として一国に君臨している人物にむかって、私人の身でありながら献策することに長じている者はすべて、支配者自身が手に入れているべきであった知識を持っている、とわれわれは主張すべきではないだろうか。

若いソクラテス　そう主張すべきです。

B

エレアからの客人　しかるに、正真正銘の王にそなわるはずの知識こそが、「王者の持つべき知識」というものであるはずだ。そうだろう？

若いソクラテス　はい、そうです。

エレアからの客人　そして、まさにこの知識を手に入れている者をなら、この者がたまたま支配の座についていようと、たんなる私人になっていようと、もっとも根本的なこの専門技術をともかく基準として考えるかぎり、われわれは「王者にふさわしい人」と呼ぶのが正当ではないだろうか。

若いソクラテス　その呼びかたがたしかに適切です。

エレアからの客人　もうひとつ言っておくと、家長と主人とは同一のものだ。

若いソクラテス　ええ、もちろんです。

エレアからの客人　さらにまた、堂々たる大家族と、それからこんどは小規模の国家とを見くらべてみるばあいに、このそれぞれを治める支配術のうえでの相違がなにかあるだろうか。

若いソクラテス　なにもありません。

C **エレアからの客人**　さあこれで、以上の考究の結果として、いま挙げられたものの全部を取り扱う知識が単一なひとまとまりの知識であることが明らかになったのだ。そしてこの知識をだれかが「王者の持つべき知識」と呼ぼうと、「政治家の持つべき知識」と呼ぼうと、「家長の持つべき知識」と呼ぼうと、この人にむかってわれわれはいっさい異議を唱えないことにしようではないか。

若いソクラテス　はい、仰せのとおりにいたしましょう。

三

エレアからの客人　さらにまた、もうひとつ明らかなことがある。つまり、王者というものはすべて、その支配の座を維持するためには、両手をはじめとする身体の全体を使うだけでは、頭脳のす早い理解力と強靭な精神力とを使うばあいにくらべると、ごく些細なことをしかなしえないのだ。

若いソクラテス　明らかにそうです。

D **エレアからの客人**　すると、王者というものは、手仕事の知識とか、あるいは一般的に言って「行動に密着し

た知識」とかとよりも、むしろ「純知的な知識」のほうと近い関係にある、とわれわれは主張しておくほうがよいのではないだろうか。きみの意見は?

若いソクラテス もちろんそう思います。

エレアからの客人 してみると、政治家の持つべき知識と政治家、それから、王者の持つべき知識と王者にふさわしい人、——これらの全部を一まとまりの一団とみて、この両知識と両人物とのそれぞれをわれわれは同一視すべきなのだ。そうだろう?

若いソクラテス 明らかにそうです。

エレアからの客人 さあそうすると、以上の考察のつぎに、純知的知識というものをその種類に分けていくことにするなら、われわれの論究の進めかたはしかるべき順序にかなうことになるのではないだろうか。

若いソクラテス ええ、たしかにそのとおりです。

エレアからの客人 さあそこで注意してくれたまえ。この純知的知識というものの内部に裂け目の線のようなものがほんらい走っているのが、もしや見えてくるかどうかに。

若いソクラテス どのようなありさまの線なのかを教えてください。

E

エレアからの客人 いまから話すようなありさまの線だ。つまりまず、計算の技術とでも称すべきものを、われわれはつねづねから知っているはずだ。

若いソクラテス はい、知っています。

エレアからの客人 それは、どう見ても、純知的な専門技術のうちのひとつだと私は思うのだ。

若いソクラテス　ええ、もちろんそのとおりです。

エレアからの客人　さらにその計算術について言うと、いろいろな数のあいだの相違を認識したうえでその認識の内容について判定をくだすということ、これ以外に計算術にはまだなすべき仕事が残っているなどと、われわれはまさか考えるべきではないようだが、どうだろう?

若いソクラテス　もちろんそう考えるべきではありません。

エレアからの客人　ところがじつは、さらに建築家というものもすべて、この当人自身は自分で手をくだして働く職人ではなくて、職人たちの支配者なのだ。

若いソクラテス　はい、そうです。

エレアからの客人　というのも、たぶん、建築家が提供するのは純粋な知識であって、手仕事ではないからだろう。

若いソクラテス　そのとおりです。

エレアからの客人　だから、建築家は純知的な知識のうちのひとつを所持していると見なされるのが適切であろう。

260

若いソクラテス　ええ、たしかにそのとおりです。

エレアからの客人　ところが、建築家というものは、判定をくだしさえすれば目的を達成して放免の扱いを受ける、ということになるべきではないところが、計算家のばあいと異なる点であるように私は思うのだ。つまり建築家は、職人たちのめいめいに適切な指示を与えながら、指示された仕事が完成するのを見届ける必要がある。

若いソクラテス　正当なご指摘です。

エレアからの客人　さあそうすると、建築家が所持しているような種類の知識全部と、計算術の仲間であるすべての知識とは、両方とも純知的知識ではあるが、この二つの種類は[1]、その一方が判定のみをくだし他方が命令をくだすのだという点で、相互に異っているのではないか。

B

若いソクラテス　その両方はそういうものだと私は思います。

エレアからの客人　では、純知的知識の全体を二つに分割して、その一方を命令に関係する部分と呼び[2]、他方を判定のみに関係する部分と呼ぶことにすれば、われわれは適切な分割をおこなったのだと主張できるのではないだろうか。

若いソクラテス　私の感じだけで考えれば、どうもそのようです。

エレアからの客人　きみは遠慮して答えているようだが、共同でなにごとかをおこなっている者たちにとっては、同じ意見に達することがなんといっても喜ばしいのだ。

若いソクラテス　ええ、もちろんそのとおりです。

エレアからの客人　したがって、われわれ自身が共同の論究によりこうして同じ意見に達したのであるかぎり、この意見にたいする他人の思わくなどは度外視すべきなのだ。

若いソクラテス　ええ、たしかに仰せのとおりにすべきです。

四

C

エレアからの客人　さあそれでは続けよう。いま見た二つの専門技術のうちのどちらを「王者にふさわしい人」は持っている、とわれわれはきめるべきであろうか。この人は一種の見物人と同様に、判定のみの技術を持っている、とすべきであろうか。それともむしろ、この人は主人としての地位にある以上は、これを命令の技術の所有者であると見ることにしようか。

若いソクラテス　それは、どうしても後者のほうだとすべきです。

エレアからの客人　それでは、命令の技術というものがどこかで割れているかどうかを、あらためて観察しなければならぬようだ。そこでだが、私の見るところでは、つぎのように言えるようだ。つまり、小売商人が使う

D

専門技術が自作物直売業者の専門技術から区別されるのと同様なぐあいに、王者にふさわしい人の種族は伝令使たちの種族とはどうも異っているようなのだ。

若いソクラテス　そこを、もうすこし説明してください。

エレアからの客人　小売商人は、他人の手で作られた商品が販売されるのをまず先に受けとって、それの二回目の販売をあらためてやっていると言えるようだ。

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　それから伝令使の部類もまた、他人の思考内容が命令として与えられるのを受けとり、こんどは自分が二回目の伝達をする者となって、べつの人々にそれをあらためて命令として与えているのだ。

1　シュタルバウムやキャンベルに従って、γένεε と読む。

2　価値にかんする純粋知識は命令形でも表現されうるから。

若いソクラテス　このうえなく真実なことをご指摘になりました。

エレアからの客人　ではどうだろうか。王者の持つべき知識、これを、通訳の技術や、船長からの漕ぎ手への命令の伝達技術(1)や、神意をたずねる技術や、伝令使の技術や、これらと同類のその他多数の専門技術、つまり、命令という要素をともかく含んでいるすべての技術と同種のものとして、それらのあいだへ混ぜこんでしまうことにしようか。それとも、たったいま試みた比較(2)による説明法を踏襲して、ここで問題の中心になっているものの名称をも類推によって作りだすことにするほうが、きみ、望ましいだろうか。というのも、命令の最高決定者たちの種族は、現状では、どうもその名称を欠いているように思えるからだ。それから、いま挙げたもろもろのものを分割するにあたって、われわれはつぎのようにしてはどうだろうか。つまり、まず王者たちの種族のほうは、これを命令の最高決定の技術を持つものと見なす。そして他方、これ以外の全部は無視することにする。そのさい、この無視されるべき種々のものを一括するような名称をきめる仕事は、だれかわれわれ以外の人に譲ることにする。なぜなら、われわれが追跡によって見つけだそうとしているものは、はじめから支配者なのであって、その反対のものでは断じてないからだ。

E

261

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

五

エレアからの客人　さあそうすると、自分の意志だけで命令をくだすものなのか、他の人の命令を伝えるものなのか、そのどちらであるのかを区別の基準としたことによって、われわれが問題とすべきものが種々の無関係

なものからいまや適正に遠ざけられてしまった以上、こんどは、前者のほうだけをあらためて分割する必要があるのではないか。もちろんこれは、われわれのこの希望をかなえてくれるような切れ目がそのものの内部に見つかるであろう、と仮定しての話ではあるけれども。

若いソクラテス ええ、たしかにそのとおりです。

エレアからの客人 ところが、さいわい、その切れ目が見つかるように思えるのだ。ともかく、きみ、私にぴったりとついてきながら、協力して切り分けてくれたまえ。

若いソクラテス どのように切り分けるのですか。

エレアからの客人 命令という手段を用いていると考えられることごとくの支配者たちは、なにか或る結果を

B

作りだすために指示しているのだということが、しかるべく調べをつけていけば、われわれにわかってくるはずではないだろうか。

若いソクラテス ええ、そうなるにきまっています。

エレアからの客人 ところがここで、そのうえに結果を作りだされるすべてのものを真二つに分けることは、べつに困難なことではない。

若いソクラテス どのように分けるのですか。

---

1 古代ギリシアでは、三段櫂船の甲板長はその船長の命令を受けたうえで、漕ぎ手たちにたいして、いつ船漕ぎをおこなうべきかについての指示を伝えていたと言われる。

2 王者と自作物直売業者との比較(260D)を指す。

エレアからの客人　まず、それらのもの全部のうちの一方は無生物であり、他方は生物であると言えよう。

若いソクラテス　はい、そうです。

エレアからの客人　うん、そこで、いま言ったこの両者の区別を手掛りにして、純知的知識という一団のもののうちの命令に関係するほうの部分を、切断の意図を持つわれわれとしては切断してみることにしよう。

若いソクラテス　どのような切りかたをするのですか。

エレアからの客人　いま言ったとおりの知識を切ったときに得られる片方は無生物のうえに、他方は生物のうえに、それぞれ結果を作りだすことにたずさわるものになる、と言えるように割り当てをすればよいのだ。こうやってこそはじめて、当のものの全体が真二つに分割されることになるだろう。

C

若いソクラテス　ええ、たしかにそのとおりです。

エレアからの客人　さてそれでは、これら二つのうちの片方は、そっとしておくことにしよう。そして、他方を手に取ってみることにしよう。そして、これを手にとったうえで、その全体を二つのものになるように分割することにしよう。

若いソクラテス　そのまえに、二者のうちのどちらを手にとるべきかを、おっしゃってくださいますか。

エレアからの客人　それはもうぜったいに、動物を相手としての命令、これに関係する知識のほうだろう。なぜならどう見ても、王者にふさわしい人の知識がはたすべき仕事は、たとえば建築術のばあいとはちがって、無生物にたいして采配を振うことなどであるはずはないのだから。それはもっと高尚なものなのだ。動物のあいだで動物だけを相手にして、つねにその力を発揮しているのだから。

D

若いソクラテス　正当なご指摘です。

エレアからの客人　ところで、動物を誕生させて飼育する仕事にもつぎの二種類があることが、だれにもわかることだろう。つまり、その一方は一頭だけを飼育する仕事であり、他方は群れをなした生きものを集団として世話する仕事なのだ(1)。

若いソクラテス　正当なご指摘です。

エレアからの客人　ところがこんどは政治家に目をむけると、これが牛追いとか馬丁などとはちがって、箇々の動物の世話人ではないことがわかるだろう。政治家は、むしろ馬の群れの飼育番や牛の群れの飼育番に似ているのだ。

若いソクラテス　こうしてご説明をうかがうと、そのとおりのようです。

E

エレアからの客人　だから、動物飼育法のうちには、多数の動物を集団として飼育するやりかたがあるわけだが、これをわれわれは動物群飼育と名づけようか。それとも集団飼育術とでも名づけようか。

若いソクラテス　どちらでも、これから論議をくりひろげていくうちにおのずから得られるほうの名称を選べばよいでしょう。

1　本篇では、この箇所において、王者と牧者との混同が始まるのであるが、本篇の対話が進むにつれて、この混同が由々しい帰結を露呈していき、エレアからの客人に悪戦苦闘を強いることになる。われわれは、この点に注意して、対話の進行を見守らなければならない。本篇の275Dなどを参照。

六

エレアからの客人　これはまた美事な答えだ、ソクラテス。たしかに、たんなる名称をめぐる問題にはむきになるな、という教えをいまのきみのようによく守っていくなら、きみは、将来老年に達したら知恵がますます豊富な者になるだろう。――さて、いまから私は、きみが促してくれているとおりに、われわれの課題と取り組まなければならない。そこでだが、きみは思いつくだろうか？　動物群飼育術には二通りがあることを示すことに

262

よって、いまの段階では二倍の広さの区域で探索されているものが、やがてその半分の広さの区域で探索されることになるようにするための方法に。

若いソクラテス　ひとつ張りきって考えてみましょう。そうですねえ、私としては、その相互に異るものの一方は人間の飼育であり、他方は畜類の飼育だ、と思います。

エレアからの客人　これはまあ、まったく張りきって答えてくれたけれども、きみがいま述べたその分割は、じつはまったく勇み足の分割なのだ。けれど言っておくが、こんごはこういう失策を、われわれはできるかぎり避けるようにしようではないか。

若いソクラテス　どんな種類の失策をですか。

エレアからの客人　小さな一つだけの構成要素を、それが大きな多数のものに対置されるにいたるようなかた

B

ちで切り離すというようなことは、やるべきでないのだ。また、切るときには、ものの真の種類(エイドス)(1)を無視してはならぬのだ。つまり、切って得られる部分(メロス)が、同時にものの真の種類をなしてくるようにすべ

きなのだ。もちろん、切りかたさえ正しければ、探索が目ざしているものを残余のものから即座に分離するのが、なによりも素晴らしいにはちがいない。だからこそきみも、ほんのいまのことだが、これで当の分割をすることができたと思いこんで論議を急いだわけだ。つまりきみは、われわれの論議がいまや人間を挙げる段階にきた、とにらんだのだ。けれども、じつはきみ、よく聞いてくれたまえ。微細に過ぎるものをいきなり取りだすのは安全なみちではないのだ。むしろ、手中のものをその真中で半分に切りながら進むほうが安全なのだ。そして、こうするほうが、ものの真の種類というものは見つかりやすいのかもしれない。こうしていま私が示した点が、どのような探究をするさいにもとりわけ大切なのだ。

C

若いソクラテス　そのお言葉の意味を、先生、もうすこし説明してください。

エレアからの客人　私は、ソクラテス、きみの素敵な才能に好感を抱いているのだから、もっと明確に説明するように努力しなければなるまい。もちろん、今日の論題の範囲では、いま私が指摘した点を完全無欠に明示することは不可能だけれども、きみに明確に理解してもらいたいと私は思うので、説明をたとえすこしだけでも先へ進めてみることを企てる必要がある。

若いソクラテス　では、私どもは分割作業をおこなうにあたって、さきほど、いったいどのようなことをしたのが正しくなかったのでしょうか。この点を指摘なさってください。

エレアからの客人　いまから話してみるようなたぐいのことをしたのがよくないのだ。つまり、たとえば、人

1　原語「エイドス」はたんに「種類」と訳されることも多い。

類を真二つに分割することを企てるばあい、ここらあたりの住民の大多数が振り分けているような、あんな分割 D 法をやると誤りを犯すのだ。この人たちは、一方では、ギリシア民族を一まとまりの一団と見て、ほかのすべての人間から別個に切り離しておき、他方では、それ以外のいろいろな民族全部が、その数も無限で、その相互のあいだに婚姻関係も持たず、言語も相互に異にしているのに、これらにたいしてただ一つの呼称を適用して、これを夷狄と総称しているのだが、そのばあい、呼称がこのとおりただ一つだという理由で、その呼称を受けるもの自身が種族としても単一な一まとまりのものであるにちがいないと信じているのだ。

さらに、もうひとつべつの例を挙げると、数というものを二つの真の種類に分割したつもりでいても、じつはたんに、つぎのようなことをしているにすぎないばあいがある。つまり、一万という数をすべての数のなかから E 切りとり、これを一まとまりの真の種類と見て、離れたところへ纏(まと)めあげておき、それから残りの数の全体にただ一つの名称をつけることによって、この呼称のゆえに、この後者もやはりまた、前者とは別箇の異った一まとまりの種類をなすのだと信じこんでしまっているようなこともある。

以上のような分けかたよりももっと優れた、そしてものの真の種類にもっとよく適合した真の分割、そういう分割をおこないうるためには、まず数のばあいであれば、これを偶数と奇数とに切ることにすればよいであろうし、それにたいしてこんどは人間の種族のばあいであれば、これを男性と女性とに切ることにすればよいであろう。そして、リュディア人とかプリュギア人とか(1)、その他いろいろな名前の人々を、当の人たち以外の諸民族と同列に並ぶべき単位として全体から切り離してもよいのは、その全体を二つに切り分けてみたとき、その両方が「切断によってできる部分」になっているのみならず、一個の「真の種族」にもなっている、という事態、まさ

263 にこういう事態がどうしても発見されえないような、そういうばあいにかぎられるのだ。(2)

七

若いソクラテス このうえなく正当なご指摘です。それにしても、先生、いまおっしゃったその点なのですが、「真の種族」というものと、「切断によってできる部分」というものとを、どうやればもっと明瞭に認識できるのでしょうか。つまり、両者が同一物ではなくて相互に異ったものだということが。

エレアからの客人 これはたいした度胸だねえ、ソクラテス。とんでもない注文をつけるものだ。われわれとしては、課せられた論題から必要以上に遠く離れて、長い道をここまで迷い歩いてきてしまったというのに、きみは、もっと先まで迷って行け、とわれわれに命じているとは! しかし、いまはとにかく、こうするのが適切な策であるようだから、あらためてもとのところへ引き返そうではないか。もちろん、いまの問題点は、こんご B 暇なときを選んで、狩猟者のようなやりかたで追究することにする。それにしても、きみにぜひとも気をつけて

1 リュディア人もプリュギア人も、小アジア(現代のトルコ)の西部の、一部をエーゲ海に面する内陸部寄りの地域に住む。プリュギア人の居住地のほうがリュディア人のそれよりも北方にある。両者とも、当時のギリシア人から格別に蔑視されていた。

2 ここで述べられている指示は、プラトンの後期著作においてのイデア論の重要な一側面としての、いわゆる「二分割法(dikhotomia)」という考察方法についての真に重要な示唆を与えるものではあるけれども、じつはしかし、この前後の箇所は本篇のたんなる序説部の一端にすぎないのであって、まだ、いくつもの論究の峠を超えていかなければ、『ポリティコス』における真のイデアないしイデア的理想体の意味を把握することは不可能なのである。

もらいたいことが、さらにまだもうひとつある。つまり、当の問題点についての明瞭な規定を私からすでに聞きおえたなどとは、きみに思ってもらいたくないのだ。

若いソクラテス　どのようなことについての規定をですか。

エレアからの客人　ものの「真の種類」と「切断によってできる部分」とは相互に異っている、ということについてなのだ。

若いソクラテス　とおっしゃいますと？

エレアからの客人　まず、真の種類のほうはといえば、それがなにものかの「真の種類」になっているばあいには、これは、およそいかなるものの真の種類であると呼ばれようとも、その当のものの「切断によってできる部分」にもなることが必然なのだ。ところがこんどは、「切断によってできる部分」のほうは、これが「真の種類」にもなるという**必然**はまったくないのだ。さあ、当の問題点にかんする私の考えを、いまの説明のほうがさきの説明よりもむしろうまく表わしているということを、ソクラテス、きみはつねに忘れないようにしたまえ。

若いソクラテス　仰せのとおりにいたしましょう。

c

エレアからの客人　さあそれでは、つぎの点についてのきみの考えを聞かせてくれたまえ。

若いソクラテス　どのような点についてですか。

エレアからの客人　話がどこから脱線してわれわれがいまのようなことを論じるにいたったのか、という点についてだ。私の記憶では、たしか、動物群飼育という仕事をどのように分割すべきであるのか、という私の質問にたいして、きみがまったく張りきって答えをしてくれて、「動物の種類は二つであり、その一方が人類で、こ

れと異る他方のは人類以外の畜類全部から成る一まとまりの一団です」と述べてくれたところから、脱線が始まったようだが。

若いソクラテス　それに間違いありません。

エレアからの客人　さらに、この私があのとき見たところでは、きみは、一つの部分を切り離すにあたって自分が残すことにしたものが残余の全動物から成る一まとまりの種族だ、と考えていたようだ。そのさいきみは、この全動物を畜類と呼ぶことによってこれに同一の名称を当てることができたので、そう考えたわけだ。

D

若いソクラテス　ええ、それもまた、おっしゃるとおりでした。

エレアからの客人　ところがここで、たいへんな勇み足をやったきみに考えてもらいたいのだが、ことによると、つぎのようなばあいがあるかもしれない。つまり、たとえば鶴がそれに該当するかとも私は思うのだが、また、そのほかにもなにか同種のものがいるかもしれないが、ともかく、知性をそなえた動物が人間以外にもなにかいるのだとしてみよう。そして、この鶴などが言葉による区別をきみと同様なやりかたでおこなうばあいもあるとしてみる。そのさい、こういう動物なら、おれたちは偉いのだと言わんばかりに、まず鶴をその他すべての動物に対置されるべき一まとまりの種族と考え、それからその他の動物は、人間をも含めてこれを同一視しながら一括し、この全部を、ほかの名によってではなく、かならずや畜類という名で呼ぶことだろう。

E

だからわれわれとしては、この種のいかなる失策をも犯すことがないよう、十分に注意することを怠らないようにしようではないか。

若いソクラテス　どうやれば、その失策が避けられるのですか。

エレアからの客人　動物の種族を分割するさい、その途中でこの種族の全体をいつまでも問題にすることはやめるようにすればよいのだ。いま言った失策を少くするには。

若いソクラテス　たしかに、この全体をいつまでも問題とする必要はすこしもありません。

エレアからの客人　うん、そもそもそんなことをしたから、さきほどもあのような誤謬が起ってきたのだ。

若いソクラテス　はっきり言って、どうしてそんなことになったのかを、よく説明してください。

エレアからの客人　純知的知識のうちの命令に関係する部分はすべて、われわれの見たかぎりではどうも動物飼育、それも群れをなした動物の飼育、これに関係する種類を内容とするものであったようだ。そうだろう？

若いソクラテス　はい、そうでした。

エレアからの客人　したがって、いまのことを確認したときすでに、動物の全体は、飼い馴らされる動物と野性的な動物とに分割されてしまっていたことになる。つまり、習性として飼い馴らされることができるほうが温順な動物、飼育を受けつけようとしないほうが野性の動物、と呼ばれるならわしになっているのだ。

若いソクラテス　美事なご説明です。

エレアからの客人　ところが、われわれが狩人のようになって追跡している知識は、これまでの考察過程においても現在の段階においても、温順な動物に関係するものであることに変わりはない。さらに付言すれば、われわれの探索は、群れをなした生きものに狙いをつけておこなわれるべきだ。

若いソクラテス　ええ、そうです。

エレアからの客人　そういうしだいである以上、分割をするにあたって、さきほどとはちがって、当のものの

B 種類全部をいつまでも注視していくようなことはやめようではないか。また、政治家の持つべき知識というものに速やかに近接できるためには、焦ることもしないようにしよう。たしかに、こんどのばあいがそのよい例なのだが、われわれは焦ったために、諺に言われているような破目に陥ってしまったのだ。

若いソクラテス　どのような破目にですか。

エレアからの客人　慎重穏健な、注意深い分割をおこなわなかったために、「せいてはことをし損ずる」(1)という諺のとおりになったのだ。

若いソクラテス　そのようなことになったのも、先生、よい教訓になります。

八

エレアからの客人　そういうことにしておこう。それはそうと、本論にもどり、集団飼育術なるものを、あらためて最初から分割することを試みてみようではないか。きみが熱烈に求めているもの(2)にしても、われわれの論究がその結末へ近づいていくにつれて、おのずから、だんだんと歴然たるかっこうになって、きみの眼前にその正体をあらわしてくることであろうから。
そこでだが、きみの考えを聞かせてくれたまえ。

若いソクラテス　いったい、どのようなことについての考えをなのですか。

1　直訳的には、「目標到達を焦れば、速度が鈍る」

2　人間というものを定義することを指している。

C

エレアからの客人　いまから話すようなことについてだ。私としては、きみが、ことによれば種々の人々から、このような話をなんども聞いたことがあろうか、とも思って話してみるわけだが……。つまりだ、ナイル河や、それからペルシア大王が作らせた人造湖などで魚が飼い馴らされているありさまをきみがしたしく見て知っているようなはずなどはない、と私が思っているのは事実であるけれども、各地の泉のなかでそのようなことがなされているのをなら、きみは、たぶん、見たことがあるにちがいない。

若いソクラテス　まったく仰せのとおり、そのようなありさまをなら、私は感心して眺めたことがありますし、また、いまはじめにおっしゃった他国の話も、多くの人から聞いたことがあります。

エレアからの客人　それればかりか、鵞鳥の飼育とか、鶴の飼育とかなどもあるのだが、きみがテッタリア(1)の平原を歩きまわったことはないとしても、このような飼育についての話をだけなら、きみは人から聞いたことがあるだろうし、また、その話が事実であることを信じてくれるはずだ。

若いソクラテス　もちろんです。

D

エレアからの客人　いまのようないろいろなことを私がきみに質問したのは、群れをなして飼育されるものには二通りあって、その一方は水中に住むものであり、他方は乾いた陸地を歩くものだ、と言えるからだ。

若いソクラテス　ええ、たしかにそのとおりです。

エレアからの客人　ではここで、集団飼育の知識を二分する必要があることに、きみは同意してくれるだろうな？　そのさい、当の両種の動物のそれぞれにこの知識のそれぞれの部分を対応させなければならぬのだが、そうするためには、この二分された片方の部分を水生動物飼育に関係するもの、他方を陸上動物飼育に関係するも

のと名づけることにすればよいのだ。

若いソクラテス　ええ、そうすることに賛成です。

エレアからの客人　そこでつぎは、王者の持つべきものが問題なのであるが、以上の点が明らかになったので、E これがいま言った二つの専門技術のうちのどちらの範囲にはいるかは、もう探究する必要がないのだ。それはだれが見ても明らかなことなのだから。

若いソクラテス　ええ、それはもう、まったくそのとおりです。

エレアからの客人　さあでは、動物群飼育のうちの陸上動物飼育に関係する系統をなら、だれでも分割することができよう。

若いソクラテス　どのように分割するのですか。

エレアからの客人　有翼動物の飼育と、歩行動物のそれとに区別できるのだ。

若いソクラテス　そのお言葉はこのうえなく真実です。

エレアからの客人　それからつぎに、政治家の持つべきものなのだが、これは、かならずや歩行動物を問題としながら探索されるべきものだろうが、どうだろうか。いや、すこしどぎつい言葉を使うと、どんな馬鹿者でも、いま言ったとおりの意見を抱くにきまっているときみは思うはずだ。そうだろう?

1　ギリシア本土の北東部の一地方の、アッティカ方言による名称。一般にはテッサリアと呼ばれる。この地方の北境にマケドニアがある。周囲を山丘が囲っているが、中部は広い平野になっているので、農産物や家畜に富む。

若いソクラテス　ええ、そう思います。

エレアからの客人　そこで、歩行動物飼養術なのだが、これが、さきほど「数」というものを問題としたばあいと同様に、真二つに切られうるのだということを明示する必要がある。

若いソクラテス　ええ、明らかにそうです。

エレアからの客人　さらにまた、われわれのこのたびの論究が前進を続けている方向にむかって、道のようなものが二本延びているのが、はっきりと見えるように思えるのだ。その一方は、近道ではあるが、小さな部分を大きな部分と対置するようにして分割していく道なのだ。他方は、「できるかぎり中央切断をなすべし」という

265

さきほどのわれわれの要求を満たす見込みが強いほうの道であるが、こちらのほうは長い道になる。そこでだが、われわれはこの二つの道のうちのどちらをでも、進みたいほうを進むことにしてよいのだ。

若いソクラテス　ひとつ、いかがでしょうか。両方の道を進むことは不可能ですか。

エレアからの客人　同時には不可能にきまっている。きみ、無茶を言うものではない。けれども、一つずつ順々になら可能なことは明らかだ。

B

若いソクラテス　それでは、私としましては、一つずつ順々に両方を進むほうをやってみたいと思います。

エレアからの客人　お安いご用だ。残りの道程(みちのり)は短いのだから。もちろん、われわれが論議を進める出発点とかその道中の真直中(まっただなか)とかにいたときだったとすれば、きみのその要求には手を焼いたことだろうが。しかし、いまの段階ではもう、きみの希望がそのようなぐあいである以上、まず最初に長い道のほうを歩いてみることにしよう。われわれはまだ疲れていないだけに、その道を進むのもそれだけらくなわけだから。さあでは、つぎの分

割に注目したまえ。

若いソクラテス　それをおっしゃってください。

九

エレアからの客人　群れをなすあらゆる動物のうちで、温順なもののうちの歩行するものは、これをすでに自然がわれわれのために真二つに分割してくれている。

若いソクラテス　どのような違いによって分割してくれているのですか。

エレアからの客人　一方の動物は、生まれて生長しても角が生えないが、他方の動物は角を持っているという違いによってなのだ。

C

若いソクラテス　明らかにそのとおりです。

エレアからの客人　さあでは、歩行動物飼養術を分割して、定義という手段を用いることにより、その両部分のそれぞれに適確にあてはまることを述べてみたまえ。というのも、それらに名称をつけることをきみが望んだりすると、必要以上に複雑な名前ができてくることになるからだ。

若いソクラテス　では、私はどのような述べかたを試みるべきなのでしょうか。

エレアからの客人　つぎのように述べればよいのだ。歩行動物飼養の知識を真二つに分割して得られる一方の構成要素は、動物群のうちの角を持っているほうの一団に、他方は角を欠く動物群の一団に、それぞれ充当されることとなったのだ、と。

D

若いソクラテス　くだんの分割と定義とは、いまおっしゃった言葉によってりっぱに述べられたものと見ることにいたしましょう。説明はこれで完全に十分なものになったのですから。

エレアからの客人　それからさらに、王者というものが角を欠いた一種の動物群の牧養者であることも、やはりまた明白に理解できることだ。

若いソクラテス　ええ、それはもちろん明らかです。

エレアからの客人　さあそれでは、この動物群を細分してみることによって、王者にほんらい帰属すべき役目を、王者に割り当てる試みをしようではないか。

若いソクラテス　ぜひ、そういたしましょう。

エレアからの客人　それでは、つぎのどちらの分けかたをすべきであるかについて、きみの意見を聞きたいのだ。つまり、双蹄類と、それから単蹄類とか呼ばれているもの(1)、この二つのものの違いを基準にしてこの動物群の種別を分けることにしようか。——それとも、雑種繁殖(2)をするのか、同種内だけで繁殖するのかの違いを基準にして分けることにしようか。もちろん、きみには私の言葉の意味はわかっている、と思うのだが……。

若いソクラテス　どういうことをおっしゃろうとするのか、わからないのですが。

E

エレアからの客人　こういうことだ。まず、馬と驢馬（ろば）とは、相互間の交配によっても子を産むようにできている。

若いソクラテス　ええ、そうです。

エレアからの客人　ところが、温順で角を欠く動物群のうちのいま言った二種以外の残余のものは、種族の性

質上、相互間では混血しないのだ。

若いソクラテス　ええ、もちろんそのとおりです。

エレアからの客人　そこでつぎに政治家なのだが、この者は、いまから言うどちらのものの面倒をみるのだと考えられるだろうか。つまり、雑種繁殖をする動物類の面倒をであろうか、それとも同種内だけで繁殖するようなものの面倒をであろうか。

若いソクラテス　言うまでもなく、他の種とは混血しない動物類の面倒をです。

エレアからの客人　さあではこの動物類を、われわれはさきほどのばあいにならって、とうぜんのことながら真二つにきちんと分ける必要がある。

若いソクラテス　ええ、たしかにその必要があります。

エレアからの客人　とはいってもじつは、動物のうちの温順で群れをなすものは、だいたい二種類を除いて、すでにその全部がばらばらに細分されてしまっているのだ。ことわっておくが、ここで、犬の種族は群れをなす生きもののうちの一種だとして数えられるには値しない。

1　この「単蹄の」という語は、ホメロスの『イリアス』では折々用いられているが(たとえば第五巻二三六行)、それ以後は、あまり使用されなくなった稀語である。したがって、「……とか呼ばれているもの」という表現が必要であったわけである。——なお、単蹄類のみが雑種繁殖をなしうるのであるから、ここに示されている動物群種別法の二種類は、そのどちらを用いても、同じ結果が得られるはずである。

2　現代の専門用語に近いものを使うなら「異種間生殖」とも訳されうるかもしれない。

若いソクラテス　ええたしかに、それには値しません。けれど、そんなことよりもむしろおたずねしたいのですが、いまおっしゃったその二種類を、いったいどんな方法でわれわれは分割すればよいのでしょうか。

エレアからの客人　とうぜん、テアイテトス(1)ときみとがこの二種類を振り分けるさいに用いるであろうと期待される方法によってなのだ。きみたちは、幾何学にたずさわる者なのだから、このような方法をたしかに好むはずだ。

若いソクラテス　つまり、どのような方法で、とおっしゃるのですか。

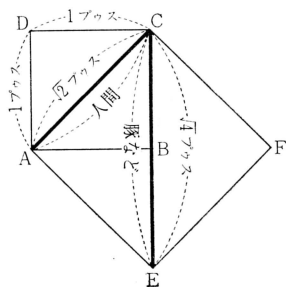
エレアからの客人　どうも、対角線と、それから他方でもまた、対角線の対角線なるもの、とを用いる方法でのようなのだ(2)。

若いソクラテス　なんですって？　いまのお言葉を、もっとよく説明なさってみてください。

B

エレアからの客人　われわれ人間の種族にそなわっている固有の性能は、歩行という面では、「力にかけては二足獣的な」という表現と同じ表現で示される長さの対角線に(3)、まさか、ぴったりと準(なぞら)えられないはずはあるまい。そうだろう？

若いソクラテス　ええ、ぴったりです。

エレアからの客人　さらに、残った他方の種族の歩行性能もやはりまた、その力の大きさについて言えば、われわれ人間の力の大きさを単位とする正方形の対角線の大きさにちょうど相当するのだ。この性能が二の二倍の数の足にほ

んらいもとづいている以上はそうなるはずだ(4)。

若いソクラテス　ええ、それはもう、まったくそのとおりです。そればかりか、先生が明らかにしていきたいと望んでおられることがらが、私にもだいたいわかってきました。

C

エレアからの客人　それから、いま指摘した点のほかに、喜劇のたねにでもすれば拍手喝采を博するかもしれぬような、そういう情景のひとつになるまたべつの新しい事態が、ソクラテス、これまでの分割作業の結末としてわれわれの眼前に現れているのが、はっきりと見えるではないか。

1　青年テアイテトスが無理数の問題にかんする重要な研究成果を残した数学の権威であったことについては、『テアイテトス』147D～148Dなどを参照。——そして、以下の266Bにかけての、対角線による幾何学的な説明は、このテアイテトスと、その学友である若いソクラテスと、この対話をそばで聞いている大数学者テオドロスとの三人を喜ばせるために、エレアからの客人が意識的に用いた巧妙な冗談なのではあるが、同時にこれは、本篇のこのすこしあとで明示されているとおり、王者を定義しようとするここまでの一見ふざけた考究が美事な失敗であったことを告白するための、周到な伏線にもなっている点にわれわれは注意しなければならない。

2　本文の図形を参照。〝対角線〟とはその図形での線分ACを、〝対角線の対角線〟とは線分ECを指している。

3　これは、一応はいわゆる意訳である。この、〝「力にかけては二足獣的な」という表現と同じ表現で示される長さの対角線に〟の箇所を、数学の用語で直訳すれば、「平方して二プゥス（二フィート）の長さになる対角線に」となる。対角線とは、一辺の長さが一プゥスの正方形の対角線であって、その長さが、この直訳で示されたとおり、$\sqrt{2}$プゥスであることは、言うまでもない。そして、こうして、意訳と直訳との両方によって、異った角度から同じギリシア原文が表現されなければならぬことからも理解されるように、生物分類法の用語が、同時にそのまま、当時の学界を賑わせた無理数なるものをめぐる数学の用語としても使われているところが、まことに美事な洒落だと言えよう。

4　本箇所と図とについては、補注B（三八六ページ）参照。

若いソクラテス　どんな事態がなのですか。

エレアからの客人　われわれ人類は、籤運(くじうん)のいたずらのせいでもあるのだろうが、全生物のうちでもっとも堂々と肥満しているとともにもっとも気楽な種族(1)を、競走相手とする破目になったのだ。

若いソクラテス　ええ、私にもはっきりとわかるのですが、まったく思いがけぬ変な結論になってくるようです。

エレアからの客人　それからさらに、もっとものろい動物(2)が決勝線には最後にたどりつく、と予想されるのではないか。

若いソクラテス　ええ、それはそのとおりにきまっています。

エレアからの客人　また、われわれは、王者というものがいま言ったおかしな情景よりもいっそう滑稽なものに思える、ということに気づくのではないだろうか。というのも王者は、配下の群れを率いてこれといっしょに走り続けるのであるし、しかも競走路を駈(か)けるときには、例の動物と同様に気楽な生活を営むためのだれにも劣らぬ最高訓練を受けた人物、そういう人物(3)を対等な相手とすることになったのであるから。

D

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　うん、これでいまや、ソクラテス、さきほどソフィストの定義を求める探究をしたさいに述べておいたあの大切な点(4)が、従来よりも明白に理解できるようになってきたぞ。

若いソクラテス　と申しますと？

エレアからの客人　こういうことだ。つまり、いまやっているような種類の追跡の仕事は、種々の問題点のう

ちの崇高なものについても、崇高でないものについてと同程度の配慮をしか加えないものなのだ。また、偉大な部類の問題点のばあいに劣らぬ敬意を、些細な部類の問題点にも払うことにしているのだ。そして、かならず自分だけの意向に従いながら、このうえなく真実な結論を得ようとするのだ。

若いソクラテス　どうも、そうらしいようです。

E

エレアからの客人　では、つぎにこれから、王者というものを定義するための短いほうの道とは、さきほどの論究においていったいどのような道になるべきであったのかという質問を、私が説明するまえにきみが提出するという事態、こういう事態などは避けたいと思うので、私のほうできみよりも先にこの問題に手をつけることにしてもよいだろうか。

若いソクラテス　ええ、ぜひお願いします。

エレアからの客人　では、私の考えを述べてみると、短いほうの道を通って政治家を定義しようとおもえば、さきほどのしかるべき段階で陸上歩行動物を見いだしたうえ、これをいきなり二種類の相対するものになるようにしながら、つまり陸上動物を二足動物の種族と四足動物の種族とになるようにしながら、振り分けによる分割をおこなうべきであったのだ。そして、人類がまだその分割段階ではただ有翼動物のみと対をなすような籤運になっている、ということを確認したうえで、二足動物の群れを、こんどは体毛のない動物と羽毛を生やした動物

1　豚の種族を指す。
2　豚を指す。
3　豚飼いを指す。
4　『ソピステス』227 A sqq. を参照。

との二種類に切断することにするのだ。そして、この切断が終われば、はやくもその段階で人間飼養の専門技術なるものがその正体をあらわにされることになる。そうなったうえで、政治家ないし王者にふさわしい人を連れてきて、この者を戦車の御者に見たてながら当の群れのなかへ坐らせ、そのうえで、国家を統御する手綱をこの者に手渡すことにするのだ。それは、この者こそこの統御の知識を持つにふさわしいと考えられるからだ。

若いソクラテス　先生は、いまこうして懸案の定義をなさったことによって、私への義務を美事にはたされました。私のためにしていただいたのは借金の返済にそっくりのことですが、さらに利子をまでもおまけに頂戴するしまつになりました。本論をのこりなく話してくださったうえに、脱線の談義をまでもうけたまわったのですから。

一〇

エレアからの客人　さあそれでは、話を続けてみよう。そして、われわれの以上の論究の始めのところから終りのところまでを振り返って見ることにより、「政治家が持つべき専門技術」と名づけられるものの定義を、繋ぎ合わされた一まとまりの言葉にして述べてみることにしようではないか。

若いソクラテス　ぜひ、そのようにいたしましょう。

エレアからの客人　うん、ではそれを述べてみると、われわれは論究の始めのところで、「純知的知識」の部分の一つが「命令の技術」であることを見た。つぎに、類比による説明を用いて(1)、いまのものの構成要素の一つを「命令の最高決定の技術」と呼んだ。つぎにこんどは、命令の最高決定の技術の範囲に属する種々の種類のう

ちのけっして軽視しえぬ種類として、「動物飼育術」を切り離した。さらに、動物飼育術の範囲に属する真の種類の一つは「動物群飼育術」であり、動物群飼育術のそれは、こんどは「歩行動物飼養術」であった。つぎに、歩行動物飼養術の範囲内から、きわめて重要な意味を持つものとして「角を欠く動物類にたいして飼育力を揮う専門技術」が、切断によってわれわれの手中へはいってきた。つぎにこんどは、この技術を切って得られる部分に注目すべきであるが、これを指す名称を一まとまりのかたちに結合したいと思う者は、この部分をすくなくとも三箇の表現の編み合わせによって述べることにしなければならない。つまり、これを「〈混血しない〉(2)〈獣群を〉〈牧養する〉知識」と呼ぶことにすればよいのだ。つぎに、いま言った知識の一部分をなすその切片は、二足獣の群れに関係した「人間飼養術」という依然としてわれわれの手中に残っている唯一の部分なのであるが、まさにこれこそ、まぎれもなく、われわれの探索の目標であったものであり、かつまた、同一物でありながら、「王者の持つべき知識」とも「政治家の持つべき知識」とも、両様に呼ばれているものにほかならないのだ。(3)

C

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　……いや、ソクラテス、待ちたまえ！　はたしてわれわれは、いま聞いたきみの返答をそ

1　260Dの「自作物直売業者と比較してみることにより」という意味。

2　あくまでも生物学的な意味で「他の種の動物とは混血しない」の意。人種の範囲内では、道徳性格の異なる家系を結婚により混血させることが、真の政治家の重要任務の一つである。本篇310B sqq. 参照。

3　エレアから来た客人によるこの総括は、ここに至るまでの論究成果の細目を、かならずしも正確には枚挙しつくしていない。それは、過度の厳密をむしろ卑しむべきこととプラトンが考えていたから、と一般に解釈されている。

のまま是認して、われわれの仕事を以上の論究だけによって真の意味ですでにやりとげてしまっているのだ、などと信じてもよいのだろうか。

若いソクラテス いったい、どのような仕事を、とおっしゃるのですか。

エレアからの客人 与えられた課題を残すところなく十分に論究しつくしてしまう、という仕事にきまっているではないか。つまり、以上の探究の最大の欠陥を要点的に示すなら、われわれは当の定義を或る一面からは述べおわったものの、まだけっしてこの定義を、どこから見ても完璧なかたちでは完成するにいたっていない、と言うべきではないだろうか。

D

若いソクラテス いまのお言葉をもっとよく説明してみてください。

エレアからの客人 きみがそう言って要求している以上、私としては、自分が抱いている考えをわれわれ両名のためにいっそう詳しく説明してみることを試みようと思うのだ。

若いソクラテス そのご説明をうけたまわりたいのですが。

エレアからの客人 まず、ついさきほどわれわれの眼前に多数の形態をとりながら姿を現わしてきたあの「牧養の技術」というもののうちの或る一まとまりの技術、これをわれわれは「政治家の持つべき技術」と考えたのであったが、これは同時にまた、或る一まとまりの動物群、これの面倒をみる仕事であるとも言えたはずだ。そうだろう?

若いソクラテス ええ、そうです。

エレアからの客人 そしてさらに、さきの論究で明確に規定されていったところによれば、この技術は、馬を

はじめとするその他種々の畜類を扱う飼育法ではなくて、人間を扱う集団飼育の知識であったのだ。

若いソクラテス　そのとおりでした。

一一

E

エレアからの客人　だからつぎに、王者以外のあらゆる牧養者とそれから王者たち、この両者のあいだの相違点をわれわれは調べてみることにしようではないか。

若いソクラテス　どのような相違点があるのでしょうか。

エレアからの客人　まず、王者以外の種々の人々のうちにも、王者の持つべき技術とは異る専門技術に通じた者としてそれにふさわしい名称を持っているのに、自分も、さらにそのうえ、王者の率いる動物群の共同飼育者としてその飼育に参画しているのだと相互に言い張り、それらしい態度をも憚らずにとっている、——そういう者がいるかどうかを調べてみよう。私はそう言っているのだ。

若いソクラテス　そのお言葉の意味を、もうすこし具体的に説明してください。

エレアからの客人　たとえば、貿易商人や農耕者や穀物を加工するすべての業者、それからこれらに加えて、体育の教師や、さらに医者の集団、——以上の種々さまざまな人々が、人間社会の面倒をみる牧養者を相手にして、つまりわれわれが政治家と呼んだ者を相手にして、総がかりで論陣を張ってくるにちがいないことにきみは気づいてくれるはずなのだが。つまり、「自分たちこそ人間の飼育に心を配っている者なのだ。しかもここに言う人間のうちには、群れをなした人間ばかりではなくて、その支配者自身も含まれているのだ」というのが、そ

のさいのこの人々の主張なのだ。

若いソクラテス　それはいかにも正当な主張だ、と見るべきではないでしょうか。

エレアからの客人　たぶんそうだろう。いまの点は、のちほども吟味する予定にしている。(1) それはそうとつぎの点をなら、われわれもいま熟知しているはずだ。つまり、牛飼いを相手としてであれば、このような種類のいかなる論点をめぐる論争であろうと、これを試みる者は現れないことであろう。それは、牛の群れの飼育番というものは、この者自身が直接に当の動物群の飼育者でもあれば、またこの者自身が直接にその医者でもあり、同時にこの者自身が直接にそのいわば媒酌人にもなり、また、つぎつぎに生まれてくる仔牛の出産とそのおりの分 B 娩の世話とにさいしては、ただこの者だけが産婆術の腕をりっぱに揮いうるからなのだ。それからさらに遊戯や音楽について言えば、この者によって養われる家畜がこれらを受けつけうる限度はおのずからきまってはいるけれども、ともかく、楽器を伴奏したり自分の口だけによる歌唱を用いたりして、その配下の畜群のための音楽をこのうえなく巧みに奏でながら、魅了のわざにより、聞いている動物の気持を陽気にしたり鎮静したりする能力を、この者以上にりっぱに備えている者はほかにはいないのだ。そして一般に、牛飼い以外の種々の牧養者のばあいも、事情は以上と同じなのだ。そのとおりだろう?

若いソクラテス　このうえなく正当なお言葉です。

エレアからの客人　だからして、われわれが王者についてくだすべき定義が正当であるとともに欠陥のないも C のだと考えられる根拠などは、なにもないことになるだろう。自分には王者である権利があると主張しているほかの無数の者を無視しつつ無雑作に当の者だけをとくに選びだして、王者とは、人間という動物群の牧養者であ

るとともにその飼育者のことである、などときめてしまうようなことをするなら。

若いソクラテス　たしかにそうでしょう。

エレアからの客人　すると、王者にふさわしい人を描いている粗描のようなものをわれわれはたまたま論述しているようなことにはなっても、政治家の肖像をまだ精緻には描きあげていないのではないか、という意味の先刻(2)のわれわれの懸念も、正当な心配であったようだ。つまり、われわれはまず、政治家のまわりに蝟集していて、自分らは政治家と共同牧養をする資格を持っているなどと自称している連中をその周囲から排除し、そういう部外者のもとから政治家を遠ざけたうえで、単独なかたちにされたこの者の姿を純粋なありさまにして明示すべきではないだろうか。

D

若いソクラテス　それはたしかにこのうえなく正当なご指摘です。

エレアからの客人　うん、まあともかく、いま述べた作業を、ソクラテス、われわれはおこなう必要があるのだ。この論究の結末を醜いかっこうにするのは、われわれの望むところではないのだから。

若いソクラテス　いやたしかに、そのような結末だけはぜったいに避けるべきです。

一二

エレアからの客人　うん、ではあらためて始めから出なおすことにして、道のようなものがなにかべつに走っ

1　以下の275Bや276Bなどを参照。

2　267C〜Dの箇所を指す。

ているようであれば、それをたどって進むことにしなければならない。

若いソクラテス　いったい、どのような道をなのですか。

エレアからの客人　どうも、遊戯にさいして使われるような話を混入した道中になるようだ。つまり、或る長大な神話の相当量の部分を援用することにしなければならぬのだ。そしてその仕事を終えたあとはさきほどと同様にして、分割によって得られた部分のなかから不要な部分をそのたびに一つずつ除去していきながら、探究の最終目標へ到着するようにしなければならない。このようにすることこそ必要なのではないだろうか。

E

若いソクラテス　ぜひとも、そうやるべきです。

エレアからの客人　さあではいよいよ、子供たちのように注意をよく集中して、私が話す神話の物語に耳を傾けてくれたまえ。つまり、どう見てもきみはまだ、子供がやる遊戯をやめて長年を過ごしてきたような年輩者ではないのだから。

若いソクラテス　どうぞ、そのお話を聞かせてください。

エレアからの客人　では始めてみよう。むかしの話のうちには、過去においてと同様に、将来においても物語られると思われるものがほかにも多数あるのだが、それらのうちでまずとくに注意してみたいのは、アトレウスとテュエステスとの抗争(1)の神話のなかで出てくる例の不思議な現象の話なのだ。きみは、その抗争のおりのできごととして伝えられている話をかならずや聞いたことがあるはずだし、またよく覚えてもいるにちがいない。

若いソクラテス　そのお言葉の指しているものは、あの、黄金の仔羊によって神意が示された、という意味の話(2)のことのように思いますが……。

エレアからの客人　そうではないのだ。私が指しているのは、太陽をはじめとするすべての星々の、沈みかたと昇りかたとが変わってしまった話なのだ。この話によれば、すべての天体は、こんにちそれらが昇っている方角へ当時は沈んでいたし、またその昇る方角も、こんにちとは逆の方角であったのだ。ところが、あたかもこの抗争のおりに、神はアトレウスのほうを嘉したまう証拠として、天体のこの運行をこんにち見られるとおりの姿へ変えたもうた、と伝えられている(3)。

若いソクラテス　ええ、たしかにそういう話も伝えられています。

エレアからの客人　それからまた他方では、神クロノスが王者のように統治したもうていた御代の話(4)も、われわれは多くの人々から聞かされている。

1、2、3　アトレウスは、ペロポネソス半島東岸の古都ミュケナイを支配した神話時代の王。テュエステスはその兄弟で、両名の父はペロプス王。ペロプスがヘルメス神の息子を殺したため、ヘルメスは、その復讐として、アトレウスの家畜のなかに、黄金の羊毛を持った一頭の仔羊を生ぜしめた。その結果、この仔羊がアトレウスとテュエステスとの兄弟のあいだの抗争の発端となった。つまり、この兄弟がミュケナイの王位継承権をめぐって、たがいに争うにいたったとき、まず、アトレウスは、黄金の仔羊の出現が自分への神々の加護を示す、と主張した。ところが、アトレウスの妻はその不倫の恋の相手であったテュエステスにこの仔羊を秘かに与えたため、アトレウスは一時その王位を失った。しかし、アトレウスを支持するゼウス神が、その支持の証拠として、太陽とプレイアデス星団との進路を逆転させるという、もっと大きな奇跡を示したので、アトレウスはその王位を奪還した。(そのときの天体の進路逆転は、たんに一日間の事件であったが、プラトンはここでこの原伝承を多少変形させている。)けれども、兄弟喧嘩はその後も続き、アトレウスがテュエステスにその子供らの肉を宴席で食わせるなど、残忍きわまる復讐事件が両者やその子孫たちのあいだで数多くくりひろげられた。

4　神クロノスは神ゼウスの父。クロノスの御代とは地上の太古の黄金時代のこと。たとえば、ヘシオドス『仕事と日々』一一一—一二二行などを参照。

(269)
B

若いソクラテス　そうです。ずいぶん多くの人々から聞いています。

エレアからの客人　またさらに、むかしの人種は、人間どうしの交わりによる生殖によっては産まれずに、大地の子として発生していた、(1)という話もある。

若いソクラテス　ええ、それもいろいろな昔話のうちの一つです。

エレアからの客人　うん、つまり、これらの話の全部は、世界の或る同じ大異変を起源とするものなのだ。そして、いま挙げた若干の話のほかにも、これらよりなお驚くべき種々の異った話が無数にあったのだ。ところが、話の成立いらい長い時間が経過したために消滅してしまった話もあるし、こんにちまで語り伝えられている話のほうも、いまでは相互間の関聯を失って、そのそれぞれが断片のかたちになってしまっている。また、これらすべての話を原初に産みだした当の大異変なのだが、これを語り伝えてくれている者は、こんにちにいたるまでだれひとりいないのだ。けれども、私はいまこそこれを話してみなければならない。たしかに、王者の姿を明瞭に示すためには、これを述べておくことがきわめて適切な処置になると予想される。

C

一三

若いソクラテス　じつに素敵なお言葉でした。さあ、なにひとつ省略なさらぬようにして話してください。

エレアからの客人　では、聞いてくれたまえ。まず、われわれが住んでいるこの万有の運行を、神がしたしく介入して主導したまい、その円環運動に手を借したまう時期と、神が万有を放置したまう時期との二つがあるのだ。この放置のほうは、万有がいくたびも周行を重ねたあげく、万有に割り当てられている時間が一定の限度の

長さに達するにいたるたびに始まるのであるが、これが始まるとこんどは、万有は、その直前の時点にいたるまでの転回方向とは反対の方向へ自動的に転回していくことになる。この転回が自動的であるのは、万有がひとつの動物であって、しかも、これを原初にうるわしく構築したもうた神のみ手から、幸運にも知性を授けられているものであるからなのだ。そして、いま言った逆行運動が万有にそなわる固有の特質にもとづくものだと必然的に帰結されうるのは、つぎのような理由があるからなのだ。 D

若いソクラテス いったい、どのような理由があるからなのですか。

エレアからの客人 常時にわたり、同一の状態にあって同一なありさまを呈し、したがってまた同一性を保持しているということ、――これは、万物のうちでもっとも神聖な一群のもののみにそなわる固有性質なのであり、それにたいして総じて物体の部類をなすものは、この一群とは階級を異にしているのだ。ところで、われわれが天空とか宇宙とかと名付けることになっているものは、なるほど祝福すべき資質をもその生みの親のみ手から数多く恵み授けられてはいるものの、他方ではやはり、物体であるという一面にもあずからざるをえないありさまになっている。その結果として、これが変化というものを完全に免除されるにいたることは不可能なのだ。とはいえ、これが見せる変動は、可能なかぎり同一の場所での同一の状態での均一な運動であると呼ばれる資格を最高度にそなえたものになっている。だからこそ宇宙は、さきにも一言したとおりの逆方向への円環運動をおこな E

1 たとえば、アテナイ人たちは、自分らを、太古より他の地方へ移住したことがない民族であるとともに、アテナイを中心とする地方で、そこの土着民である「大地の子」として生まれたのだ、と信じていた。272E 注2や、『メネクセノス』237B～Cなどを参照。

2 イデアなどの部類を指す。

うべきさだめとなっているのだ。それは、この運動こそが、宇宙にとって固有の原初からの動きかたから、最小限にしか逸脱していないものであるからなのだ。

ところが、他方ではさらに、物体としての宇宙以外に、すべての運動変化するものを統御しているもの(1)があるはずなのだが、どうもこのものだけしか、自分で自分を常時にわたって回転させるということはなしえないようなのだ。しかも、このものが宇宙を動かすばあいの動きの方向がときどき変化してそれ以前と反対になるなどということは、神聖な永遠の掟によって不可能なのだ。

さあそこで、以上において確認した種々の基礎事実から得られる結論を述べることにしてみると、宇宙が常時にわたり自分で自分を回転させているのだとわれわれは考えるべきでもなく、また、べつの考えかたをとってみて、宇宙の全体が二種類のたがいに反対方向への転回運動をつねに一柱の神のみから与えられているのだと断定すべきでもなく、あるいはさらに、たがいに相反する意図を持つ二柱の神のようなものが宇宙を交互に反対の方向へ回転させているのだとわれわれは主張すべきでもないはずだ。だから、結論とすべき主張はまだ一つだけ残されている可能性を述べるものなのであるが、これによればさきほど私が述べた説のとおりになってくるのだ。つまり、まず或る時期には、宇宙はその外部から作用を及ぼしたまう神の起動力を受けてその主導に従い、あらたに生命を吹きこまれて、神の力で回復された不死の活力をこの創造者のみ手から受けとることになる。ところがまたべつの時期には、宇宙は神から放置されるのであるが、そうなるといつでも、宇宙は自分の力だけで動いていくことになる。しかも、この放置がじつによく配意された適切絶妙な瞬間に始まるので、それ以後における宇宙の逆行運動は万の幾倍回もの周行を重ねていくことになる。それというのも宇宙はこのうえなく巨大であ

り、このうえなく均勢のとれた形姿を持ち、このうえなく小さな回転軸に乗ってめぐりつづけるからであるのだ。

B **若いソクラテス** なるほど、いまのこまやかなご説明は、そのなかのどの点を考えてみても、まったく真実味のあふれるものであったように思います。

一四

エレアからの客人 さあでは、いま私が述べた話から結論を引きだすことにして、これこそ例の不思議な神話のすべてを原初に産みだしたものだとさきに私が主張しておいたあの宇宙の大異変を、あらゆる面から理解してみることにしようではないか。

そこでまず私に言わせてもらうなら、その大異変とは、なんといってもつぎのようなものなのだ。

若いソクラテス どのようなものなのですか。

エレアからの客人 万有の運動が、いま現におこなわれているとおりの円環運動、これと同じ方向へむかっておこなわれる時期があるかと思うと、そのあとに、その運動方向がそれと反対の方向をとる時期がくる、という変化なのだ。

若いソクラテス そうだとすると、どういうことになる、とおっしゃるのでしょうか。

1 いわゆる世界霊魂を指す。これは、完全に善なる魂であって、神と呼ばれることもできる。

(270)
C

エレアからの客人　この変化は、天空の世界において生じるあらゆる変転[1]のうちでもっとも大規模でもっとも完璧広範な変転である、とわれわれは見るべきなのだ。

若いソクラテス　ええ、どうもそのとおりであるようです。

エレアからの客人　うんそこで、その天空の内部の一角に住みついているわれわれ人間の身のうえにも、そのおりにはもっとも激烈な変化が生じるにちがいない、と考える必要がある。

若いソクラテス　その点もほんとうであるようです。

エレアからの客人　また、われわれの熟知しているところによれば、大規模で多様きわまる変化が数多く襲ってくるばあいには、総じて動物の部類をなすものは、その同時的衝撃に耐ええないのではないだろうか。

若いソクラテス　そうです。どう考えてみても、耐えうるはずはありません。

エレアからの客人　うん、そこでそのおりには必然的に、他のすべての動物も大規模に死滅していくことにな

D

るのであるが、わけても注意しておきたいのは、人間の種族もごくわずかしか生き残らないことになるという点なのだ。そして、この生き残った人間たちの身のうえには、不思議で新奇なできごとが数多く同時的に起ることになるのであるが、それらのうちでもっとも驚くべきできごとが、つぎに述べるものなのだ。要するに、このできごととは、現在の世界においてわれわれが知っているとおりのかたちで確実におこなわれている宇宙の回転、これとは逆の回転への変転が始まる時点での万有の運動の逆転に、おのずから随伴して生じるできごとのことなのだが。

若いソクラテス　それは、どのようなできごとなのですか。

エレアからの客人　まず第一に、ありとあらゆる動物のそれぞれは、その時点にいたるまで重ねつづけてきた年齢の数を、そのときかぎりでもはや重ねなくなってしまったのだ。そして、どの動物もほんとうはいのちに限りのあるものであるのに、見た目には、その老化を進めていくことをやめたのだ。そして、逆方向への変化をあ E らたにこうむることになったために、さながら、若返って瑞々しい精気が蘇ってくる、とでも言えるようなありさまになっていったのだ。だからまた、老人たちの白髪も黒くなっていき、さらにまた、顎鬚を生やしている男たちの頬も滑らかになっていって、各人は自分の過ぎ去った青春時代をふたたび味わうにいたったのだ。また、思春期にさしかかっていた者たちの身体は、一日一夜が過ぎるごとに滑らかさを加え、丈も小さくなっていき、もとの新生児の初々しい状態へあらためてもどっていったのだ。つまり、この者たちは、心理的にも生理的にも、幼児同様の姿へ変わったわけなのだ。さらに続いて、このような身体は、ついに消え去るようにしてまったく無くなっていき、完全に姿が見えなくなっていったのだ。

他方また、あの大変転の時期に無惨にもその生命を落とした人々について言うと、屍となっていたその身体も、271 以上で述べたのと同一な一連の変化を、大急ぎにではあるがつぎつぎと経験していき、わずかの日数のうちに跡かたもなく滅びはてていったのだ。

1　この種の変転のうちで人類に身近なものとしては、たとえば、冬至・夏至における太陽の運動の反転を挙げることができる。『エピノミス（法律後篇）』990Bを参照。

一五

若いソクラテス　それにしても、先生、そういう時期には、動物の誕生は、どのようなありさまのものだったのですか。つまり、動物どうしの交わりによる生殖は、どのような方法によっておこなわれていたのですか。

エレアからの客人　動物どうしの交わりによる生殖というものがその時期の宇宙機構のなかでは不可能であったことは、ソクラテス、明瞭なはずだ。けれども、むかしは大地の子という種族が実在していたという神話なら、これをだれでも聞いたことがあるだろう？　この種族こそ、ちょうどその遠いむかしの時代に、大地の内奥から地上へ帰ってくることを繰りかえしていた人々なのであって、この種族のことを記憶にとどめて後世に伝えてくれたのが、わが人類の最古の祖先たちであったのだと考えられる。この祖先たちは、宇宙の前回の循環期の最終B部分に隣接したその直後の時期に、つまり現在の循環期の当初に発生した人々なのだ。ともかくこのような人々が、いま言った神話を伝達する役目をわれわれのためにはたしてくれたのであるが、それにもかかわらず、現実にはこの神話の信憑性を疑う者が多いのだ。けれどもこの疑いは、じつは正当ではないのだ。

それというのも、私の見るところでは、当の神話から得られる帰結をこそ、われわれはぜひとも全般的に理解する必要があるからなのだ。つまり、さきに述べたとおり、老人たちが子供の初々しい状態へつぎつぎともどってきていた以上、とうぜんその帰結として、すでに死者となって大地のなかで眠っていた人々のほうも、やはりこんどは、その大地のなかであらたに形姿を与えられて、蘇生してきていたはずだと考えられる。そして、死者のこのような蘇生は、さらに広い見地から説明すれば、万物の発生と死滅との全般にわたる循環的変化が現在に

おけるとは反対の向きに進行する、というような変転が起ったことのひとつの結果であったとも言えるであろう。そして、いま述べたとおりの理由によって、当時発生してきていた人々は、必然的に、大地の子であったことに

C なる。ともかく以上が、この種族に付けられた名称の由来なのであり、その名称の正当性を裏付ける背後の事実でもあるのだ。ただし、この者のあいだにも、神によりなにかべつの運命(さだめ)のもとに置かれて不生不死の境遇を得るにいたった少数の者がいたとすれば、(1)これは大地の子ではなかったわけなのだけれど。

若いソクラテス ええ、そのご説明はじつに適確で、いまのお話が、そのまえにうけたまわったお話のぴったりとした帰結になっています。それはそうと、こんどは、先生のご指摘によれば、神クロノスの威光のもとで営まれていた生活があったわけですが、その生活の営みというのは、宇宙のむかしの循環期のほうでのできごとですか。それとも現在の循環期のほうでのできごとなのですか。私としては、星々や太陽の進みかたが変化するという事件は、明らかにどちらの循環期の終りにおいても勃発しうるものだということを考えて、おたずねしているのですが。

D **エレアからの客人** きみが私の進める論究に一歩の遅れもとらぬようにして、ここまで付いてきてくれたとはたのもしいかぎりだ。ところで、きみのいまの質問は、人間にとって必要なすべての自然物が人手を借りずに自生していた時代にかんするものであるが、万物のそのようなありさまは、いまわれわれの眼前において確定されている宇宙の運行組織の所産ではなくて、いまから私が話してみるこのありさまもまた、宇宙のこんにちの運行

1 これは、真に知を愛し求めた人々のことを指している。『パイドロス』249A などを参照。

期に先立つ時期にみられたものなのだ。

つまり当時は、最高神が宇宙の円環運動の全体にかくべつのみ心を配りたまい、これを直接に統御しておられた。そしてさらに、世界のどの場所を見ても、その事情は世界の全体と同様であって、宇宙のすべての部分は、それぞれべつべつに、めいめいべつの神々のみ手に割り当てられて、その統御を受けていたのだ。だからまた、動物をも、その種類ごとに、さらに種を同じくする動物群ごとに、下位の神々であるそれぞれの神霊たちがその牧養者のようになって、分担して受け持っておられたのだ。このさい、この神霊たちはそれぞれ、ご自分が牧養する配下の動物のためになにごとを取りはからいたまうおりにも、自給自足しておられたのだ。その結果として、獰猛(どうもう)な動物などはまったくみられず、動物相互の食い合いもみられず、戦争も内紛もそこにはまったく発生しなかった。そのほか、神々の統治によるこのような世界秩序の、さまざまなかたちで現れる細部については、述べようと思えば無数に述べるべきことがあるだろう。

そこで、さきの中心的な論点へ話をもどすと、労働を必要とせずに営まれる人間たちの生活、これにかんしてはつぎのように述べることによって、われわれはその説明のつとめをはたすことができる。つまり当時は、神みずからが人間たちの監督者として、これを牧養しておられたのだ。——そのありさまは、神に近いほうの動物である人間が自分らよりも下等な種族のいろいろな動物を牧養している現代の世界の模様になぞらえてみれば、よく理解されうるであろう。——そして、神が人間たちの牧養者であったこの時代には、種々の政体の国家などというものはみられなかった。妻の所有も子供の所有もみられなかった。これは、当時のことごとくの人間が、前世のことを完全に忘却した状態で、大地のなかから蘇生してきていたからなのだ。要するに、いま挙げたような

ものは、そこにはことごとく欠けていた。そして、当時の人間たちは、果樹からもその他のおびただしい森林樹からも、果実を際限なく入手していた。これらの果実は、農耕業によって栽培されるものではなくて、大地が人手を借りずに産みだしてくるものであったのだ。また、この人間たちは、衣類も身に纏わず、寝台も持たずに、たいていは野外で生活しながら、その牧養者の保護を受けていた。つまり、四季のめぐりは穏やかなものとなるように調整されていて、人間に苦痛を与える季節などはなかったのだ。かつまた、大地からは豊富に草が生えでていたので、人間はこれを自分の柔かな褥としていたのだ。

B　さあ、ソクラテス、きみに以上で聞いてもらったのが、まず、クロノスの君臨したまう御代での生活の話なのだ。そこでこんどは、ゼウスが君臨したまう御代である、と世間で言われているこの現代という時代での生活なのだが、これは、きみもみずからそこに生まれあわせているので、自分の体験を通じて知っているはずだ。(1)だから、これら二つの生活のうちのどちらが他方よりも幸福な生活であるのかを、きみは判定することができるだろう？　いや、すすんで判定してくれるだろう？

若いソクラテス　いいえ、それはぜんぜんだめです。

エレアからの客人　その言葉から察すると、きみは、どうも私に一応の断定をくださせたいらしいな。

1　プラトンがここで描いているような、クロノスの御代からゼウスの御代への推移に該当する太古の時代の変化を、異った意図からではあるが、ローマの大詩人オウィディウスは、その『転身の歌』第一巻八九―一五〇行において、プラトンよりも詳しく歌いあげている。また逆に、ウェルギリウスは、本篇でのゼウスの御代に相当する鉄の時代から、クロノスの御代への壮大でめでたい移行が、間近いことを、その有名な『牧歌』第四歌で歌っている。

若いソクラテス　ええ、ぜひお願いします。

一六

エレアからの客人　それではひとつ話してみよう。まず、クロノスの保護のもとで育てられていた種族は、人間たちだけを相手としてではなくて、いろいろな野獣をまでも相手として、たがいに仲良く言葉をかわすこともできたようだ。つまり、それに必要なだけの閑暇を十分に持ちあわせていたであろうし、さらに、らくらくとそ C のようなことができるための能力をもそなえていたようなのだ。さあそこで、当時の人間が、自分らにそなわっていたこれらの利点の全部を愛知の営みのために活用していた、と仮定してみよう。もちろん、そうするためには、人間どうしで談話をするだけでなく、いろいろな野獣をも談話の仲間に加えなければならなかったことであろうし、さらに、ありとあらゆる生類から話を聞いてまわって、もしや、その生類のうちに、なにか特殊な能力を所持しているおかげで、それの仲間たちが一般に知っていることを凌駕するようななにかの新事実を発見することにより、知恵を集積する事業に寄与した者が現れたかどうかを、知る必要もあったことであろう。それはともかく、いまの仮定が正しければ、クロノスの時代の人々が現代の人間をその幸福の度合にかけては無限に凌駕していた、と容易に判定できるのだ。また、当時の人間が、飲食物を存分に平らげて満腹になったうえで、その仲間やいろいろな野獣をまでも相手にしながら、ちょうどいまこの者たちについて私が話しているような種類の D 物語(1)をいつも語りあっていたのだと仮定してみても、私一個人だけの意見を披瀝させてもらうとすれば、やはりさきのとおりの判定が容易にくだされうるのだ。

とはいえやはり、われわれとしてはこの問題を当分のあいだ、おあずけにすべきであろう。なぜなら、当時の人間たちが学問的知識の獲得と論理的な談話の活発な使用とを熱烈に欲求していたかどうかを、われわれに事実のとおりに報知してくれる有力な権威者が、いまのところまだ一人も現れていないからなのだ。それに反して、ながいあいだ眠っていたこの神話を復活させようと考えたときにわれわれが目的として目ざしていた論点だけは、つぎに述べることにしなければならない。そうすることが、われわれに残された仕事をさきへ進めてこれを完結させるにいたるための必要な処置となるのだ。

そこでそれを述べてみると、以上で話したとおりの先行の時代のできごとの全部が起っていくに要するだけの時間が満了して、変化が生じざるをえなくなり、わけても、大地から生まれでるあの種族がいまや完全に尽きはててしまったとき、つまり、その種族のそれぞれの者にやどるべきことごとくの魂が一定の回数だけ肉体とともに生まれでるという役をつとめあげてしまったとき、言いかえれば、それぞれの魂が、自分にあらかじめ課せられていた回数だけ大地のなかへ種子のように蒔き落とされる(2)というさだめを耐え終えてしまったとき、さあ、まさにそのとき、万有をあやつる操舵者は、その舵の取っ手の部分とでも呼ぶべきところからみ手を離して、宇宙を見晴るかすご自分の住いへと立ち去りたもうたのだ。そして、宇宙のほうは、宿命の力とそれから宇宙に深く

E

1　ディエスに従って μύθους, οἷοι と読む。

2　ギリシア神話において、テバイの都の創建者とされているカドモスがテバイの地で一頭の竜を殺してその歯を地面に蒔いたところ、地中から、武装した成年男子から成る軍勢が生じた、と伝えられているが、本篇のこの箇所で述べられている大地の子は、このカドモスの軍勢に似ていることを指摘する学者もある。

やどっている性癖とが、あらためてこれを逆方向へ回転させはじめたのだ。そこでさらに、最高位の神霊による万有の統御の仕事に宇宙のそれぞれの場所から協力していた神々もことごとく、変わりつつある事態をすぐに察知して、宇宙のそれぞれの部分のことを心配してやるというご自分の仕事から手を引きたもうたのだ。そしてま 273 たこの宇宙は、その回転方向の変化に伴い、その前後の回転期のそれぞれ終りと始めとに相当する時点で、たがいに相反する方向へ自分を突進させるような衝撃力を受けたために、自己の内部でその衝突による大激震を発生させ、その結果として、このたびもまたあらたに、[1]種々さまざまな動物の死滅を招くにいたったのだ。けれどもそのごはやがて、十分なだけの時間が経過すると、宇宙は、激動と混乱とを、さらに激震とをやめて平穏を回復し、自分の平常な走行法へもどって、秩序正しい進みかたを続行するようになっていったのだ。そしてこのさいには、まだ宇宙自身が、自分の内部に含まれているすべてのものと自分自身とにたいして、心を配り、統制力を B も揮っていたのであるが、そのようなことができたのは、宇宙が、その父である創造者の垂れたもうた教訓をできるかぎり忠実に記憶していた賜物であったと言えよう。

もちろん、このようなつとめを宇宙がかなり厳格に履行していたのは、この新しい時期の当初においてのみなのであって、その末期になると、そのような義務感は鈍化していったのだ。この鈍化を招いた原因は、宇宙の組成のうちに見られる物質的な要素だったのだ。そういう要素が、測りしれぬほどの遠い太古に生まれた宇宙の根本性質のうちに深くやどっているわけなのだ。つまり宇宙は、現在みられるとおりの秩序あるすがたに到達する以前には、無秩序きわまるありさまを呈するものであったのだ。

なお、この点について一言すれば、宇宙が所持しているりっぱなものはことごとく、その構築者のみ手から授

C かったのであるが、他方、この天空のもとで起っている忌むべき不正な性格の全事象は、宇宙の誕生以前の[2]それの状況に起因しているのであって、これを宇宙はこんにちまで自分でも受け継いできているとともに、全動物の内部にもそれに類似した性格を生ぜしめていると言えるのだ。

さてそこでだが、宇宙が、前述のあの操舵者の助力を得ながら自分の内部で全動物を育てていたときには、宇宙の内部で生みだされる劣悪なものは僅少であり、優良なものは多大であった。また、その操舵者のみ手から離れたあとも、宇宙は、放置されてまだ間もないころの時期には、つねに万事の管轄をじつに美事におこなっていた。ところが、時間が経過して、神を忘却する気持が宇宙のなかで広まっていくにつれて、太古の不協和状態を D 反映する風潮が、ついに勢力を強めることとなってくる。さらに、このような時期が終りに近づくにつれて、この風潮は一面にわたる花の満開にも似た極盛期に達して、優良なものは僅少になってしまう。それにもかかわらず宇宙は、「優良」とは反対の部類のものから成る混入物を自分のなかへ多量に注ぎこみつづける結果として、自分自身をも自分の内部に含まれているすべてのものをも、破滅させてしまいそうな危機を迎えるにいたるのだ。

さあ、このようなことになったために、宇宙にむかし秩序を与えたもうた神は、このたびもまた介入に乗りだしてこられるのだ。つまり神は、宇宙が苦境にあえいでいるのを眺めたもうたとき、これが「混乱」という嵐に激しくもまれて分解され、ついには、「無限定」という水をたたえていて「類似性完全剝奪」という作用力を持っ

---

1 前回に起った動物の大量の死滅については、本篇の 270 Cを参照。

2 宇宙の二種類の循環期の交替が繰り返しておこなわれるようになった時代にさらに先行する時期、つまり、宇宙の真の原初の時点を指す。

ている大海、そういう大海のなかへ沈没する[1]のではないか、と憂慮したまい、ご自分の舵を握るための座へあらためてご着席になるわけなのだ。そして、宇宙がこれに先立つ時期に独力で周行を続けていたさいに病変し解体していたそれの諸部分にも、その状態を改善するための回転をおこなわせることにより、全宇宙にあたらしく秩序を与えたまい、さらに、このようにして宇宙をふたたび正しく建てなおすことによって、これを不老不死の状態に変えたまうこととなるのだ。

　さて、以上で、宇宙のうえにおこる変化の一巡を、私はその最終段階まで説明し終えたことになる。そこでこんどは、王者というものの姿を明瞭に示すためには、以上の物語のなかでさきほど[2]話しておいた状況のことを、よく覚えておくようにしさえすればよいのだ。つまり、宇宙の回転の方向がまたもや復原されて、万物の現在みられるとおりの発生と死滅との方式が再成立するにいたったとき、生物の年齢の歩みは、あらためてまた停止するにいたり、その結果として、まえの循環期には見られなかった逆の事態が招来されることになったのだ。すなわち、まず、全動物のうちでその身体が若年の小さな姿へもどってしまって、いまにも姿を消していくさだめにあったものは、ふたたび成長しはじめたのだ。それから、白髪の高齢者のからだつきをしてその直前に大地のなかから誕生してきていた人々は、ふたたび死去することによって、大地のなかへその姿を没していったのだ。こうして一般に、その他のことごとくのものも、万有がこうむった変転を忠実に反映しながら、かつまたその影響をまともに受けながら、変化していったのであるが、ことに、受胎と出産と哺育との面でも同様な反映が起ったのは、この全般的な傾向への不可避的な順応現象のうちの重要な一つだと見られるべきなのだ。考えてみればたしかに、この時期にあってはもはや、動物が自分ら以外のものに由来するような結合力によって大地のなかから

誕生するということは、不可能になっていたのだ。つまり、宇宙の総体にたいしては、自分の運行を完全に独力で統御せよという指示が、この時期にはあらかじめ与えられていたのであるが、ちょうどそれに呼応した同じ趣旨によって、宇宙の諸部分にたいしても、宇宙にやどる力に類似した内部からの衝動に駆られることにより、可能なかぎりみずから自分だけの力を用いて生殖し出産し哺育せよ、という持続的な指示が当時あたえられていたわけなのだ。

B　さて、以上の長い物語を始めたとき以来の私の目的であった帰結に、われわれはいまやすでに到達していることになる。つまり、ほかのすべての野獣については、そのそれぞれが変化のどのような段階を踏んで現在のかたちにいたっているのかとか、その変化の原因はなになにであったのかとかなどを、いろいろと詳細に説明することは、もちろんできるにちがいない。けれども、人間については、そのような説明よりもむしろ、もっと簡潔でこの場にもっと役に立つような点を述べることにしなければならない。それをいまから話してみると、まず、当時の人間は、以前に自分らを掌握し牧養したもうていたあの神霊の保護をいまや失ってしまって、淋しくうち捨てられていたのだ。それに加えて、野獣の大部分は、がんらい御しがたい性格のものであったのであるが、これらがいまや凶暴化してきたのだ。そこで、素手のままでは弱力なものとなり無防備なものとなっていた人間は、

C　これらの野獣の餌食となって、つぎつぎに生命を奪われていったのだ。たしかに、原始の時代には、人間は生存

1　諸国家の、その欠陥による沈没の叙述（302A）と比較。

2　宇宙が神の手を離れて逆方向へ回転しはじめた結果として、種々の動物が大規模に死滅していったありさまを述べている上記の273Aの箇所を指す。

の手だてをも持たず、必要な技術をもまだ持っていなかった。なぜなら、労働によらずに自生してくるような食物はすでに姿を消してしまっていたし、人間のほうも、それ以前の時代にその必要に迫られることがまったくなかったために、食物を自分で入手するすべを、まだ心得るにいたっていなかったからなのだ。ともかく、このような種々の事情のゆえに、当時の人間は非常な苦境に立たされていたのだ。

D　さあ、よく聞いてくれたまえ。いま私が話したとおりの状況が誘因となって、むかし成立したいろいろな神話が伝えているように、神々のみ手からわれわれ人類に種々の恵みの品が、必要な教訓と教示とを添えて、授けられるにいたったのだ[1]。つまりまず、神プロメテウスのみ手からは火が、それから、神ヘパイストスとその技術に協力する女神[2]とのみ手からは種々の技術が、さらに、他の神々[3]のみ手からは種子と植物とが授けられたのだと伝えられている。じじつ、人間らしい生活を営むための助けとなるにいたっているすべての道具立ては、神々からのこれらの授かりものにもとづいてできあがってきたのだ。それというのも、いまさき私が述べたように、人間は神々から保護されるという幸せを失ったあげく、自力で自分の生計を立てて、自力で自分の保護を工面していかなければならなくなったからなのだ。要するに、人間のこのありさまは宇宙の全体のばあいと同様であるのだ。つまり、われわれ人類は、いかなる時期においてもかならず宇宙の一員としてその状態を反映し、かつまた、その変化に順応しているのであるから、現代にあってはいま述べたような、以前の循環期にあってはさきに述べたような、生存と誕生との方式をとることになるのだ。

E　さあ、ともかくこれで、神話にかかわる物語は終えることにしよう。そしてつぎに、「王者にふさわしい人」とか「政治家」とかの姿を明示するにあたって、どれほどの誤謬をここにいたるまでの論究のなかでわれわれが

犯したのであろうか、という問題点を洞察するために、以上の物語を役立ててみよう。私はそう思うのだ。

一七

若いソクラテス と仰せられますと、先生のお考えでは、先刻の論究のどこのところが悪かったのですか。それから、私どもが犯した誤謬のひどさは、どの程度のものであったことになるのですか。

エレアからの客人 われわれが犯した誤謬のうちには、比較的軽微なものもある。けれどもそのほかに、はなはだ重大で、その大きさも深さも当初の予想をはるかにうわまわるほどの誤謬をも犯しているのだ。

若いソクラテス どのような意味で、そうおっしゃるのですか。

エレアからの客人 まず、現在の循環期における万物の発生方式のもとで見られるような王者ないし政治家について説明を求められているのに、われわれは、万有が現在と逆方向に周行していた時代に着目して、その時代の、人間という動物群を養う牧者について論じたのだ。しかもその牧者は、いのちに限りのある者ではなくて神であったのだ。まずこの点では、正道をひどくはずれた誤りをわれわれは犯したことになるのだ。それにたいして他方では、王者が国家の全体を統治する支配者であることをわれわれは明示したのだけれども、その統治の方法がどのようなものであるかは、これを詳論しなかった。こういう点のほうから見れば、われわれ

1 神々が原始の人類に与えた種々の恵みについての類似した伝説は、すでに、プラトンの初期作品『プロタゴラス』321C～322Aなどにも見られる。

2 アテナ女神を指す。『法律』XI. 920Dを参照。

3 デメテル女神やディオニュソス神などを指す。『法律』VI. 782Bを参照。

のおこなった説明はたしかに真実ではあったのだが、やはりまだ、総体にわたる説明も明確な説明もなされるにいたっていないありさまなのだ。したがって、いまの点でわれわれが犯した誤謬は、さきの点での誤謬にくらべれば軽微だとも言えるのだ。

若いソクラテス　そのご指摘は真実です。

エレアからの客人　うん、だから、私の見るところでは、政治家が国家を統治する方法、この方法を明らかにしておいたうえではじめて、政治家というものの説明がわれわれの手によって完璧におこなわれたことになると期待すべきであるようだ。

若いソクラテス　美事なご指摘です。

B

エレアからの客人　さらにまた、さきほどの神話の物語を私が援用した意図も、じつは二つあったのだ。つまり、まず動物群飼育の仕事というものについていえば、ありとあらゆる人々が現在われわれの探究のまととなっている者(1)と競合して、自分らにもその仕事をする資格があると主張するはずだということを、あの物語が明示してくれるであろうと私は期待したのだ。それから私の意図はたんにそれだけではなくて、羊の牧者や牛飼いなどに典型的にみられるとおりの飼育を人間にたいしておこなうことに心を配っている唯一の者、ただこのような唯一の者だけが人間の理想的飼育者と呼ばれるに値するとうぜん考えられる以上、そういう理想的飼育者のありのままの姿を私はあの物語によってそれだけ明瞭なかたちにして理解したいとも思ったしだいなのだ。

若いソクラテス　正当なお言葉です。

C

エレアからの客人　ただ、私の考えるところでは、ソクラテス、さきほどの物語で見たような、神の身である

牧養者の姿などはまだ偉大でありすぎて、これこそ王者がそなえているにふさわしい姿である、などとは称されがたいのだ。むしろ、現実にわれわれの周囲で生きている政治家たちは、その資質のうえでは、神によりも、はるかに被支配者のほうに類似しているし、また、そういう政治家たちが受けてきている教育も養育も、被支配者が受けているものとほとんど差異がないのだ。

若いソクラテス　たしかに、仰せのとおりのようです。

エレアからの客人　けれども注意したまえ。政治家の資質が神と人間との資質のどちらに近いものであろうとも、政治家を探究するわれわれの熱意は強くも弱くもなるべきではないはずなのだ。

若いソクラテス　ええ、もちろんです。

エレアからの客人　さあそこで、あらためて道を引き返すことにしようではないか。われわれの先刻の主張によれば、命令の最高決定の技術とは、動物にたいして、その一頭ずつにではなくて、それを集団として扱いながら、心を配ってやるような技術のことであった。それから、あのときわれわれはどうしたのかといえば、すぐそのあとで、この技術を動物群飼育術と名づけたのだ。(2) この点をきみはたしかに覚えているだろう?

D

若いソクラテス　はい、覚えています。

エレアからの客人　こういうことをやったあたりのどこかで、われわれは大失策をやり始めていたのだ。つまり、あのときわれわれは、政治家というものをいかなる場所においても取り押さえはしなかったし、また、一連

1　王者ないし政治家を指す。

2　本篇の261Eを参照。

の名称によるそれの規定をも、じつはおこないはしなかったのだ。それどころか、われわれがそれの規定をしようとしていた最中に、いつのまにかわれわれの目を盗んで、政治家は姿をくらませてしまったのだ。

若いソクラテス　どうして、そんなことになったのでしょうか。

エレアからの客人　それぞれ自分の動物群を飼育するということは、ほかのすべての牧養者に当てがわれた仕事だとは言えようが、これはじつは、政治家に当てがわれた仕事ではないのだ。それにもかかわらず、われわれはあのとき、こういう仕事を表わす名称を政治家に付けたのだ。けれどもほんとうは、同種の者の全員に漏れなく適用できるような名称をなにか選んで、それを政治家につけるべきであったのだ。

E

若いソクラテス　仰せのとおりです。そのような理想的な名称が、あのときうまく見つかっていたらよかったのに、とは思いますが。

エレアからの客人　いや、きみ、これがわからなかったのは変だったよ。つまり、面倒をみてやるということなら、これを全員に共通の仕事だとどうぜん考えるべきではなかっただろうか。もちろん、そのさい、この仕事が飼育であるとか、なにかほかの用務であるとかなどとは、すこしもかくべつに断わらないままにしておくのだ。たしかに、当のものの全部につける総称として、動物群の世話をする技術とか、あるいはその面倒をみてやる技術とか、あるいはそれのことを心配してやる技術とかというような名称を用いておけば、われわれは政治家をもその他の関連する人々とともにその名称のなかへ包みこむこともできたはずなのだ。このようにすべきだというのが、考えてみればわれわれの論究の指令するところであったようなのだ。

一八

若いソクラテス　正当なお言葉です。それにしても、こんどは、そのつぎにおこなわれるべき分割のほうですが、これは、どのようなやりかたでおこなえばよいのですか。

エレアからの客人　前回のおりにわれわれは、動物群飼育術を、歩行動物であって無翼である動物に、さらに混血しない動物であって角を欠く動物に、つぎつぎにかかわるものとして分割をしていったのだが、これと同じ方法に従えばよいのだ。つまり、今回の動物群世話術のばあいも、この技術には現代において活用されるべきものと神クロノスの御代において活用されるべきものとの二通りがあるけれども、前回と同じ基準に従ってこの分割を進めていけば、この両方が等しく、得られるべき定義のなかに包含されうることになるだろう。

若いソクラテス　明らかにそうなるでしょう。けれども、さらに、そうなったあとの事態がどのようなものなのかを、私はぜひとも知りたいのです。

B

エレアからの客人　疑いもなく、つぎのような事態になるのだ。つまり、動物群世話術という名称がいま述べたような意味で用いられていたとすれば、王者の仕事とは「心配をしてやる仕事」のうちのひとつなどではまったくないのだ、というような異議を或る種の人々が唱えたりすることは、けっして起らずにすむことであろう。逆に言えば、「飼育と呼称されるに該当する技術などというものは、人間には無関係なのだ。また、かりに、そのような技術がなにかあるとしても、その技術にたいする請求権を持つ者は、王者となるべき人々のうちのだれよりも優先的に、かつまたいっそう正当に、王者以外のおおぜいの者であるのだ」という意味のさきほどの異議

は、適切なものであったことになる。

若いソクラテス　正当なお言葉です。

エレアからの客人　同時にまた、「われこそは、人間社会の全体のことを心配してやるという仕事をする者であるとともに、すべての人間にたいして統治権を揮うための技術であるのだ」と主張することを、王者の持つべき技術以上に強力にそして優先的に所望しうるような技術は、ほかにはなにひとつとしてあるはずはないようだ。

C

若いソクラテス　そのお言葉も正当です。

エレアからの客人　それはそうと、以上の事項を述べたうえで、ソクラテス、きみにたずねてみたいのだが、こんどは、さきほどの定義のちょうど終りのあたりで(1)われわれがひどい大失策を重ねて犯していたことが、われわれには理解できるだろうか。

若いソクラテス　どのような失策をですか。

エレアからの客人　言ってみれば、つぎのような失策をなのだ。つまりわれわれは、二足獣のつくる動物群を飼育する技術というものがじっさいにあるのだということを、どれほど強く確信していたにせよ、そうだからといってべつに、その技術をすぐ無雑作に「王者の持つべき技術」ないし「政治家の持つべき技術」などという名で呼んではならなかったのだ。あのときは、これで当の技術の定義は完全にできあがったと思いこんでいたわけだが。

若いソクラテス　すると、われわれは、どうやるべきだったのでしょうか。

エレアからの客人　まず第一に、私がさきほどから主張しているとおりに、名称の模様変えをすべきなのだ。

D このさい、「飼育する仕事」という言葉はできるだけ避けて、「世話をする仕事」という言葉のほうを使うようにするのだ。そのうえでつぎの作業として、この仕事の種類を区分していくべきなのだ。この仕事は、まだなん回も区分されうるものなのだから。

若いソクラテス それらの区分は、どのようなものになるのですか。

エレアからの客人 まず一方では、神の身である牧養者と人間の身である世話役とを、分割によって別個のものとして区分することができるだろう。

若いソクラテス 正当なお言葉です。

エレアからの客人 ついでこんどは、人間の身である統治者のほうに割り当てられた世話の技術を、さらにまた真二つに切る必要があったのだ。

若いソクラテス どのような基準を用いて切るのですか。

エレアからの客人 強圧的におこなわれる世話と自発的に受容される世話、この両者の違いを基準としてだ。

若いソクラテス ええ、よくわかります。

E **エレアからの客人** たしかにいまの点においても、われわれはさきほど誤謬を犯していたのだ。そして、王者と専制僭主とをまるきり同一視していたとは、われわれの無邪気ぶりも度が過ぎていたと言うべきであろう。ほんとうはこの両者は、その人物の点でもその統治の方法のうえでも、まったく異っているのだ。

1 本篇の267B〜Cの箇所を指す。

若いソクラテス　それに間違いありません。

エレアからの客人　だからともかく、いまここであらためて修正をして、私が述べたとおりに、その行使が強圧的におこなわれるのか、それともそれが自発的に受容されるのかの違いに応じて、人間の身である者によっておこなわれる世話の技術を真二つに分割することにしようではないか。

若いソクラテス　ぜひ、そういたしましょう。

エレアからの客人　さあそこで、われわれは、まず一方の、強圧手段を行使する支配者が用いるべき世話術を「専制僭主が持つべき技術」と呼ぶことにするとともに、他方の、自由意志にもとづいて統治を受けるような二足の動物を扱う動物群世話術であるとともに自発的に受容されることを目標としているもの、これを「政治家の持つべき技術」と呼ぶことにするのだ。そしてこのばあいさらに、この後者のほうの技術を所持して世話の仕事をおこなう者こそ、真の意味でその名に値する「王者」ないし「政治家」にほかならないのだ、とわれわれは宣言することにしてはどうだろうか。

一九

若いソクラテス　そのとおりにすべきです。それればかりか、先生、これでどうやら、政治家というものの描写は、私の見るところでは完璧なものになったようです。

エレアからの客人　ことがうまく進んでくれている、とは言えるだろう、ソクラテス。けれども、きみひとりだけがこれで満足しているのでは駄目なのだ。私もきみと共通した同一意見を抱く必要があるのだ。ところがじ

つは、私の見るところでは、王者には、まだ完全な姿が与えられていないように思えるのだ。つまりたとえば、ちょうど彫刻家が、急ぐべきではない段階で作業を急いで、必要以上に多数の、かつまた必要以上に嵩張った余分な原材料を自分の仕事用に持ちこんでくるために、その作品となるべきことごとくのものの完成を遅らせてしまうようなばあいが往々にしてあるものなのだが、いまのわれわれもちょうどこのありさまに似た状態にあるのだ。つまりわれわれは、さきほどの説明過程のなかで犯された誤謬を、早急にしかも規模壮大に明らかにしたいと望むあまり、王者の姿を描くためには堂々たる類型を眼前に据えておくのがふさわしいと信じて、異様な巨体のようなあの神話の物語を手中に取りあげて、その巨体の必要以上に大きな部分を利用する破目に陥ったわけなのだ。その結果としてわれわれは、課せられた描写の仕事を長大でありすぎるものにしてしまっているし、また、当の神話の物語の趣旨のほうにも、けっきょくは決着をつけるにいたらなかったありさまなのだ。逆に、われわれの論究は、まるでなにかの動物の絵のばあいにそっくりであって、その外側の輪郭は申しぶんなくできあがっているようには見えても、絵の具を塗りつつ色彩を巧みに調和させていくことによって得られるような明瞭な生彩は、そこにはまだ欠けているようなのだ。

それはそうと、どのような動物の姿を明らかにしようとするばあいにも、絵画をはじめとするさまざまな手仕事の部類に頼るよりは、言葉を用いる論究というものを手段とするほうが、その論究の意味を一歩一歩理解していくことができる人々にとっては適切なのだ。そのような理解をしていくことができない残余の部類の人々にとっては、種々の手仕事を手段とするほうがよいのだが。

若いソクラテス　その点のご指摘はたしかに正当ですが、われわれがおこなった論議のなかのどの点がまだ不

B

C

十分であるとお考えになっているのかを、つぎに明らかになさってください。

D **エレアからの客人** あのねえ、まるで神霊にも似たきみが相手だから言うのだが、いろいろな類例を用いずには、なににせよ重大な意味をもつような部類のことがらを申しぶんなく明瞭に示すことは困難なのだ。だから注意してくれたまえ。下手をすると、われわれのうちのだれのばあいでも、夢のなかではあらゆることを知っていたのに、こんどは醒めてみたら、逆に、あらゆることに無知であるというようなありさまになっている可能性があるのだ。

若いソクラテス そのお言葉は、どういう意味なのですか。

エレアからの客人 いやたしかに、私のいまの言葉は、知識というものを得ようとするばあいの、われわれの現在時点での精神状態を簡明に表現する言葉のつもりであったのだが、どうもやはりきわめて不可解であったようだ。

若いソクラテス いったい、なにをおっしゃるつもりなのですか。

エレアからの客人 きみに話しづらい気がするのだが……あのねえ、私が用いようと思っていた類例は、それだけでは不十分なので、さらに、べつの類例を必要とするにいたっているのだ。

E **若いソクラテス** ともかく、どのようなお話なのですか。私を退屈させたくないというようなご配慮は捨てて、しりごみなどはなさらずに、おっしゃってください。

二〇

エレアからの客人　そうだねえ、きみが私の話にどこまでもついてきてくれる熱意を示している以上、私は話さなければなるまい。そこでだが、子供たちが字母をちょうど覚えはじめている時分のありさまは、だれでも知っているとおり、ほら、あのようなぐあいなのだ。

若いソクラテス　どのようなぐあいなのですか。

エレアからの客人　子供たちは字母のひとつひとつを、それが、きわめて短くてきわめて簡単な音節のなかに含まれているばあいには、眼で見ればすぐに十分正確に区別する。そして、そういうばあいだけであれば、それらのそれぞれがなんという字母なのかを、誤りなく述べることができるようになるのだ。

若いソクラテス　ええ、もちろんそうです。

エレアからの客人　ところが、これらの同じ字母でも、さきに親しんだもの以外のいろいろな音節のなかに含まれているばあいには、子供たちは、また以前のように戸惑いを感じて、当の字母について思い違いをしたり説明を間違えたりするものなのだ。

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　では、子供たちに、まだよく理解していない字母をもっとも容易にそしてもっともりっぱに覚えさせるには、つぎのようにすればよいのではないだろうか。

若いソクラテス　どのようにすればよいのですか。

エレアからの客人　子供たちが、たったいま私も指摘したように、いろいろな字母を正しく理解していたばあいの音節がいくつかあったわけであるが、子供たちを、まず第一にこれらの音節に、あらためてよく注意させる

のだ。それから、このようにあらためて注意させたうえで、子供たちがまだ十分にはよく理解していない字母の B 結合体のまえへ、子供たちをつれてくるのだ。そして、これら両種の、理解されているほうと理解されていないほうとの結合体のいずれにおいても、そこに含まれている字母ががんらいはたすべき機能は類似した同一不変なものなのだということを、比較を繰り返すことによって子供たちに呑み込ませるのだ。このような指導を続けていけば、ついには、字母の結合体のうちの、子供たちが知らないものの全部のわきに、子供たちが正確に理解している結合体が、並べて示されるにいたるはずだ。そして、この後者の結合体は、このようなかたちで示されるときはじめて、類例というものになってくるのだ。その結果、子供たちは、どのような字母がどのような音節のなかに含まれていようとも、そのそれぞれを見るとき、それが残余の字母とは相違した字母であればその相違を C 理解したうえで、また、それが同一な字母であればつねに自身と同一の状態にあるものとしてのそれの同一性を理解したうえで、その名を挙げうるようになるはずだ。

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　では、以上によってわれわれが十分に理解するにいたっていることがらはといえば、それは、類例というものがつぎのようなばあいにできあがる、ということではないだろうか。つまりそれは、問題となっている事象とは別箇の截然と区別された事象のうちに同一物として現れるものがあるとき、これが正しく理解されたうえに、さらに両事象を比較対照するための基準とされることによって、対（つい）をなしたものの片方となるどちらの事象にも妥当するような一まとまりの観念を作りあげる、というようなばあいなのだ。

若いソクラテス　明らかにそのとおりです。

D

エレアからの客人　すると、さあ、つぎのことはどうも不思議なことだ、とわれわれは思うべきであろうか。つまり、われわれの精神は、万物を構成する字母とも称すべきもの[1]を問題とするとなると、えてして、私がさきに述べたとおりの、同じ哀れな状態に陥りがちなのであって、或る面からこれを考究するさいには、真理の助けを得て、箇々の点にかんしても強固な安定性を示すかとおもえば、その他のいろいろな面からそれを考究するさいには、こんどは逆に、あらゆる点でぐらついて、とりとめがつかなくなるようなばあいもある。言いかえれば、そういういろいろな字母の或る種の結合のようすについては、われわれの精神は、どうにかこうにか正しい理解をするのであるが、現実の実在を構成する長大で把握の困難な音節のなかへそれらの同じ字母が移されると、これらの字母については、またもとの無知な姿へもどるのだ。

若いソクラテス　そのとおりです。いまのお話は、すこしも不思議なことではありません。

E

エレアからの客人　してみると[2]、きみのいまの答からもとうぜん予想されることであるが、誤った臆見などから出発しようものなら、真理のどれほど小さな部分にせよ、ともかくそういったものへ到達して、明知を入手するにいたるようなことなどは、とうてい不可能だろう？

若いソクラテス　ええ、まずぜったいに不可能でしょう。

エレアからの客人　以上のことがほんらい言えるとすれば、私ときみとが、特殊で些細な別種の類例のようすを調べながら、総じて類例とはどのようなもののことなのかを理解しようとあらかじめ試みておいたことは、た

1　イデアを指す。

2　シュタルバウムとキャンベルとに従って、πῶς ἄρ' と読む。

279

しかに筋のとおった処置であったと見るべきではないだろうか。なぜなら、われわれがこれから試みようと思っていることはといえば、それは、なにかの手頃な分野を見て入手した知識を、最高に重要なものとして聳え立つ王者の特質のばあいにも適用していきながら、国家の全般にたいしての王者による配慮というものを、あらたに類例を用いることによって学術的な方法で把握することなのだから。つまり、われわれが目ざすところは、夢幻の影像のかわりに、白昼の真実自体を見ることだとも言えるのだ。

若いソクラテス　まったく仰せのとおりです。私としては異存はありません。

エレアからの客人　さあでは、さきほどの[1]論究の続きに、あらためてとりかからなければならない。つまり、王者にふさわしい人の種族と競合して、自分らにそれぞれ各地の国家の面倒をみる資格がある、と主張している連中が無数にいる以上、これらの全員を遠ざけて、王者だけを手もとに残すようにする必要がある。いや、まさにこの作業を進めるためにこそ、われわれはしかるべき類例を必要としている、と私はさきに主張したしだいなのだ。

若いソクラテス　たしかに、そのとおりです。

二一

エレアからの客人　さあでは、われわれは、政治家の持つべき技術と同じ働きかたをするようなものであれば、きわめてささやかな技術でよいのであるが、ともかく、なんという技術を類例としてこれを比較のために眼前に

B

据えれば、われわれの探索の目標物をうまく発見できることになるだろうか。さあ、ソクラテス、きみの意向を

私はほんとうに真剣な気持で知りたいと思っているのだが、なにかほかの類例がわれわれの手もとになければ、しかたがないからわれわれは機織り術をでも選んで、これを利用することにしようか。とはいっても、きみが同意してくれれば、機織り術の全体を利用する必要はないのだが、どうだろうか。つまり、羊毛製の織物を作る技術だけで、おそらくことたりるはずだから。いやたしかに、機織り術のこの一部分だけを選んで利用すれば、われわれの考究に必要なだけの確実な論拠は、たぶん得られるはずなのだ。

若いソクラテス　ええ、私はそのご提案に、もちろん同意します。

エレアからの客人　うん、だからとうぜん、われわれのとるべき方法ははじめからきまっているのだ。つまり、さきほどの考究にさいしてわれわれは、いくつもの構成部分をつぎつぎに切断していきながら、その切断の各段階で現れるものを分割したわけであるが、今回の機織り術のばあいにも、やはりちょうどそれと同一の作業をおこなうべきなのだ。そして、力のおよぶかぎり手短かに、またできるだけすす早く万事を点検したうえで、いまの考究に必要な論点へ、あらためてもどるようにすべきなのだ。

C

若いソクラテス　そのお言葉は、どういう意味なのですか。

エレアからの客人　私が説明を進めていけば、それがおのずから、きみのいまの質問にたいする返答になってくるだろう。

若いソクラテス　まことに素敵なお言葉でした。

1　本篇の268C～Dおよび275A～277Cの箇所を指す。

(279)

エレアからの客人　さて、それでは話してみることにすると、われわれが製作したり取得したりしている物品の全部は、そとへなにかの作用をおよぼすことを目的とするものと、困った作用をそとから受けることがないようにするための防衛用具とに分けられる。さらに、防衛用具のうちには、天与のおよび人造の予防用妙薬と、防護物とがある。そして、防護物のうちには、戦争で用いるための武器と、周垣(しゅうえん)用具とがある。さらに、周垣用具のうちには、遮蔽幕と、寒気および熱気を防ぐ掩護用具とがある。そして、そういう掩護用具のうちには、家屋類と、個人身体用保護物類とがある。さらに、個人身体用保護物類のうちには、敷物類と、衣服類との別がある。そして、衣服類のうちには、全一枚布類もあれば、それとはべつに、若干枚の布から成るものもある。そして、若干枚の布から成るもののうちには、穴をあけたところを用いて結び合わせたものと、穴をあけたところを用いずに一体化されたものとがある。さらに、穴のついていない衣服類のうちには、大地から生える植物の繊維で作ったものと、毛髪類で作ったものとがある。そして、毛髪類で作った衣服類のうちには、液体類や漂布土を使って接着させて作ったフェルト類と、当の原料だけをたがいに編み合わせて一体化されたものとがある。

D E

さあ、この最後に挙げたような、当の原料だけを編み合わせて結合したものをなん枚か使って作製された防衛用具としての個人身体用保護物類、これにわれわれは「着物」という名称を当てることにしているわけなのだ。そこでこんどは、かくべつに着物類のことを心配してやる技術はといえば、ちょうどさきほど、国家(ポリス)のことを心配してやる技術を「政治家の持つべき技術(ポリーティケー)(1)」とわれわれが呼んだ先例にならって、こんどの技術のばあいも同様に、これを、それがかかわる具体的物品そのものの名にもとづいて、「着物製作術」と命名することにしてはどうだろうか。

280

それからまた機織り術はといえば、これが着物類の作製に関係するきわめて役割の大きな構成要素であることはさきほども一言しておいたとおりであるが[3]、いずれにしてもともかく、これは着物製作術とわずかにその名称だけが異るにすぎないという点を、ここでわれわれははっきりさせておこうではないか。要するに、この二つの技術の関係は、先刻の論議のおりに[4]「王者の持つべき技術」が「政治家の持つべき技術」とほとんど同義であったあのありさまに似ているのだ。

若いソクラテス　そうです。このうえなく正当なお言葉です。

エレアからの客人　さあ、以上を話しておいたうえで、ここで、その話のまとめとしてよく考えておきたいことがあるのだ。つまりこういうことなのだ。着物類を作る機織り術というものは、以上のように説明されることによって十分に説明されつくした、と考えるような人がたぶんいるかもしれないのであるが、そういう考えかたというものは、この技術を、これと密接に協力するいろいろな技術からわれわれはまだ区別するにいたっていないということ、――このことを、その人が理解しえないばあいに生まれるのだ。もちろん、この技術は、自分以外の相当多数の同類の技術からは、すでに切り離されてしまっているのだけれども。

B

若いソクラテス　先生、どのような同類の諸技術からなのですか。おっしゃってください。

1　「ポリーティケー」は、「ポリス」の派生語としての意味を重視して訳せば、「国家統治の技術」となる。したがってまた、政治家という語をその原語「ポリーティコス」の直訳によって示すとすれば、それはほぼ「国士」となる。

2　本篇の279Bの箇所を指す。

3　ギリシア人の衣服は布地をそのまま身体に巻きつけるようなものであったから。

4　本篇の259B～Cや274Eなどの箇所を指す。

二二

エレアからの客人　どうも見たところ、きみは、私がいま述べたことをひとつひとつ理解していかなかったようだな。そんなぐあいだと、そのまえの論究が終ったところからあらたに話し始めることにして、あともどりをするほうがよいのではないかと私は思う。つまり、ほら、私がいろいろ挙げた事物のあいだの親近関係をきみがよく理解していればわかることなのだが、われわれは衣服類を織る当の仕事から、たったいままずあれを分離したはずだ。あの、種々の敷物を作りあげる仕事をだ。そのさいの区別の基準は、当の製品が身体のまわりに纏わ(まと)れるものであるのか、それとも足下に敷かれるものであるのかという違いであった。

若いソクラテス　ええ、それはわかります。

c **エレアからの客人**　それからさらに、亜麻や、エニシダの皮層や、その他、私がたったいま相互のあいだの類似関係にもとづいて植物の繊維類と呼んださまざまなものがあるわけだが、これらを用いておこなわれる製作作業は、さきほどわれわれの手でことごとく除外されてしまったはずだ。また他方では、フェルト類の製造作業と、それから穴をあけたところや縫い目などを用いておこなわれる接合作業とをわれわれは分離したはずだ。こうした接合作業の主要なものは、靴類作製術がおこなうべきものなのだから。

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　またさらに、全一枚製品の個人身体用保護物類を仕上げる仕事のひとつである鞣皮(なめしがわ)の技術を、さらに、家屋類を作る技術を、いいかえれば、建築術をはじめとする大工工事術の全体のうちにもその他の

種々の技術のうちにも含まれてくるかぎりでの水流の侵入を防ぐ諸技術の部類を——ともかくこういうすべての技術を、われわれはさきほど除外したはずなのだ。また、周垣用具のうちの窃盗や暴力行為を防止するのに適した器具類、このような器具類を調達してくれるような種々の技術は、つまりたとえば蓋類を工作する作業の工程とか戸口類の取付け工事とかに従事する技術などは、ことごとく指物師の持つべき技術の分野を形成する構成要素だと言えるのだが、これらもまた、さきほどわれわれの手で排除された技術のうちに含まれるのだ。また、武器製造技術をもわれわれはさきに切り離したわけだが、この技術は、防護物製作にかかわる偉大で多様な技能のひとつの切片をなすと言えるのだ。それからさらにまた、予防用妙薬を扱う魔術はといえば、この話の始めのところで、(1)ただちにわれわれはこれを完全に除去したはずだ。だからわれわれは、だいたい確信を持ちうるところを述べてみると、われわれが探索していた技術だけを、つまり寒気を防ぐのに適した技術であるとともに羊毛製の防護物を作製する技術でもあるようなものだけを、以上の考究の結果として手もとに残していることになるのだ。もちろん、この技術を一箇の名称で呼ぶとすれば、これこそ「機織り術」だということになる。

D

E

若いソクラテス ええ、どうもそうなるようです。

エレアからの客人 けれどもだ、きみ、教えてあげよう。まだこれだけでは、われわれの説明は完璧にはなっていないのだ。よく聞きたまえ。最初の工程のところで着物類の作製作業に手をつけるようなことをすると、われわれは機織り仕事とは反対の作業をしているようなかっこうに見えることになる。

281

1 本篇の279C〜Dの箇所を指す。

だ。

若いソクラテス　どうしてですか。

エレアからの客人　まず、機織り仕事というものの実質は、どうも、一種の編み合わせをすることであるようや圧縮されているものなどの繊維を解きほぐす作業なのだ。

若いソクラテス　はい、そうです。

エレアからの客人　ところが、着物類の作製作業の最初の工程は、もつれて結合された状態になっているもの

若いソクラテス　それは、いったいどういう作業のことなのですか。

エレアからの客人　毛梳き(す)をおこなう職人の技術がはたすべき仕事のことなのだ。それはそうとここできいておきたいのだが、われわれはひとつ勇気を出して、毛梳き術を機織り術と呼び、さらに、毛梳き職人を、まるでその真実の呼び名を使っているようなつもりにでもなって、機織り職人とでも呼ぶことにしようか。

若いソクラテス　いいえ、それはぜったいにだめです。

エレアからの客人　では、さあこんどは、縦糸や横糸を作製する技術に機織り術という名をつける者がもしもいるとすれば、その者は、途方もない偽りの名称を口にしていることになる。

B

若いソクラテス　ええ、もちろんそのとおりです。

エレアからの客人　さあ、それからつぎは、布の縮充術という部類の全体や修繕裁縫術だが、きみ、どちらにしようか。つまり、これらはいかなる意味においても衣服類を仕上げることに心を配る仕事などとは無関係だ、とわれわれは考えておくことにしようか。それとも、これらはどれもみな機織り術だ、とでも主張してみること

にしようか。

若いソクラテス　いいえ、ぜったいにそんな主張はできません。

エレアからの客人　そうだろう? だが、それにもかかわらず、これらの技術は、その全部がことごとく、機織り術の技能と競合しながら、着物類の作製にあたってその面倒をみる資格が自分らにもあると主張するであろう。つまり、これらの技術は、機織り術が当の分野において最大の部分を占めていることは認容するであろうが、同時にまた、自分ら自身のものとして、それぞれ、その大きな部分を請求することであろう。

C **若いソクラテス**　ええ、たしかにそうでしょう。

エレアからの客人　さらにまた、これらの技術に加えて、機織り仕事による製品を完成するための手段として用いられる工具類がいろいろあるわけだが、そういう工具類の製作者となる種々の技術もやはり、われこそはあらゆる織物の生産のためのすくなくとも補助原因としての資格をとうぜん持っている者だ、という自己主張をするにきまっているのだ。たしかに、そう考えておかなければならない。

若いソクラテス　このうえなく正当なご指摘です。

エレアからの客人　では、きみ、どちらにすべきだろうか。つまり、機織り術、いや、もっと正確に言えば、われわれが選んで利用したそれの一部分、これについてくだされるべき定義をわれわれが確定するにいたるためには、この技術を、羊毛製の衣服類にたいして心を配るすべての仕事のうちのもっとも高貴でもっとも重要なもの、とでも見なすことにしさえすれば、それだけではたして十分であろうか。それとも、そうではなくてむしろ、
D いま私が述べたような規定は或る程度は真実なものではあっても、やはりまだ明確なものではなく、ましてや完

璧なものではありえないのではなかろうか。明確と完璧とに到達しうるためには、われわれは当の技術から、その周辺に群がるいまいくつか挙げたような技術の全部を、あらかじめ遠ざけてしまわなければならないのだ。

若いソクラテス　正当なお言葉です。

二三

エレアからの客人　では、以上の指摘をしておいたうえで、いま私があらかじめやっておくべきだと言った課題を、はたすことにしなければならない。われわれの論究が順を追ってうまく進行していくようにするためには、そうすべきなのだ。

若いソクラテス　ええ、ぜひともそうすべきです。

エレアからの客人　それでは、なにを作りあげるばあいにも、活用されるべき技術には二とおりのものがあることを、われわれはまず最初に見きわめておこうではないか。

若いソクラテス　なにとなにとの技術があることをですか。

エレアからの客人　そのひとつは生産の補助原因となる技術であり、他方は直接的に原因となる技術なのだ。

若いソクラテス　その区別を説明してください。

E

エレアからの客人　まず一方では、当の物品そのものの製作はしないけれども、製作をおこなう諸技術のために道具類を調達してやるような技術がいろいろとあるのだ。だから、こういう部類の技術の補助を借りないと仮定すると、他方のおのおのの技術は、自分にたいして指示された物品を作製することがけっしてできないことに

282

なるだろう。そこでだが、こういう種類のいろいろな技術の全部が補助原因となる技術であり、他方の、当の物品そのものを作りあげるいろいろな技術が、ほんらいの原因となる技術だということになる。

若いソクラテス　ともかく、なかなか理屈にかなった説明をなさいました。

エレアからの客人　だからつぎに、機織り術のばあいも同様に、まず一方には紡錘（ぼうすい）とか機織りの筬（おさ）とかをはじめ、ほかにもいろいろ人体を包む衣類の生産に参与する道具類があるのだが、これらを作る諸技術の全部を、われわれは補助原因となる技術と呼び、それにたいして、いま言った衣類そのものを扱ってこれを製作するほうの諸技術を、原因となる技術と呼ぶことにしてはどうだろうか。

若いソクラテス　このうえなく正当なご提案です。

エレアからの客人　また、原因となる諸技術のうちには、洗濯術や整備裁縫術をはじめとして、衣類の面倒をみる技術もことごとく含まれているわけであるが、こうした衣裳美飾術というものは多種多様にわたっている以上、この分野に所属するとともに当の機織り術(1)をかたちづくるはずのひとつの構成要素を、衣服類仕上げの技術という名称で呼んでまとめあげるのが、なによりも適切な処置であろう。

若いソクラテス　美事におまとめになりました。

エレアからの客人　それからさらに、毛梳き術や糸紡ぎ術に加えて、衣服類の作製そのものにたずさわるわざの全部は、つまりわれわれがいまそれの構成部分をいろいろと挙げている作製作業(2)にたずさわるわざの全部は、

1　この箇所へのキャンベルの注釈には従わない。

2　〔羊毛製の〕衣類の製造作業を指す。

その名称が世間でいま広く用いられているもののひとつである一まとまりの技術、つまり「羊毛紡績術」として一括されることになる。

若いソクラテス　ええ、もちろんそのとおりです。

B

エレアからの客人　さあそこでなのだが、この羊毛紡績術は二箇の切片に分かれているのだ。さらに、これら二箇の切片のおのおのは両方とも、二箇の技術の部分となるような諸技術からがんらい成りたっているのだ。

若いソクラテス　それは、どういう意味ですか。

エレアからの客人　毛梳き仕事と、機織りの筬(おさ)を操作する技術の半分と、もつれ合っている糸を相互から分離するすべての仕事類、これらの全体を一括して、これが当の羊毛紡績業そのものの分野に所属するものだ、と指摘することが可能なようだ。それから、いまのばあいにかぎらず、あらゆるものについて適用されうる広範囲な二つの技術を、ほら、われわれは区別しておいたはずだ(1)。つまり、結合する技術と分離する技術とをだ。

若いソクラテス　はい、そうでした。

エレアからの客人　だから、分離する技術の範囲に所属するのが、あの毛梳き術をはじめとする私がいま挙げた技術の全部なのだ。つまり、原料の羊毛を分離する技術は手を用いることによって活用され、糸を分離する技術は機織りの筬を用いることによって活用される以上、おのずからその活用の方式はそれぞれのばあいで異なることになるわけであるが、ともかくこの分離の技術には、私がちょうどいま挙げたようないろいろな下位の諸技術の名称がつけられているのだ。

C

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

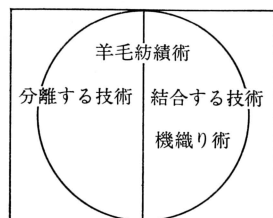
エレアからの客人　さあ、こんどはまたもとの話へ帰って、結合する技術というもののの構成要素であると同時に羊毛紡績業の領域内にもこれの構成要素として含まれてくるような、そういう技術とはどのようなものになるのかを、われわれは問題にしてみよう。そして、分離する技術の範囲に所属していながらこの羊毛紡績業の領域内でいま見いだされたいろいろな技術のほうは、これを全部、手放してみることにしよう。(2) さあこうすれば、われわれは羊毛紡績業を、分離の仕事をするほうと結合の仕事をするほうとの二つの切片に分けて、これを真二つに切ることになるのだ。

若いソクラテス　その分割だけなら、いますでに完了しているのだと考えておくことにしましょう。

エレアからの客人　うん、だからこんどは他方の、結合する技術の構成要素であると同時に羊毛紡績術の構成
D 要素にもなっているような技術なのであるが、これを、ソクラテス、われわれは分割する必要があるのだ。われわれが追求の目標として前提している機織り術というものを完全にうまく把握しようというのが、われわれの目ざすところなのだから。

若いソクラテス　そうですとも。たしかに、そうする必要があります。

エレアからの客人　そうだろう？　たしかに、そうする必要があるのだ。そこでだが、当の結合する技術が撚(よ)

羊毛紡績術
分離する技術　結合する技術
機織り術

1　たぶん、本篇の281Aの箇所を指す。
2　エレアからの客人の、この前後における言葉に見られる諸技術の関係は、右のように図示すれば、きわめて明瞭に理解されうる。

る技術と編み合わせる技術との二つの部分に分けられることを、われわれはここで断定しておくことにしようではないか。

若いソクラテス　では、先生、私はつぎのように考えておけばよいわけでしょう？　つまり、縦糸を作製する技術のことを、先生はどうも撚る技術と呼んでおられるように私には思えるのです。

エレアからの客人　うん、それもだが、それだけではなくて、横糸の製造術もそこに含まれているのだ。いや、きみはどう思う？　撚る仕事をしないで横糸を作るような方法が、なにか見つかるものだろうか。

若いソクラテス　それは、ぜったいに見つかりません。

E

エレアからの客人　さあでは、いま問題の二つの技術のおのおのを、きみがもっと細かく区分してみたまえ。かならずや、私がいまきみに命じているとおりの細かな区分をすることが、きみにとってこの段階の考察を進めるためのちょうどふさわしい援助となるにちがいないようなのだ。

若いソクラテス　どのように区分すればよいのですか。

エレアからの客人　私がいまから述べるようにすればよいのだ。毛梳き術を活用した結果としてできあがる製品のうちで、適当な長さを与えられるとともに幅をも持つにいたったものは、一般に、梳毛糸（そもうし）と呼ばれているだろう？

若いソクラテス　はい、そうです。

エレアからの客人　さあそこで、紡錘に巻きつけながらこの梳毛糸を撚りあげると、堅く引き締った紡績糸ができあがるわけだが、この紡績糸をきみに縦糸と呼んでもらうことにしよう。そしてさらに、これの製作を主宰

する技術が縦糸紡績術であるのだと主張してもらおう。

若いソクラテス　承知しました。

エレアからの客人　それにたいしてこんどは、緩（ゆる）く撚り合わされてはいるけれども、あとで布仕上げをするさいに引張りをしてみても破れない程度の強さだけは持つように配慮されて作られていて、縦糸のなかへ織り込まれるのに適するように柔らかさを保持している紡糸類がいろいろあるのだが、これらすべてをわれわれはとりあえず横糸とでも呼び、同時にまた、この種の糸類の調達を司る技術が横糸紡績術であるのだと主張することにしようではないか。

283

若いソクラテス　このうえなく正当なご主張です。

エレアからの客人　そうなのだ。たしかに以上で、機織り術の範囲に所属していてわれわれがさきほど考究の目標として選んだ部分は、だれの眼にもいまや明瞭な姿のものになってきた。つまり、結合する技術の構成要素であるとともに羊毛紡績業にも関係するような技術が、横糸と縦糸とを均一に織り合わせることによって織物を作りあげていくばあいにはいつも、われわれはその織られたもののすべてを羊毛製の衣服類と名づけ、また、こういう織物をつくることにたずさわる技術を「機織り術」と名づけるならわしなのだ。

若いソクラテス　このうえなく正当なお言葉です。

二四

B

エレアからの客人　よしきた。さあそこで、きみに聞いてみたいのだが、われわれはさきほど、いったいぜん

たいなぜ、「機織り術とは、横糸と縦糸とを織りあわせる技術のことだ」といきなり返答するようなことを避けて、あれほどの遠回りをしながら歩きまわり、その道中でこのうえなく多数のものごとをとりあげて、無意味な区別を重ねたりしたのだろうか。

若いソクラテス　いいえ、先生、われわれが論じたかずかずのものごとのうちには、ひとつとして無意味に論じられた事項はなかった、と私としては考えていました。

エレアからの客人　なるほど、いまきみがそう考えるのは、べつに不思議なことではない。けれど、きみほどの青年でもだよ、将来は考えが変わるかもしれん。さあそこでだが、なにか無意味な論議がなされたのではないかと案じるような心の病気が、こんごなん年も経ったあとで、そうなってもすこしも驚くにたらぬことなのだが、ともかく、きみをどうも襲ってきそうな可能性があるようだ。だから、きみはいまから、この病気にたいする備えをしておく必要がある。その意味で、そういう厄介な問題が生じたばあいにそなえて、一般的に与えられるに C ふさわしい教訓のようなものを、ここできみに聞いておいてほしいのだ。

若いソクラテス　それを、ぜひともおっしゃってください。

エレアからの客人　ではそれを話してみると、いまわれわれがやっているような談論をするにさいして、論議が必要以上に長すぎたり短かすぎたりしたばあいに、一定の準則に照らして、これを称賛したり非難したりすることができるようになるために、われわれは「超過」という事態や「不足」という事態を全般的なかたちで捉えて、これらの意味を吟味することから始めようではないか。

若いソクラテス　ええ、たしかに、そうしなければなりません。

エレアからの客人　そこでだが、われわれの論究が正しく進んでいきうるためには、つぎに私が挙げるようなものごとについて考察しなければならぬと私は思うのだ。

若いソクラテス　どのようなものごとについてですか。

D

エレアからの客人　長さとか、短かさとか、さらに、あらゆる種類の「超過」および「不足」についてだ。つまり、ほら、測定術というものは、こういうものの全部を取り扱う技術のことであるようなのだ。

若いソクラテス　はい、そうです。

エレアからの客人　それではわれわれは、この技術を、二つの部分になるように分割しようではないか。さあ、よく聞きたまえ。現在われわれが熱心に追求している目標物へ到達しうるためには、この分割が必要なのだ。

若いソクラテス　その分割というのはどのようになされるべきなのかを、おっしゃっていただきたいのですが。

エレアからの客人　その分割は私がいまから説明するとおりにおこなうべきなのだ。つまり、分割の結果としてできる一方は、事物を相互に比較しあって、それらの事物が「大」に関与しているとか「小」に関与しているとかを定める仕事にたずさわる技術なのであり、他方は、製作作業というものがそもそも成立しうるための絶対必要不可欠な基準を示す仕事にたずさわる技術なのだ。

若いソクラテス　そのお言葉は、どういう意味なのですか。

E

エレアからの客人　とうぜんの理に従って考えるなら、大きいほうのものは、ひとえに小さいほうのものと比較してみてこそ、これを大きいほうのものと呼ぶべきなのであり、さらに他方では、小さいほうのものを小さいほうのものと呼びうるためには、これを大きいほうのものと比較すべきであって、ほかのなにものとも比較すべ

きではないのだ。きみも、そのとおりだと思ってくれるはずだ。

若いソクラテス　はい、そのとおりだと私は思います。

エレアからの客人　さあ、ところが他方では、口にされるいろいろな言葉のうちにも、あるいはまた現実におこなわれるいろいろな行動のうちにも、適正な限度を示す厳格な基準を超過していたり、あるいはその基準を下回っていたりするもの、こういうものもやはり、われわれの周囲に見かけられるのだ。まさにこの点をわれわれはいつでもこころよく認めるのではないだろうか。というのも、とりわけこの種の過不足によって、われわれ人間のうちに、劣悪な者と優秀な者との差異が生じているのだから。

若いソクラテス　明らかにそのとおりです。

エレアからの客人　してみると、以上で指摘したとおり、大きいとか小さいとか言われるものの本質的な意味と、そういうものについての判定のくだしかたとは、それぞれ二とおりあるのだと見なすことにしなければならない。つまり、事物のあいだの私がはじめに述べたような相互比較だけにもとづいて、それらを大きいとか小さいとかと判定すべきではないのであって、いまそのあとで述べておいたとおりに、一方には、事物のあいだの相互の比較にもとづく判定の方法がありはするけれども、他方にはまた、適正な限度というものとの比較にもとづく大小の判定の方法もある、——むしろ、このように考えることにしなければならないのだ。そこでだが、なにゆえにそうしなければならないのかを、われわれはつぎに深く理解することを望むべきであるようだ。そうだろう？

若いソクラテス　ええ、もちろんです。

284

エレアからの客人　その理由はといえば、総じて大きいほうと言える部類のものを、ただ小さいほうのものとだけしか比較することを認めないばあいには、適正な限度との比較対照ということは、ぜったいに不可能になってくるはずだからなのだ。たしかにそうだろう?

若いソクラテス　ええ、そうなってくるでしょう。

エレアからの客人　すると、われわれは、そういう見地にでも立とうものなら、その結果として、いろいろな技術自体はもちろんのこと、それらの技術が作り出す種々の作品をも、完全に破壊してしまうにいたるであろう。そればかりか、われわれはそのさいには、こうして現在探索している「政治家の持つべき技術」をも、さらに、さきに論考しておいたあの機織り術をも、抹殺するにいたるのではないだろうか。いやたしかに現実を見ればよくわかることであるが、こういういろいろな技術の全部は、各種の作業をするにあたって、適正な限度以上のことをおこなうことも、それ以下のことをおこなうことも、これを自分に無関係なこととは考えずに、逆にこれをまことに有害なことと考えながら、自分の管轄する作業を厳重に監視していると言えるようだ。そして、いかなる技術にせよ、それが仕上げている作品のうちの優秀で美事だと見なされうるすべてのものは、まさにこのような考えかたをとりながら、技術が適度というものを厳守して作るものだけなのだ。

B

若いソクラテス　そのとおりです。

エレアからの客人　さてそこでなのだが、「政治家の持つべき技術」をわれわれが抹殺するばあいには、「王者の持つべき知識」のこんごの探索にあたっても、われわれは前進の手段に窮するにきまっているのではないだろうか。

若いソクラテス　ええ、きっとそうなるでしょう。

エレアからの客人　だからここで、ひとつ考えてみてくれたまえ。つまり、われわれは以前に、ソフィストについて論じたおりに、必然の論理を用いて、「有らぬもの」でも「有る」のだと確定したはずだ。それは、このものを理解しようとする段階にきたとき、そう考えることにしなければ、当の論究はわれわれの手で収拾がつかなくなってしまったからであった(1)。だからまた、現在の考究にあたっても、この先例にならうことにして、いま問題の「多すぎるもの」とか「少なすぎるもの」とかについても、これらが測定されうるものとしての処理を受 c けることは、それらを相互に比較してみるさいにのみ可能なのではなくて、適正な限度に合致したものを作りだすことを目ざすさいにもやはり可能なのだという点、——この点をわれわれは、必然の論理によって確定しておくべきなのだ。たしかに、この点にかんする万人の一致した同意が得られないとなると、政治家というものにしても、その他一般にいかなる種類の者にしても、ともかく行動の部類にかかわるいろいろな事項を熟知した人間というものが、いかなる異論をも受けることなく識者として通用するようなことは、どう見ても不可能になってくるのだ。

若いソクラテス　ええ、ですからこのたびも、以前の考究のおりに示されたとおりの先例に、できるかぎり従うようにしなければなりません。

二五

エレアからの客人　いや、ソクラテス、われわれがこんどおこなうべき仕事は、あのときの仕事よりもさらに

大変なのだ。もちろんあのときの仕事にしても、それがどれほど厄介なものであったかは、まだわれわれの記憶に新しいことだけれども。――それはともかくとして、われわれがいま当面している問題については、つぎに示すような点をあらかじめ確定しておくことが、まことに正当適切な処置となるのだ。

D

若いソクラテス　どのような点をですか。

エレアからの客人　将来、われわれが厳密な最高真理自体を明瞭に示していくような仕事にとりかかることがあるなら、(2)「大」や「小」などの意味について私がいま説明した点がそのさい必要となることであろう、という点をなのだ。そこで、現在われわれに与えられている課題を解決しようという目的で、われわれがりっぱにそして十分に指摘してみせた点を、ここで念のためにもう一度強調しておくと、われわれを壮大な規模で援助してくれるような原則について、私は以上で説明したつもりなのだ。この原則に従えば、われわれは、種々の技術の全体が存立することを確信するばあいには、それと同時にまた、事物を大きいほうのものであるとか小さいほうのものであるとかとして測定する作業が、それらを相互に比較してみることによってのみ進められるべきではなくて、適正な限度に合致したものを作りだそうと目ざすさいにも進められるべきなのだ、という点をも同じように強固に確信しなければならないのだ。

つまり、この適正な限度というものに合致したものが存立するなら、種々の技術のほうも存立するのだ。逆に、

1　『ソピステス』241D～Eを参照。

2　プラトンが『哲学者』という対話篇を書こうという意図を当時抱いていたらしいことが、この言葉からも察知されうる。

この後者が存立するなら、前者もまた存立するのだ。だから、これら両者のどちらか一方が存立しないなら、それらは両方とも存立しないことになるはずなのだ。

若いソクラテス　それは正当なご指摘です。それにしてもそのつぎにわれわれは、いったいなにをなすべきなのでしょうか。

E

エレアからの客人　明らかに、きみ、われわれは前述のとおりにこの測定術を分割していくべきなのだ。つまりわれわれは、さきほども私が説明したようにこの技術を真二つに切っていくことになるのであるが、この測定術を切った結果として見えてくるそれの構成要素としてはつぎの二種類のものがあることを、われわれは認めるにいたるはずだ。つまり、その一方の一まとまりの種類をなすのは、いろいろな事物の数や長さや深さや幅や速度などを、それぞれその反対のものと比較しながら測定する種々の技術の全部なのだ。それにたいして他方の種類をなすのは、適正とか相応とか時宜とか正当性とかをはじめ、両極端を避けた中庸をその座としているさまざまな標準類の全部を、それぞれ目標に置きながら測定をする種々の技術、このような技術のすべてなのだ。

若いソクラテス　ええ、それにしても、いまおっしゃったどちらの種類もなかなか巨大な切片です。そればかりか、両切片の相互間の相違もそうとうなものです。

285

エレアからの客人　そのとおりなのだ、ソクラテス。じじつ、穿った説を立てる一派の人々[1]のうちには、真知の一端をそれによって表明しているつもりでいるにちがいないのだが、測定術こそ森羅万象に適用できるものだなどという説を、往々にして立てている者がすくなくないのだ。ところが、ちょうどいま私が強調しておいた見地が、まさしくそういう説にそっくりなのだ。考えてみれば、技術の粋を含む製品というものは、そこに多少の

差はあっても、ことごとく測定作業の所産をその要素としているのであるから、おのずからそういう見かたが生じてくるのだ。

けれども、いま私が指したような人々は、ものの真の種類に合わせて分割していきながら考究するという習慣を身につけていないために、一方では、いまも垣間見たような著しく相違した事物を相互に類似していると見なして、無雑作にこれらを同一の部類のものとして搔き集めてしまうのだ。そうかとおもうとこんどは他方では、ほかのいろいろな類似物のばあいには、その真実の部分には合致しないような分割をやっていくものだから、この人々はまえとは逆の誤りを犯すことになる。——では、ほんとうはどのようにすべきなのかをつぎに述べてみると、まず、多数のものが本質的な親近関係によって結合されているありさまのほうに最初に気づいたばあいにはかならず、いろいろな真の種類のなかに含まれていてこれを構成している真の差異[2]となるべきものの全部がそのような関係にあるのを見きわめるまでは、早まって考察作業を中止するようなことをしてはならないのだ。それにたいして、いまのばあいとは逆に、雑多な状態にある多くのもののあいだに多種多様な非類似関係が成立しているありさまのほうがまず目にうつったばあいには、そのうちで近い関係にあるものの全部を一まとまりの類似関係の系譜の内部へ囲い入れて、その一団が一まとまりの種類を真実の意味でかたちづくっていることを洞察しながらそれらを取りまとめてしまうまでは、自分の焦慮感や恐怖感などのために考察から手を引くようなことをするのは許されないのだ。

B

1　たぶんピュタゴラス派を指した言葉であろう。

2　この語の意味については『テアイテトス』208D参照。

C

さあそこで、以上を指摘しておけば、いま私が言及した問題についてはもちろん、種々のかたちの超過や不足をめぐる問題についても、説明はすでに十分なものになったと見てよいだろう。そして、そういう過不足を測る測定術には二つの違った種類のものが見いだされるという点、とくにこの点をわれわれはとにかくしっかりと念頭に刻みこんでおくことにしようではないか。さらに、これらの二種類がわれわれの主張によればいかなるものになるのかを、よく記憶しておくことにしようではないか。

若いソクラテス そうです。それを、よく記憶しておくようにしたいと思います。

二六

エレアからの客人 さあでは、以上の論究を終えたので、こんどは、いまわれわれが探索の目標としているもののみにかぎらず、一般に、談論が扱うべきこの種のいろいろな主題にも適用されうるような、べつの或る新しい論究に着手してみようではないか。

若いソクラテス どのような論究にですか。

エレアからの客人 まず、いろいろな字母について学習している子供たちが先生の授業に出席して親しくその指導を受けている最中に、その子供たちのうちのだれかが、なんという単語であろうと、ともかく或る単語の綴りを作る字母はなになにであるのかと先生からたずねられるとすれば、そのばあいにはつぎのどちらになるとわれわれは主張すべきなのか、——さあ、これを知りたいような人がいると仮定してみよう。つまり、この子供が

D

そういうばあいに励む勉強というものは、先生からその席で提示された特定のひとつの単語だけを覚えることを

主眼としているのだろうか。それともむしろ、その子供に将来も提示されると予想されるすべての単語を学んで、正字法全般にいっそう通じた者となるのがその勉強の目的だ、と言うべきであろうか。

若いソクラテス　明らかに、すべての単語を学ぶのが目的です。

エレアからの客人　では、こんどは、政治家の正体を見つけようとしてちょうど現在われわれがおこなっている探索のばあいはどうなのであろうか。いったい、われわれに与えられている課題にとっては、ただ政治家だけのことを知るのが目的であろうか。それとも、すべてのことがらを論じるにあたって対話法(ディアレクティケー)(1)を駆使することにいっそう上達した者となるのが、その目的であろうか。

若いソクラテス　こんどもまた、すべてのことがらを論じうるようになるのが目的だ、と私は答えなければなりません。

エレアからの客人　いやそればかりか、機織り術の定義にしても、だれであろうと普通のわきまえがある人なら、これをただそれだけのためには、狩人のようになって追跡したいとは思わないにちがいない。

E　それにしても、有るものにはつぎの二種類があるという点は、従来のたいていの人が迂濶にもこれを看過してきているように私は思うのだ。つまりまず、有るもののうちの理解されやすい(2)もののほうは、だいたいにおいて、感覚されうる種々の類似関係をがんらい備えているのであって、こういう類似関係を明らかにすることなら、こ

1　この原語は問答法などとも訳される。
2　スケンプに従って ῥᾳδίοις と読む。キャンベルもこの読みかたを推奨している。

れはなんら困難ではないのだ。要するに、こういうものが問題となるばあいには、それらのうちのなにかについての説明を要求している者にむかって、自分が気づいたなにがしかのことを指摘してやるつもりになれば、それだけですむのであって、ここにはなんらの面倒もなく、論究なども必要ではないわけだから、ことは簡単だと言えるのだ。

それにたいして、他方の有るものとしては、このうえなく偉大でこのうえなく尊厳な部類の実在があるのだが、こんどはこちらのほうには、人間がそれを直接に知りうるための手掛かりとなるように明瞭なかたちで作製されているそれの写像の部類が、まったく欠けているのだ。そういう写像さえあれば、探究心に燃えているような人の魂を満足させたいと思う者はだれでも、この人にその写像を示してやり、これをその人の感覚器官のうちのどれかに銘記することによって、この相手の望みを十分にかなえてやることもできるはずなのだけれども。

そして、後者のような部類の実在があるがゆえにこそ、われわれはそのそれぞれについて、論理だけによる説明を述べることも、またそういう説明に耳を傾けることも、どちらもできるように訓練を積んでいかなければならないのだ。なぜなら、いま話しているように、物体としての性格を完全に欠いている実在というものは、このうえなく高貴でこのうえなく偉大なものでもあるのだが、これは、論理だけによって示されうるのであって、それ以外のなにものを用いても明確には示されえないからなのだ。そして、私がきみを相手に現在こうして述べている考究の言葉も、じつはその全部が、まさにこういう実在を知ることを目的としているのだ。もちろん、いま

B

私が言ったような訓練、これは、どのような分野のものを選んでおこなわれるばあいでも、比較的些細な事例をその手段として利用するほうが、過大な事例を手段とするよりも容易ではあるのだけれども。

若いソクラテス　まったく素敵なお言葉でした。

エレアからの客人　それでは、さきほどから問題にしはじめたような各種の事項について、私が以上のさまざまな説明をおこなったのはなにを目的としてであったのかを、ここで思いおこしてみようではないか。

若いソクラテス　なにを目的としてであったのですか。

エレアからの客人　ほら、さきほどわれわれが機織り術について論じたさいにも、さらに万有の運動の逆転(1)のことを話したさいにも、さらにまたソフィストのことを問題としながら、「有らぬもの」でも「有る」のだと定めたさいにも、延々と続く長話を耳にしたために、われわれは「もううんざりだ」という気持になっただろう？だからなによりもこの不快な嫌悪感がそもそもの原因となって、あのような説明に私はとりかかったのだ。つまり、それらの説明をしたさいには、話の長さが限度を越えていることにわれわれは内心では感づいていたのだ。だからこそわれわれは、総じてこのような部類のことをするのはよくないのだ、という非難をわが身にむかっても浴びせたしだいであったが、それは、われわれのおこなった話が余分であるとともに長すぎもする脱線になっているのではないか、と心配したからであったのだ(2)。そこでだが、こうした嫌な目には二度とあわないようにしC たい、というのが私のいまの望みなのだ。だからともかく、さきほどからいままでわれわれ両名が続けてきた論究は、この種の論議の全般を、これにたいするこの種の嫌悪感から完全に予防することをその目的としているの

1　本篇の269C sqq. を参照。
2　機織り術については本篇283Bを、伝説の物語が長かったことについては本篇277Bを、ソフィストのばあいについては『ソピステス』261A～Cなどを、それぞれ参照。

だ。きみに、ここでそう主張しておいてもらいたいのだ。

若いソクラテス　仰せのとおりにいたしましょう。ですから先生のほうは、いまの続きとして述べられるべき事項を、ぜひとも述べてみてください。

エレアからの客人　うん、ではそれを述べてみると、私もきみも、ついさきほど指摘しておいた原則をよく記憶にとどめておいて、われわれがおよそなにごとについて論議するばあいでも、その論議の「短かすぎ」とか「長すぎ」とかにたいしてそのたびごとに称賛とか非難とかをぜひとも加える必要があるのだ。そのさいわれわれは、D 長さなどの部類について適切な断定をくだすためには、その問題とされるものを相互に比較したりすべきではないのであって、測定術のうちの相互比較に依拠しないほうの部分、つまり、これをとくによく記憶しておくべきだとさきに(1)主張しておいたほうの部分、この部分が基準とするものに従いながら、そのつど相応というものを目ざすようにしなければならない。

若いソクラテス　正当なお言葉です。

エレアからの客人　ところが、これはそれに付け加えて注意しておくべきことなのであるが、いま言った相応などというものを目ざすだけでは、まだ、すべてを言いつくした指摘にはならないのだ。つまりまず、たとえば娯楽という目的に適合した「長すぎ」などは、なにかの余事をでもやろうというばあいならいざ知らず、いまのわれわれにとってはなんら必要ではないであろう。さらにまた、課題として提示されたものを探索しようとしているばあいでも、当の目標体をもっとも容易にそしてもっともす早く発見するための工夫などなら、第一義的な仕事としてではなく、たんに第二義的な仕事としてのみこれを大切にせよ、というのがわれわれの論究の命じて

いるところなのだ。それに反して、――これが命令しているところをあらためて述べてみれば、――かくべつに重要なものとして、つまり第一義的なものとしてわれわれが尊重すべきであるのは、ものの真の種類に合致するように分割していくことができるようになるための研究方法、これにほかならないのだ。そうであればこそ、さらに論究の過程というものにしても、言葉をつぎつぎに述べてみた結果、その全体がたとえ長引きすぎたものになるようなことがあっても、この言葉に耳を傾ける者にその真理の発見力を高めてやるようなものであるなら、

E

そういう論究にはおおいに熱意を燃やすべきなのであって、論究が長すぎるからといって、嫌だというような表情などをすこしでも人に見せたりしてはならないのだ。また逆に、論究が短かすぎるものであるばあいでも、それが長すぎるものと同じ意義さえ持っていれば、われわれがこれにたいしてとるべき態度は同様なものであってしかるべきなのだ。

それから以上に加えて、さらにまだ注意しておくことにすると、いまわれわれがおこなっているような種類の談話をかわしあうにあたり、論究が各所で長引いている点をとらえて非難する者とか、遠回りの周行を繰り返すような論議などはこころよく思わないような者とかがいるものなのであるが、こういう種類の者が「話が長すぎた」などというような単純な非難を加えたときでも、この者を談話の席から、即刻にあるいはまるきり無雑作に

287

立ち去らせるようなことをしてはならないのだ。むしろ逆に、「話をもっと短くしさえすれば、その談話をかわしあっている人々は、対話法を駆使することにいっそう上達してくることであろうし、さらに、実在を論理の力

1　本篇の284A～285Cの諸箇所を指す。

で白日のもとに示そうとするにあたっては、真理の発見力をいっそうよく発揮しうるようになることであろう」ということをも、そういう者はとうぜんながら余分に証明すべきである、とわれわれは考えることにしなければならないのだ。それに反して、なににせよ、いま私が挙げた点以外のいろいろな事項に着目しておこなわれるような他のすべての非難や称賛などには、なんら顧慮をはらう必要はないのであって、この種の批評などは、まったく耳にしていないような振りを見せておけばよいのだ。

さあそこで、以上の話は、きみのほうもその点について私と同意見であるのなら、これだけでもう十分だとしておこう。そして、いよいよいまからわれわれは、あらためて政治家のことに話をもどしてみようではないか。もちろん、そうするにあたっては、すでに前置きとして説明しておいたあの機織り術を、こんご探索されるべきものにとっての類例としながら、これを政治家のばあいに適用してみようと思うのだ。 B

若いソクラテス　美事なお言葉でした。では、われわれは仰せのとおりの作業をはじめることにしましょう。

二七

エレアからの客人　さてそこでなのだが、あの問題の王者というものは、これが持つべき技術と同類の多数の技術のすべてから、と言うよりはむしろ、動物群を扱うべきすべての技術から、すでに分離され終った状態にあるわけだ。そこで、まだ残っている技術はといえば、それは、国家というものにまとをしぼってみたばあい、補助原因類と原因類との両方の部類のものとして国家にかかわる範囲内で用いられているような、そういう各種の技術なのだとわれわれはここで主張できるのだ。そして、その相互間の分割をおこなってみるべき諸技術として

われわれが最初にとりあげてみるべきものは、まさにこれらの技術なのだ。

若いソクラテス　正当なお言葉です。

エレアからの客人　それでは、これらの技術を真二つに切る作業はなかなか困難であるということが、きみにはわかっているだろうか。それがなぜであるかは、われわれが論究をさきへ進めていくにつれて、だんだん明白になってくることだろうと私は思っているのだ。

C

若いソクラテス　ええ、仰せのとおり、われわれは論究をさきへ進めていくべきです。

エレアからの客人　では、真二つに切る作業をすることがここでは不可能である以上、こんどはわれわれは、ちょうど犠牲獣をその四肢五体の関節に合わせて解体するばあいのようにして、いまさき私が指摘したいろいろな技術の群れを分割していこうではないか。もちろん、切断というものはいかなるばあいでも、可能なかぎり二つに近い箇数の結果が現れてくるようにしながらおこなわれるべきであるのだけれども。(1)

若いソクラテス　するとこのたびは、われわれは、どのようにすればよいのでしょうか。

エレアからの客人　前回の分割のばあいと同様にやればよいのだ。つまり、機織り術のことを考究したさいに、その道具類を調達していた技術のすべてを、われわれはあのとき、補助原因となる技術と見なした(2)ような覚えがある。

1　『ピレボス』16Dにおいても、これと同様な切りかたが試みられている。

2　本篇の281C～Eの箇所を指す。

若いソクラテス　はい、そうでした。

エレアからの客人　だから今回もまた、われわれは、その同じ見かたを取ることにしなければならないのだ。ただし、あのときよりもなおいっそう注意深く広範囲に眼を配りながら、作業をする必要がある。なぜなら、それが些細なものであれ、重要なものであれ、ともかく道具という名に値するものを国家という規模のものの範囲内で製作する技術であれば、それらをすべて、補助原因となる技術であるにちがいないとわれわれは見なさなければならないからだ。たしかに、補助原因となるべきこれらの技術を欠いていては、国家（ポリス）というものも、政治家の持つべき技術（ポリーティケー）というものも、けっして成立しえないことであろう。とはいってもやはり、われわれはこれらの技術の製品のどれひとつをも「王者の持つべき技術」の製品と同列に置くべきではないようだ。

若いソクラテス　ええ、そのとおりです。

エレアからの客人　それにしても、われわれがいま着手している作業、つまり道具類作製術という技術の種類をその他のあらゆる技術から離れたところへまとめあげるという作業、これはなかなか厄介なものなのだ。それというのも、きみ、考えてみたまえ、「すべて事物というものは、他のなにものかの道具のようなものにもなる可能性を持っている」という指摘は、ちょっと気の利いた指摘だと信じられやすいのだから。それはそうとこんどは、国家が備えているべき財物の一種となるものでありながら、これまで言及したものとは異種のものなのであるが、ともかくそういうものとして、つぎのようなものを私は挙げることにしたいのだ。

若いソクラテス　どんなものをですか。

エレアからの客人　こんどのは、普通の道具類が持っているような特性を備えていないというところが、変わった点なのだ。つまり、こんどのは、普通の道具とはちがって、他のものを生産する目的で頑丈なかたちに仕上げられているようなものなのではなくて、すでに製作されてしまった品物を貯蔵するために作られたものなのだ。

若いソクラテス　それは、どのようなものなのですか。

エレアからの客人　ほら、きみも知っているように、乾燥物や、液体類や、火で鍛えてこしらえた品物や、火を使わずにこしらえた品物など、——これらを入れておくために作製された多種多様の器具から成る種類があるはずだ。われわれは、この種類のものを一括する呼称によって言いあらわすおりには、これを「容器」と呼んでいるのだが、この種類のものがいたるところで見かけられることにはまったく異論がないとはいうものの、これらのものは、われわれがいま探索している知識とは、私の見るところ、ぜったいになんらの関係もないようだ。

若いソクラテス　ええ、なんらの関係もありません。

エレアからの客人　さあでは、われわれは、いま問題にしている財物のうちの第三番目の種類であって、陸上のものや水上のものや、多大の彷徨性を持つものや彷徨性を欠いているものや、あるいは高価なものや安価なものなどの、非常におおぜいの構成者から成っている或る別種の種類に目を注いでみなければならない。もちろん、この種類のものの全体は、そのつどなにものかのための座席となることによって、自分の上にものをなんらかのかたちで坐らせることを目的としたものであるがゆえに、総括的な単一の名称を持つにいたっているのだ。

若いソクラテス　どのような名称を持っているのですか。

エレアからの客人　この種類のものを、われわれは「乗物」と総称しているのだ。もちろん、これは「政治家

の持つべき技術」の製品などではけっしてないのであって、大工工事術や製陶術や鍛冶屋術などの製品だと考えられるほうがはるかに正しいのだ。

若いソクラテス　わかりました。

二八

B

エレアからの客人　では、第四番目の種類をなすものはなにであろうか。われわれはこれを、以上で挙げた三種類のものとは異ったものだと考えるべきではないだろうか。もちろん、こんどの種類のうちには、かなり以前(1)にわれわれが述べたものの大部分が含まれることになる。つまり、衣服類の全部と武器類のうちの大多数のもの、さらに城壁類をはじめとする土と石とで作られた防備施設類の全部、さらにその他の無数のものがここに含まれているのだ。そしてこれら全部は、保護ということに役立てる目的で作製されたものなのであるから、「防護物」というのをその総称とするのがもっとも適切な呼びかたとなるであろう。だからまた、こんどの種類を建築術や機織り術などの技術の製品と考えるほうが、これを「政治家の持つべき技術」の製品と見るよりも、むしろはるかに正当であるようだ。

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

C

エレアからの客人　それから、第五番目の種類としては、装飾法や絵画法をはじめとして、この絵画法とそれから音楽とを用いて完成されていく模写法のすべてなどが該当するのだとわれわれは考えることにしてみようか。つまり、これらすべては、われわれ人間を楽しませるいろいろな娯楽だけのために仕上げられたものなのである

から、この全部をただ一つの名称によって一括しておくのが適切であろう。

若いソクラテス　どのような名称によって一括するのですか。

エレアからの客人　その全体は、「児戯」とかいうような言葉で呼ばれているようだ。

若いソクラテス　ええ、たしかにそのとおりです。

エレアからの客人　うん、そうだとすると、この名を使うなら、それがこの一群のものの全部にとっていかにも似つかわしいただ一つの名称となることだろう。考えてみればたしかに、現実相手の真剣な言行を目的としているものはこの一群のなかにはひとつもないのであって、これらはことごとく、ただ遊戯のためのみに興行されているのだ。

D

若いソクラテス　その程度のことなら、そのまえのご指摘のばあいと同じように、私にもだいたいわかります。

エレアからの客人　ではこんどは、以上のすべての仕事に原料類を供給してやるような諸技術のひとつの種類があるはずだ。原料類というのは、技術類の範囲のうちの現在まで私がつぎつぎに述べてきたとおりのすべての技術が、これを加工して製作したり、あるいはその製作工程の途中でこれを利用したりしているもののことなのだ。ところで、いま取りあげたこの種類は多種多様な諸技術から構成されていて、これらの技術のうちには、他のさらに原始的な諸技術の作りだしたものを加工するようなものも相当多数含まれているのであるが、このような種類の全体を第六番目の種類であるとわれわれは見なすべきではないだろうか。

1　本篇の279C〜Eの箇所を指す。

若いソクラテス　先生は、いったいどのような種類のものを指しておられるのですか。

エレアからの客人　金や銀をはじめとする鉱業によって入手されるすべての金属、および樹木伐採術や製材術などの部類の切断技術の全部が大工仕事や技編み細工のために調達するあらゆる原料など、――これらを私は指E しているのだ。それからさらに、いろいろな植物の外皮を剝く技術や、生命を持っていた動物の身体の獣皮を剝ぎ取ることによっておこなわれる靴類作製術、およびこの種の産物を作るすべての技術、たとえばコルク製品やパピルス原料類や膠とか縄などのような接合物などを作製する種々の技術、以上の技術はすべて、合成されていない種類のものを材料として、合成された形状の製品を製作することを可能にしてくれる技術なのだ。そこでわれわれは、こういう技術の産物の全体を人間が手に入れるべき「原初的単純所有物」と呼んで、これを一括することにする。もちろん、この種の産物は非合成物のみから成っているのであって、「王者の持つべき知識」などによって作られた製品などではけっしてないと見られるべきなのだ。

若いソクラテス　はい、そのまとめかたに賛成です。

エレアからの客人　さあ、それからさらに、食糧品という部類の所有物があるし、また他方には、人体内へ吸289 収されていき、それ自身の成分の作用によって人体の該当諸部分の健康を増進しうる相当な効能を授けられているような大切なものがいろいろとあるのだ。(1) そこで、こういう種類のものの全部をわれわれ人間の「育ての親」とでも名づけたうえで、これが第七番目の種類となるのだとわれわれは主張しなければならない。もちろん、こういう種類の食餌類にはなにかほかのもっと素敵な名称を当てるべきなのであるが、そういう名称が見当たらないとすれば、いま私がこれに付けた名称で我慢することにしなければならない。もちろん、「政治家の持つべき

技術」よりも、むしろ農耕術や狩猟術や体育術や医療術や料理術などの管轄下にこの種類の全体を置いて、この全体に配慮するつとめをこれらの分野に帰属させることにするほうがむしろ正当であるようだが。

若いソクラテス　ええ、もちろんそのとおりです。

二九

エレアからの客人　うん、では、人間が入手しうる種々の所有物の部類としては、種々の温順な動物を除いて、以上のように総計七箇の種類を挙げることによって、だいたいその全部が列挙されつくしたように私は思うのだ。ただし、きみ、ちょっと注意しておいてくれたまえ。以上の列挙にさいして、とうぜんその冒頭に置かれてしかるべきであったものは、原初的単純所有物から成る種類であったのだ。そして、これにつぎつぎと続くのが、まず道具類であり、それから容器類、乗物類、防護物類、児戯類、食餌類、と順々に並べられるべきであったのだ。

B

それはそうと、なんであれ、それがあまり重要でないために、われわれが不注意をして見落しているようなものがあるかもしれん。そういうものについては、われわれはその言及を省略しているわけなのであるが、こういうものを、以上で列挙した七箇の種類のうちのどれかひとつのなかへ適当に納め込むことは可能なのだ。この種のものの例としては、貨幣とか印形とか、それから各種の刻印などのような特質をがんらい備えているものなどが

1　複雑な言いまわしを使ってここでやや詳細に説明されている大切なものとは、薬品類のことである。吐剤や下剤などのように人体の組織に吸収されえない劇薬類は別として、内服薬の部類をこのようにかくべつ大切な食餌類の重要な一部と見なすのは、エンペドクレス以来の伝統に立った顕著な見解だと言われている。

(289)

考えられよう。

この種のものは、要するに、他の諸種類と対等に並びうるほどの広範囲なひとつの種類を形成しうるような性格を欠いているのであって、たんに、そのうちの或るものが装飾品類のうちへ、他のものが道具類のうちへ、ときには強引にであっても、ともかく結果的にはなんとか引きずりこまれていき、これらの部類のなかへ解けこんで、うまく調和するにいたるようなものであるにすぎないのだ。それから、所有物のうちで、奴隷以外の種々の温順な動物にかんする処置についていまひとつ注意しておくと、さきほどの考究においてわれわれが細分しておいたあの動物群飼育術が、これらの動物全部をすでにその手中におさめていることが、すこし注意して考えさえすれば、ただちに明瞭に看取されることであろう。

C

若いソクラテス まったくそのとおりです。

エレアからの客人 さあ、そうすると、まだ残っているのは、奴隷と、それから各種の召使との一団だということになるのだが、私がいま胸中に抱いている予感が正しいなら、王者と競合して、織物にも似た国家組織そのものを作成する資格を自分らも持っていると主張するような部類の人々は、どうも、まさしくこの一団のなかのどこかでその姿を明瞭に現わしてきそうに思えてならないのだ。もちろん、このような競合は、さきほどのわれわれの論究のばあいで言えば、機織り職人を相手として、糸紡ぎとか毛梳きとかをはじめ、われわれが見たその他の多数の仕事に従事する職人たちのおこなう競合に酷似しているのだ[1]。

これに反して、この一団以外のあらゆる人々は、補助原因のような者だとわれわれがさきに[2]指摘しておいた部類の人々にちょうど該当するのであるが、ともかくこの人々は、それらが作りだす種々の製品とともに、つまり

たったいま私が挙げた総計七種類の製品とともに、すでに除去処分を受けてしまっているし、げんに、さきほど D の考究を通じて、王者の持つべき技術や政治家の持つべき技術にもとづく諸活動とは無関係なところへ、分離され遠ざけられてしまったのだ。

若いソクラテス　ええ、ともかく仰せのとおり、あの人々は遠ざけられてしまったようです。

エレアからの客人　よし。ではいよいよ、われわれは、この残っている者たちの姿を従来よりも確実に見きわめるために、この人々の近くへ肉薄して、近距離からこの人々へ考察の光をあててみようではないか。

若いソクラテス　ええ、たしかに、そうする必要があります。

エレアからの客人　さあ、この、きわめて広範囲な分野で活動する一団の者から成っている「召使」という部類の者について、まずひとつの点を指摘してみると、これについていま言ったような至近距離からの観察を試みれば発見できることなのであるが、この人々が精励している仕事も、この人々が野心として秘めている感情も、そのどちらも、われわれがまだ遠方からこれを見ていたときに予想として目星をつけていたところとははっきりと正反対なのだ。

若いソクラテス　その召使にはいろいろな種類があるでしょうが、その名は、それぞれなになになのですか。

エレアからの客人　買いとられた、つまり購入という方法で主人に入手された連中が、まず見つかるのだ。こ E のような連中をわれわれは、異論を受ける余地なく、奴隷と呼びうるのではないだろうか。そうだとすれば、こ

1　本篇の 281B sqq. などを参照。

2　本篇の 287B～D の箇所を指す。

ういう者どもが王者の持つべき技術を持ちたいと熱望するようなことはぜったいにありえないはずだ。

若いソクラテス　ええ、それは、もちろんありえません。

エレアからの客人　ところがさらに他方には、自由な身分の者でありながら、たったいま私が挙げた七種類の技術家たちに奉仕するために召使術を会得するように、との命令を自発的にわが身に課し与えているような人々がいろいろといるのだ。この人々はことごとく、農耕業をはじめとするその他いろいろな技術の製品をそれらの技術家の相互のもとへと運び移してやって、これら相互のあいだに経済上の均衡を生じさせているのであるが、この種の仕事をおこなうにあたっては、各地の都市の中央市場(アゴラー)だけを自分の仕事場として利用している者もいるかとおもえば、他方ではまた、海路や陸路を用いてひとつの国家からべつの国家へと渡り歩いている者もいるのだ。けれども、このどちらの種類の者がおこなっていることも、貨幣を物産と交換したり、貨幣を貨幣と交換したりすることなのであって、こういうことをその業としている人々をわれわれは両替業者とか貿易商人とか船舶所有者とか小売商人とかと命名するならわしなのだ。そこで、きみに聞いて確めてみたいのだが、これらの人々は、まさか、政治家の持つべき技術を自分らも多少は持つ資格があるなどとは主張するはずがないだろう?

若いソクラテス　さあ、どうでしょうか。ことによれば、商業活動を管理する政治術だけであるなら、これを持つ資格が自分らにもあると主張するかもしれません。

エレアからの客人　けれども、雇われ人や日雇い労働者となって、われわれの見るところ、だれのためにも召使役をつとめることを明らかに心から喜んでいるような者たちであれば、これらが「王者の持つべき知識」を持

ちたいと熱望しているところをわれわれが発見するようなことなどは、けっしてありえないはずだ。

若いソクラテス ええ、もちろん、そのようなことはありえません。

エレアからの客人 ではこんどは、つぎに述べるような種類の召使的奉仕をいつでもわれわれのためにおこなってくれる人々については、われわれはどのように考えるべきであろうか。

若いソクラテス そのお言葉は、どのような種類の召使的奉仕のことを指しているのですか。また、その奉仕をおこなってくれるのは、なになにの種類の人々なのですか。

B

エレアからの客人 私が指している一団のうちには、伝令使たちが作っている特殊な連合体や、さらに、当の召使役を頻繁に勤めあげた結果として、公文書の作製などの仕事に手慣れた腕前を見せてくれるすべての人々や、さらに、これらとは異った種類の者であって、政府当局の権能に関係したそれ以外のいちいち名を挙げるにも値しない種々の業務を履行するのに練達している下級吏員などが、いろいろと含まれているのであるが、われわれは、こんどとりあげてみたこのような人々を、なんという名で呼ぶべきであろうか。

若いソクラテス ちょうどいまのお言葉のなかで用いられた単語を借用して、召使と呼ぶことにしましょう。ですから、こういう者たちのことを、みずから国家を統治している中心人物だなどと言ってはなりません。

エレアからの客人 うん、たしかにきみの言うとおりでありはしても、政治家の持つべき技術を自分らも持つ資格があるのだと他のだれよりも強く主張する者たちが、いま述べたような部類の人々の群れのどこかのなかで姿を現わすことであろう。私はいまさきこのように述べたのであったが、これはべつに、私が夢などを見てその影響を受けたからなどではけっしてない、と私は思っている。

(290)
C

それにしても、われわれがいま問題の中心に置いているあの種の人を[1]、召使どもが占めているような一帯などのほうへ視線をむけながら探索したりしたのであるから、われわれは、極度に風変りなやつだと嘲笑されることになっても、まあ、しかたがないだろう[2]。

若いソクラテス まったくそのとおりです。

エレアからの客人 さあ、ではつぎに、以上の考究においてはまだ厳重な検討を受けていないような人々のもとへもっと接近して、これと接触を保つことにしてみよう。そうすると、まず見つかるのは、予言術にたずさわることによって、召使として奉仕するために必要な一種の知識の部門を身につけているような人々であるのだ。つまり、神々の意志を言葉にして人間たちに伝えてくれる取り次役だと世間で認められているらしいのが、こういう人々なのだ[3]。

若いソクラテス はい、そのとおりです。

エレアからの客人 それからさらに他方では、神官たちから成る一群の者もいるのであって、この人々は、世間の掟(おきて)が承認しているところによれば、一方では、われわれ人間が犠牲物を用いて神々に供える捧げ物を神々の

D

嘉(よみ)したまうように奉納する方法にも、それから他方では、神々のみ手からわれわれ人間にかずかずの恵みが授けられるようにと祈願によって懇願する方法にも、どちらにも精通しているそうなのだ。けれども、これらの方法というものは、両方ともそれぞれ、たんに、召使として奉仕するための技術というものの構成要素であるにすぎないようだ。

若いソクラテス ええ、どう見てもそのようです。

三〇

エレアからの客人　うん、では、いよいよいまや、論究によるわれわれ自身の前進にとって最初から目標物となっていたものが自分のうしろに残していった確かな足跡のようなものを、どうもわれわれはとらえつつあるように思うのだ。さあ、きみもよく注意して考えてみたまえ。神官たちや予言者たちの風采は、気概に満ち溢れていて荘厳な輝きを帯びているではないか！　これは、この種の人々の手がける仕事が崇高であるからにほかならないのだ。だからこそ、エジプトの国では、国王は神官職を兼ねなければ統治しえないことになっているし、さ E らに、神官職に無関係な家柄の者が、最初は強引な手段を使って偶然にも王位につくにいたったようなさいにも、その国王は、あとでかならずこの神官の団体へ加入して、その一員とならなければならぬのだ。

さらにまた、ギリシア人のあいだにおいても、その多くの土地で見うけられる習慣について話しておくと、さきほど見たような宗教行事にかかわる犠牲物のうちのもっとも重要なものを神々に捧げることをつとめとしている者は、国家の統治機関のなかでもっとも重要な中枢部を占めている者にほかならない。だからまた、きみたちの住んでいる国においても、私がいま説明している事態は、だれの眼にも明らかなかたちで実現されている。つ

1　真の政治家ないし王者を指す。

2　この言葉は、プラトンの時代のアテナイにおいて、ここで言及されているような書記などの部類の者が、国家の中枢へ触手をのばそうとするような事実があったことにたいする皮肉のようなものかもしれない、と考える学者もいる。

3　予言者も当時の社会で相当な政治権力を握ることがあったという事実が、トゥキュディデスやクセノポンの著作などから知られる。

まり、このアテナイの国では、太古以来の犠牲奉納祭で取りおこなわれる儀式のうちのもっとも荘厳でもっとも深く祖先の遺風に根ざす部分は、籤引きによって選出された「バシレウス(王)[1]」という名称の高官の手に今日でもなお委ねられている、と私は聞いている。

若いソクラテス　ええ、それはまったく事実のとおりです。

エレアからの客人　うん、それでは、いま言及したように、籤引きによって選出された結果として、王であるとともに神官にもなっているような者たちと、それからこういう者の召使たちと、それから非常に多数の人数から成る或るべつの群集、以上の各種のものをわれわれはつぎに調べてみなければならない。なお、いま最後に挙げた群集は、さきほど私が列挙してみた各種の人々がすでに遠くへ分離されていったので、その姿をわれわれの眼前にちょうどいま明瞭に現わしてきているのだ。

若いソクラテス　先生が説明しようとしておられるその人々というのは、だれたちのことなのですか。

エレアからの客人　たしかに、まったく異様な或る種の人間どものことなのだ。

若いソクラテス　いったい、どうして異様なのですか。

エレアからの客人　諸種族が著しく混合しあった或るひとつの種類をこの連中は形成しているのだ。すくなくとも今の時点でこの連中をちょっと眺めてみるかぎりでは、この種類の者どもはそういう外観を呈しているのだ。つまり、これらの者どもは人間類にはちがいないのだけれども、そのうちの多数の者は獅子などや、半人半馬の怪物(ケンタウロス)のたぐいや、その他のこれらと同類のものに似ている。さらに、それら以外のきわめて多数の者は淫乱な半神半人の森の精(サテュロス)のたぐいや、弱力で策略好きのいろいろな野獣に似ている。また、

B

この連中はその外観と特質とを相互のあいだですばやく交換し合うのだ……。あっ、こんな説明をしていたら、ちょうどいま、ソクラテス、私はこの人間どもの正体[2]に急に気づいてしまったような気がするのだ。

若いソクラテス　おっしゃっていただきたいのですが……。先生がいま眺めておられるものは、なにか異様なものであるらしいと拝察しますので、ぜひひとつそれを……。

エレアからの客人　きみの言うとおりなのだ。つまりだれでも、自分がそれについて無知であるようなものを見ると、その結果として、「これは異様だ」という感じを受けるものなのであるが、明らかにいまのばあいにも、C この私自身がそのような精神状態になったのだ。つまり、国政に手だしをしている大集団の姿が突如として目にとまったものだから、私はなすべきすべを知らなかったのだ。

若いソクラテス　それは、どのような種類の大集団だったのですか。

エレアからの客人　私が見たのは、要するに、すべてのソフィストどものうちでもっともすさまじい如何様師(いかさまし)、つまり、この種の者どもが使う例の技術の大先生の姿だったのだ。けれども、真の意味でその名に値する「政治家」とか真の意味でその名に値する「王者にふさわしい人」とかの部類のことを調べたいと思えば、この部類のなかへそういういかがわしい分子を入れないことがどれほどの難業であろうと、われわれはそのようなやつらをここへ入れないようにしなければならないのだ。われわれが探索の目標にしているものを明瞭なかたちで発見し

1　民主制時代のアテナイ国家は、自分の政府の最高官職者として九名のアルコンたちを籤引きで選出していたが、その九名のアルコンのうちの第二位を占めていて、宗教行事の監督をそのおもな職務内容としていた者が、バシレウスと呼ばれていた。

2　この正体については、本篇の303C〜Dを参照。

たいというのがわれわれの意図であるかぎり、そのような努力が必要なのだ。

若いソクラテス ええ、そのような努力の気持だけは、緩めないようにしなければなりません。

エレアからの客人 私一個人の意見に照らしてみても、それだけはぜったいに緩めるべきではないだろう。そこでだが、つぎの事項についてきみの意見を述べてくれたまえ。

若いソクラテス どのような事項についてですか。

三一

D **エレアからの客人** 政治上の支配形態のうちのまず一箇の種類として、われわれは「単独支配者政体(モナルキアー)」を挙げうるのではないだろうか。

若いソクラテス はい、そうです。

エレアからの客人 それから、単独支配者政体のつぎには、少数者による統治体制を挙げるのが自然な順序だと私は考えるのだ。

若いソクラテス ええ、もちろんです。

エレアからの客人 そこで、政体(1)がとるべき形態として第三番目に挙げられるべきものは、多数者が統治する支配形態であるのではないだろうか。もちろん、世間で広く用いられているそれの名称で呼ぶなら、それは「民主政体(デーモクラティアー)」だということになる。

若いソクラテス じじつ、そのとおりです。

エレアからの客人　ところが、全部で三種類見いだされると一応考えられる支配形態は、或る見地から見れば、五種類になってくるのではないだろうか。つまり、最初に見られたうちの二種類のものがそれぞれ自己分裂をおこして、既存のものに加えられるべき他の二つの名称をあらたに産みだしてくるから、そうなるのだ。

若いソクラテス　その、あらたな二つの名称とは、いったいどのような名称なのですか。

E

エレアからの客人　現代流の考えかたを取る人々は、強圧手段の行使と自由意志による服従可能性への顧慮、それから、貧乏と富裕、それから、法律の尊重と法律の無視などが、いま見た種々の政体のなかに相反的な要素として生じてくるという点にまず着眼するようなのだ。そして、私がいま挙げたはじめの二つの政体のうちのどちらの一方をも、こうしたそれぞれの二要素を含むものとして分割しているのだ。その結果として、まず単独支配者政体のほうは、二種類の姿をわれわれに見せてくれると考えられるので、二箇の名称によって呼ばれることになる。つまり、その一方の種類は「僭主独裁政体（テュラニス）」と呼ばれ、他方の種類は「君主支配政体（バシリケー）」と呼ばれているのだ。

若いソクラテス　ええ、たしかにそのとおりです。

エレアからの客人　それにたいして他方の、少数者によってその権力を掌握されている国家のほうはことごとく、「上流者支配政体（アリストクラティアー）」と呼ばれるものと、「少数者専制政体（オリガルキアー）」と呼ばれるものとの二種類に分けられている。

1　「政体」の原語「ポリーテイアー」は「国家体制（国制）」とも訳される。

若いソクラテス　じじつ、そのとおりです。

エレアからの客人　ところが民主政体のばあいには、財産を持っている富豪たちを多数者が支配するにあたって、強圧手段が行使されようと、あるいは自由意志による服従可能性が顧慮されようと、それから、法律が厳重に守られようと、あるいは守られまいと、その政体の名称をけっして変更しないのが一般の習慣なのだ。

292

若いソクラテス　それに間違いありません。

エレアからの客人　それでは、つぎの問題についてはどのように考えればよいだろうか。つまり、われわれが以上のいろいろな政体のうちのどれかひとつを正当な政体だと判定できるにいたるためには、いま私が挙げたような標識だけを判定の規準として用いることによって当の政体を判別してみるだけでよいだろうか。つまり、支配者が、一人であるのか、それとも少数者であるのか、それとも多数者であるのかとか、あるいはまた、富裕であるのか、それとも貧乏であるのかとか、あるいはまた、強圧手段を行使するのか、それとも自由意志による服従可能性を顧慮するのかとか、あるいはまた、成文法を用いて統治することになるのか、それとも法律を用いずに統治することになるのか、――さあ、これらの点だけにわれわれは着目すれば、それだけで十分であろうか。

若いソクラテス　もちろん、それらの点だけに着目して政体の当否を判別することにしても、なんら悪いわけはありません。

B

エレアからの客人　それでは、私がつぎに述べるような事項をきみに一歩一歩理解していってもらって、もっと明確に調べをつけてもらおうと思うのだ。

若いソクラテス　どのような事項を先生はお述べになるつもりですか。

エレアからの客人　われわれは、以前に述べておいた根本命題を遵守すべきであろうか。それとも、これに反対を唱えることにすべきであろうか。

若いソクラテス　どのような根本命題のことを先生は指しておられるのですか。

エレアからの客人　王者のおこなうべき統治のわざというものはいろいろな知識のうちのひとつである、とわれわれはさきに主張した[1]ように私は思うのだ。

若いソクラテス　はい、そうでした。

エレアからの客人　しかもわれわれは、それを任意の諸知識のうちのひとつだとは考えずに、ほかのすべての知識にくらべて、この知識こそ、判定をくだす知識であるとともに指揮をとる知識でもあると呼ばれるにふさわしいものであるようだと考えて、とくにこれを選びだしたのだ[2]。

若いソクラテス　はい、そうでした。

エレアからの客人　さらに、この、指揮をとる知識のうちには、生命を持っていない製品類を取り扱う知識と、C 動物たちを取り扱う知識との二種類が含まれていることをわれわれは見届けた。そしてそのつど、まさにこのような、当初の分類にさいしてとられたとおりの方針を維持しながら、知識をその部分へとつぎつぎに分けていくことによって、われわれは現在の論究段階まで前進してきたのであったが、その道中では、王者に不可欠なものが知識にほかならないという点を、かならず念頭においていたつもりだ。けれどもわれわれは、その知識がどの

1　本篇の 258B の箇所を指す。

2　本篇の 259E〜260E を参照。

ような知識であるのかを、まだ精密には確定しうるにいたっていないのだ。

若いソクラテス　正当なお言葉です。

エレアからの客人　だから、われわれがいま明瞭に理解している事項はまさにつぎのような点だ、と言うべきではないだろうか。つまり、種々の政体の当否について判定をくだすための規準となる標識としては、国の支配者が少数者から成るとか、あるいは多数者から成るとか、などの点を選ぶべきではなく、さらに、自由意志による服従可能性が顧慮されているとか、あるいは自由意志を圧殺する強制が加えられているとか、などの点を選ぶべきでもなく、さらに、支配者が貧乏であるとか、あるいは富裕であるとか、などの点を選ぶべきでもないのであって、ただ、支配者がしかるべき知識を持っているか否かという点だけを、われわれは選ぶようにしなければならないのだ。われわれは、さきほどの帰結をあくまでも遵奉しようとするかぎり、そのようにすべきなのだ。

若いソクラテス　ええ、たしかに、それを遵奉しないわけにはいきません。

三二

D

エレアからの客人　さあ、そうだとすれば、いまからわれわれがおこなうべき考察の課題は、どうしてもつぎのようなものにならざるをえないのだ。つまり、人間たちを支配する支配術というものは、なによりも習得しがたいとともに、習得すべきもっとも重要なものだと考えられるのであるが、この支配術にかんする知識は、以上で挙げたいろいろな政体のうちのいったいどの政体を基盤として、そのなかで生じてくることになるのであろうか。——いやたしかに、この知識にこそわれわれは着眼する必要がある。ここに着眼してはじめて、われわれは

知性ゆたかな王者のもとから、どのような連中を排除すべきであるのかを見きわめうるようになるのだ。なお、ここで排除されるべきは、政治家であるかのようにみずからも装い、大衆にもそのように信じこませてはいるものの、じっさいにはなんらの政治家でもない連中であることは言うまでもない。

若いソクラテス ええ、その作業を進めることはたしかに必要です。この必要は、われわれのさきほどからの論究によって、すでにおのずからきまっていたはずです。

E

エレアからの客人 では聞くが、多数者というものであれば、これが国家を形成しているばあい、私がいま言ったあの知識を習得しうる者であるのだ、などとはとうてい考えられるはずもあるまい。

若いソクラテス それはもう、どうみても考えられません。

エレアからの客人 それではこんどは、人口一〇〇〇人の国家のなかで一〇〇名ほどの者が、あるいはせめて五〇名の者がこの知識を申しぶんなくりっぱに習得する、ということが起りうるだろうか。

若いソクラテス いや、先生、そんなことが起ろうものなら、当の技術はすべての技術のうちでいちばん気楽な技術だということになりますよ。なぜなら、万人周知の事実を申すようですが、将棋の棋士にしても、自分ら以外の全ギリシア人のあいだでその道の者と呼ばれている人々に見劣りしないほどの一流の腕前の者は、一〇〇〇人の人間のうちに、いまのお言葉にあったほどおおぜいはけっしていないものなのですから。いわんや王者をや、ではありませんか。それというのも、ほら、さきほどの論議によれば[1]、いやしくも王者の持つべき知識をそ

1 本篇の 259A～B の箇所を指す。

なえている者であれば、この者がたまたま支配権を握っているにせよ、あるいは握っていないにせよ、まったくそれにはかかわりなく、「王者にふさわしい人」と呼ばれるのがとうぜんなのですから。

エレアからの客人　これはまた、なかなか美事な記憶にもとづいた指摘だ。それはそうと、いま見た点の帰結になると私が考えていることを述べてみると、総じて政治権力というものが正当なかっこうで現れてくるばあいにはかならず、われわれが探し求めるべきその正当な政治権力というものは、だれか一人の人物か、二人の人物か、あるいはきわめて限られた少数者だけが、これを具備していることになる。

若いソクラテス　ええ、たしかにそのとおりです。

エレアからの客人　だから、これらの人々が、自由意志にもとづいて服従している者たち、そういう者たちを支配しているのか、自由意志に反して服従している者たち、そういう者たちを支配しているのかは、ここでは問題ではない。また、これらの人々が成文法に従って統治しているのか、成文法を用いずに統治しているのかも、問題ではない。また、これらの人々が富裕な者として支配の座にあるのか、貧乏な者として支配の座にあるのかも、問題ではない。大切なのは、これらの人々がどのような権力行使をおこなうばあいでも、技術にもとづいてその権力を行使する支配者であるのだ、という点を承認すべきであるということなのだ。われわれ両名も、げんにこのとおりの見地をとっている。

B　この見地が正しいことは、古来われわれが医者を医者として承認するにあたって用いてきた条件を例にとって考えてみれば、きわめて明瞭になる。つまり、医者がわれわれの自由意志によって承諾された方式の治療をわれわれに施すのか、われわれの自由意志に反した方式の治療を施すのかは、問題ではない。たとえば、患者にたい

する処置として、メスでこれの手術をおこなおうと、これに焼灼法を施そうと、あるいはその他どのような苦痛を与えようと、治療は治療なのだ。また、医学教則書に準拠して治療するのか、医学教則書を度外視して治療するのかも、問題ではない。また、医者が貧乏人であるのか、富裕な人であるのかも、問題ではない。以上のどのばあいにおいてもまったく同様にして、われわれが医者を医者とみなすのは、医者が技術を用いてその管轄の責務をはたしているからにほかならない。吐剤や下剤のたぐいによって患者の体内を浄化するさいにも、それとはべつの手だてによって患者を痩身にするさいにも、逆に、患者の体重の増加をくわだてるさいにも、医者が技術を用いているからにほかならない。さらにまた、医者が、患者の身体の利益になるようにと思いはからいながら、C その不良な状態を改善する者であるからにほかならない。このようにしてはじめて、医療を施す者である医者の各人が、医療を受ける患者の身体を健康にしてやることができることになる。

さあ、だから、違うことなくいま述べたとおりにわれわれは考えかたを確定すべきであるようだ。つまり、いま述べたことこそ、医術をはじめとするありとあらゆる支配術についての、唯一の正当な規定になっている、と見るべきであろう(1)。

若いソクラテス　まさしくそのとおりです。

1　したがって、「技術を用いて、かつ、被支配者の利益(善)になるようにと思いはからいながら、被支配者を支配すること、――これが支配術である」との定義が得られる。

三三

エレアからの客人　そうだとすると、種々の政体についても、それらのうちでかくべつに正当であるとともにその名に値すべき唯一の政体とは、その政体のもとにある国家の支配者たちがたんに評判のうえにおいてではなくて真実の意味で知識をそなえている者であること、このことがしかるべき人の眼前に明示されるにいたりうるような政体のことだ、と必然的に言えるのではないかと考えられる。そのさい、この支配者たちが、法律に従って統治しているのか、法律を用いずに統治しているのかは、また、自由意志にもとづいて服従している者たちを支配しているのか、自由意志に反して服従している者たちを支配しているのかは、また、この支配者たちが貧乏な状態にあるのかそれとも富裕な状態にあるのかは、すべて問題ではない。つまり、これらの差異のどれひとつとして、当の問題にかんする判定の正当性とはいかなる意味においてもまったく関係がないことにわれわれは注意する必要がある。

D

若いソクラテス　美事なお言葉です。

エレアからの客人　だからまた、支配者たちが、国家の利益になるようにと思いはからいながら、或る一部の者を死刑に処したり、あるいは国外へ追放したりする処置によって、国家を浄化するようなばあいがあるかもしれない[1]。あるいはまた、いくつもの植民者団を分封する蜜蜂の多くの群れのようなかたちで海外のどこかの土地へ送りだすことによって、国家の規模を縮小するようなばあいがあるかもしれない。あるいは、海外のどこかから来住者たちをしかるべくあらたに迎え入れ、これらに市民権を賦与して国家の規模を拡張するようなばあいが

あるかもしれない。この種のいろいろなばあいにおいて注意すべき唯一の条件を挙げるなら、支配者たちが知識を活用し正義を心掛けつつ、国家の健全を維持するための活動者として国家に見られる欠陥を改善する仕事に全力をつくしているかぎり、ひとえにそのかぎりにおいてのみ、つまり、なによりも肝要なその点を根本原則として守っているかぎり、当の政体をわれわれとしては唯一の正当な政体であると宣言しなければならない。そして、 E われわれがふつう挙げることにしているこれ以外のあらゆる政体は、真正な政体ではなく、真の意味でその名に値する政体でもない、とわれわれは断定しなければならない。要するに、これらはすべて、あの唯一の政体を写し表わしているものにすぎないのであって、それらのうちで、法制がよく整っているなどと一般に考えられている政体のほうは比較的りっぱに、その他のいろいろな政体のほうは比較的ぶさいくに、あの原型を写し表わしている[2]という点に、多少の差が見られるだけなのだ。

294 **若いソクラテス**　先生、以上のご説明のうち、ほかの事項はすべて適切であるようにみうけられるのですが、ただ、法律を用いない統治というものもとうぜんおこなわれる必要がある、という意味のお言葉だけが、どうも理解しがたいかんじでした。

エレアからの客人　ソクラテス、きみは私のがわの予定よりもわずかだけさきにその質問を出してきたわけだ。というのも、きみが以上の論点全部を是認するのか、それとも、私がこれまで述べた事項のうちにきみが不満に

1　以下の309Aと比較。
2　バーネットとは異り、キャンベルやディエスらとともに、μεμιμῆσθαι を削除しない。

思うようなことがなにかあるのかを、これからきみに徹底的に問いただしてみようと私が思っていたやさきに、きみが切り出してきたのだから。ともかく、これでいまや明らかになったことがらを述べてみると、きみの意向によれば、法律を用いずに統治する者、これに帰属すべき正当性をめぐる問題をわれわれ両名は検討してみるべきだということになる。

若いソクラテス　ええ、もちろんそのとおりです。

エレアからの客人　そこでだが、まず、立法にかんする知識が「王者の持つべき知識」のなかにひとつの要素として含まれていることは、もちろんある意味では明らかなことだ。けれども、最善の理想的な状態というものは、法律が強力であることではなくて、知性をそなえていて王者たるにふさわしい人物、これが強力であることなのだ。どうしてそうなのかは、きみにもわかるだろう？

若いソクラテス　先生は、どうしてだとおっしゃるつもりなのですか。

エレアからの客人　法律の能力には、限界があるからだ。つまり、すべての人間にとって最善の理想になるとともにもっとも適切でもあるようなこと、これを厳密に網羅したうえで、最善の方策をひとときに全員に命令として与えるということ、このようなことは法律がぜったいに実行しえないところなのだ。いやたしかに、きみ、おおぜいの人間のあいだにも、そのいろいろな行動のあいだにも、さまざまな相違点があるではないか。さらに、人間の世界のできごとのうちには、かたときでも粛然と静止しているようなものは、まずなにひとつとしてないとさえ言えそうではないか。だからこそ、いかなる問題にのぞんでも、単純不変な公式のたぐいをありとあらゆる時においてあらゆる事例に適用されうるものとして確定的に示すことは、総じていかなる技術にも許されてい

B

ないのだ。

さあ、いまの点は、われわれがふだんから認容していることであるようだが、どうだろうか。

若いソクラテス　ええ、それはもちろんです。

エレアからの客人　ところが法律というやつは、見たところどうも、この単純不変な公式を示すことだけに没頭しているようなのだ。だから考えてみれば、法律はどこかの強情で愚鈍な人間にそっくりなのだ(1)。つまり、自分が布告した命令に反することは、なにひとつだれにもおこなうことを許そうとしない人間にそっくりなのだ。c このような人間は、自分が発令した法令文とは異ったなにか新しい指示のほうが或る個人にとってはむしろ有益であるというような情況がたまたま現れてきても、自分にむかって質疑をすることをさえだれにも許そうとはしないのだ。

若いソクラテス　それに間違いありません。じじつ、現行の法律はわれわれの各人にたいして、いまのお言葉にあったところと寸分も違わない態度をとっています。

エレアからの客人　それでは、単純不変なかたちをたえずとっているようなものが、かたときも単純不変ではないようなものにたいしてうまく適用されることは、不可能なのではないだろうか。

若いソクラテス　おそらく不可能でしょう。

1　ソポクレス作の悲劇『アンティゴネ』におけるテバイの国王クレオンのごとき者が、指されているのかもしれない。

三四

エレアからの客人　さあ、そうだとすると、いったいなぜ、立法という処置をとることが必要不可欠なのだろうか。法律が完璧な正当性を持ったものだとは言えないから、この点をきみにたずねるわけなのだ。ともかく、立法が必要な理由をわれわれは発見しなければならない。

若いソクラテス　たしかにそのとおりです。

エレアからの客人　では聞くが、よそのいろいろな国家においても事情はだいたい似ているようであるが、きみたちの国においても、それが競走であるにせよ、なにかその他の種目であるにせよ、ともかく競技会に出場して当の部門の参加者と優劣を競いうるようになるための練習課程のようなものが、集団をなした生徒を対象者として、じじつ設けられているのではないか。

若いソクラテス　そのとおりです。しかも、じつに多種多様な課程が設けられています。

エレアからの客人　よし。それでは、専門技術を用いて生徒を訓練する先生たちがこのような体育指導をおこなうにあたって生徒たちに与える命令というものの特質を、われわれはここであらためて思いうかべることにしようではないか。

若いソクラテス　どのような点でそれを問題になさるのですか。

エレアからの客人　体育の先生たちは、生徒各自の体質にふさわしい事項を指示してやるというような個人指導ふうの綿密教育は不可能だ、と考えている点に注意したいのだ。つまり、これらの先生たちはかなり大ざっぱ

E

な教えかたを選ぶようにしているのであって、生徒たちの身体にとって有益なことを命令として課するさいには、だいたいの対象者にだいたいのばあいにおいて適合するようなところを教えることを方針とすべきだと信じているのだ。

若いソクラテス　仰せのとおりです。

エレアからの客人　そうであればこそ、現状を見ても、この先生たちは一団をなした生徒たちに同一量の鍛錬を課しているわけなのだ。つまり、先生たちはランニングやレスリングをはじめとする身体のあらゆる鍛錬を、いっせいに開始させていっせいに終了させているのだ。

若いソクラテス　じじつ、そのとおりのことがおこなわれています。

エレアからの客人　だから、さらに立法者についても、われわれはいまのばあいと同様な見かたをとることにするのが望ましいのだ。つまり立法者というものは、いくつもの群れをなすその配下の国民を正義にかかわりのある分野において、たとえば人間が相互のあいだで取りかわす約定などの面で、統轄しようとするにあたっては、集団をなす全員にたいして指示を与えることになる以上、国民の一人一人にとって適切であるような事項を厳密に示してやるだけの力は、けっして持ちえないであろうと考えられる。

若いソクラテス　どうも、そう考えることが当っているようです。

エレアからの客人　だからこそ、大多数の国民にとってだいたいのばあいにふさわしくあるにすぎぬようなもの、したがっていかにも大ざっぱなもの、どうもたんにそういうものを、立法者は国民の各人に適用されるべき法律として制定することになるようだ。もちろん、立法者が、法律を成文法のかたちにして示そうと、あるいは

法律を不文律のかたちのものであるとして、祖先伝来の慣習を守ることを立法と同一視する立場をとろうと、この点に変わりはない。

若いソクラテス　立法者のその処置は、いかにも正当なものです。

B
エレアからの客人　たしかに正当な処置なのだ。つまり、ソクラテス、ひとつ考えてみたまえ。だれかしかるべき者で、特定の個人のそばにその一生のあいだ常時付き添ってやって、その者に適切なことをいつも厳密に指示してやるというようなたいへんな任務をはたしうるほどの者が、いったいぜんたい見いだされうるであろうか。これに加えてさらにその理由を述べてみると、いま私が述べた任務をたとえはたしうるような者であっても、王者の持つべき知識を真の意味で身につけるにいたった人々のうちにその名をつらねる者ならだれでも、いま私が説明したような性格のものである法律などを起草したりすることによってわが身の自由な活動に足かせをつけるようなことは、とうていおこなうはずもなかろう。

若いソクラテス　もちろんです、先生。すくなくとも、いままでのご説明にもとづくかぎり、そう言えるはずです。

エレアからの客人　いや、それがだねえ、きみ、まだあるのだ。これから私が述べようと思っている説明をよく聞いてくれれば、その点はいっそうはっきりしてくるだろう。

若いソクラテス　どのようなことをご説明になるのでしょうか。

C
エレアからの客人　つぎのようなことをなのだ。つまり、ここでわれわれは、みずからひとつの場面を想定して、そのさいに生じてくるはずの問いに、みずから答えることにしてみよう。さあひとつ、医者とかあるいはま

た体育の教師とかが、これから旅行に出かけることになっていて、そのために、自分がその面倒をみてやっている者たちのもとから長期間にわたって離れることになる、と予想していることにしてみよう。そしてそのさい、そういう人が、体育の訓練を受けている自分の生徒たちあるいは自分が預っている患者たちは、自分が口頭で与えておいた指示をよく記憶にとどめないかもしれない、と懸念したとしてみよう。そのばあいには、こういう者たちのためにその人は、覚え書きを書いておくべきだと思うことであろう。それとも、なにかべつのことを考えるであろうか。

若いソクラテス いいえ、いまのお言葉のとおりのことをなすべきだと思うことでしょう。

エレアからの客人 さてそこで、その同じ医者なりなにかが、最初の予想よりも短期間でその旅行を終えて帰国するとすればどうであろうか。もしも、なにか新たな療法のほうが患者たちにとって有効であるというような事態がたまたま起っていれば、その医者は、自分が旅行にでかけるまえに書いて与えた指示とは異った療法を、思いきって患者に課するのではないだろうか。なお、大気の性質であるとか、その他なにかの天候現象が、思いがけずに平常のそれとは異ったありさまのものに変わることもあるために、いま言ったような事態の変化も起りうるわけなのだ。——さあそれとも、その医者は、ここで頑固な態度を示して、最初の指示はすでに法律のように成文化によって定められたものである以上、これを犯してはならぬ、と考えるであろうか。つまり、医者自身のほうもそれと異った指示を与えてはならぬし、患者のほうもすでに書いて与えられた指示とは違うことを不遜にも試みるようなことがあってはならぬ、なぜなら最初の指示だけがほんとうに医学的であり、健康に資するのであって、これと異る指示は病気を招きこそすれ、技術にはなんらもとづいていないのだから、というようにそ

D

の医者は考えるであろうか。いや、むしろ逆に、いやしくも知識とか真実の意味での技術とかにたずさわる者で

E ありながら、なにごとにかんしてであろうと、いま私が説明したような処置をとることがあるなら、いま私が述べたようなかたちの成文規定というものは、疑いもなくなによりもひどい物笑いのたねとなるにきまっているのではないだろうか。

若いソクラテス　ええ、疑いもなくそのとおりです。

エレアからの客人　さあそれでは、なにが正しくてなにが不正なのかを、また、なにが高貴でなにが醜悪なのかを、また、なにが有益でなにが害悪となるのかを、人間たちから成るいくつもの動物群のために成文化して定めることにより立法をおこなった人、さらに、それらの問題は不文律のかたちで定まっているとしてこれを挙げることを立法と同一視している人、こういう人々のばあいを考えてみよう。なお、いま言った動物群とはすべて、国家というものを単位とするいくつもの集団にわかれて、そのそれぞれの国家のなかで法律起草者たちの手になる法律を守りながら牧養されているもののことである点に注意しておこう。さあ、いま言ったような立法者たち

296 が、もしも、まさしく技術なるものを活用しながら法律の成文化をおこなう人物とかだれかほかの同類の人物とかを、自分の国にたまたま迎えるようなことがあれば、自分らが最初に定めたところとは異る法令をその助言にもとづいて国民に指示するというようなことは、ほんとうに許されないとすべきであろうか。いやむしろ、ここでこうして禁令を発することこそ、さきの医者のばあいに考えてみたありさまに劣らず、まことに滑稽だと感じられるのではないだろうか。

若いソクラテス　ええ、たしかにそのとおりです。

三五

エレアからの客人　そこでなのだが、このばあいにみられるような問題について一般の大衆がいつも表明する意見を、きみは知っているだろうか。

若いソクラテス　急にそうおっしゃっても、私にはちょっと思いつきません。

エレアからの客人　それは、いかにも一理ありそうな意見なのだ。よく聞きたまえ。だれでも、それ以前の人人が作った法律よりも優れた法律を発見できたさいには、自分の所属する国家をまず説得したうえでそれの立法をなすべきなのであり、そしてその説得ができぬかぎり、その立法をおこなってはならぬ、と一般の大衆は主張しているのだ。

若いソクラテス　おや、どうしてまた……。その主張は正しくないのですか。

B

エレアからの客人　いや、たぶん正しいだろうが……。まあともかく、総じて説得をおこなわないで優れたほうの法令をだれかが強制するばあいのことだが、きみ、答えたまえ！　この強制[1]なるものにつけるべき名称はな

1　この「強制」と訳された原語 bia は、同時に、「暴力」をも意味している。しかし、この暴力は、真実の知識を得た真実の王者のみが用いうるのであって、他のすべての者は、支配者であれ、被支配者であれ、これを用いることは厳禁されていることが、本篇の以下の論旨から、きわめて明瞭に理解されうることに、注意しなければならない。たとえば、専制僭主も（301Cなど）、過激派的暴慢の徒輩（309A）も、プラトンにとっては、最大の悪のうちに数えられるのである。

んであるということになろうか。——いや、待ちたまえ。適当な先例となるような事態を選び、そのばあいについて、あらかじめ調べをつけておかなければならない。

若いソクラテス　その先例になるべきものとして、どのような事態を先生は挙げようと思っておられるのですか。

エレアからの客人　われわれがとっている見かたに従うかぎり、どうしてもつぎのように考えざるをえないのだ。つまりたとえば、医療の技術を正しく身につけているどこかの医者が、その医療を受けている患者を説得することなしに、しかも医学教則書に書かれている規則を無視して、医学的にそれよりも優れた療法を、子供にであれ、あるいはどこかの大人にであれ、あるいはまた婦人にであれ、強制的に受けさせる、というような事態を想定してみよう。そのばあい、この強制につけるべき名称はなんであるということになるだろうか。——さあ、これをひとがなんと呼ぼうと勝手だけれども、これが、すくなくとも、医者の技術を冒瀆した罪過だとか病勢を悪化させる処置だなどと呼ばれるようなものでないことだけは、はっきりしているのではないだろうか。また他方、このような医療にさいして強制を受けた患者には、なんとでも申し立てる権利がありはするけれども、ただ、自分がこの強制を加えた医者たちの手によって病勢を悪化させるような非技術的な処置を受けたとだけは、ぜったいに言えないのではないだろうか。

c

若いソクラテス　いま仰せられたことがらは、このうえなく真実なものでした。

エレアからの客人　では、こんどは、政治家の持つべき技術を冒瀆した罪過というものはなんと呼ばれるようなものだとわれわれは見ることにしようか。それは、醜悪とか害悪とか不正などと呼ばれるようなものではない

だろうか。

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　ではつぎに、成文化されている法律や祖先伝来の不文律などに違反した行動をとるように強制されはしたけれども、その行動は、それ以前の行動にくらべれば、もっと正しくもっと有益でもっと高貴なものになっている、そういう人々のばあいを考えてみよう。

D

さあ、きみ、この種の人々がこの種の強制にたいして加える非難はどういう言葉になるべきであるかを、ひとつ述べてみてくれたまえ。まず私がそれを述べてみると、その非難の声は、それがこのうえなく不条理なものにはなるべきでないとすると、なるほど時を選ばずになんとでも称することはできるけれども、すくなくとも、強制を受けたこの人々が強制を加えた人々の手によって醜悪で不正で害悪となるような処置を受けたとだけは、ぜったいに称すべきではないようだ。

若いソクラテス　いま仰せられたことがらも、このうえなく真実なものでした。

エレアからの客人　あるいはまた、強制を加える者が富裕であればその強制された行動は正しいが、強制を加える者がたまたま貧乏であるならその強制された行動は不正である、などと言えるだろうか。

いや、ほんとうはむしろ、統治者が、国民を説得しても説得しなくても、富裕であっても貧乏であっても、成

E

文法に従っていても成文法を無視していても、ともかく有益なことをなしとげさえすれば、まさにこのことが、あるいはこの種のことに近いことが、国家の正当な管理というもののなによりも真正な標準をなすべきなのであって、知恵を持った有能な人物がその配下の被支配者にかかわる諸問題を処理するにあたって準拠とされるもの

は、ひとえにこの標準にほかならないのだ、と言うべきではなかろうか。

また、船の舵をとる船長が、自分の船と水夫たちとの利益をたえずつぶさに注視しつつ、文字に書かれた航海

297

規則書などを利用することによってではなく(1)、ただ自分の持っている技術だけを活用することによって、その船の同乗者全員の生命を守ってやるようなばあいと同様なことが、われわれの政治家のばあいにも言えるのではないだろうか。つまり、この船長のばあいと同様な原則に従って同じようなかたちの統治をなしうる人々の手によってはじめて、言いかえれば、技術の力のほうが法律よりも優(まさ)ることを実地に見せつけてくれるような人々の手によってはじめて、正当な政体というものは作られうるのではないだろうか。そして、知性のすぐれたこの支配

B

者たちは、なにごとをおこなおうとも、ただひとつの重要な条件を満たしているかぎりは、罪過などを犯したとは見られえないのではないだろうか。つまり、知性と技術とにもとづいて得られるこのうえない正義を国家の構成者たちのそれぞれに適切に実行させることによって、これらの者たちを健全な状態にありうるように守ってやるだけの力を持っているとともに、これらの者たちに見られた不良な状態を可能なかぎり完全に改善してやるだけの力をもそなえているかぎりは。

若いソクラテス　いま先生が述べられたお言葉にたいしては、反論することなどはとうていできません。

エレアからの客人　うん、しかしまた、いまの指摘と同様に、さきほど述べておいたことがら(2)にたいしても反論する余地はないはずだ。

三六

若いソクラテス　さきほど先生が述べられたことのうちの、どのような論点にたいしてなのですか。

エレアからの客人　多数者というものは、どのような部類の人間たちをその構成者としているばあいでも、いま私が述べたような知識を身につけたうえで国家を知性によって管理する、というような責務ははたしえないのであって、われわれがあの唯一の正当な政体を探索しようとおもえば、そのような政体の中枢部をなすべきものとしての少人数の者からなるきわめて小さな権力機関とか、あるいは唯一の支配者をいただく権力機関とかに着眼しなければならない、というさきほどの言葉を私は指しているのだ。同時にまた、ついさきほども述べたとおり[3]、これ以外の形態のあらゆる政体はこれの模写にすぎないのであって、それらのあいだの差異としては、この唯一の原型を比較的りっぱに写し表わしている政体と比較的ぶさいくに写し表わしている政体とがあるという点だけが挙げられうるにすぎないのだ。このように断定すべきであることにたいしても、やはり反論の余地はないはずなのだ。

C

若いソクラテス　どういう意味で、なにを指して、先生はそうおっしゃったのでしょうか。じつは、いま考えてみますと、先刻もその模写ということの意味が私にはよくわからなかったようなのです[4]。

1　多くの学者は、ここの οὐ γράμματα τιθεὶς という原文の意味を、ほぼ、「法規などを〔船内に〕制定することによってではなく」という意味で理解しているが、訳者は、これはわずかながら誤訳であると考える。また、アーペルトだけは独自の解釈を示しているが、その解釈も原文の意味を正確に伝えているとは言いがたい。

2　本篇の 292E の箇所を指す。

3　本篇の 293E を参照。

4　この「模写」とか真の原型を「写し表わす」とかの意味は以下の 300C～301E などにおいて十分に説明されている。

エレアからの客人　うん、それればかりか、これほどの大変な主張を提起していながら、それについて論じたてD るべきところでそれを放擲し、この点について現代の社会が犯している誤謬をくわしく論じて説明する、という仕事を怠っている者がいるとすると、これはじつに由々しいことだと言わなければならない。

若いソクラテス　それは、いったいどのような誤謬なのですか。

エレアからの客人　われわれがここでぜひ探究によって見いだすべき誤謬とは、ほぼつぎのようなものなのだ。もちろん、これは、われわれにとってなじみがはなはだ薄く、したがって理解するのも容易ではないような誤謬ではある。それにもかかわらず、これをわれわれは把握することを試みることにしようではないか。さあさあ、よく考えてみたまえ。われわれの考えによれば、さきに述べたあの政体(1)だけが唯一の正当な政体であることに変わりはないのだけれども、これ以外のあらゆる政体も、この唯一の政体が作製した法典を活用しているかぎり、大切に存置されるべきであることが、きみにいま理解できるだろうか。だからまた、現代の社会でひろく是認されている法規は、完璧に正当であるようなものなどではないけれども、ともかくこの法規を実施している種々の政体も、この存置されるべき政体のうちに含まれてくるわけだが。

若いソクラテス　それは、どのような法規なのですか。

E **エレアからの客人**　「国家の構成者のうちのいかなるものも、法律に違反することをなにひとつ、不遜にもおこなうようなことがあってはならぬ。そして、そのようなことを不遜にもおこなう者は、死刑をはじめとするあらゆる極刑によって処罰されるべし」という法規なのだ。じじつ、この法規こそが、いましがた説明したあの第一の最高原則をわれわれが離れて次善の原則を選ぶことにするばあい、この範囲ではもっとも正当でもっともう

るわしい状態にあるものなのだ。そこでこんどは、私がいま次善の原則と呼んだものがどのようなしだいによってできあがってくるにいたるのかを、いまからわれわれはすこし立ち入って説明してみようではないか。たしかに、このようにすべきではないだろうか。

若いソクラテス　まったく仰せのとおりにすべきです。

三七

エレアからの客人　ではまず、われわれは話をもとへもどして、われわれの目標物とその姿が酷似しているようなもののばあいをあらためて例にとって考えてみることにしようではないか。つまり、王者たるにふさわしい支配者というものをその類似物によって説明しようと思えば、いつでもかならずそういう類例を用いざるをえないのだ。

若いソクラテス　それは、どのような類例なのですか。

エレアからの客人　正真正銘の船長と、それから「なんにんものほかの医者に匹敵するほどの実力をそなえている医者[2]」とを類例にとってみるのだ。さあそれではわれわれは、これらの両者が登場してくることによってできるひとつの状況を心のなかに描いてみることによって、その一部始終を見きわめることにしようではない

1　本篇の293A～Eを参照。なお、この政体は、キャンベルが指摘しているとおり、『国家』における表現を借りれば、「哲人王」が支配する政体である。

2　ホメロス『イリアス』第一一巻五一四行の一部を、散文化して引用したもの。

か。

若いソクラテス　ほぼ、どのような状況をなのですか。

エレアからの客人　つぎのような状況をなのだ。つまりたとえば、われわれ全員が船長や医者について一致して想定をおこなって、われわれがこの連中の手によって非道きわまりない取り扱いを受ける、ということにしてみるのだ。つまりまず、船長と医者とのうちのどちらの部類の者であろうと、その者は、われわれのうちのだれかの生命を安全に守ってやろうと意図するばあいには、どちらの者でも他方の者に劣らず、その生命の安全を守る責務は、もちろんはたすことができる。ところが、このどちらの者でも、われわれのうちのだれかを虐待しようという気をおこせば、じっさいに虐待することもできるのだ。つまりまず医者なら、メスで手術をおこなったり、焼灼法などを施したりしたうえで、医療費を自分のもとへ、ちょうど租税の納入のばあいのようにして持参せよ、と指示し、そして、こうして支払われた医療費を患者の医療のためにはまったく支出しないか、そのうちのごく一部分だけを支出するかにとどめ、その残額は、これを全部、当の医者自身とその家族との使途に当てるのだ、としてみる。そしてそればかりか、ついには患者の親族たちから、あるいはばあいによれば患者と敵対関係にある人たちからさえも金品を報酬として受けとったあげく、その患者を殺してしまうのだ、としてみる。

B

また、こんどは船長のほうであるが、この連中も、医者とは異った分野においてではあるけれども、やはり、同様にひどい悪事を無数に犯すのだ、としてみる。たとえば、航海に乗りだすいろいろな機会を利用して、ほしいままに陰謀をめぐらし、乗客たちを無人島などに置き去りにするとか、あるいは外洋上で事故を故意に発生させて乗客を海中へ放りこむとか、その他さまざまな悪事をおこなうのだ、としてみる。

さあそこで、われわれが、以上の想定の結果を見たうえで、このような船長どもや医者どもについて熟慮を重ねたあげく、たとえばつぎのような決定をくだすことになるとすればどうだろうか。C

つまり、「これら二つの技術のうちのどちらにも、奴隷どもにたいしてはもちろん、とうぜん自由市民にたいしては、絶対的な権限を帯びて支配権をふるうようなことは、こんごは許可しないことにする。そしてそのかわりに、それが民衆全体であろうとあるいは富裕な階級の者たちだけであろうと、ともかくわれわれ自身を構成者とする定例集会を召集することにする。そして、その集会では、素人の部類に属する者であろうと、当の問題とは無関係な仕事にたずさわる職人の部類に属する者であろうと、ともかくどのような者であれ、航海にかんする問題にたいしても病気にかんする問題にたいしても、集会の一員として自由に意見を発言することを許可されることにする。つまり、ここでだれにでも許されることになるその発言というのは、われわれが患者に種々の薬物を投与したり医療器具による療法を患者にたいして施したりするにあたって、どのような原則に準拠すべきであるのかとか、さらにまた、船舶の本体やその艤装器具を、じっさいに船を動かす航海期間のあいだ、ことに種々の危険に対処するにさいして、どのような方法で操作すべきであるのか、などというような問題についての発言のことなのである。そしてここで、この航海時の危険というもののうちには、まず、強風や波浪のために航海そのものが脅かされるさいの危険も含まれているし、さらに、海賊どもに遭遇したために生じる危険も含まれているし、さらにまた、幾艘もの軍艦を用いて敵がわの艦隊と海戦を交えたりしなければならなくなるようなばあいの危険などが、とうぜん含まれているのである。さて、こうして医療や航海などの問題にかんして群集が決議した事項は、それがしかるべき医者や船長たちの助言にもとづくものであろうと、あるいは当の分野には暗い素人D

たちの助言にもとづくものであろうと、どちらのばあいでもまったく同様に、これを木製回転板[1]とか金石板[2]とかのようなもののうえに書きとどめることにする。もちろん、この種の決議事項のうちの一部のものには、これを祖先伝来の慣習と同じであると見て、不文律としての効力を認めることにする。そして、いまからただちにこんご永久にわたり、海上の航海も患者にたいして施される医療も、以上のとおりの決議事項に準拠しておこなわれるべきものとする」——と決定することにすれば……。

若いソクラテス　これはまた……、まったく奇妙な状況を先生はお描きになりました。

エレアからの客人　うん、そればかりか、「富裕な人々のなかからであろうと、民衆全体のなかからであろうと、籤引きをして当たった者がだれでも当の地位へ登用されることになる、という規定を設けて、群集を指導する役職者が毎年任命されるべきものとする。そして、このようにして任命された役職者たちが、さきに定められたあの成文法に準拠して権限をふるいながら、船舶の操舵をも患者の医療をもおこなうべきものとする」と決定することにしてみるのだ。

若いソクラテス　これは、ますますひどいことになってきました。

三八

エレアからの客人　さあ、では、いま述べた事態に続いて、その結果としてとうぜん起ってくるあらたな情景をも、きみ、眺めてみてくれたまえ。つまり、いま言った役職者たちのめいめいがその一年間の任期をすべて勤め終えることになるときに、なんにんかの裁判官からなる法廷が構成されなければならぬであろう。この裁判官

たちは、あらかじめ選びだされている富裕な人々のうちから、あるいはむしろ逆に、民衆全体のうちから、ともかく籤引きによって選出された者である。そこで、任期満了により役職者の座をいまおりたばかりの人々をこの裁判官たちのもとへ召喚し、その在職中の行跡についてこの人々に尋問を加えなければならぬだろう。そして、過去一年間のその在職中において、船舶を操舵するにあたりあの成文法に準拠しなかったとか、祖先たちがさだめた旧来の慣習に準拠しなかったとかのかどで当の者を告発することが、希望者にはだれにでも許されることになるであろう。患者の医療をおこなった者にたいしても、これとまったく同様な告発がなされることになるであろう。

さらに、これらの被疑者のうちから有罪の判決を受けるにいたる者がでたばあいには、これらの者がどれほどの体刑を受けるべきかを、あるいはどれだけの罰金刑を支払うべきかを、裁判所は、とうぜん裁定することになるであろう。

若いソクラテス　ええ、たしかに、このような社会のなかにおいてであれば、自分がそこで役職に就くことに同意するような者は、ことに、みずからすすんで役職に就こうとするような者は、どれほど大きな体刑や罰金刑を受けても、それをまったく正当な報いと思うべきでしょう。

B

1　木材をピラミッドのような三角錐のかたちに切って、これを回転軸に取り付けたもの。前六世紀のアテナイの立法者ソロンなどは、自分が立法した法律を、このような回転板に書きしるした。アリストテレス『アテナイ人の国制』(七の一)を参照。

2　大理石や真鍮などの板。前四世紀のアテナイでは、この種の板に法律文を書き刻むのがならわしになっていたと言われる。

エレアからの客人　いやそればかりか、以上のすべての法規に加えて、さらにもうひとつだけ法律を制定する必要があるだろう。つまり、最後を飾るべきこの法律によれば、操舵術や航海法などについて、あるいは他方、健康法をはじめとする医学上の真理について、たとえば大気の性質とか種々のかたちでの熱気や冷気などが人体におよぼす真の影響などについて、だれかがさきの成文法を無視して探究をおこなっていることが明らかになるばあいには、つまりこの種の問題についてだれかがなにか怪しげな思索などによる新説を立てていることが明らかになるばあいには、まず第一の処置として、この者を医術専門家とも操舵術専門家とも呼ぶべきではなくて、たんに空理空論家とか饒舌なソフィストのたぐいだというくらいに呼ぶことにしなければならぬことになるのだ。さらにそれに続くべき処置として、この者が社会にあってはおおぜいの若年者を堕落させているとして、[1]つまり、C 法律を守ることなく操舵術や医術に関与しつつ船舶や病人たちにたいして絶対的な権限を帯びて支配権をふるうように、との不穏な教唆を青年たちにむかっておこなっているとして、この者を当の権限のある者のうちの希望者はだれでも告発して、裁判所などのようなところへ召喚しなければならぬことになるのだ。そして、審理の結果、この者が法律や書きしるされている法規の字義などに違反するような説得を、青年たちにであれあるいは老人たちにであれ、おこなっているのだと見なされるようなばあいには、この者を極刑によって処罰しなければならないことになるのだ。

このとき、官憲当局はこの法律の趣旨を説明して言うであろう。「なぜなら、いかなる者でもぜったいに法律よりも賢い者であってはならない。またじじつ、医療法や健康法についても、あるいは操舵法や航海法についても、だれひとり無知な者はいないはずだ。なぜなら、成文法はすでに明記されているのであるし、祖先伝来の慣

D 習も揺ぎなく確立されているのである以上、だれでもこれらを学ぶことを望む者には、その学習が許可されているのだから」と。

さあ、ソクラテス、いまの話で私が言及した若干箇の知識にたいして、いま私が説明したとおりのひどい処置が加えられるとすれば、そしてさらに、全軍統帥術も、また、その種のいかんにかかわらず全部の狩猟術も、さらに絵画法も、あるいは全部の模写術のいかなる部門も、さらに大工工事術も、さらにその種のいかんにかかわらず用具類作製業の全体も、あるいはさらに農耕業や植物栽培の技術の全体も、いま私が述べたとおりに取り扱われることになるとすれば、どうだろうか。あるいはさらに、馬の飼育法などまでもが法典に従っておこなわれるというようなありさまをわれわれが眼前に眺めなければならぬようになるとすれば、どうだろうか。あるいは全部の動物群世話術が、あるいは予言術が、あるいは召使的奉仕術のうちに包括されているすべての部門が、あ

E るいは将棋が、あるいは全部の数学技術が、つまり、純粋数論も平面幾何学も立体幾何学[2]も、さらに運動力学[3]までもがここに含まれることになるだろうが、——さあ、これらのものすべてが、いま私の説明したとおりに処理されることになるとすると、つまり、これらが技術に準拠してではなくて、法典に準拠しておこなわれることになるとすると、われわれの世界は、いったいどのような光景のものになってくることだろうか。

---

1 この前後の言葉は、喜劇詩人アリストパネスがその作品『雲』においてソクラテスに加えた揶揄の言葉と、プラトンの初期作品『ソクラテスの弁明』にみられるような、メレトスやアニュトスらの一派による法廷へのソクラテスの告発状の言葉とを、たくみに結合することによって書かれたようなかたちになっている。

2 直訳的には、「深さを持つものを扱う数学」

3 直訳的には、「速度を持つものを扱う数学」

(299)

若いソクラテス　明らかに、さまざまの技術はことごとく、探究というものを禁止するあの法律の力によって、われわれのもとから完全に滅却されてしまうことでしょうし、また将来においても、二度と蘇生することはぜったいにありえないことになるでしょう。したがってまた、われわれの人生は、そうでなくても現状のままでは生きづらいものであるのですが、そのうえ、いま先生が説明されたような時代がくれば、まったく息ひとつ吐くことさえできないものになることでしょう。

三九

300

エレアからの客人　ではこんどは、つぎのばあいについてのきみの意見を聞きたいのだ。つまり、われわれが万事にわたる強い規制処置を設けて、いま私が挙げたいろいろな技術の分野での活動がことごとく、法典に準拠しておこなわれるようにきめておくとともに、われわれのこの法典を統轄すべき任にあたる役職者として、選挙で選ばれた者とか、あるいは籤が当って偶然に選ばれた者とかを定めることにするばあいでも、もしも、この者がこの成文法にはなんらの敬意をも払わず、逆に、なにかの利欲心に駆られたり、あるいは私的な情実に走ったりしたために、その成文法の定めるところとは異なることを、自分が知識の所有者ではないのに、おこなおうと試みるようなことがあれば、これは、さきのばあいの害悪よりもさらにひどい害悪だということになるのではないだろうか。

若いソクラテス　このうえなく真実なことをご指摘になりました。

B

エレアからの客人　それはなぜかといえば、私の見るところでは、法律というものは、すくなからざる試行錯

誤をかさねたうえで定められたものであるとともに、しかるべき助言者たちが善意のかぎりをつくしつつ箇々の事項について助言したうえで、かつまた、その制定をおこなうようにと民衆を納得させたうえで定められたものであるのだから、そういう定めに違反したことを不遜にもおこなおうとする者は、さきのばあいの罪過のなん倍も大きな罪過を犯してしまうことになるからだ。言いかえれば、こういう者は行動というものの全体を、さきのばあいの法典よりもさらにひどく混乱させることになると考えられるからなのだ。

若いソクラテス　ええ、もちろん、とうぜんそうなるはずだと考えられます。

C　**エレアからの客人**　そうであればこそ、およそなにごとについてであろうと、法律ないし成文法を制定する当局者たちは、個人にも群集にも、その法律に違反するようなことは、それがいかなることであろうと、いかなるときにおいてであろうと、また、いかなる点において違反することであろうと、これをおこなうことを許可しないという方針を、次善の方策[1]として堅持しているわけなのだ。

若いソクラテス　正当なご指摘です。

エレアからの客人　さてそこでだが、まず、この法律ないし成文法というものは、日常百般のことがらにかかわる真理を写し表わしたものだ、と言えるようだ。つまり、有識者たちがあらんかぎりの力をつくしてこの真理を文字に書き写したものなのだ。

1　次善の方策とは、直訳すれば、「第二の航海」である。この語句の意味については、『パイドン』99Dや『ピレボス』19Cなどを参照。

若いソクラテス　ええ、もちろんです。

エレアからの客人　ところが、われわれのさきほどの主張を思いだしてみると、有識者というものは、つまり真の意味での政治家というものは、自分の活動の本領を発揮しようとするさいには、自分の持っている技術だけを用いることによって多くの仕事をなしとげるはずなのであって、成文法などにはすこしも留意しないはずであった。つまり、このような政治家は、被支配者たちがたまたま遠隔地にいるさいに、そういう者たちのために自分自身が文字に書きしるしたうえで書簡のかたちで書き送ってやっておいた命令書、こういう命令書の指示するところとは異った指示のほうがむしろ優れていると自分が判断するさいには、いつでも自分のその判断のとおりに対処するものだとわれわれは主張したはずだ。(1)

D

若いソクラテス　ええ、われわれは、たしかにそう主張しました。

エレアからの客人　そうだとすると、いかなる一人の人物にせよ、あるいは一人以上のいかなる人々にせよ、ともかくこの種の者が、制定された法律を手もとに持っているさいにも、その法律とは異る方策のほうが優れていると信じて、その法律に書かれている文字の規定に反するようなことを実施しようとくわだてるばあいには、この種の者は、あの理想としての真実の政治家がおこなうはずだと期待されることと、その力のおよぶかぎりにおいてではあるが、一致するようなことをおこなっていると言えるのではないだろうか。

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

エレアからの客人　けれども、この種の者は、ほんとうの知識を持っていないのにもかかわらずそのようなことをおこなうばあいには、真実の統治を写し表わそうとくわだててはいても、じつはまったく拙劣にそれを写し

E

表わすことになる。——それに反して、もしもこの種の者がそのさい技術をそなえていれば、その統治は、もはやなにかを写し表わしているものなどではなくて、あの理想としてのこのうえなく真実な統治そのものだと言えるのではないだろうか。

若いソクラテス ええ、まったく仰せのとおりのようです。

エレアからの客人 ところが、われわれ両名がさきほどから一致して認めているところによれば[2]、およそ多数者というものはけっして技術というものを、その種のいかんにかかわらず、習得することができないのだ。

若いソクラテス ええ、その点は、じじつわれわれが認めているところです。

エレアからの客人 だから、王者の持つべき技術というものがともかく成立すると考えられる以上は、富裕な人々の大多数も民衆の全体もどちらも、この技術を、すなわち「政治家の持つべき知識」を、けっして習得することはできないであろう。

若いソクラテス ええ、できるはずはありません。

301

エレアからの客人 だからこそ、いま私が指した二種類の人々のうちのどちらが主権を握っているような政体の国家も、ともに、それらがあの真実の政体の国家を、つまり、技術を活用しながら統治する唯一の人物の治下にある国家を、力のおよぶかぎりりっぱに写し表わそうと意図する以上は、法律がそれらの政体の国家のために

1　本篇の295C〜Eを参照。なお、プラトンの『書簡集』などは、この種の、書簡による命令書の典型とも考えられるものを含んでいる。

2　本篇の292Eを参照。

ひとたび制定されたうえは、文字に書かれた法規と祖先伝来の慣習とに違反するようなことを、なにひとつおこなってはならぬことにすべきであるようだ。

若いソクラテス　このうえなく美事なお言葉です。

エレアからの客人　そこで、あの理想の政体を写し表わそうとする支配主体が富裕な人々であるばあいには、そのさいにできるような政体をわれわれは「上流者支配政体（アリストクラティアー）[1]」と呼ぶことにする。それにたいして、そのような国家の支配者たちが法律に敬意を払わないばあいには、このときの政体を「少数者専制政体（オリガルキアー）」と呼ぶことにする。

若いソクラテス　おそらく、そのどちらもそう呼ばれるべきものでしょう。

B

エレアからの客人　さらにそれにたいしてこんどは、唯一の人物が法律を守って統治しているばあい、この統治者はほんとうの知識を持ったあの理想の者を写し表わそうとしているわけであるが、このばあいには、この統治者をわれわれは「王」と呼ぶことにする。なお、ここでわれわれは、この単独支配者がほんとうの知識を活用しているのか、それともたんなる思わくに頼りながら法律を守っているのかという相違を、特別の名称によっては区別しないことにするのだ。

若いソクラテス　おそらく、われわれは仰せのとおりにすべきでしょう。

エレアからの客人　だから、支配者の地位にある唯一の人物が真の意味で知識を持っているばあいにも、この人物は[2]、その名称のうえではいま私が最後に言及した者のばあいと疑いもなく同一であって、やはり「王」と呼ばれるべきなのであり、ほかのなにものとも呼ばれるべきではないであろう。さあ、この点を顧慮したうえで全

体を総覧してみると、われわれがいまの時点で論究しているいろいろな政体の名称は、全体でけっきょくは五箇となってくるのだ。(3)

若いソクラテス　ともかく、そうなってくるようです。

エレアからの客人　ところがこんどは、支配者の地位にある唯一の人物が法律にも従わず、慣習にも従わずに行動していても、じっさいにはさらに、つぎのような者であるばあいにはどうであろうか。つまりこの者が、真の知識を持っている者であるかのようによそおって、最善の方策をとるためには文字に書かれた法規に違反することをさえ恐れてはならぬ、などと称していながら、この者にこうして理想を写し表わすかのような行動をうながしているおもな原動力が、なんらかの欲望とか無知とかであるようなばあいには、このような部類の者のめいめいをわれわれは「専制僭主（テュラノス）」と呼ばないわけにはいかないと私は思うのだが、どうだろうか。

C

若いソクラテス　もちろん、そう呼ぶべきです。

1　この語がじつは不相応な美名であることについては以下の302Dを参照。なお、これの原語の直訳は「最優秀者支配政体」であるが、『国家』における同名の政体とはその実質をまったく異にする。

2　もちろん、これは、いわゆる「哲人王」である。この哲人王を頂く政体は、さきの291D〜Eの箇所では、まだ顧慮されなかったものである。

3　ディエスおよびスケンプに従って、δι' ἃ δὴ τὰ πάντα ὀ. τ. ν. λ. π. πέντε μόνον γέγονεν. と読む。ここで、五箇の政体とは、それぞれ、君主支配政体、僭主独裁政体、上流者支配政体、少数者専制政体、民主政体のことである。――なお、可能な全政体を挙げると、民主政体が、以下の302D〜Eにおいて述べられているように、二種類に分けられるとともに、前注で触れられた哲人王の支配する政体も加えられるから、ほんとうは全部で七種類の政体があることになる。以下の302Cを参照。

四〇

D

エレアからの客人 さあ、以上で述べたようにして、専制僭主も王も、それから少数者専制政体も上流者支配政体も民主政体も、地上に生じてくるにいたっていると私は見ているのであるが、これらが発生する理由を深く考えてみると、これはまず、世間の一般の人々があの唯一の理想としての単独支配者というものを憎悪しているからであるのだ。そして、いかなる者であろうと、あれほど素敵な政治権力をそなえるにふさわしい者にはぜったいになるはずはないという疑惑の気持を、一般の人々が抱いているからであるのだ。つまり、みずからの優秀性と知識とを活用しながら統治することによって、聖俗それぞれの義と正とをその配下の全員にたいして誤りなく割り当てるという仕事をすすんでおこなうとともに、それに必要なだけの能力をもそなえているということ、これほどのたいへんな要求にこたえうるような権力者などはぜったいに見つかるはずがない、と一般の人々は思っているからであるのだ。そしてさらに、これほどの権力者であれば、われわれのうちの、そのつどその者が望むであろう者を、虐待したり殺したり痛めつけたりするにきまっている、とだれでも思っているからなのだ。もちろん、いま私が述べたような人物がもしもほんとうに現れるようなことがあれば、その人物は、ひとびとの歓呼の声のなかで迎えいれられて、その治下の、厳密な意味で正当な国家を独力で安泰に舵取りながら、その国で生涯を送ることであろうが。

若いソクラテス そうなるにちがいありません。

E

エレアからの客人 ところが、現実を見て私の確信するところを述べるなら、蜜蜂の巣箱のなかで女王蜂が自

然に発生するようなぐあいには、各地の国家のなかで王者が生じてくることはありえないのだ。言いかえれば、その身体もその精神も、生来かくべつに傑出したまったく独自の者が、自然に発生することはありえないのだ。そうである以上、われわれのうちのしかるべき者たちが一箇所に集合したうえ、あの真実このうえない政体が地上に残していったいくつかの足跡のようなものを、それが消えないうちにいち早く見つけるようにして追いかけていきながら、法典を起草することにせざるをえないのではないかと思われる。

若いソクラテス　おそらく、そうせざるをえないようです。

エレアからの客人　だからこそだ、ソクラテス、このようにしてできたいろいろな種類の政体の国家のなかにおいて、いま日ごとに生じるにいたっている無数の禍は、さらにまた、こんごも無数に生じるであろうと考えられる禍も、われわれにとって驚くべきものなどでありえようか。というのも考えてみれば、これらのさまざまな政体の基礎をなす土台は、いま私が説明したとおりのまことに脆いものなのだ。つまりそれらは、知識を活用することによってではなくて、成文法や慣習などに従って、国民のいろいろな行動を規制しようとするものであるにすぎないのだ。そして、政治に直接は無関係なべつの技術を例にとって考えればだれの目にも明白なことであるが、この種のものを自分の基礎として用いている技術というものは、自分が作りあげていくすべての作品を崩壊させてしまうにきまっているのだ。

いやむしろ、われわれは考えかたを変えて、国家とはがんらいなんと堅固なものであることかと考えつつ、この点のほうをこそ不思議に思うべきなのであろうか。というのも、地上における諸国家はいま言ったようなかずかずの禍を現在にいたるまでの無限に長い期間にわたって身に受けてきていながら、これらのうちの若干のもの

は安定を保っていて転覆を免れてきているのだから。(1)

けれども数多くの国家は、やはりときおり、ちょうど難船する船舶のようなありさまになって、いま波間にその姿を没していきながら滅亡の足掻きを見せているし、またすでに滅亡してしまった国家も、またこんごかならず滅亡するにいたるはずの国家も、数多く見られるのだ。これらの滅亡は、国家を船にたとえて言えば、船長や水夫たちに相当する連中が劣等無能であって、もっとも重大な問題についてもっとも由々しい無知の極みに陥っている結果として招来される不幸なのだ。つまりこの連中は政治にかんする問題についてはいかなる点においてもほんとうのことを知ってはいないのに、自分では、さまざまな知識の全部のうちでとくにこの政治にかんする知識をあらゆる点においてもっとも明確に習得していると思いこんでいるのだ。

B

若いソクラテス　このうえなく真実なことをご指摘になりました。

四一

エレアからの客人　さあでは、正当な政体とはその基盤を異にしているこれら種々の政体は、どれもみな、それのもとで共同生活を営む国民にとって耐えがたいものであることに変わりはないのだけれども、しいて言えば、それらのうちのどの政体において、この耐えがたさがもっとも少いのであろうか。逆に、どの政体がもっとも苛酷なのであろうか。この問いに答えることは、現在われわれに課せられている当面の課題を中心として考えるなら、たんに副次的な仕事だと呼ばれるようなものではあるけれども、われわれとしてはいま言った点を一応みきわめておくべきではないだろうか。ともかく、当面の課題をべつとして、一般的な見地に立って考えてみれば、

われわれ人間は、だれでもなにごとをなすさいにも、私のいまの問いが暗示しているようなことを[2]、どうも念頭に置いているようなのだ。

若いソクラテス　もちろんですとも。その点をみきわめておくべきです。

エレアからの客人　うん、それではひとつ、きみがここで認めることにしてもらいたいのだが、さきに述べた三種類の政体のうちのめいめいは、それぞれ同じものでありながら、かくべつに耐えがたいものにも、またきわめて安穏な生活を保障してくれるものにも、どちらにもなりうるのだ。

c

若いソクラテス　どういう意味で、そうお考えになるのですか。

エレアからの客人　いや、きみ、さきほどの論点をふたたび多少とりあげてみたいだけなのだ。つまり、私の主張のうちでとくに注意してもらいたい点を述べてみると、いまやついに洪水のように押し寄せてくるにいたっているこの論究をわれわれが本格的に開始したあたりで見たとおり、単独支配者政体と、少数者が統治する支配政体と、多数者が統治する支配政体とが、三つの大きな部類として挙げられたはずだ[3]。

若いソクラテス　ええ、たしかにその三つが挙げられました。

エレアからの客人　うん、それではひとつ、これら三つのめいめいをそれぞれ真二つに切ることによって、この全体を六種類のものに分けてみようではないか。——もちろんこのさい、あの理想としての正当な政体は、こ

1　たとえば、スパルタなどがそれに近いと考えられる。

2　つまり、「人生をなんとか我慢のできるものにすること」

3　本篇の291Dを参照。

れをこの六種類のものとは無関係なところへ第七番目の政体としてあらかじめ隔離しておくことにするのだ。

若いソクラテス　どのように分けるのですか。

D

エレアからの客人　まず、あの単独支配者政体を、君主支配政体と僭主独裁政体とにわれわれは区別したはずだ。それからさらに、多数者とはいえない人々が統治する政体であるが、これをわれわれはさきほど二つのものに区別して、その一方には不相応なほどの美名を当ててこれを上流者支配政体と呼び、そして他方を少数者専制政体と呼んだはずだ。[1]

それからさらに、多数者が統治する政体については、さきほどは、これの実質を単一なものと見ながらその名称を選ぶことにより、これをわれわれは民主政体と規定したのであったが、このたびはあらためて考えを進めて、この政体をも二種類の実質からなるものと規定することにしなければならない。

若いソクラテス　いったい、どのようにしてそれが二種類になるのでしょうか。それから、どのような違いによってこの民主政体をわれわれは分割していくことにするのですか。

エレアからの客人　これ以外の政体を分割するさいに用いられるはずの違いと同じ違いによってこれを分割することにするのだ。もちろん、民主政体をわれわれが分割しようとするにいたった現時点においてはじめて、こ

E

の民主政体という名称は二義的であるという点が判然となるにいたったのだけれども。しかしともかく、当の統治者が法律に従って支配するのか、それとも法律軽視の支配をするのかという相違点だけは、この民主政体にもそれ以外のすべての政体にも共通してみられる特徴であることに間違いはないのだ。

若いソクラテス　ええ、たしかにその相違点はみられます。

エレアからの客人　うん、そこでだが、さきほどわれわれがあの理想としての正当な政体を探索していたさいには、いま私が用いようとしているような分割法は、あの先刻の論究のおりに私が明瞭に示したとおり[2]、たしかに役には立たないものであった。けれども、われわれがあの理想の政体をひとまず視界のそとへ遠ざけて、それ以外の種々の政体を「やむをえず存置されざるをえないもの」であると断定した以上は、これらの種々の政体の内部での風潮が法律軽視的であるのか、それとも法律遵奉的であるのかという違いが、これらの諸政体のそれぞれを二分割するための根本原則となるのだ。

若いソクラテス　そうですねえ、いまのご説明をうけたまわりますと、どうも仰せのとおりだと考えるべきでしょう。

エレアからの客人　うん、そこでだが、単独支配者政体は、法律と呼びならわされている優れた成文法の拘束によって縛られているかぎり、われわれがいま問題にしている六箇の政体全部のうちで最優秀の政体なのだ。それに反して、この同じ政体が法律を欠いているばあいには、そのような国家は、そのもとで共同生活を送る者にとって耐えがたく、また、もっとも苛酷なものになるのだ。

若いソクラテス　おそらくそうでしょう。

エレアからの客人　それにたいして、多数者とはいえない人々が統治する政体はといえば、「少数」というものが「一」と「多」との中間項をなしているという事情にも対応するような見かたをとって、いまここで問題に

1　この政体は、直訳的には最優秀者支配政体であるから。

2　本篇の 293 A～E を参照。

されている諸政体の優劣という両性格のうえでも、これをちょうどこの中間的な性格の政体であるのだと[1]われわれは判定することにしよう。

それからさらに、多数者が統治する政体というものは、私の見るところでは、これ以外のすべての政体と比較してみればわかることであるが、あらゆる点で弱体であって、それが有益なことであれ、あるいは害悪になることであれ、ともかく強力な処置というものはなにひとつ取りえないような政体であるのだ。それは、この政体においては政治権力が細分化されていて、そのそれぞれが多くの人間の管轄下に配分されてしまっているからであるのだ。

だからして、この民主政体というものは、いまここで問題にされているすべての政体が法律遵奉的であるばあいには、それら全部のうちでもっとも劣悪な政体なのだ。ところが、これら全部の政体が法律軽視的であるばあいには、そのうちでは民主政体がもっとも優秀であるのだ。だから、ことごとくの政体が拘束力を欠く無規律なものであるばあいには、民主政体のもとで暮すのがもっとも望ましい暮しかたなのだ。それに反して、諸政体が秩序正しいありさまを呈しているばあいには、民主政体のもとで生活するのはもっともみじめであるのだ。こういうばあいには、むしろ、私がいまさき最初に挙げた政体[2]のなかで生活することにするのが、それ以外の政体のなかで暮すよりも格段に優れたそしてだんぜん第一等のものとして選択されるべき方途なのだ。もちろん、これは、きみ、あの第七番目の政体[3]を除外してのはなしである点に注意したまえ。

いやたしかに、すべての政体のうちでこの第七番目の政体のみは、ちょうど神が人間どもの群がる地上をはるかに超えたところにましますのと同じように、その他のあらゆる諸政体のはるかかなたの上方にその座を占めて

いる特別に神々しいものだ、とわれわれは考えなければならない。

若いソクラテス　どうも仰せのとおりの結論がでてくるようですし、また、そう見るのが真実に合致した考えかたにもなるようです。ですから、だれでも、先生のいまのお言葉に従うようにして、行動しなければなりません。

C

エレアからの客人　さあ、そういうしだいであるから、われわれはさらに考えを進めて、真の知識を持っている者の治下にあるこの政体のばあいだけは例外として、それ以外のいま見たあらゆる政体に参画しているあのおおぜいの連中を、ほんとうは政治家ではなくて、たんに内紛的党派指導者どもにすぎないのだと断定したうえ、この見地に立ってこれらを排除することにしなければならない。つまりこの連中はもっとも大仕掛けな各種の幻影を擁護する者であるとともに、この者ども自身も同様に種々の幻影そのものである、とわれわれは考えることにしなければならない。そればかりか、この連中こそもっとも大仕掛けな物真似師（ものまねし）ないしは如何様師（いかさまし）なのであるから、これらをわれわれとしてはけっきょく、各種のソフィストのうちのもっとも大仕掛けなソフィストどもにほかならぬ、と考えることにしなければならない。

若いソクラテス　いま先生が口にされたソフィストという呼称は、めぐりにめぐって、ついにいまやあの通俗

1　つまり、「上流者支配政体」は、法律遵奉の諸政体のうちでは、「君主支配政体」に次いで優秀である。他方、「少数者専制政体」は、法律軽視の諸政体のうちでは、「民主政体」よりも劣悪であるが、「僭主専制政体」よりはすぐれている。

2　法律を遵奉している地上の君主政体を指す。

3　哲人王が支配する理想の政体を指す。本篇の302Cを参照。

的な意味での政治家連中のうえにつけられることに決着したわけですが、おそらく、この語法はきわめて正当であるようです。

D

エレアからの客人　うん、そのとおりなのだ。そして、われわれがいま眺めている光景は劇の終了場面にすっかりそのままなのだ。つまり、ついさきほどは、ケンタウロスやサテュロスなどのとおりに扮した俳優たちの一団に似たものが眼のまえに見えてきたと私は言ったはずだが、(1)同時にまた、まさにこの一団をこそ「政治家の持つべき技術」というもののもとから退場させなければならないことを私は示唆したはずだ。ところがいまや論究が、ずいぶん苦しい道程を経たあげく、やっと現在の段階に達したために、この一団はこれでめでたく退場させられてしまったことになる。

若いソクラテス　明らかにそのとおりです。

エレアからの客人　ところがだ、さらに、いま見た一団とはべつの、なおいっそう取り扱いの厄介な一団が、まだ残っているのだ。というのも、この一団は、王者にふさわしい人々の種族(2)と親近関係にあるとともに、さきの一団には見られなかったほどこの王者というもののそばに密着しているために、その正体の把握がもっと困難であるからなのだ。だから、私のいまの感じをひとことで言うと、いまのわれわれは、黄金を精錬する仕事にたずさわっている人々のばあいと類似した状況に置かれているようなのだ。

若いソクラテス　どういうわけで、そうおっしゃるのですか。

エレアからの客人　いま言った仕事にたずさわる職人たちは、やはりわれわれのばあいのようにして、まず最初の作業工程として、土や石をはじめ、これらと同類のそのほか数多くの夾雑物を原鉱から除去するのだ、とい

E

うはなしを私は聞いている。そしてこの除去作業が終わると、黄金と親近関係にある貴金属類が、混合された状態で手もとに残ってくることになる。これらの貴金属は、火を用いることによってのみ分離されうるのであるが、そういうものとしては、まず銅や銀を挙げておかなければならぬ。またときによっては、鋼鉄類のようなもの(3)がそこに含まれているかもしれない。ともかくこれらの貴金属をくりかえし溶融し、それらを試金石になんどもの せてみることによって、辛苦のすえそれらをやっと分離してしまったあげくに、われわれは、世に純金と称されているものがまったく自力で無類の輝きを放つところを、まのあたりに見ることが許されるようになってくるのだ。

若いソクラテス　ええ、聞くところによりますと、黄金の精錬作業はまったく仰せのとおりの方法でおこなわれているそうです。

四二

エレアからの客人　うん、だからいまのばあいのわれわれも、それと同じ方式に従って考えていこうとしているわけだ。つまり、政治家の持つべき知識とはちがったもの、ないしはそれと異質なもの、さらにそれと調和し

1　本篇の 291A～C を指す。

2　本篇の 300C～303D において、地上の不完全な諸政体を中心として論究が進められてきたが、この箇所以後は、ふたたび、哲人王に考察の焦点が当てられることとなる。

3　これの原語は adamas である。その正体は不明だと考えられるべきであるが、ことによれば、ダイアモンドとか白金などが指されている可能性もある。なお、『ティマイオス』59B を参照。

(303)

ない関係にあるもの、——そういう多数のものは、すでにことごとくわれわれの手によって遠くへ分離されてしまっている、と見ることにしてもよいだろう。それに反して、まだわれわれの手もとに残っているのは、その価値が高いとともにいま問題の知識と親近関係にあるようないくつかの技術類である、と考えられるべきであろう。

304

この後者の部類に属するものとしては、まず軍隊統帥法や裁判術や、さらに雄弁などが挙げられるべきであろうが、ここに言う雄弁とは、王者の持つべき知識と密接に協力しながら、正義を実行するように国民を説得することによって、国家に関係するような各種の行動を王者と共同して指導するようなものにかぎられることは言うまでもない。さあそれでは、いま最後に挙げたいくつかの技術類を、どのような方法によれば王者からもっとも容易に切り離すことができるだろうか。もちろん、これらを切り離していけばおのずから、われわれが探索しているあの王者は単身の赤裸々な者となって、まったく独自の風貌を見せながらその姿を現わしてくるはずなのだ。

若いソクラテス　言うまでもなく、いま先生が提示なさった課題をなんとかしてやりとげるようにくわだててみなければなりません。

エレアからの客人　うん、それでは、くわだてるかどうかだけが問題だというのなら、やがて王者の真の姿は明らかになるだろう。では、音楽のばあいを例にとって考えることにより、われわれの探索の目標となっている者の姿を明らかにする仕事に着手しなければならない。そこで、きみ、私の質問にひとつ答えてくれたまえ。

若いソクラテス　どのようなご質問にですか。

B

エレアからの客人　音楽というものは、多かれ少なかれともかく実地に学習されるべきものであるように私は

思うのだが、きみはどう思う？　音楽にかぎらず、総じて手先の熟練を必要とする各種の知識についても、その点は同様なはずだが。

若いソクラテス　そのとおりだと私も思います。

エレアからの客人　では、つぎのばあいはどうだろうか。つまりこんどは、いま私が言及したいろいろな知識のうちの任意のひとつをわれわれが学ぶべきであるのか、それともそれを学ぶべきでないのか、という問題であるが、これら二つのうちのどちらにすべきかを決定するものも、やはり一種の知識であるとわれわれは主張すべきであろうか。いや、きみはこの点にかんしてどう思う？

若いソクラテス　私も先生と同意見です。つまり、それも一種の知識であるとわれわれは主張すべきです。

エレアからの客人　ではさらに、決定をするほうのこの一箇の知識は、そのまえに見た直接的な各種の知識とは次元を異にしているのだという点を、われわれ二人は一致して認めるべきではないだろうか。

若いソクラテス　ええ、認めるべきです。

エレアからの客人　では、つぎの点はどちらが正しいだろうか。つまり、以上で見たすべての知識の範囲のうちにおいてであるが、そのうちのどれひとつとして、それがそのうちの他の知識を支配すべきではない、と見るのが正しいだろうか。それとも、さきに挙げた直接的な各種の知識が、あとで挙げた知識を、つまり決定をするほうの知識を、支配すべきだと見るほうが正しいだろうか。あるいは逆に、あとで挙げた一箇の知識のほうが、それ以外の各種の知識のすべてを監督しながら支配すべきだ、と見るほうが正しいだろうか。

若いソクラテス　あとで挙げられた一箇の知識のほうが、そのまえに挙げられた各種の知識を支配すべきだ、

C

と見なければなりません。

エレアからの客人　するとどうも、きみの判定に従えば、なにかほかの知識をわれわれが学習すべきであるか否かを決定する知識のほうが、当の学習され教授されることになる知識を支配すべきである、とわれわれは宣言することにしなければならぬようだ。そうだろう？

若いソクラテス　それはもう、ぜひともそう宣言すべきです。

エレアからの客人　すると、いまのばあいとどうも同じ理由によって、説得ということをおこなうべきであるか否かを決定する知識もまた、説得する能力そのものを授けうるような知識を支配すべきである、と見るべきであるようだ。そうだろう？

若いソクラテス　もちろん、そのとおりです。

エレアからの客人　よしきた。では聞くが、説得の能力は、ほんらいなんという知識のおかげで生じてくるものなのだとわれわれは考えるべきであろうか。たんに教示だけを伝えることによってではなくて、巧みな物語をも交え(まじ)ながら、多数者ないし群集を説得していく能力は？ D

若いソクラテス　私の見るところでは、それは明らかに弁論術によって授けられるものだ、とわれわれは考えるべきでしょう。

エレアからの客人　では他方、説得を用いてにせよ、あるいはまたなんらかの強制手段を用いてにせよ、或る一団の人々にむかってなんらかの方策を講じるべきであるのか、それとも逆に、完全な静観を続けるべきであるのか、という点についての決定をくだす任務は、どのような知識がはたすものだとわれわれは考えるべきであろ

うか。

若いソクラテス　それは、説得術ないし言論報道術というものを支配しうるような知識のほうがはたすべきものでしょう。

エレアからの客人　それはつまり、私の見るところでは、政治家がそなえるべき技能としての知識にほかならないようだ。

若いソクラテス　これはまた、まったく美事なご説明です。

エレアからの客人　さあこれで、政治家の持つべき知識のほんらいの範囲から、真に異った種類をなすものとしての弁論術の分野が、あまり手間取らずに分離されたようだ。しかも、弁論術が、政治家の持つべき知識の下位にあってこれに奉仕するようなものであることも、同時に明らかになった。

E

若いソクラテス　はい、そうです。

四三

エレアからの客人　ではこんどは、つぎのような種類の能力については、われわれはどのように考えるべきであろうか。

若いソクラテス　どのような能力についてですか。

エレアからの客人　それは、われわれがどこかの相手国と開戦することを決意したばあいに、その特定の敵国とどのような戦略によって戦争すべきであるのかを発見する能力についてなのだが、さて、ここでわれわれとし

(304) ては、この能力が技術とは無関係なものだと主張することにしようか。それとも、この能力が技術にもとづくものだと主張することにしようか。

若いソクラテス　いや、先生、全軍統帥術をはじめとするあらゆる戦争行為が発動されるにいたるさいにその準拠として用いられるような能力が技術とは無関係なものだなどと、どうしてわれわれは考えうるでしょうか。

エレアからの客人　では他方、開戦に踏みきるべきであるか、それとも友好関係を維持して両国家間の紛争点を氷解すべきであるかを、徹底的に熟慮して決定するだけの実行力と洞察力とをそなえている知識、われわれはこの知識を、きみがいま言おうとしたほうの技術とは異るのだ、と考えておくことにしようか。それとも、その技術と同一のものだと考えておくことにしようか。

若いソクラテス　私どもは、いまさき弁論術について考察したばあいにとった見地をつらぬくつもりでいるのでしたら、必然的に、いまの知識はさきの直接的な知識とは異るのだと見るべきです。

305 **エレアからの客人**　それでは、いまさきの論究のばあいと同様な見地をとることにする以上、われわれはこんどもやはり、あとで挙げられた知識のほうがさきに挙げられた知識を支配するものなのだ、と判定すべきではないだろうか。

若いソクラテス　私も同じ意見です。

エレアからの客人　うん、それでは、戦争術というものは、まことに恐るべき、まことに強力な技術なのであるから、この技術の範囲にはいるものの全体を完全に牛耳（ぎゅうじ）ることができるほどの絶対権をそなえている主人とい

うものが、いったいなんという名前の知識であるのかを判定しようと思えばたいへんなくわだてをやることになるのであるが、ともかくこの主人は、どう考えてみても、真実の意味でその名に値するようなあの「王者の持つべき知識」にほかならない、と言うべきではないだろうか。

若いソクラテス　ええ、それ以外のいかなる知識でも、それほどの権力はそなえていません。

エレアからの客人　するとどうも、将軍たちが身につけるべき知識というものは、べつの知識の下位にあってこれに奉仕するようなものであるから、われわれはこれを「政治家の持つべき知識」と見なすべきではないようだ。

若いソクラテス　そう見なしては、理屈に反することになるでしょう。

B

エレアからの客人　さあそれでは、ここであらたに、べつのものへ目を転じることにしよう。そして、正当で真正な判決をくだす裁判官たちの技能を、われわれは注視してみることにしようではないか。

若いソクラテス　ぜひ、そのようにしてみましょう。

エレアからの客人　では聞くが、この技能は、種々の約定が人間のあいだで取りかわされるさいに発生するいろいろな問題を処理するにあたって、法律の規定として制定されている条項の総体を立法者としての王者の手から受領したうえ、たえずこれを参照しながら、正当であると裁定されるべき行為と不正であると裁定されるべき行為とを判別するという仕事、こういう仕事の権限をなんらかの意味で超えるにいたるほどの任務をはたすことができるであろうか？　もちろん、裁判官たちのこの技能は、いま言った仕事をはたすにあたっては、自分だけがそなえている固有な優秀性の真価を発揮することになる。つまり、いかなる賄賂にも脅迫にも憐憫にも、さら

C

にそのほか、嫌悪感とか贔屓心(ひいきしん)とかのようななにかの個人感情にも屈することなく、立法者の定めた規定に反することがないようにと心がけながら、双方の法廷対抗者の相反する申し立てにかんして裁定していくところが、この技能だけの本領なのだが。

若いソクラテス　そうです。それ以上のことを裁判官たちから期待することは無理です。つまり先生はいま、この技能が成就しうる仕事のだいたい限度だと考えられるところをご説明になったわけです。

エレアからの客人　すると、いまやわれわれの眼前に明らかになりつつあることであるが、裁判官たちがどれほど堅固な節操を身につけていても、この堅固さも、王者の持つべきものではないようだ。つまりこの力は、法律を守護しつつ王者の持つべき力に召使として奉仕するもの、そういうものであるにすぎないようだ。

若いソクラテス　どうも、そのとおりであるようです。

エレアからの客人　さあ、このようなしだいで、以上においてわれわれがとりあげてみたあの三種類の知識を総覧してみれば、明らかにこれらのうちのいかなるものも「政治家の持つべき知識」ではありえないことが、おのずから理解されてくるはずだ。いやたしかに、真実の意味でその名に値するような「王者の持つべき知識」と

D

いうものは、直接に自分が手をくだして行動するようなことをしてはならないのだ。それはむしろ、直接に行動する能力をわれわれに授けうる種々の知識、これらの知識を支配すべきものなのだ。なぜなら、この唯一の知識だけが、どの国家におけるばあいであれ、その国家の浮沈にかかわるような最重要政策を、開始して一気に発動させることが時宜にかなっているか、それとも時宜に反しているか、という問題について真に熟知しているからなのだ。それに反して、これ以外のあらゆる知識は、こうして指示された政策をたんに実行しうるだけなのだ。

若いソクラテス　正当なお言葉です。

エレアからの客人　だから、以上のとおりの理由によって、さきほどからわれわれが立ち入って調べてきたあの三種類の知識のほうは、相互にそれらのうちの他を支配すべきでもなく、また、そのそれぞれが自分を自律的に支配すべきでもないのだ。つまり、これらの知識のそれぞれは、自分にとって固有な或る特殊の活動分野だけに関係しているにすぎないのだ。だから、このそれぞれが持つにいたっている名称も、その活動分野のこのような特殊性にもとづくものであるがゆえに、とうぜん特殊なものになっているのだ。

若いソクラテス　ともかく、その点は仰せのとおりのようです。

E

エレアからの客人　それにたいして、他方の唯一の知識のほうは、いま私が言ったあの三種類の知識の全部を支配する知識であるとともに、法律をはじめとして国家(ポリス)にかかわりを持つ全部のものごとについて心配してやりつつ、このうえなく完璧にこの全体をまとまった一枚の織物となるように織りあげていく知識でもあるのだから、われわれは、ここに見られるような国家公共体の持つ全般性を表明しうるような呼称を用いてこの知識の能力を包括することにするなら、この知識を「政治家の持つべき知識(ポリーティケー)」と呼ぶのが、私の信じるところでは、どうももっとも適切であるようだ。

若いソクラテス　まったくそのとおりです。

四四

エレアからの客人　さあそれでは、国家にかかわりを持つあらゆる種類の事項をわれわれは以上において明瞭

に理解できるようになったわけであるから、こんどは、あの機織り術を類例として用いていくことによって、この「政治家の持つべき技術」を綿密に吟味してみることにしてはどうだろうか。

若いソクラテス　そうですとも。ぜひそうすることにしましょう。

エレアからの客人　ではまず、王者のおこなうべき編み合わせ作業というものを問題としてとりあげてみて、これがどのような種類の編み合わせであるのかを、また、この作業がどのようなぐあいに編み合わせていくことによってどのような種類の織物をわれわれの眼前に作りあげて見せてくれるのかを、われわれは論究してみなければならぬようだ。

306

若いソクラテス　明らかに、その問題を考えてみなければなりません。

エレアからの客人　してみると、われわれはどうも、まことに困難な問題に明確な解答を与えざるをえない破目になってしまった。いや、ほんとうなのだ。

若いソクラテス　それでもやはり、その問題をわれわれはぜひとも論じなければなりません。

エレアからの客人　ではまず、私の重要な主張点のうちのひとつを述べてみると、「美徳というものをかたちづくるひとつの構成部分が、美徳というものの範囲に含まれているひとつの真の種類と或る意味では対立関係にある」という説をわれわれは立てなければならないのであるが、このばあいには、論理を巧みにあやつる論争好きな連中が一般の世人の抱いている信念を盾にとってこの説に攻撃を加えてくることはきわめて容易であるということを、われわれは覚悟しておかなければならない。

若いソクラテス　いまのお言葉の意味は、私にはまるきりわかりませんでした。

エレアからの客人　ではあらためて説明のしかたを変えて、つぎのように述べることにしてみよう。さあ聞きたまえ。「勇気（アンドレイアー）」が美徳というものをかたちづくる一まとまりの構成部分であることをわれわれが承認してもよいということにたいして、きみにも異存はないと私は思うのだ。B

若いソクラテス　まったく異存はありません。

エレアからの客人　さらにまた、「慎重（ソープロシュネー）」は勇気とは異るものではあるけれども、やはりこれもまた、勇気がそうであるのと同様に、美徳というものをかたちづくる一まとまりの構成要素であることをきみは認めるはずだ。

若いソクラテス　はい、認めます。

エレアからの客人　さあそこで、これら両種の美徳について、われわれは大胆な態度をとって、ひとつの驚くべき新説を表明してみなければならない。

若いソクラテス　それはどのような説ですか。

エレアからの客人　これら両種の美徳は、現実の世界のなかの多数の事例のかたちで現れてくるさいに、なにかひとつの見地からその姿を見ると、相互に相手を激しく憎悪しているとともに相手にたいして反対党派の関係にあるようなものだと考えられる、という説なのだ。

若いソクラテス　どういう意味のことを先生は述べようとしておられるのですか。

エレアからの客人　私が述べようとしているのは、どう考えてみても、一般の人々にとっては聞きなれぬ新奇な説なのだ。いやたしかに、きみも知っているとおり、美徳というもののいろいろな構成要素は、その全部が相C

互にとって仲のよい調和関係にある、と一般には説かれているらしいのだ。(1)

若いソクラテス　そうなのです。

エレアからの客人　さあそれでは、この問題が一般に説かれているほど単純平明なものであるのか、それとも、これらの構成要素のうちには、その同属の諸要素と或る点では相容(あいい)れないような相違性をやどしているものがいくつかあると見るのがなによりもりっぱな見かたであるのか、このふたつのうちのどちらなのかという問題を、われわれは十分に注意を集中して考察することにしようではないか。

若いソクラテス　賛成です。ですから、どのような方法によってその考察をおこなうべきかを、先生に指示していただきたいのです。

エレアからの客人　あらゆる種類の事象のうちで、われわれがそれを全体としては美事なものだと見なしてはいるけれども、同時にまた、そのそれぞれを相互に相反対の関係にある二箇の真の種類へわけてみることもできるようなもの、こういうものの全部についてわれわれは探究する必要があるのだ。

若いソクラテス　できることなら、もうすこし明確に説明してください。

エレアからの客人　「活発さ」とか「速さ」とかというようなものを例にとってみたまえ。このような性質は、D それが人体のうえに見られるばあいでも、あるいは精神のうえに見られるばあいでもよいのだ。さらに、発声の急激な動作のうえに見られるばあいでもよいのだ。それからまた、現実の生命体自体がそういう性質のものであるばあいでも、あるいは各種のたんなる写像のなかにそういう性質が見られるばあいでもよいのだ。ここに言う写像のうちには、音楽が或る種の模写をすることによって作りだすような写像も含まれているし、さらに、うま

くいけば絵画法でも、この種の写像に該当しうるほどの模写の逸品を作りだすことがある。いずれにせよ、以上で私が挙げてみたいろいろな種類の現象のうちのなにか或るひとつのものを、さあひとつ、きみ自身がいままでに称賛したことがあるかどうかを、あるいは、きみの目のまえで他人が称賛するのをきみが見たことがあるかどうかを、私に答えてくれたまえ。

若いソクラテス　もちろん、その種のことをなら、私も経験したことがあります。

エレアからの客人　それでは、とうぜんきみは、いま私が挙げたいろいろな現象のそれぞれのばあいにのぞんでその現象の称賛者たちが自分の心のなかで感じるその称賛の気持をどのようなかたちで表面に現わすものであるかを、記憶しているはずだ。そうだろう?

若いソクラテス　いいえ、それはぜんぜん覚えていません。

エレアからの客人　すると、いまの私の質問にたいする解答を、言葉による説明だけを用いて、私が心のなかで熟知しているとおりの明瞭なかたちにしてきみのために明示してやることが、私の力でうまくできるだろうか。

E

若いソクラテス　先生の力でそれができないはずはありません。

エレアからの客人　きみは、どうもこの仕事を甘く見ているようだ。それはそうと、われわれは相反対の性質を含んでいるような種類の現象を見つめながら、いま私が触れようとした問題点を考察してみることにしよう。

1　ここに挙げられている一般の説は、じつは、まだソクラテスの影響下にあったプラトン自身の初期から中期にかけての諸作品にも、その各所に見られる見地である。たとえば、『プロタゴラス』329C sqq. や 349B～350C などを参照。

さあよく聞きたまえ。人間たちの行動のうちの数多くのものに着目してみると、われわれはじつに頻繁に、思考過程とか体力とかの、さらにばあいによれば、発せられた肉声などの「速さ」や「激烈さ」や「活発さ」に驚嘆するものなのだ。このようなおりにわれわれは、このような一連の性質にたいする称賛の気持を言葉にして述べようとすれば、いつでもかならず同じように、「勇壮だ！」と称呼するものなのだ。

若いソクラテス　そこを、もうすこし説明してください。

エレアからの客人　では、いろいろな例を挙げていくと、われわれは、まず或るひとつのばあいには、「これは活発だ」とか「これは勇気がある」などと言うかもしれない。またべつのばあいには、「これはすばやい」とか「これは男らしい」などと言うかもしれない。さらにまた同様にして、「これは激烈だ」と言うようなばあいがあるかもしれない。けれども、どのばあいにおいても、いま私が言ったとおりのあのひとつの名称を共通の名称としてこれらすべての素晴らしい特質に当てることによってはじめて、われわれはこれらの素晴らしさを称賛することになるのだ。

若いソクラテス　そのとおりです。

307

エレアからの客人　では、つぎのばあいはどうであろうか。つまり、こんどは逆に、静穏にものごとが進められていくばあいに見られる特質としてのこの「静穏さ」を、われわれは人間の行動のうちの数多くのもののうえに発見して、これを称賛したことがいままでにたびたびあるのではないだろうか。

若いソクラテス　ええ、それはもうまったく疑いなく、そういうことがたびたびありました。

エレアからの客人　するとわれわれは、こんどの称賛の気持を声に出して言い表わそうとすれば、まえのばあ

いとは反対の意味を持つような言葉を用いざるをえないと私は思うのだが、この点についてきみにもまさか異存はあるまい？

若いソクラテス　具体的にその点を説明してください。

エレアからの客人　では、種々の例にわけて説明してみると、われわれは、きみもたぶん知っているとおり、いま私が言ったような性質のものを見るたびに、「これは粛然としている」とか「これこそ慎重さの所産だ」などと批評するものなのだ。さらに、われわれは、思慮のさまざまな動きを見るさいにも、あるいはまた人間のいろいろな行動を見るさいにも、それらのものが悠然としていて柔軟であるありさまに驚嘆するばあいには、あるいはさらに肉声の響きを聞いてそれが滑らかであるとともに低音の荘重さを帯びているありさまに驚嘆するばあいには、さらに、どのような動きかたにせよそれがリズムに合致しているありさまに、それから詩歌のすべてが時宜に応じて悠然とした調子を活用しているありさまに驚嘆するばあいには、——以上のような全部のありさまにたいして「これは勇壮だ！」という名指しかたをではなくて、「これは慎み深い」という名指しかたをわれわれはいつでも適用するものなのだ。

B

若いソクラテス　このうえなく真実なことをご指摘になりました。

エレアからの客人　ところがそれに反して、こんどは逆に、以上で見た両種の美事なはずの事態が時宜に反して発生していることにわれわれが気づくようなばあいには、われわれはかならず急に態度を変更して、これら両者の事態のどちらをも非難するとともに、これらを以上で見た称賛すべき種類のものとは反対の方位に配置されるべきものと見て、あらためてその名称を選ぶようにするのがならわしなのだ。

若いソクラテス　そこを、もうすこし説明してください。

エレアからの客人　まず、あの一方の種類のいろいろなものが時宜にかなった限度以上に活発なものになったり、あるいはこの種類のうちの或るものが速すぎたり頑強でありすぎたりすることが明らかになるようなばあいには、われわれは、これらのものを「過激である」とか「狂暴である」などと呼ぶことによって非難するのだ。c それにたいして、いま見た他方の種類のいろいろなものが重々しすぎたり悠長でありすぎたり軟弱でありすぎたりするばあいには、われわれはこれらのものを非難して、「怯懦（きょうだ）である」とか「怠惰（たいだ）である」などと呼ぶことにしているはずだ。

しかもここで、このような諸性質をめぐるだいたいの模様を概括的に述べてみると、いま私が挙げた両極端の欠陥的な性質のほうはもちろん、これらのそれぞれとは相反対の現象のうちに見られる一方の「慎重」と他方の「勇気」との素晴らしい両特質のほうも、いわば敵対する党派のように相争うことを運命づけられている原質的性格どうしである以上、これらの特質をそなえた種々の行為のなかにこれらが現れてくるばあいにも、この両者が相互に混合しあうところをわれわれが見かけるようなことはけっして起らないものなのだ。それればかりかさらに、これらの敵対しあう両特質のそれぞれを自分の精神のなかに固持している人間たちも、やはり相互に闘争しあうものであることを、われわれはこの人々の行状の追跡調査を続けていけば目撃しうることであろう。

四五

若いソクラテス　その目撃が、いったいどこでできるのだと先生は考えておられるのですか。

D

エレアからの客人　もちろん、まず、さきほどから私がつぎつぎに挙げてみたいろいろな現象が、すべてその闘争の具体的な現れなのだ。それからまだほかにも、この種類の現れは、とうぜんのことながら数多く見られることであろう。つまり人間たちは、私の見るところでは、いま私が述べた二種類の性格の人間のどちらか一方と自分らが親近関係にあるために、その結果として、どちらか片方の種類の行為だけを自分ら自身の固有な気風に合致しているとして称賛するとともに、自分らと相違した性格の人々がおこなうべつの種類の行為のほうを自分らとは根本的に異質だとして非難するものなのであるが、ともかくこうして、人間たちは数多くの問題にかんして相互にたいする深い憎悪を抱くようになっていくのだ。

若いソクラテス　おそらく、人間たちはそうなっていくことでしょう。

エレアからの客人　さて、それでは注意しておきたいのだが、このような闘争は、それがたんに異った気質のあいだでの闘争だけですむものであれば、遊戯同然のたわいもないものであると見てよい。ところが、このような傾向が国家公共の最重要事項をめぐる問題のうえに生じてくるとなると、これは、各地の国家の存立そのものを脅かす種々の病弊のうちのもっとも恐るべきものとなってくるのだ。

若いソクラテス　先生が言われたその最重要事項とは、いったいどのようなものを指しているのですか。

E

エレアからの客人　とうぜんのことであるが、それは、人間が社会生活を営むために万事を整備する手立ての全体にかかわるような事項であるようだ。つまりまず、かくべつに慎み深い人々のほうは、静粛な生活をたえず送っていきたいと願っているので、自分ら自身の国事には、自分らだけで孤立して黙々と取り組むばかりなのだ。そしてさらに国内においても、全国民と平和の精神に徹した交友関係を深めていくとともに、諸外国にたいして

もやはり同様な方針にしたがいながら、万難を排して或る意味での平和外交を貫きたいと願っているのだ。

そして、ついには、これほどの平和愛好心というものは、必要な限度を超えて間の抜けたものになるのがつねであるから、自分らの望む国策を実行しようとするばあいにも、自分ら自身が不戦の心の堅いものであることの、また、自分らの国の青年を同様の心情を抱くように躾てきたことの、たいへんな非を悟ることがないものなのだ。それればかりか、この種の人々は、自分では気づいていないけれども、外部からの侵略者たちによって蹂躙される寸前に立っている。いや、このような破局を迎えるには、多年にわたる長い時間の経過などを待つ必要はないことであろう。そして、ひとたび外敵によるこの破局が訪れてきたら、この種の人々自身もその子女も、そしてとうぜんその国家の全体も、もはや自由な姿のものではなくなって、すべてまったくの奴隷にされてしまうのであるが、そうなってしまったあとで自分の非に気づいてもあとの祭であることが、諸国家の過去を見るとまことに頻繁に起っているのだ。

若いソクラテス　これはまた、苛烈であるとともに恐ろしくもあるような受難の光景を、先生は述べられたものです。

エレアからの客人　それにたいしてこんどは、勇気のほうを偏愛する傾向にある人々のばあいはどうであろうか。この人々は、尚武の気概に満ちた生活を必要以上に激烈に求めたがる欲望に駆られて、自分らの所属する国家をつねになんらかの戦争をおこなうようにと叱咤嚮導しつづける結果、多数の強国から憎悪を受けるような窮地に立つこととなって、自分らの祖国を完全に滅亡させるか、あるいはうまくいったとしても、これらの敵国に奴隷のように屈従する属国の悲惨な地位に祖国を没落させるか、そのどちらかの道をたどるものだというのがむ

かしからの事実なのではないか。

B

若いソクラテス　ええ、そのご指摘もまた、事実に的中しています。

エレアからの客人　こういうしだいである以上、それが国家存立の根底を左右するほどの重大な動因として働くばあいにも、さきほどから問題にしている二種類の気質は、両方ともそれぞれ他方にたいしてつねに、深くしてこのうえなく激しい憎悪ないし党派的敵対心を固持しているものであることを、われわれはどうして否定することができようか。

若いソクラテス　どう考えても、その点を否定する方法というものはぜったいにありえません。

エレアからの客人　そうだとすると、けっきょく、いまの考究の最初のところでわれわれが吟味しようとしていた問題(1)の解答を、ついにいまや発見したことになる。つまり、美徳というものをかたちづくるいくつかの構成要素のうちの些細なものとは言えぬ一対のものは、ほんらい相互に闘争しあうものであるとともに、この二者のそれぞれを心のなかに固持している二種類の人間たちを、やはりまったく同様に、相互に争いあわせることにもなるのだ、というさきほどの説の意味が、いまやわれわれに明らかになってきたのだ。

若いソクラテス　おそらく、その一対のものはそういう性質をやどしているようです。

エレアからの客人　さてそれでは、こんどは、つぎのような点を、われわれは理解するようにしようではないか。

1　本篇の 306A を参照。

若いソクラテス　どのような点をですか。

四六

C　**エレアからの客人**　まず、つぎの二つの見かたのうちのどちらが正しいであろうか、という点をなのだ。つまり、構築的な合成を本業とする種々の知識のうちには、自分の製品となるべきなんらかの物品を合成によって作りあげようとするにあたって、その物品がどれほど卑小なものになるようなばあいでも、劣等な材料と優良な材料との両方を故意に自分のために選ぶような知識などというものが、一般的に言って、見いだされるとすべきであろうか。それとも、ほんとうはむしろ、知識というものはすべて、すべての分野において、劣等な材料のほうは可能なかぎり除去するようにするとともに、有益で優良な材料のほうだけを手もとに残すようにして、この残されたものが相互に類似しているものと相違しているものとの両方を含んでいるようなばあいでも、それらの材料の全部を一体をなしたものになるように纏めあげていくことによって、独自の機能をはたすのにふさわしい独自の形姿のものを製作していくのだ、とすべきであろうか。

若いソクラテス　もちろん、あとで先生が述べられた見かたのほうを正しいとすべきです。

D　**エレアからの客人**　してみると、ほんらいそれが具備すべき条件に真の意味で合致しているような「政治家の持つべき知識」というものも、ひとつのしかるべき国家を組織的に作りあげるための材料として、優良な人間と劣悪な人間との両方を故意に選ぶようなことは、けっしておこなわないはずなのだ。そればかりか、このような知識であれば、かならずや、まずあらかじめその国の幼児たちに遊戯をおこなわせることにより、この遊戯を試

金石として用いてこれらを吟味にかけることであろう。ついで、この試金石による吟味を終えたうえで、こんどは、教育する能力をそなえているとともに国家構築のこの大事業のために奉仕従属する能力をも持っている人々の手中に、この最初の試験の合格者となった子供たちを委ねることになるのであるが、こうして教育者たちに子供らを委託したあとも、この「政治家の持つべき知識」は、みずから依然として、この教育者たちにたいして指示を与える監督者としての活動を続けていくのだ。

このありさまは機織り術のばあいとまったく同様なのであって[1]、機織り術もやはり、毛梳きをおこなう職人たちをはじめ、当の中心技術がおこなう織り合わせ作業のために必要なその他すべての材料を準備する種々の職人たちにたいして、それらの工程の全体を近くで見守りつつ、これに指示を与える監督者としての立場に立つことになる。つまり、機織り術は、自分がなすべき編み合わせ作業のために適合していると機織り術自身が判断するような製品を仕上げるように、と全職人たちのそれぞれにたいしてたえず注意を与えているのだ。

若いソクラテス まったくそのとおりです。

E

エレアからの客人 さあ、これと同じようなぐあいにして、「王者の持つべき知識」も、指揮を取る知識というものが持つべき権能をみずから確実に保有しながら、法律の定めるところに従ってその責務にあたる教育者たちや養育者たちの全員を統轄しているのだ、と私は考えている。つまり、王者の持つべき知識は、自分がおこなうべき混成作業のために適確に相応するような道徳性格をその仕上げの成果として作りだすにはい・た・ら・な・い・ような

1 本篇の 282A sqq. などを参照。

訓育をおこなうことを、いかなる教育者にも許可しないことであろう。そして、ひとえにこの趣旨だけを肝に銘じて教育に専心せよ、と鼓舞しつづけるはずであろう。

309

だからこそ、勇気という性格や、慎重という性格や、美徳を目ざすようなその他各種の道徳性格にあずかることができない子供たち、したがってまた、その生来の素質が低劣であるために、猛り狂う内面の憤気を抑止するすべもなく、無神論的瀆神や過激派的暴慢や反人倫的不正などの、美徳とは逆の部類の主義へ押しやられていくような子供たち、――これらのあらゆる子供たちを「王者の持つべき知識」はつぎつぎに死にいたらしめることによって、あるいは国外追放をはじめとするもっとも恥辱的な種々の懲罰に服させることによって、ことごとく社会の外部の闇へと抹殺してしまうのだ。(1)

若いソクラテス　ともかく、なんだかそのような処置がとられるという話も聞いています。

エレアからの客人　それから、他方ではさらに、知能の愚鈍や根性の低劣などが顕著であるような段階にいつまでも低迷している子供たちは、これらを奴隷の階層へ突き落としてこれらに軛（くびき）をつけ、全社会にこれを隷属させることにするのだ。(2)

若いソクラテス　このうえなく正当なお言葉です。

B

エレアからの客人　さてそこで、以上の者どもを除いた残余の子供たちはすべて、その生来の素質に恵まれているために、うまく教育を受けていけば高尚な心を持つように陶冶されうるとともに、技術を活用して政治家がおこなう相互混合行政活動の対象者にもなりうるような者たちでもあると言えるのだ。だから、王者の持つべき知識は、こういう素質の者たちのうちから、一方では勇気を目ざす性癖の勝（まさ）った者たちを選んで、これらの者た

ちの堅く引き締った道徳性格をちょうど縦糸の素質を持つようなものであると判定しておくとともに、他方では慎み深さを目ざす素質の者たちを選んで、この後者の部類の一団を、厚みがあって柔らかな、比喩的に言えば横糸にそっくりの紡ぎ糸的要素として利用することによって、――さあこうして、相互に反対の方向へ進もうとするこれら両種の素質の者たちを自分の手中にとり、ほぼつぎのような方法によって、これらを結合し編み合わせることをこころみるわけなのだ。

若いソクラテス　いったい、どのような方法によってなのですか。

c

エレアからの客人　王者の持つべき知識は、自分がここで第一にはたすべき仕事として、いま私が述べたような素質の者たちの魂の真に永遠不滅である部分のほうを、その性質の親近性にもとづいて、とうぜんのことながら神の世界に根ざす絆(きずな)によってうまく調和する一体のものになるように結びつけたうえ、この神聖な作業の終了ののち、あらためてこんどは、その同じ者たちの動物的な部分をたんに人間的であるようないくつもの絆によって結びつけるのだ。

若いソクラテス　こんどもまたご質問することになるようですが、先生がいま言われたのはどういう意味のことなのですか。

1、2　補注C(三八六ページ)を見よ。

四七

D

エレアからの客人　なにが美であり、なにが正であり、なにが善であるかについての、さらになにがこれらのそれぞれの反対であるかについての思わくが、しかもまったく真実の意味で真理そのものに根ざしている思わくが、不撓不屈の確信をともなって人間たちの魂の内部で発生するばあいには、私はこの発生のことを説明して、これは、神の世界に根ざすものが神霊のように神々しい種族のうちに発現することであると主張するのだ。

若いソクラテス　たしかに、それは適切なご主張です。

エレアからの客人　さあそこでだが、政治家というものは、優秀な立法者でもあるのだから、われわれの理解しているところによれば、「王者の持つべき知識」の側近にその手足のようにして列する妙なる詩歌（ムゥサ）の魅力を用いて、いま私が指摘した神々しいものとしての思念を、教育の正当な恩恵をうけた若者たちの心のなかへ、つまりついさきほど私が説明したとおりの若者たちの心のなかへ、鼓吹しうる唯一の者であるという特性をそなえているはずなのだ。そうだろう？(1)

若いソクラテス　たしかに、それはそのとおりであるようです。

エレアからの客人　それに反してだ、ソクラテス、このような気高い任務をはたすだけの能力を持っていないような者にかんしては、本日われわれがその正体を探索しているあの目標物に当てられるべきであるようないくつかの名称を、(2)この者の呼び名としてはけっして用いないことにわれわれはきめようではないか。

若いソクラテス　このうえなく正当なお言葉です。

E

エレアからの客人　さてそれでは、さらにつぎの問題を考えてくれたまえ。つまり、勇気のある魂というものは、いまさき私が挙げたあの神々しい真理を深く理解して堅く所持するばあいには、教化された温順なものになっていき、その結果、なにをさしおいても国家における正義の顕現活動に参与したいと、さいわいにも願うようになりうるのだ。ところが、この種の魂は、あの真理の恩恵に浴さないばあいには、正道を逸脱して、野獣同然のすさまじい狂暴性を目ざすような邪道への堕落をますます深めていくことであろう。そのとおりではないだろうか。

若いソクラテス　もちろん、そのとおりです。

エレアからの客人　では他方の、慎み深さという特質を身上としている種族のほうはどうなるだろうか。こちらの種族も、さきほど私が言ったあの信念をその心のなかにやどすときはじめて、国家公共体のなかで生活する者としての限定された程度においてではあるけれども(3)、真の意味で思慮深くなるとともに、真の意味で知性をそなえたものにもなってくるのではないだろうか。

ところがこの種族も、さきに私が説明したあの神々しい思念にあずかるような共同体の一員にならなかったばあいには、とうぜんしごくのことながら、「単純愚直なお人よしだ」という非難されるべき呼び名をつけられる

1　補注D(三八六ページ)を見よ。

2　「政治家」、「王者」、「王者にふさわしい者」などという名称のこと。

3　善そのものを、自分自身の魂だけによって直接的に理解しうる哲学者個人のほうが、優れた市民生活者たちよりも高度な思慮や知性をそなえうるのであるから、このような限定の言葉を添えることが、必要なのである。

(309)

ことによって、ひろく世間から悪評を受けることになるのだ。

若いソクラテス まったくそのとおりです。

エレアからの客人 さて、このようなしだいである以上、国家の組織体を作りあげるものとしての編み合わせによる絆というものは、劣悪な人間をその同類の劣悪な人間と結合することによっても、あるいは優秀な人間を劣悪な人間と結合することによっても、どちらの方法によっても堅固な持久力をそなえたものにはけっしてなるはずがないのだという点を、われわれは強調することにしなければならないはずだ。さらに、およそいかなる知識であろうと、いま私が述べたような欠陥のある集団をその材料として扱いながら、この集団を一体化すべき絆などを作ってみようとするようなことは、本気にはけっしてくわだてないものなのだという点をも、われわれは強調することにしなければならない。

若いソクラテス ええ、そのようなくわだてが成功するはずはありません。

310

エレアからの客人 それに反して、その誕生の原初のとき以来天賦に恵まれているとともに、その素晴らしい素質に適合した養育をも授けられてきた性格の者たち、ひとえにこういう者たちのあいだだけに、あの神々しい絆は、法律の助力を得るなら、芽生えてくるものなのだ。そしてこのような者たちのためにこそ、この絆は技術の力によって妙薬としての効能を発揮して、これを禍から守ってやるのだ。しかも、この合体の絆のほうが、さきにも述べておいたとおり、他方の種類の絆よりも神聖なものであって、この絆こそ、美徳の構成部分のうちの、相互にたいして類似性を欠いているとともに相反対の方向へ突進しようとする二種類の構成部分を堅く合体させて、ついには、ひとつの美徳という結晶を産みだすにいたるようなものなのだ。これがわれわれの主張なのだ。

若いソクラテス　このうえなく真実なことをご主張になりました。

エレアからの客人　さて、そこでつぎに、これ以外の数多くの残余の絆について考察することにすると、これらはすべて、じじつ、たんに人間的であるような絆なのであるから、あの神聖な絆のほうがすでに基盤としてできあがっているばあいには、これがどのようなものであるのかを理解することも、あるいはその理解にもとづいてそれらの絆をじっさいに完成してみることも、たぶんすこしも困難なことではないだろう。

B

若いソクラテス　それは、いったいどういう意味のお話なのでしょうか。また、それらの絆はどのような絆なのでしょうか。

エレアからの客人　私が言おうとしているその絆とは、以上で見た二種類の性格の者たちのそれぞれがつくる異質的な両集団を相互間の婚姻関係で結びあわせ、さらに、そのあいだで生まれた子供らの両親であることを両集団に相互認知させるように処置する操作、このような操作によって作りだされる数多くの絆なのだ。だから、逆に言えば、これは、個人がその娘を勝手によその婚家の者と結婚させるような私的な慣行を規制することによって作りだされる絆だということにもなる。考えてみればたしかに、一般の大衆はこの方面にかかわる問題の処理法を誤って、生殖行為により子女をもうけるという見地から見れば正当性を欠いた姻戚関係を、家庭相互のあいだで結んでいる。

若いソクラテス　いったい、その関係の結びかたのどういうところが正しくないのでしょうか。

エレアからの客人　まず、世間一般の人々が姻戚関係を利用して財産や権力を必死になって追求しているのは事実であるが、だれであろうと、この事実をとくにとりたてて論じるに値すると見て、これを本気になって咎め

たてることにしなければならぬような強い理由などを、はたしてなにか見いだすであろうか。

若いソクラテス　そのような理由などはなにもありません。

四八

エレアからの客人　それにたいして、自分らが結婚の相手として選ぶ家庭の血統の種類がどのようなものであるかについて心を配っている人々のばあいを問題としてとりあげてみながら、この人々がなにか重大な点で不適切な選びかたをしているのではないかどうかを論じてみるほうが、むしろ当をえた考究の進めかたになると考えられる。

c

若いソクラテス　ええ、たしかにそのほうが適切でしょう。

エレアからの客人　さあそこで、一般の人々のばあいの姻戚関係を作るにあたっての選択法を見ると、その考慮の基準はすこしも正当なものではないのだ。つまり、結婚の相手を選ぶにあたって、一般の人々はその当座だけにおいて得られる安楽な満足感をひたすら追求しているのだ。そして一方では、自分らと類似性の強い相手だけをわが家へ温く迎え入れようとするとともに、自分らと類似していない者たちにたいしては情愛を抱こうとしないのであるから、この人々は、結婚の相手を選ぶさいの判断の基準の要素としては、自分が抱く好悪の感情だけを過分に重視しているわけなのだ。

若いソクラテス　その点を、もうすこし説明してください。

エレアからの客人　まず、慎み深いほうの種類の人々は、その結婚の相手として、どうも自分ら自身と同じ道

徳性格の人間をしきりに探し求めるようなのだ。そして、ありとあらゆる手だてをつくして、こういう人間たちの家庭から妻を娶（めと）るようにするとともに、こんどは自分のほうでも、わが家から嫁がせる娘を、やはりそのような性格の家庭へ新婦として送り出すようにしているのだ。

D

それから他方の、勇気のほまれがたかい血統の人々も、その生来の気質が自分らと同じであるような伴侶を一心に求めているのであるから、その選択法そのものは他方の種類の人々のばあいと同様であると見てよい。けれどもほんとうは、これら二種類の血統の者は、両方ともいま述べた一般の選択法の正反対の方法をとるべきであるのだ。

若いソクラテス　もうすこし説明してください。要するに、なぜそうすべきなのですか。

エレアからの客人　なぜなら、まず「勇気」のほうも、「慎重」を特質とする種族と混血することのないような生殖によって幾世代にもわたり産みだされつづけていくと、最初のうちは強力というものの精華を誇りうるりっぱなものであるのだが、やがて最後にはその花の色は褪（あ）せてしまい、完全な狂暴に化していくのが自然の経緯というものであるからだ。

若いソクラテス　たぶん、そのようになってしまうことでしょう。

E

エレアからの客人　それから他方の、羞恥心が極度に充満していて抑制力の強い魂もやはり、勇気に富んだ大胆不敵な気性と混合されぬままに幾代にもわたる生殖によって産みだされていくと、人生での時宜をつねに逸するような不活発な気質のものになっていき、とうとうついには完全な不具不能者になりはててるようにできているのだ。

若いソクラテス　たぶん、そのようななりゆきも、やはり予想されるようです。

エレアからの客人　さあそこで、さきほど私が述べたことを繰りかえしてみると、このような結果を避けるための数多くの絆を結合作業によって作りあげることは、じつはすこしも困難ではないのだ。もちろん、これらをつくりあげうるためには、いま私がその結末について説明したあの両方の血統の人々が、高貴で優秀なこととはどのようなものであるかについて堅く一つにまとまった信念を抱いている、という事態が前提条件としてあらかじめ実現されていなければならない。

いやまことに、ここでこそ必要なものは、王者の持つべき知識がその緻密な織り合わせの活動によってはたすべき、全体を堅く一つにまとまったものに仕上げていく作業なのだ。つまり王者は、まず慎重というものをその身上としている道徳性格の者たちには、勇気を身上とする者たちのもとから疎遠になってしまうことをけっして許さないものなのだ。そしてむしろ逆に、王者は、いわば筬（おさ）による織り合わせ作業を遂行するために、共通するいろいろな思念を両者の心に吹きこみ、名誉や恥辱や光栄をいろいろなかたちで両者に与え、この両者自身には、311 合体の誓約のしるしとして、人質の役目を負わされた者たちを新妻のかたちで相互に取りかわさせるのだ。そして、こうして織り合わせ作業を進めることによって、滑らかであるとともに、世人の言葉を借りると「目のつんだ織りかたの」織物を、この両者をその材料としながら織りあげていったうえで、国家のために整備されるべき各種の権力機関を、つねにこの両者が共通にわかちあうべきものとしてこの両者の手中に委託することにするのだ。(1)

若いソクラテス　その最後の点を中心にして、もうすこし説明してみてください。

エレアからの客人　つまり王者は、或る国家が単独の支配者を必要とする事態にいたっていることを見抜いたさいには、いま言った両方の性格を一身に兼備している者を選んで、この者をその国家の統轄者の地位に登用することであろうし、また、数名の者から成る集団指導委員会を必要とするような国家においては、あの両種の人間たちのそれぞれの集団のなかからそれぞれその一部分をなす者を選び、この選ばれた代表者を巧みに混合してその委員会を作ることであろう。

なぜなら、慎重というものを身上としているような一方の支配者たちの道徳性格は、総じて極度に用心深くて公正で旧習墨守（ぼくしゅ）の気風を持っている反面、俊敏旺盛の気概と、それから活発に行動を起こす進取敢行の決意力のようなものとを欠いているからだ。

若いソクラテス　なるほど、ただいまうけたまわったご説明も、たしかに事実のとおりであるように思います。

B

エレアからの客人　それにたいして、こんどは他方の、勇気を身上にしているような人々の道徳性格は、公正の精神と克己の美徳との面では、いま私が述べた人々よりも劣っているけれども、各種の行動を起こすときに必要な進取敢行の活力のほうは、これをかくべつに優れて保持しているのだ。

1　本篇の269A sqq. で、宇宙の太古のようすが長々と物語られたさいにも、神クロノスの治下にあった善き時代においては、世界のすべての部分は、それぞれ別々の神々の統御下に置かれていたことが、271Dにおいて述べられていた。これに類似した権力の配分が、いまや、真の王者の組織する国家においても、ここで述べられているようなかたちで起ることになる。――この点は、本篇の各箇所のあいだに張りめぐらされた相互対応関聯によって作りあげられている作品の強固な統一性の現れの、たんなる一端にすぎない。

だから、およそ国家にかかわる事項の運用というものは、それがたんに個人の生活だけに関係するものであろうと、あるいは公共活動の性格を持つものであろうと、あの二種類の性格の者が両者相互にかたく提携（ていけい）してそこに参与協力することがないかぎり、あらゆる点で美事な成果をあげていくことは不可能なのだ。

若いソクラテス　ええ、もちろんそのとおりです。

エレアからの客人　さあ、ここでいよいよ、道徳性格のうえで「勇気」がまさった人間たちと「慎重」がまさった人間たちとの両方を対象者としながら、政治家が均一に織り合わせる編み合わせの活動をおこなうことによって達成される「国家」という織物の完成状態を、われわれはついに見ることができるにいたるのだと主張しようではないか。つまり、私の見るところでは、こうなのだ。――思念の一致と親愛の絆とをその手段として用いながら、両性格のこれらの人間たち全部の生活を共同体にふさわしいかたちのものになるように統合していくことによって、王者の持つべき技術が、あらゆる織物のうちでもっとも規模壮大なそしてもっとも優秀な織物を完成したうえ、こうして織られたもののなかに、総じて国家というものに所属する残余の全員を、つまり奴隷をも自由人をも包みこんで一致団結させ、さらに、幸福な国家が享受するにふさわしい最大限の恵みをいかなる分野においてもいかなる点においても取り逃すことなく、これを国家に授けてやりながら国家の支配と統轄とをおこなうときはじめて、当の織物の完全な姿が見られることになるのだ。

c

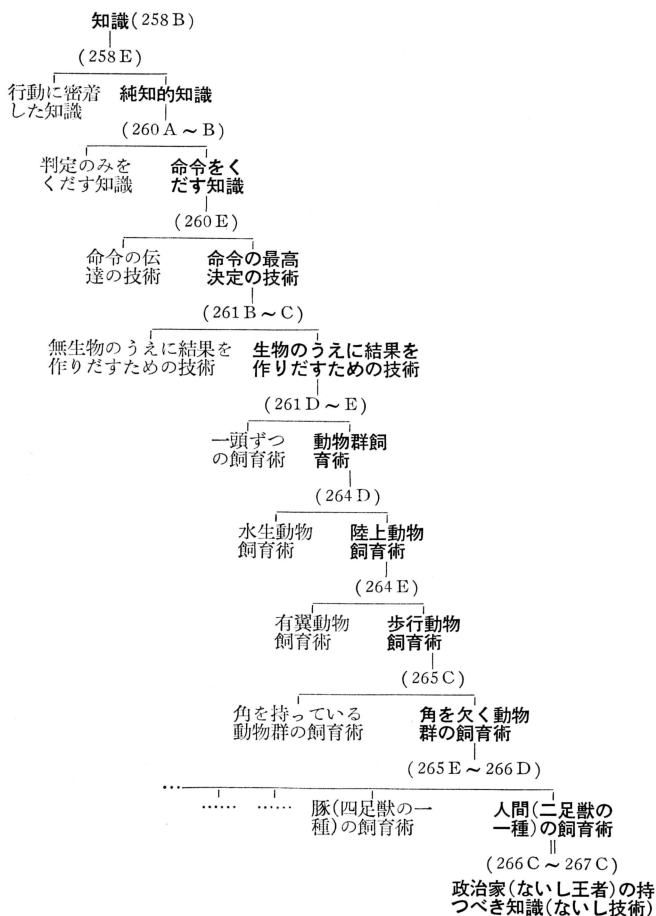
若いソクラテス(1)　先生には二度目(2)のお礼を申しあげなければなりません。こうして、王者たるにふさわしい人物ないし政治家というものの完全な姿を、こんどもこのうえなく美事に、私どものために描いてくださったのですから。

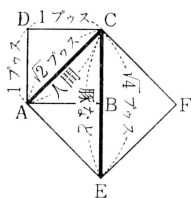
1　この最後の総評と感謝との言葉を、シュタルバウムやディエスやスケンプなどは「若いソクラテス」のではなくて、「老哲学者ソクラテス」の言葉であると考えている。老ソクラテスは本篇の冒頭部でも登場して対話を開始させたのであるから、対話をこの重々しい語句によって終結させるのも同じ老ソクラテスであるほうがふさわしいから、と言うのである。しかしキャンベルやバーネットなどは、あくまでもこれを「若いソクラテス」の言葉であると見ている。

2　この『ポリティコス(政治家)』の対話篇が設定されている対話の時間のたぶん直前に、この同じ「エレアからの客人」は、『ソピステス』において、すでに美事にソフィストの真姿を描きあげているからである。

『ポリティコス(政治家)』補注

A 「政治家(ないし王者)の持つべき知識(ないし技術)」を定義するために最初に試みられた「知識(ないし技術)」の分割について(258B～267C)

本篇では、種々の探索目標体の発見と定義とのために約八箇所で「分割法(ディアイレシス)」が駆使されているのであるが(解説一〇章の最後の改行点以下、すなわち四六七ページを参照)、それら全部の諸分割のうちでこの258B～267Cでの分割がもっとも大規模におこなわれているゆえ、この分割の全体のありさまのみをここに一覧表にして示す。

B 人間と豚との歩行能力の幾何学的表示について（266B）

この〝その力の大きさについて言えば、われわれ人間の力の大きさを単位とする正方形の対角線の大きさにちょうど相当するのだ〟という箇所も、266B注3の箇所と同様に、できるだけ数学の用語を用いて、「平方根との関係について述べれば、われわれ人間のばあいの平方根（すなわち対角線）を単位とするときの対角線〔の長さ〕に、ちょうど相当するのだ」と訳されうる。この文意を理解するには、人間の歩行能力が$\sqrt{2}$プゥスという数値であること、および、この$\sqrt{2}$プゥスの線分を一辺とする正方形の対角線は$\sqrt{4}$プゥスの長さとなること、この二点に注意すればよい。つまり、二足獣である人間の歩行性能が$\sqrt{2}$として示されるなら、すこしあとで暗示されている豚などのような四足獣のそれは、とうぜん、$\sqrt{4}$として示される、ということを意味している。――そこで、この箇所と、前注3の箇所とで述べられていることをまとめて、一辺の長さが一プゥスの正方形ＡＢＣＤと、一辺の長さが$\sqrt{2}$プゥスの正方形ＡＥＦＣとを用いて、人間と、豚などの四足獣との、それぞれの歩行性能を図示すれば、上のようになる。

C 劣等者の一掃作業について（309B）

社会の不良分子にたいしては「一掃作業」をおこなうほかない、という考えかたは、つねにプラトンの政治理論の一面をなしているという点を、さらに、個人にたいする尊敬心、強情な反抗者にたいする寛容、病める者にたいする心づかい、などの美徳は、たとえば、キリスト教からは期待されえても、プラトンからは期待されるべきではなく、そのような期待心は、かえって、プラトンの真の理解を妨げる、という点を、スケンプはこの箇所への注釈のなかで指摘している。なお、この箇所に見られるプラトンの一見極論らしい説については、これを、たとえば『国家』III. 410Aにおけるプラトンの見地と比較すれば、興味深い。

D 政治において詩歌がはたすべき機能について（309D）

相互に関連した重要事項二条について注意する。

（1）厳密には、一方の政治知識ないし哲学と、他方の詩歌とは、同一物でもなく、類似した性質のものでもなく、むしろ、相互に反発しあう性格のものである。たとえば、哲学や政治の言語は、詩歌よりも野暮なものであるだろう。けれども、前者が後者を利用して、これを自己のために完全に奉仕させることはできる。このさいには、後者は前者の範囲下に完全に納められて、これと一体化しているような観を呈する。本篇のこの箇所は、この結合の完成された状態を述べている。したがって、原文の τῆς βασιλικῆς は、範囲の属格であって、たんなる所有の属格ではない。

（2）西洋世界の歴史においては、そのような合体は、プラ

トンの死後三百年あまりのちに、はじめて実現した。つまり、荘麗なるローマの再建に成功したアウグストゥス皇帝が、その元首制のイデオロギーを普及する手段として、ウェルギリウスやホラティウスなどの非凡な宮廷詩人たちを重用したのは、ここに示されているとおりの洞見にもとづく政策であった。詩人たちのほうも、皇帝のこの精神を体して、詩歌の持つ不思議な魔力を最大限に活用しながら、実際の現実よりもはるかに神々しく、「万物のうちでもっともうるわしいローマ」（ウェルギリウス『農耕詩（Georgica）』第二巻五三四行）の映像を作りあげて人心の高貴な統一をはかった。そして、プラトンのこの箇所をめぐる文脈の意味を深く理解して書かれたかのような詩行を、われわれはホラティウス『抒情詩集（Carmina）』第三巻第一歌一―四行において見いだすことができる。この詩行は気高い一連の「ローマの歌」の序詩部をなすものであるが、これを拙訳すれば、つぎのとおりになる――、

瀆神の俗衆どもを
われ忌みて拒み遠ざく
下種（げす）の言（こと）ものども恥じよ
珍らなる歌また歌を
詩歌女神（うたがみ）の司祭なるわれ
おとめらとおのこらのため
あたらしくいざ歌うゆえ

『ソピステス』解説

藤沢令夫

一　登場人物、状況設定（対話設定年代と『テアイテトス』『ポリティコス（政治家）』との関係）、執筆年代

登場人物

テオドロス（Theodoros）　数学・天文学・音楽に通じ、とくに幾何学者として高名であった。ギリシア人のアフリカ植民都市キュレネの人であり、アテナイへ来て、多数の弟子をとってこれらの学問を教えていた。その年代は確定できないが、アナクサゴラス（前五〇〇年ころ生まれ）と同じ時代の人という伝承（(Eudemos Fr. 84, DK.) さえあるので、前三九九年に対話年代が設定されている本篇では、相当の高齢の人であるはずであり、ソクラテスより年長であったと考えられる。
『テアイテトス』におけるかなり主要な登場人物であり、『ポリティコス（政治家）』にも登場するが、後者では、最初の

導入部で数回発言するだけである。本篇においても、発言は第一章に限られていて、その役割は、主役であるエレアからの客人を紹介することにとどまっている。その他、より詳しくは、『テアイテトス』「解説」の「登場人物」の項を参照。

ソクラテス(Socrates)　前四六九—三九九年。『テアイテトス』の主役であったが、本篇では導入部の第一章と第二章で発言するだけで、あとは全篇を通じて沈黙の聞き手である(この点は『ポリティコス(政治家)』でも同様)。ただし、導入部におけるその発言は、『ポリティコス(政治家)』でも引き続き主役となるエレアからの客人がどのような人物かを明らかにする上で、またとくに、〈ソフィスト〉——そして〈政治家〉〈哲学者〉——という主題を設定している点で、さらに議論の方法・形式の選択や、対話人物としてのテアイテトスへの名指しなど、かなり重要な中身をもった発言である。

エレアからの客人　本篇——および『ポリティコス(政治家)』——の主役。プラトンの対話篇の登場人物はほとんどが歴史的に実在した人であるが、これは(『法律』の登場人物の場合と同じく)例外的に架空の人物である。プラトン後期の二つの重要な対話篇の主役となるこのエレアからの客人が、どのような立場のどのような人物であるかについては、この対話篇そのものが導入部において、的確に紹介し説明している。本文216Bの注3参照。その紹介により全体として彼が真の哲学者として規定されていることは、この架空の人物を通じて語られる事柄が、プラトン自身の哲学的立場と見解を示すものとみなされうることを、われわれに告げるであろう。

テアイテトス(Theaitetos)　アテナイのスゥニオン区に生まれ、後に大数学者となった人。いわゆるユークリッド(エウクレイデス)幾何学の形成に寄与し、無理数論と立体幾何学における業績はとくに有名である。『テアイテトス』においてソクラテスの相手役をつとめたのにつづいて、本篇でもエレアからの客人の対話相手となるが、まだうら若い青年もしくは少年(メイラキオン＝一五歳から二〇歳くらい)として登場している。これらの対話篇の時代は前三九九年に設定されているから、テアイテトスの生年は、前四二〇—四一五年ころと推定できる。前三六九年のコリントスの戦闘による傷病のために死んだ。『テアイテトス』は、この彼の死後間もなく書かれた、プラトンによる彼のための記念碑であるといえる。より詳しくは、『テアイテトス』の「解説」の「登場人物」の項を参照。

このほか、かなりの人数の者がその場に居合わせて、これらの人たちの話を聞いていることが想定されている(217D)。そのなかで、ソクラテスと同名の青年のことが、テアイテトスと同年齢の勉強仲間として、テアイテトスによって言及されている(218B――同箇所に対する注1参照)。この若いソクラテスは、『ポリティコス(政治家)』において、テアイテトスと交替して、エレアからの客人の対話相手をつとめることになる。

状況設定(対話設定年代と『テアイテトス』『ポリティコス(政治家)』との関係)

『テアイテトス』はソクラテス、テオドロス、テアイテトスを主要対話人物とし、その最後は、「では、今はとにかく、メレトスが僕を訴えたので、その公事(くじ)に対してバシレウスの役所に僕は出頭しなければならないが、明朝早く、テオドロス、ここでもう一度われわれは出会うことにしましょう」(210D)というソクラテスの言葉で終っている。『ソピステス』は明らかにこれを承けるかたちで、「きのうの約束どおりに、ソクラテス、われわれ自身もこうしてきちんとやって来ましたし……」(216A)というテオドロスの言葉ではじまっている。

このことによって、『ソピステス』における人物と「とき」と「ところ」に関する状況設定は、『テアイテトス』のそれをそのまま承け継ぐものであることが明白に知られる。そしてこの状況設定はさらに、『ポリティコス(政治家)』によって引き継がれることになる。

『テアイテトス』における対話設定年代は、冒頭導入部の「あれは(ソクラテスの)亡くなられる少し前のことだった……」(142C)という言葉、そしてより明確には、右に引用した「今はとにかく、メレトスが僕を訴えたので」云々という言葉によって、ソクラテスの裁判と死刑の年、前三九九年であることが確定される。場所は、144Cで言われている事柄から、アテナイの或る体操場または相撲場であったと想像できる(『テアイテトス』の同箇所に対する注3参照)。『ソピステス』自体のなかには、こうした時や場所についての言及はないが、『テアイテトス』にお

けるこれらすべての設定を承け継ぐものと考えればよい。訳本文216Aに対する注1(五ページ)参照。ただし、もう少し詳しく言うと、『テアイテトス』の全篇はさらに、エウクレイデスとテルプシオンという二人の人物の会話(コリントスの戦闘——ほぼ確実に前三六九年のそれ——直後の時点における)によって導入されていて、そのエウクレイデスがソクラテスとテアイテトスの対話(前三九九年の)を覚書に書きとめてあったのを、召使いに読ませるという二重の構成になっている。つまり、前記のような状況設定のもとにおけるソクラテスとテオドロスとテアイテトスの間の対話というのは、このエウクレイデスの覚書の内容なのである。『ソピステス』——そして『ポリティコス(政治家)』——が『テアイテトス』の状況設定をそのまま承け継ぐといっても、それがこのようなエウクレイデスの覚書の内容であるということまでは、むろん承け継がれていない。そのことは、あたかも忘れられたかのごとき観を呈している。

その点を別にすれば、『ソピステス』『ポリティコス(政治家)』における「とき」と「ところ」と人物についての状況設定は、エレアからの客人を新たなメンバーとして加えながら、右のように『テアイテトス』のそれをそのまま承け継いでいるのであるが、プラトンがこの状況設定の継続の上に立って、『ソピステス』『ポリティコス(政治家)』に次いで『ピロソポス(哲学者)』という対話篇の執筆を構想していたのではないか、とわれわれに推定させるような点がいくつか目につく。

(i)『ソピステス』の導入部においてソクラテスが、〈ソフィスト〉と〈政治家〉と〈哲学者〉の三者の区別についてエレアからの客人に質問し(217A)、エレアからの客人はこの質問と懇請を承けて、テアイテトスを相手に、「まずソフィストのことから始めて——それが順序だと私には思われるのだが——、私といっしょに考察してもらわなければならない」(218B)という言葉によって討論を開始している。

(ii)議論の途中でもエレアからの客人が、「こうしてわれわれは、哲学者というものを何かこのような領域のうちに、いまも今後も見出すことになるだろう――もし彼を探し求めるならばね」(253E)と言い、つづいてまた、「それでは、この哲学者については、われわれがなおそうしたいと望むのであれば、やがてすぐにでも、もっと明確に考えてみることになるだろう」(254B)と言って、〈哲学者〉に関する考察を今後の課題として念頭に置いていることを示唆している。

(iii)『ポリティコス(政治家)』の冒頭、テオドロスはソクラテスに、エレアからの客人とテアイテトスがこれから「政治家と哲学者の姿を仕上げてお目にかけることになるでしょう」(257A)と予告し、エレアからの客人に向かっては、「引きつづいて、政治家を先に取り上げるにせよ、哲学者のほうを先に取り上げるにせよ、どちらかを選んだうえで詳しく論じてください」(257B〜C)と促がし、エレアからの客人も、「そうしなければなりません、テオドロス。ひとたび着手したからには、私たちはそうした仕事の完成に到達するまでは、手を引くべきではありません」(257C)と答える。こうしたやりとりは、『ソピステス』の最初において設定された〈ソフィスト〉〈政治家〉〈哲学者〉という三つの考察課題について、それぞれが何であるかを規定する仕事の継続と完遂が意図されていることを、明らかに告げているといわなければならない。

考察の対象として語られた三者のうち、〈ソフィスト〉の定義は『ソピステス』において果され、〈政治家〉の規定は『ポリティコス(政治家)』において行なわれるのであるから、プラトンがその次に『ピロソポス(哲学者)』という対話篇を書くつもりであったということは、右のようないくつかの点からみて、かなり確かであるように思われる。しかも、『ポリティコス(政治家)』において、テアイテトスを休ませ、その学友の若いソクラテスが代ってエレアからの客人の対話相手となるべきことが提案されたとき、ソクラテスが、「この(若い)ソクラテスをも吟味しなければならない。だから、私の相手役には、いずれあらためてなってもらうことにして、さしあたっていまは、

あなた(エレアからの客人)を相手に答えさせることにしましょう」(258A)と言っていることは、次に書かれるべきその『ピロソポス(哲学者)』の主要対話人物が、ソクラテスと若いソクラテスであると想像させる余地さえ与えている。*

しかし、そういう細部の点や、また対話篇『ピロソポス(哲学者)』がなぜ書かれなかったかということは、純然たる推量と憶測の域にとどまる。われわれに言えるのは、『ソピステス』と『ポリティコス(政治家)』のなかに目につく、意図的に書かれたとしか思えない先述のような諸点からみて、プラトンがこれらの対話篇を執筆していたときには、つづいて〈哲学者〉を主題とした対話篇を書く計画をもっていたことが、かなり確からしいということだけである。ただそれにしても、想像は自由であるとすれば、やがて(三において)見られるような『ソピステス』で扱われている基本的な哲学的課題を想うとき、対話篇『ピロソポス(哲学者)』の内容は、もし書かれたとしたらどのようなものとなっていたかということは、われわれの哲学的好奇心を刺戟すること大である。

* コーンフォード(p. 169)が言うように、かりにもしそのとおりだとしたら、学者たちがしばしば特筆大書してやまない、プラトンの後期対話篇においてソクラテスがしだいに舞台から退くという点も、いくらか疑わしくなるであろう。

執筆年代

『ソピステス』が、プラトンの数多い著作の間の前後関係の上でどこに位置づけられ、いつごろ書かれた対話篇であるかということについては、われわれは今日、かなり明確な見解をもつことができるようになっている。

この対話篇と『ポリティコス(政治家)』に対するキャンベルの注釈書(L. Campbell, *The Sophistes and Politicus of Plato*, 1867, General Introduction, esp. pp. xxiv sqq.)は、この両対話篇における用語法が『ティマイオス』『クリティアス』『法律』などと共通の特色をもち、他の対話篇と著しく異なることを示したが、はからずもこれが、

その後さまざまの面から進められたプラトンの用語と文体の研究――いわゆる文体統計学――の第一歩を画する、記念すべき業績となった。これらの研究によって、プラトンの諸著作は、最晩年の著作であることが確実な『法律』を基準として前期・中期・後期の各グループに大別され、そして『ソピステス』は文体と用語の面で、この後期著作群(他に『ポリティコス(政治家)』『ピレボス』『ティマイオス』『クリティアス』『法律』『エピノミス(法律後篇)』など)の最初に位置する対話篇であることが、定説として確立されたのである。

その際有力な手掛りとなったのは、ヒアトス(二語間の母音連続)の回避という、イソクラテスが創案したといわれる文体上の工夫が、『ソピステス』において際立って顕著に見られるという事実であった。ヒアトスが現われる一ページ平均の度数は、『パルメニデス』や『テアイテトス』に至る前・中期の著作においては三三であるのに対して、後期著作群においては四であり、そのなかでも『ソピステス』は、〇・六一というとくに低い数値を示し、『法律』の五・八五が後期グループのなかの最高となっている。『ソピステス』が、プラトンの生涯における執筆活動において、この新しい文体上の試みを意識的に採用した時期をマークすることは、疑いないであろう。*

* こうした文体研究に関する詳細と文献については、『プラトン著作集・パイドロス』(一九五七年 岩波書店)における私の「序説」九―一一ページ、およびこの『プラトン全集』十五巻における「文献案内」一九二―一九五ページ参照。

文体や用語法のことを別にしても、『ソピステス』が『テアイテトス』の後につづく著作であること(そして『ポリティコス(政治家)』に先立つ著作であること)は、先に「状況設定」において見られた事柄から完全に明白であり、また、本篇217Cに『パルメニデス』への言及と解される言葉があることから、本篇が『パルメニデス』よりも後の著作であることも、間違いないところである。

『テアイテトス』は、その冒頭に、前三六九年の出来事であることがほぼ確かなコリントスの戦闘のことが語られているので、おそらくはそれから間もない前三六八―三六七年ころに、この戦闘における傷病によって死んだテ

アイテトスを記念する意味もこめて書かれた対話篇であると、推定されている。『ソピステス』の執筆は、したがって、この年代(前三六八―三六七年)よりも後であることになる。

ちょうどそのころから、プラトンは愛弟子ディオンの求めに応じて、シュラクサイの新しい若年の王ディオニュシオス二世を教えるべく、前三六七―三六六年と、前三六一―三六〇年との二回にわたって、シケリア(シシリー)へ渡航している。これらの長途の旅によって、当然プラトンの執筆活動は中断されたであろうから、『ソピステス』の執筆は、この二度のシケリア行きのどちらかの後であると考えられる。先に見られたような、この対話篇における文体と用語法の変化は、このシケリアへの渡航による執筆活動の中断を思い合わせるならば、かなり自然に説明がつくであろう。

ただし、『ソピステス』が書かれたのが、この二回のシケリア渡航のうち、前三六七―三六六年のそれの後であるか、前三六一―三六〇年のそれの後であるかは、にわかに断定できない。本篇における文体・用語上の変化の急激性が強調されていたころは、先行する執筆活動の中断期間も長期にわたるものと想像されて、前三六一―三六〇年の後であると見る説が有力であったが、『テアイテトス』の文体が終りに近づくにしたがって後期的特徴を示すことが指摘されるようになってから、『テアイテトス』の完成と『ソピステス』との間にそれほど長期にわたる時間的距離を想定すべきでないとも考えられているからである。いずれにしても本篇は、プラトンが六〇歳以上になってからの著作であることは間違いない。

二　『ソピステス』の構成と内容の概観

この対話篇に付せられた伝統的な表題は、『ソピステス、あるいは〈あるもの〉(有)について。論理的対話篇』(Σοφιστὴς ἢ περὶ τοῦ ὄντος· λογικός, D. Laert. III. 58)である。* 「ソピステス」がプラトンのつけた題名、「あるいは」

以下の副題的な部分が後に加えられたものと考えられている。

＊ σοφιστής は固有名詞ではなく普通名詞であるから、本全集の「凡例」に示された原則(五)によって『ソピステース』(『ポリティコス』の場合も『ポリーティコス』)と表記するのが本来であるが、煩雑感を避けて長音符は省略してある。

この表題にも反映されているように、『ソピステス』の全体は、かなりはっきりとした二重構造のもとに構成されている。すなわち、直接の主題である〈ソフィスト〉とは何であるかを「分割」の方法によって規定する仕事が、全篇の外枠をなし、そして〈あるもの〉(有)についての議論、〈あらぬもの〉(非有)が或る意味ではあるということの論証、虚偽の言表や判断に関する考察などが、その外枠に包まれた中身として大きな部分を占めている。『ソピステス』全体を果実と見て、ソフィストの定義の仕事を殻とみなし、右のような論題についての考察を果肉にたとえた人(ゴンペルツ)もあった。

他面しかし、この外枠と中身とは、内容的には緊密に連関し合っていることを知らなければならない。中身をなす諸論題は、外枠であるソフィストを定義する試みがまさに必然的に行き当らざるをえない問題であり、つまり、ソフィストという概念そのものの内に本来内包されている哲学的問題にほかならないからである。

全篇の対話と議論は、次のようにして進行する。

一　導入部(第一章—二章　216A～218B)

ソクラテス、テオドロス、テアイテトスたちが、前日の約束(『テアイテトス』の最後になされた約束)に従って再会するが、このたびは、テオドロスが新たにエレアから来た客人を連れて来た。パルメニデスとゼノンの門下であるが、ゼノンの流れを汲む論争のための論争技術の専門家ではけっしてなく、真の哲学者であると紹介される。

哲学者はときに政治家のような外見で現われ、ときにはソフィストと混同される。ソクラテスは、この三者——ソフィストと政治家と哲学者——の区別についてエレアからの客人にたずねる。エレアからの客人はソクラテスた

ちの求めに応じ、テアイテトスを対話相手に選んで、この三者のそれぞれが「何であるか」ということの考察を行なうことになる。

二 〈魚釣師〉の定義（第三章―七章 218B〜221C）

エレアからの客人はテアイテトスを相手に、まず〈ソフィスト〉とは何かの規定に取りかかる。しかし、この課題はきわめて困難であることが予想されるので、その前に、もっと卑近な――しかしその定義のためには重大な主題に劣らぬだけの言論を要するような――対象について、定義を求めるための方法を練習しなければならないことが、提議される。

〈魚釣師〉が、そのような練習のための範例として選ばれる。これの定義は、〈魚釣師〉が身につけている技術の定義のかたちで行なわれ、その定義を求めるための方法が「分割」の方法である。

すなわち、〈技術〉がまず作る技術と獲得の技術に分割される。問題の〈魚釣師の技術〉は、明らかに後者に属する。そこで後者の〈獲得の技術〉が次に、交換によって獲得する技術と、力ずくで手に入れる捕獲の技術とに分けられる。〈魚釣師の技術〉は後者に属する。そこでさらにその〈捕獲の技術〉が、公然と闘い取ることの技術と、目ざす相手に気づかれずに狩猟する技術とに分けられる。〈魚釣師の技術〉は後者に属する。……

このようにして、その定義が求められている対象が属する技術の部門が次々と分けられて行き、最後に、この分割によって得られた技術の部門（種類）の内容が〈魚釣師の技術〉と合致するに至ったとき――あるいは、〈魚釣師の技術〉が他のすべての種類の技術から区別されたことが確認されたとき――「分割」は停止し、求める定義が完成する。われわれはこの「分割」のプロセスをさかのぼりふり返って、〈魚釣師の技術〉とは、〈技術〉のうちの〈獲得の技術〉のうちの〈捕獲の技術〉のうちの〈狩猟の技術〉のうちの……〈鉤漁〉のうちの〈下から上へ引き上げる〉やり方のものである、と規定すればよい。（補注A（一七二ページ）の分割一覧表参照）。

三　〈ソフィスト〉の諸定義（第八章—一八章　221C〜231C）

〈魚釣師〉の定義のために用いられた方法が、いまや〈ソフィスト〉の定義のために適用される。〈ソフィスト〉とは何かの規定は、同じように、ソフィストが身につけている技術は何であるかの規定として行なわれ、そのために、ソフィストについてのさまざまの観点から——あるいは、ソフィストのさまざまのタイプに応じて——〈技術〉の分割が幾通りか試みられる。その実際については、補注Aの分割一覧表における〈ソフィストの技術〉(1)—(6)を参照。

四　定義の試みの再出発と逢着する困難——〈影像〉と〈あらぬもの〉（非有）（第一九章—二九章　231C〜242B）

以上の結果として、次のような〈ソフィスト〉の六つの定義が与えられた。

1 〈報酬を受け取って金持ちの若者たちを狩猟する者〉
2 〈魂のための学識を扱う通商業者〉
3 同じそれらのものを扱う〈小売業者〉
4 〈学識の自作直売業者〉
5 〈闘い取る技術〉の分野に属する言論の選手であり、〈討論の技術〉を自分の専門領域とする者。
6 〈学びの妨げとなるさまざまの思いこみを取り除いて魂を浄める人〉（この規定については、訳本文231Bに対する注2、および補注Bを参照）。

しかしながら、本来はただ一つのものであるはずの〈ソフィストの技術〉が、このように多くのものとして現われるということは、どこか間違っており、「すべてがそこへと収斂されるところの、その技術のもつ肝心のもの」（232A）をよく見きわめていないことを意味する。では、〈ソフィストの技術〉のもつ「肝心のもの」とは何か。右の第五の定義に顕著に現われた、ソフィストが論争の専門家であるということへの着目を手掛りとして、新たな定義の試みがはじめられる。

ソフィストはあらゆる事柄について論争できることを示すことによって、弟子たちに知者であると思われている。しかし人間の身が、あらゆる事柄について知識をもつことは、実際には不可能である。だから、ソフィストの知識は見かけだけの知識であり、ソフィストは、ちょうど画家がすべてのものの似姿を作り出すような仕方で、言葉により実物を真似てその似姿（影像）を作る一種のいかさま師であることになる。〈ソフィストの技術〉はかくて、〈影像作りの技術〉に属する。ソフィスト追求のためには、この技術を分割して行かなければならない。それはまず、〈似像を作る技術〉と〈見かけだけの像を作る技術〉とに分けられる。

しかしここで、探求は重大な困難に行き当り、ソフィストを定義する仕事は、この困難への対応のために大きく中断されなければならないことになる。

そもそも「そう見えたり思われたりするけれども、実際にはそうでない」とか、ソフィストが「いかさま師」として虚偽を語るとかいうことは、あらぬもの（非有）があることを前提している。虚偽を語るとはあらぬもの（ありもしないこと）を語ることにほかならないから、この〈あらぬもの〉が何らかの意味であることが前提されているのでなければ、虚偽を語る＝あらぬものを語るということは、何もないものを語ること、つまり何も語らない（語ることさえしない）ことになってしまって、そもそも「虚偽を語る」というようなことはありえないことになるからである。しかるにこの前提——あらぬもの（非有）があるということ——は、パルメニデスの根本格律と真向から相対立する。

エレアからの客人は、この〈あらぬもの〉（非有）を厳格に「まったくあらぬもの」の意味にとるとき、それがいかに思考と言表に対して困難な問題を提供するかを三つの局面から示す。〈影像〉も〈虚偽〉も、この困難につきまとわれている。だから、これらの概念との関連でソフィストを定義するためには、何としても、「あらぬものがあるということは、けっして証（あか）しされぬであろう」という、ほかならぬエレア派の巨頭パルメニデスの教説を論駁して、エ

レアからの客人としてはいわば「父親殺し」の仕事を敢行しなければならない。すなわち、「〈あらぬもの〉(非有)が何らかの点であること、他方逆に〈あるもの〉(有)が何らかの仕方であらぬということを、力ずくでも立証しなければならない」(241D)ことが、確認される。

五 〈あるもの〉(有)について(第三〇章—三六章 242B～251A)

1 先人の見解吟味——多元論者と一元論者(第三〇章—三二章 242B～245E)

〈あらぬもの〉(非有)にまつわる諸困難は見られたが、しかし〈あるもの〉(有)の意味もまた、けっして自明ではない。まず第一に、この〈あるもの〉(有)について考究されなければならない。

〈あるもの〉(有)についての諸説の史的概観をしてみると、先人たちの論じ方は「気楽すぎる」もののようである。〈あるもの〉(有)として二つ以上の何か(たとえば、〈熱いもの〉と〈冷たいもの〉)を立てる人々の立場も、ただ一つのもの(たとえば、パルメニデスの〈一〉にして〈全体〉なる〈あるもの〉)を立てる人々の立場も、厳密な吟味と批判を加えて行くとき、いずれも背理と自己矛盾に導かれることが示される。

2 神々と巨人族との戦い——物体主義者と形相主義者(第三三章—三五章 245E～249D)

「問題を別の仕方で論じている人々」に目を向けてみる。真にあるもの——実在——とは何かという問題をめぐって、昔も今も、巨人族と神々との戦いにも似た果しない論争が、つねに行なわれてきている。その一方の陣営の人々によれば、実在とは、「何らかの手ごたえと手触り」を与えるもの、すなわち物体のことにほかならない。これに対して、他方の陣営の人々は、実在とは、思惟によってとらえられる非物体的な〈形相〉であると主張する。両方の側に対して、説明を求めなければならない。

物体主義者たちとても、生命と魂、また魂にそなわる〈正義〉や〈思慮〉などを、何らかのリアルなものとして認めざるをえないのではないか。そしてこれらのもののうちのたとえ一部でも、それが物体的なものでないことが容認

されるとすれば、あるということについての彼らの見解は、これらをカバーしうるものへと修正されなければならない。あるということは、働きかけたり働きかけられたりする機能(力)を有することではないか、というひとつの規定が提案される。

形相主義者のほうは、この提案に対してどのような態度をとるであろうか。おそらく彼らは、彼らが〈生成〉と厳格に区別する不変不動の〈実在〉(=形相)が、「働きかけられる」ことによって変動をこうむるということを、認めたがらないであろう。しかし全き意味での実在が、知性と生命と魂を欠いていることはありえず、そしてこれらのものは、いずれも動を含意するのである。動は実在として認められなければならない。他方また、知性の働きは、恒常的なもの、不動のものがなければ成立しえないから、「あるものと万有」は動くものと不動のものの両方から成ると考えなければならない。

六　〈類〉(〈形相〉〈イデア〉)相互間の関係のあり方とディアレクティケー(第三六章—三九章　249D～254B)

しかしながら、このように「動も静もある」と言われるとき、この〈ある〉(有)ということ自体の意味は、〈動〉や〈静〉の意味とそのまま同じではなく、これらと区別されなければならない。〈有〉(あるもの)は、「それ自身の本性」においては、動きも静止もしない。ただ、〈有〉はそれ自体としては〈動〉〈静〉と区別されるものでありながら、〈動〉と〈静〉が共に〈有〉に「関与」することによって、「動も静もある」と言われる事態が成立するのである。

或る一人の人間がいかにして「善い」「色が白い」「大きい」等々の多くの言い方で呼ばれうるのか、という問題は別として、一般にこのような〈有〉〈動〉〈静〉といった〈類〉または〈形相〉または〈イデア〉(と253B～Dで呼ばれるようになるもの)の相互間における、結合関係(「関与」「分取」「分有」「混じり合い」「関係をもち合うこと」)のあり方はどのようなものであろうか。

(i)「いかなる〈類〉もいかなる他の〈類〉とも混じり合わない」、(ii)「すべての〈類〉がすべての〈類〉と混じり合

う」という両極端の想定は、直ちに背理を帰結するので拒けられ、(iii)「或るものは互いに関係をもち合うことができるが、或るものはできない」という、残る第三の可能性が、真として立証される。それはちょうど、文字(アルファベット)の場合に、互いに結びついてシラブルを形づくるものと、そうでないものとがあるのと同様である。ではどのような〈類〉がどのような〈類〉と結びつき、または結びつかないか、とくに、文字の場合の母音に相当するような、すべての〈類〉の間に行きわたってそれらを結び合わせる特別の〈類〉が、あるかどうか、また逆に分割の原因となる特別の〈類〉があるかどうか。――このことを正しく示すためには、ディアレクティケーと呼ばれる哲学的知識が必要である。この知識を有する者は、〈類〉〈形相〉〈イデア〉界における、いわゆる類―種関係のヒエラルキー構造を認識し、それにもとづいて、正しい分割を行なう能力をもつ者にほかならない。

七　〈類〉(〈形相〉〈イデア〉)相互間の関係の実態調査と、あらぬものがあるということが可能でなければならぬこと(第四〇章―四三章 254B～259D)

以上のことを確認したうえで、エレアからの客人は、〈あるもの〉(有)と〈あらぬもの〉(非有)について可能なかぎり議論を尽くし、とくに、「あらぬものがある」と言うことが可能かどうかをしらべることを目標にして、いくつかの重要な〈類〉(〈形相〉〈イデア〉)についてその相互の関係を見とどけることを提案する。

この目的のために、これまで取り上げられてきた〈有〉〈動〉〈静〉がまず、そのような重要な〈類〉として選ばれ、さらに〈同〉と〈異〉が加えられて、この五つがそれぞれ互いに別箇のものであることが確認される。そして〈動〉を中心として、次のような関係のあり方が提示される。

1 a 〈動〉は〈静〉と異なる。∴〈動〉は〈静〉ではない。

b 〈動〉は(〈有〉の分有によって)ある。

2 a 〈動〉は〈同〉と異なる。∴〈動〉は同じもの(〈同〉)ではない。

b〈動〉は(〈同〉の分有によって)同じものである。

3 a〈動〉は〈異〉と異なる。∴〈動〉は異なるもの(〈異〉)ではない。

b〈動〉は(〈異〉の分有によって)異なるものである。

4 a〈動〉は〈有〉と異なる。∴〈動〉はあらぬもの(〈有〉でないもの)である。

b〈動〉は(〈有〉の分有によって)あるものである。

一般に、すべての〈類〉について、それぞれは〈有〉と(さらにそれ自身以外のすべての〈類〉と)異なるがゆえに、あらぬもの(〈有〉でないもの)であると正しく言えるし、また他方、それぞれは〈有〉を分有するがゆえに、あるものであると正しく言える。〈あらぬもの〉(非有)とは、〈あるもの〉(有)と反対のもののことではなく、たんに、異なるもののことである。

さらに、ちょうど〈知識〉が或る特定の対象に関わることによって、〈知識〉のその部分は或る特定の名前(「数学」、「医学」等)で呼ばれるのと同じように、〈異〉も或る特定のもの(〈美〉〈大〉〈正〉等)に対置されることによって、〈異〉のその部分は特定の名前(「非美」「非大」等)を与えられることが示され、この場合も、その〈非美〉(美ならぬもの)等は、それが対置される〈美〉(美なるもの)等と同等の資格において、あるのだということが確認される。このようにして、〈非有〉(あらぬもの)は、〈非美〉(美ならぬもの)〈非大〉(大ならぬもの)と同様、「確固としてそれ自身の本性をもっている」ものであり、実在性にかけて劣るところのないあるものである。〈異〉の本性こそが、この事態を成立させるものであった。こうして、パルメニデスの根本テシスに対する反論は完了する。

八　言表と判断における虚偽(第四四章―四七章　259D～264B)

あらぬものがあることが可能であると示されたいま、次の問題は、言表や判断がいかにしてこの〈あらぬもの〉(非有)と関わり合う(「混じり合う」)か、ということである。なぜならば、ソフィストは〈影像作りの技術〉や〈見かけだ

けを作る技術〉によって人を欺く――すなわち、虚偽を語り、虚偽の判断をなさしめる――と考えられたのであるが、しかるに、虚偽を語り判断するとは、あらぬものを語り判断することにほかならないがゆえに、それははじめからありえないことなのだというのが、ソフィストの側から予想される反論だったからである。ソフィストを取り押えるためには、虚偽の言表と虚偽の判断が可能であることを立証しなければならない。

言表〈ロゴス〉とは、これまで見られたような〈形相〉相互の組合せにもとづいて成立するものであるが、語〈すなわち、音声による表示記号〉の面からみると、それは、事物や行為者を名指す名詞〈オノマ〉と、行為・振舞い・あり方を表示する動詞〈レーマ〉とを組合せることによって、或る何らかの事態を明らかにするものとなったときに成立する。いま、

（i）「テアイテトスは坐っている」

（ii）「テアイテトス（いま話し合っているこのテアイテトス）は飛んでいる」

という二つの言表を見ると、（i）は、テアイテトスについて、じっさいにあること（もの）をあるがままに語っている真なる言表である。他方、（ii）は偽なる言表であって、それはテアイテトスについて、じっさいにあるのとは異なったものを語り、したがってあらぬことをあるものとして語っているが、しかしまた、じっさいにあるのとは異なっているところの、あるものを語ってはいる。このような意味において、言表には真なるものと偽なるものとが区別され、問題の「虚偽を語る＝あらぬものを語る」という場合の「あらぬもの」とは、このように「異なるもの」としての「あらぬもの」である。われわれはすでに、この意味での〈あらぬもの〉（非有）があること（完全な無ではないこと）を論じて示した。

さて、〈思考〉とは魂が自己自身を相手に行なう対話（ディアロゴス）であり、〈判断〉とは、この対話としての思考のひとつの結着にほかならず、そしてこの判断が感覚を介して起るものが〈現われ〉（知覚判断）であるから、言葉が

心の中にとどまるか口外されるかの違いをのぞけば、〈思考〉〈判断〉〈現われ〉は〈言表〉と同族の関係にある。したがって、〈言表〉に真と偽の区別があるとすれば、必然的にこれら一連の心的過程にも、真と偽の区別が同様の意味においてあることになる。こうして、問題の虚偽の言表と虚偽の判断とは、「予期していたよりも早く」発見された。

九 〈ソフィスト〉の定義の試みの再開、最終定義(第四八章—五二章　264B〜268D)

こうしてようやく、先に236D以来大きく中断されざるをえなかった〈ソフィスト〉規定のための技術の分割が、再開される運びとなった。すなわち、「いまや、虚偽の言表もあれば虚偽の判断もあることが明らかになった以上、実物を真似たものがありうることになるし、そしてそうした状態にもとづいて、人を欺く技術というものがそこから生じてくることが可能だということになる」(264D)からである。

〈ソフィスト〉を定義するためのこれまでの分割は(第六の分割をのぞいて)すべて、技術の二大部門としての〈作る技術〉と〈獲得の技術〉のうち、〈獲得の技術〉をその出発点としてきた。しかしここで、真似ることは、実物ならぬその影像を作ることとして、作ることの一種であることがあらためて注意され、分割は〈作る技術〉を出発点としてはじめられることになる。

その分割の実際の経過については、補注Aの分割一覧表における〈ソフィストの技術〉(7)を参照。これによって〈ソフィスト〉は、徳について知識をもたずに、思わくだけにもとづいて有徳の知者を真似る者、しかも自分の無知への恐れをもちつつ知っているふりをして、しらばくれる者、そしてその活動形態においては、私的な場で短い議論により、相手を自己矛盾に追いこむ技術の持主であると規定された。

三 『ソピステス』の哲学的課題

1 プラトンのイデア論と『パルメニデス』につづく諸対話篇

以上概観されたように、この対話篇のなかでは、ソフィストを定義する仕事と関連しながら、さまざまな多くの論題が取り上げられて論じられている。これらの論題は、その一つ一つを単独に切り離してみても、それぞれがいずれも重要な内容をもっていると言えるであろう。近来はとくに、〈類〉〈形相〉〈イデア〉と呼ばれているものの結合・非結合関係ということのもつ意義や、命題分析を通じて行なわれる「(で)ある」「(で)ない」という言葉の意味または用法の分析、といったことが人々の関心を引き、おびただしく発表されている『ソピステス』に関する研究書や論文は、プラトンがここで「(で)ある」('is')についてどのように、同一性(identity)の意味と、コプラ(copula)または述語づけ(predication)としてのそれと、存在(existence)の意味とを区別しあるいは区別していないか*、同様に「(で)あらぬ」('is not')についても、同一性の否定(non-identity)と否定的な述語づけ(negative predication)と非存在(non-existence)とが、それぞれどのように扱われているか、といった点に論議が集中している。

* このうち、存存(existence)の意味または用法については、それがプラトンによってとくに区別し出されていることが、最近では否定されている(C. H. Kahn, The Greek Verb 'To be' and the Concept of Being, *Foundation of Language*, 2 (1966), pp. 245–265; W. G. Runciman, *Plato's Later Epistemology*, 1962, Chap. iii; M. Frede, *Prädikation und Existenzaussage*, *Hypomnemata*, 18, 1967; J. Malcolm, Plato's Analysis of τὸ ὄν and τὸ μὴ ὄν in the *Sophist*, *Phronesis*, 12 (1962); G. E. L. Owen, Plato on Not-being in G. Vlastos (ed.) *Plato*, I. pp. 223–225; R. S. Bluck)。

しかしながら、たしかにこれは、『ソピステス』においてプラトンが取り組んだひとつの大きな問題ではあるけれども、この対話篇が担っている哲学的課題のすべてがそのことだけに尽きるとは、むろん言えないであろう。では、こうした「(で)ある」「(で)あらぬ」の意味・用法の分析ということのほか、ソフィストの概念規定と直接関連する〈似像〉の問題の考察や、さらには物体主義者(いわゆる 'materialists')と形相主義者(いわゆる 'idealists')との実在観の対置といったことまで含めて、さまざまの多岐にわたる論題を取り上げて論じることにより、プラトン

はいったい、より包括的また基本的には、どのような哲学的問題を解明しようと意図しているのであろうか。『ソピステス、あるいは〈あるもの〉(有)について。論理的対話篇』という、先に見られたこの対話篇の伝統的な表題は、この副題をつけた古人が、ソフィストを定義する過程で取り上げられる諸論題は結局、〈あるもの〉(有)という主題のもとに統一されうるものであり、それが「論理的」な仕方で取り扱われていると見たことを示している。この見方は、一応正しいと言えるかもしれない。しかしもしそうとすれば、その〈有〉論とは、前期以来のプラトン哲学全体の発展から大局的に見られるとき、そもそもどのような意味と課題を担った〈有〉論なのであろうか。そして、そこで取り上げられている先のような諸論題はそれぞれ、プラトン哲学全体にとってのその基本的な意味と課題との、どのような関連のもとに浮び上ってきたものであり、何が意図されてとくに「論理的」な仕方で取り扱われたのであろうか。

ひとたびこのような問の視点に立つとき、われわれはいやおうなしに、イデア論のことに目を向けなければならなくなる。イデア論こそは、何びとも否定することができないように、『メノン』に至る前期対話篇において着実に準備され、『饗宴』『パイドン』『国家』『パイドロス』などの中期諸著作のなかで本格的なかたちで表明されたプラトン哲学の中心思想である以上、これとの関連を抜きにしてその後のプラトン哲学全体の発展や行方を語ることはできず、したがってまた、そのような全体的見地から『ソピステス』が担う哲学的課題が何であるかを見定めるということも、このイデア論との関係――積極的なそれにせよ、消極的なそれにせよ――をまず見定めることなしには、なしえないことだからである。

そしてこのことはさらに、われわれの目をいやおうなしに、問題の書『パルメニデス』に向けさせることになる。周知のように、この対話篇のなかでプラトンは、パルメニデス、ゼノンと若年のソクラテスとの出会いを想定して、『パイドン』や『国家』で表明されたのと同じイデア論をソクラテスに代弁させる。これに対してパルメニデスは、

いくつもの批判的難問を集中的に発し、そのどれに対しても若いソクラテスは、充分に答えることができなかった。そして、これを転機とするかのように、以後に書かれた『テアイテトス』『ソピステス』『ポリティコス(政治家)』とつづく諸対話篇においては、イデア論はもはや、少なくともそれまでのような積極的なかたちでは表明されなくなる。取り上げられる問題の性格やその取り扱い方も、『パルメニデス』以降はたしかにそれまでと様相を異にしている。この点は、先に見られたような伝統的表題に現われる各対話篇の性格づけの語にも、反映されているといえるであろう。すなわち、

『饗宴』——「倫理的」
『パイドン』——「倫理的」
『国家』——「政治的」
『パイドロス』——「倫理的」
『パルメニデス』——「論理的」
『テアイテトス』——「試練的」
『ソピステス』——「論理的」
『ポリティコス(政治家)』——「論理的」

というように、古人も、はっきりと『パルメニデス』を境としてプラトンの対話篇が、個人の性格または品性(ἦθος)や国家社会(πόλις)に関わる人間の生き方の問題が表面に打ち出されていたもの(ἠθικός, λογικός)から、論理的関心の目立つもの(λογικός, πειραστικός)へと変ったと見ているのである。先に(一において)文体論の見地から、『ソピステス』は後期著作群の最初に位置する対話篇として、『パルメニデス』や『テアイテトス』に至る中期的対話篇と区別されることが見られたが、こうしたイデア論の現われ方や、取り上げられる問題とその扱い方の性格に注目す

るかぎりは、プラトンの対話篇における中期と後期との境界線は、『パイドロス』と『パルメニデス』との間にこそ引かれなければならないであろう。

さて、問題は、すべてこのような変化——それは疑いもなく、ひとつの大きな変化である——を、どのように解釈するかということである。右に触れた諸点にだけ目を向けるかぎり、当然予想されるひとつの見方、そして事実これまでに精粗さまざまのかたちで主張されてきた解釈は、プラトンが、みずから『パルメニデス』において指摘してみせたさまざまの難点をイデア論が避けがたくもっていることに気づいて、これを転機としてイデア論を放棄し、もしくは根本的な修正をそれに加えて、以後は別種の問題に関心を向けるようになったという見方である。われわれはやがて、事実はこの点に関してはたしてどうであるかを、われわれの『ソピステス』のなかに見ることになるであろう。

しかしながらその前に、この点に関連してぜひとも確認しておかなければならないのは、プラトンが問題の『パルメニデス』そのもののなかで、イデア論に対する批判的質問を終えたパルメニデスに、そのエピローグのかたちで次のように語らせている事実である。

「しかしそうかといって、ソクラテス、もし人が、こんどは逆に、以上に挙げられたすべての困難や他のこれに類する困難に目を向けたうえで、およそあるものの形相(エイドス)(=イデア)の存在を認めようとせず、それぞれ一つのものについて何らかの形相を規定しようとしないとしたら、自分の思考をどこへ向けたらよいかさえもわからなくなるだろう——あるもののそれぞれについてイデアが恒常的に同一性を保って存在していることを、認めようとしないならばね。そしてそのようにして、対話・問答の力を全面的に破壊することになるだろう」(135B〜C)

これがイデア論批判を結ぶ言葉であるならば、『パルメニデス』に登場するこのエレア派の巨頭は、それまで表明されてきたイデア論にまつわる困難を指摘するという意味での批判者ではあっても、イデア論そのものに対する

反対論者や否定論者ではけっしてなく、むしろその弁護者であるというべきであろう。いずれにせよ、プラトンがパルメニデスに語らせた右の言葉は、これをそのまま素直に受け取るかぎり、イデア論はそれに対する幾多の難問の提起にもかかわらず、なお堅持されなければならないし、また堅持されうるとプラトンが考えていたことを、間違いなく示すものといわなければならない。

ではしかし、それがプラトンの確信であったとすれば、『パルメニデス』を境として看取される、先のような大きな変化は何を意味するのであろうか。この点の理解についてもまた、まず何よりも尊重されなければならないのは、『パルメニデス』そのもののなかでプラトン自身が書き記している事柄であろう。すなわち、先に引用した言葉につづいてパルメニデスは、「では君は、哲学についてこれからどうするつもりなのか。以上のこと(パルメニデスによって問われたイデア論の諸困難)が知られないままで、どういう道へ君は向かうつもりなのか」とソクラテスに問う。そして、いまのところよくわからないと答えるソクラテスに対して、次のように注意する。

「それはつまり、予備訓練をつまない先に、ソクラテス、君は〈美〉や〈正〉や〈善〉といった、形相の一つ一つを規定しようとかかっているからなのだ。……なるほどたしかに、君がそのようにして言論に向かって突進して行く意気ごみは美しいし、いいかね、神々しいものでさえある。しかし君は、そういう君自身を引きもどさなければならない。そして、役に立たないと思われ、空理空論と世人から呼ばれているものを通じて、もっと訓練をつむことだ。まだ若いうちはね。さもなければ、君は真理に逃げられてしまうだろう」(135C〜D)

空理空論と世人が呼ぶものによる訓練とここで言われているのは、直接には、『パルメニデス』のいわゆる第二部の内容をなしている、前提を立ててその論理的諸帰結を導き出すゼノン流の論法による訓練のことを指している。しかしプラトンがパルメニデスに語らせた右のような言葉には、自分が進めてきた哲学の仕事についてのひとつの反省と、今後とるべき道についての決意が披瀝されていると、自然に解されうるであろう。

ソクラテスの生き方死に方に動かされて哲学の道を歩みはじめたプラトンは、前期の諸著作以来、人間の生き方と行為を導くべき価値的規範をひたすらに追求して来て、それが『饗宴』『パイドン』『国家』『パイドロス』において、まさに右のパルメニデスの言葉のなかで言われているような、〈美〉や〈正〉や〈善〉のイデアとして大胆なまでに積極的に表明された。しかしこれらのイデアの存在は、それがわれわれの住む感覚と経験の世界を超えた真実在であるがゆえに、むろん誰にでも容易に理解できるという性格のものではない。『パルメニデス』で取り上げられたような幾多の疑問が人々から向けられるのは、けだし当然であろう。いずれにせよプラトンは、「真理に逃げられてしまう」ことのないためには、それまでの著作のなかに示されたような「意気ごみ」から「自分自身を引きもどし」て、イデア論についての、もっと地味な基礎固めの作業が必要であることを自覚した、というふうに解される。

『パルメニデス』で描かれた老パルメニデスと若いソクラテスとの出会いは、『テアイテトス』(183E~184A)と『ソピステス』(217C)のなかで言及され、これらの対話篇に登場する晩年のソクラテスによって、パルメニデスへの尊敬と畏怖の思いとともに回顧されている。そして『ソピステス』と『ポリティコス(政治家)』は、『テアイテトス』で想定された状況設定をそのまま承け継ぎながら、かつて先述のようにイデア論の批判的弁護者であったパルメニデスおよびゼノンの門下、エレアからの客人を主役として登場させる。古人が「論理的」あるいは「試練的」と性格づけた『テアイテトス』『ソピステス』『ポリティコス(政治家)』の三対話篇は、このようにして、『パルメニデス』に緊密につながる一つのグループを形づくり、『パルメニデス』で右のように予示されたところの、イデア論に対する論理的ないし認識論的な反省と基礎固めを基本的課題とする対話篇であると、見ることができるであろう。

では、事実はこの点についてどうであるか。もしそう見ることが当っているとすれば、この基本的課題は、どのような仕方で果されているか。そのことをわれわれは、『ソピステス』のなかに見とどけなければならない。

2 『ソピステス』におけるイデア論

まず、出発点となる『パルメニデス』において、イデア論についての今後の課題が、大きく分けてどの点とどの点に関わるものとして示されているかを見ておこう。

「もし存在が多であるならば、それは似ていて似ていないということにならなければならない」(127E)と論ずるゼノンの論文を聞き終えたソクラテスは、ゼノンのパラドクスを解決するものとしてイデア論を提示するが、その最後を次のような言葉で結ぶ。

「もし誰かが……(1)まず第一に、たとえば〈類似〉と〈不類似〉、〈多〉と〈一〉、〈静〉と〈動〉など、この種のものすべての形相を、それ自体だけで独立にあるものとして区別し、(2)そのうえで次に、それらの形相がそれ自体のあいだで、混じり合ったり引き離されたりすることのできるものであるということを、明らかにするとしたならば、私の感心と驚歎は非常なものとなるでしょう、ゼノン。この問題に関連するあなたのお仕事も、大へん勇気のある試みであると考えます。しかし、形相そのものの間にも同じこの難問が種々さまざまの仕方で編みこまれているのを、つまり、あなたが目に見える事物において詳論された事柄が、思惟によってとらえられる対象においてもそうであることを、もし指摘できる人がいるならば、私はもっと感心するでしょう」(129D〜130A)

パルメニデスによる質問に先立って語られたこの言葉のなかには、われわれが引用の中で(1)と(2)として区別した二つの基本的な問題が示されているといえる。

(1)ひとつは、イデア——『パルメニデス』では〈形相〉〈イデア〉〈類〉(ゲノス)という三つの語で呼ばれている——を、「目に見える事物」から厳格に区別して定立すること自体の当否。

そして、このことは二種の異なった存在の区別(χωρίς)に関わる以上、この(1)の内には、(1′)イデアと感覚的

個物との関係のあり方はどのようなものであるか、という問題が直接内包されている。われわれが見たり触れたりする一つ一つの事象が、イデアとどのような関わり合いをもつかが明確にされないかぎり、イデアそのものの存在理由もまた、明らかでないからである。『パルメニデス』におけるソクラテスの言葉のなかでは、さしあたってこの両者の関係は、感覚的個物がそれぞれのイデアを「分取する」(μεταλαμβάνειν)「分けもつ」(μετέχειν)という語で表現されていた。

(2)もうひとつの問題は、もしイデアの存在が認められるとするならば、そのイデア相互間の関係のあり方はいかん、ということである。すなわち、イデアそれ自体は、互いに「混じり合うこと」(συγκεράννυσθαι)や「引き離されて区別されること」(διακρίνεσθαι)の可能なものであるかどうか、もし可能とすれば、イデアのそのような相互関係の実際のあり方はいかなるものであるか、という問題である。イデア相互間の結合と非結合の関係ということは、プラトンのこれまでの著作のなかでも、たとえば『国家』第五巻における、「(〈正〉と〈不正〉、〈善〉と〈悪〉、およびすべての形相の)それぞれは、それ自体としては一つのものであるけれども、いろいろの行為と結びつき、物体と結びつき、相互に結びつき合って(τῇ.... ἀλλήλων κοινωνίᾳ)、いたるところにその姿を現わすために、それぞれ多くのものとして現われる」(476A)という言葉や、あるいは『パイドン』102B sqq. における、〈熱〉や〈冷〉などのイデアの相互関係(相互排除性)が論じられる箇所などで、触れられるところのあった事柄である。しかしこうした言及はいずれもヒントにとどまり、イデア相互間の関係がそれ自体として、本格的に論じられたことはまだなかった。

この(1)と(2)の二つの問題は、本来、(1)がまず(πρῶτον μέν)確証されてから、(2)がしかるのち(εἶτα)はじめて考察の課題として成立しうる、という関係にある。このゆえに、先のソクラテスの言葉を受けて行なわれるパルメニデスの質問は、さしあたって(2)の問題には触れることなく、もっぱら(1)の問題に向けられて、とくに

「分けもつ」「分有する」という言葉で語られたイデアと感覚的個物との関係の問題(1′)に集中する。しかし(2)がまったく無視されたのでないことは、パルメニデスがずっと後で、ソクラテスの語ったこの問題点にわざわざ言及して賞讃している(135D～E)ことによって、明示されているのである。

さて、古代の注釈家もつとに指摘しているように、*われわれが『ソピステス』において直ちに気づくのは、『パルメニデス』のイデア論争では宿題として残されたこの(2)の問題がまっすぐに承け継がれて、ここで本格的な考察の対象とされている事実であろう。この対話篇において最初からわれわれの出会う「分割法」の大々的な実習がすでに、イデア(〈類〉〈形相〉)相互の関係のあり方をひとつの側面から予め例示するものとみなすことができるのであるが、やがてそのような結合関係(『パルメニデス』と同じく「混じり合い」と呼ばれている)の可能性とその範囲のことは、正面きって問題として立てられ(251D sqq.)、その考察がディアレクティケーの課題であることの確認のもとに、正式な取扱いを受けることになる。『パルメニデス』の主役であったその人の根本命題を論駁して、〈あらぬもの〉があることを論証するという課題も、このイデア(〈類〉〈形相〉)相互間の結合関係の実態調査にもとづいて果されたものであったし、虚偽の言表や判断の何であるかの規定(263B)も、同じくそのことにつながっている。

* Procli *in Platonis Parmenidem*, ed. Cousin, 772. 19–24; Simplicii *in Phys.*, 101. 13, 17–18.

こうして、「あなた(ゼノン)が目に見える事物において議論された事柄が、思惟によってとらえられる対象においてもそうであること」(『パルメニデス』130A)の指摘、すなわち、「似ていて似ていない」とか「同じものでありまた同じものでない」とかいったことが、さらには「ありかつあらぬ」ということまでも、〈形相〉そのものについて成立することを示すという課題は果された。『ソピステス』において、この課題の追求が一段落ついたところで、〈形相〉相互の間の結合関係をまったく認めないことは、「およそあらゆる言表(ロゴス)の最も完全な抹殺」にほかならず、その場合われわれは何ひとつ語ることも論じることもできなくなって、哲学そのものを奪われる結果にな

ると言われていること(259E〜260A)に注目したい。これはちょうど『パルメニデス』において、〈形相〉〈イデア〉の存在が認められないかぎり、思考の向かうべき対象は失われ、「対話・問答の力」(ἡ τοῦ διαλέγεσθαι δύναμις)が全面的に破壊されることになると注意されていたのと、明確に対応するものである。イデアの存在(1)と、その相互間の結合の可能性(2)とは、プラトンにとって、ともに相まって哲学の絶対的な必須条件であった。

そして、その『パルメニデス』における(1)についての注意と実質的に同じ内容の要請は、『ソピステス』においても、〈形相〉を実在として立てる人々の立場が検討されたときに、恒常不変のあり方を保持するものが存在しないかぎり、知性の働きそのものが成立しえないというかたちで、再確認を与えられている(249B〜C)。このことは、本篇におけるプラトンの(1)の問題に対する基本的な態度がどのようなものであったかを示唆するであろう。というよりも、もともとイデア相互間の結合関係ということ(2)は、先にも触れたように、イデアそのものの存在(1)が容認されていてこそはじめて問題となる事柄であるとすれば、本篇においてそれが正式に問題として取り上げられて詳論されていることはそれ自体、ここではイデアの存在が容認されて前提となっていることを意味するはずである。事実また、すでに気づかれているであろうように、ここでその結合関係が論じられている〈類〉〈形相〉〈イデア〉といった言葉は、『パルメニデス』における若いソクラテスのイデア論の用語とまったく同じものであり、そしてその『パルメニデス』において若いソクラテスが述べるイデア論は、一般に認められているように『パイドン』や『国家』で表明されていたイデア論と同じものである以上、さらにまた問題(1)と(2)は共にその同じイデア論の含む問題として『パルメニデス』で提出されている以上、『ソピステス』における(2)の問題の論議のなかで語られているこの〈類〉〈形相〉〈イデア〉という語もまた、以前と変らぬ同じ性格のイデアを指し示していると考えられなければならないであろう。*

* Cf. '. . . it is most unlikely that Plato would repeatedly use the term εἴδη without bearing in mind that readers

acquainted with his earlier works would at once think of his Forms'(Bluck, pp. 1-2).

このことはさらに、われわれが本篇のなかに見出す次のような言葉によって、ほとんど確証を与えられることになる。すなわち、その〈類〉〈形相〉〈イデア〉と呼ばれているものの結合と非結合の関係を見定めることが、「ディアレクティケー」の名のもとに哲学者の仕事であることが注意された後を承けて、エレアからの客人は哲学者について、〈非有〉(あらぬもの)の暗闇に身を寄せるソフィストと比較しながら、このように言う。

「これに対して、哲学者のほうは、思惟の働きを通じて、つねに〈有〉(あるもの)のイデアに身を置いているのであって、こんどは逆にその場所の明るい輝きのためにこそ、けっして容易には見られないのだ。なぜなら、多くの人々の魂の目は、神的なもののほうを望見しつづけることには、堪えられないからだ」(254A～B)

イデアの「神的な」性格とイデア界の「明るい輝き」、そのまばゆさゆえに多くの人々の「魂の目」はそれを観つづけることに堪ええないこと――これらは紛うべくもなく、かの『国家』第七巻の「洞窟」の比喩による、ディアレクティケーの対象領域としてのイデア界の記述をわれわれに想起させるべく語られている表現である(254Bに対する注2参照)。

以上のようにプラトンが本篇において、『パルメニデス』におけるイデア論争のエピローグで語られたのと同じ要請を提示し、『パルメニデス』でイデア――それは『パイドン』や『国家』で語られていたイデアである――を指すのに用いられた同じ用語のもとに、その同じイデア論の含む問題としてそこで提出されたイデアどうしの結合関係を論じ、そしてイデアと哲学者との関わり合いを以前と変らぬ表現によって記述しているのを見るとき、われわれはもはや、これらの事実が集中して指し示す結論を避けることはできないであろう。すなわち、『ソピステス』のなかには、イデア論の表明のされ方こそ――当然のことながら――これまでと違ってはいても、しかしイデアそのものは、『国家』を中心とする中期著作におけるそれと性格を変えることなく、ディアレクティケーがそれに関

わる対象として、確実にその存在が前提されているのである。『パルメニデス』を転機としてイデア論が放棄されたと見ること、あるいは後期著作のなかに何か特別に後期的な、それまでの形而上学的な性格を剝奪された「イデア」を見ることは、この『ソピステス』だけについて見ても、以上のようないくつかの基本的事実の集積にまったく目を閉じるのでないかぎり、許されないことであるといわなければならない。だからまた、プラトンはこの対話篇において、たんに「(で)ある」('is')という言葉の意味や用法の区別について論じているのではなく、現象界の形而上学的根拠としての、イデア界における事態そのものについて考察しているのである。

3 イデア論の基礎固め

(a) 「感覚の世界」の資格——「物」の解体

しかしながら、そのようなイデアは本篇において、ただ頭から前提されているのではない。われわれは先に、『パルメニデス』に直接つづく諸対話篇は、イデア論への論理的・認識論的な反省と基礎固めをその基本的課題としているとみなしうることを述べた。この観点から見るとき、『テアイテトス』の大きな部分を占める「知識とは感覚である」というテーゼの検討は、基本的にはやはり、感覚の世界ははたしてそれだけで——つまり、イデアなしに——自立しうるものであるか、認識論的に言えば、感覚の世界は〈知識〉の最終的な根拠となりうるものを、はたしてそれ自身の内に有するかどうかを、正式に再確認するための作業であったといえるであろう。ところで、その考察がいよいよ本格的な段階に入ろうとするところ(155E～156A)で、

「手でしっかり摑めるものでなければ、何ひとつとしてあるとは思わず、作用とか生成とか、およそ目に見えないものはいっさい、〈あるもの〉(実在)の部類に入れることを容認しない人たち」

がいることが注意され、これに対して、

「万有は本来が動なのであって、これ以外の他の何ものでもない」と主張する「もっとはるかに洗練されている人たち」が対置されて、この人たちが説く詳細な感覚的知覚の分析が述べられることになる。

この二つの立場の対置、とくに前者の人々については、そこでは簡単に触れられているにとどまり、その意義もそれほど明確ではないけれども、これを、『ソピステス』(246A～249D)のなかで「神々と巨人族との戦い」と呼ばれてかなり大がかりな取扱いを受けている物体主義者と形相主義者(οἱ τῶν εἰδῶν φίλοι)との対置と重ね合わせてみるとき、何が浮び上ってくるであろうか。

『テアイテトス』で簡単に扱われている前者の立場が、『ソピステス』のなかに、「手ごたえと手触りを与えるもの」だけがあるのだと主張する人々として現われる物体主義者の立場と同じであることは明らかである。そして後者についても、万有はすなわち動にほかならないというその主張の根本は、『ソピステス』の形相主義者の主張の半分と合致する。つまり、『ソピステス』の形相主義者の所説は、「真の実在とは、思惟によってとらえられる非物体的な或る種の形相である」(246B)、そして「実在はつねに恒常不変のあり方を保つ」(248A)という積極的側面と、他方、「物体は実在ではなく、動きつつある成り行き(生成)の過程にすぎぬ」(246C)、「生成は刻々に変転するものである」(248A)という否定的側面とが相まって成立しているのであるが、この否定的側面が『テアイテトス』においては、「もっと洗練された人たち」の説として、それ自体として大きく取り上げられて詳述されているのである。〈知識〉が成立するためには、というよりも、そもそも或るものを或るものとして語ること(τι προσειπεῖν ὀρθῶς, *Theaet.* 152D et al.)ができるためには、何らかの恒常的なものがなければならない。〈知識〉を救うかに思われる一つの途は、そのような恒常的なものを何らかのかたちでこの感覚的世界そのものの内に、感覚される事物の窮極的な構成要素として、求めることであろう。場所(位置)的運動は行なうが性質的変化は免かれているような(cf. εἰ μὲν

τοίνυν ἐφέρετο μόνον, ἠλλοιοῦντο δὲ μή κτλ., *Theaet.* 182C)、原子や剛体や質点のごときものを感覚的世界の基礎に構想することも、そのような行き方の一つである。『テアイテトス』と『ソピステス』で取り上げられる物体主義者の主張は、そのかぎりではきわめて素朴な唯物論でしかないけれども、しかし原理的には、このような構想と確実なつながりをもっている。原子は、たとえそれが微細であり、いっさいの第二性質的な性状を剝奪されたかたちで構想されているとしても、原理的には、固体的物体であり、つまり触覚的抵抗体にほかならないからである。

しかしながら、プラトンの見た感覚の世界は、このような構想が許されるには、もう少し徹底した動と流転の世界(πάντα δὴ πᾶσαν κίνησιν ἀεὶ κινεῖται, *Theaet.* 182A)であった。『テアイテトス』において先の引用につづく感覚的知覚の分析(156A〜157C)は、感覚の対象となる事物を動に還元し尽くす(さらに物体の構成要素(ストイケイオン)として構想される原子的粒子も、やがて『ティマイオス』において、その恒久的実体としての資格を正式に否定される)。感覚的事物そのものの内には、〈知識〉を保証する根拠、あるいは、そもそもわれわれが何かを或るもの(τι)と呼び語ることが可能であるための手掛りは、ついに存在しない。しかしわれわれは、事実として何かを或るものと呼び語り、事象はそれぞれ名前をもっている。とすれば、そのことの根拠は、それらの名前(ἐπωνυμία)の意味そのものが指し示すもの——それとの対応によってそれらの名前が意味を獲得するところのもの——にしかありえないであろう。

『テアイテトス』では、この最後の点は明示的に語られていない。しかし『ソピステス』のなかに現われる形相主義者(イデア論者)の立場は、その主張の先述のような否定的側面——「物体」を「議論のなかでばらばらに粉粋する」(246C)こと——が『テアイテトス』で詳論されたその成果をふまえて、そのなかに含意されていた事柄を、いまや新たに形相(イデア)こそが実在であるという積極面での主張として加えることによって、提示されたものとみなすことができよう。プラトンはこれを、『テアイテトス』では軽く触れられたままであった物体主義者の立場

とふたたび――しかしこのたびは正式に――対置させて、今も昔も「つねにたたかわれて」いる「神々と巨人族との戦い」とこれを呼びながら、何を実在と見るかについての両者の主張の対立が意味するところを明確に示す。そしてこの箇所全体(246A〜249D)を通じて、物体主義者たちに対しては、非物体的なもの(〈正義〉や〈思慮〉など)の存在の承認を迫るという仕方で、根本的な見解の変更を求めるけれども、形相主義者たちに対しては、譲歩を求めるのは結局のところ、「あるものと万有」が動を含むという点(これはとくに万有のプシューケーに関わるものと解される)だけであって、この立場の基本的正当性にまでは及んでいない。むしろ、先述のように、この立場の人々が形相について主張するような、恒常不変のあり方を保持する存在がなければ知性の働きが成立しえないという、『パルメニデス』に見られたのと同じ内容の要請が、あらためてそこで再確認されているのである。

いずれにせよ、本篇における物体主義者と形相主義者との対置と、それぞれに対するこの取扱い方は、以上見られたような意味において、知性の働きと知識を救うための二者択一的な途をあらためて提示しつつ、『テアイテトス』から引きつがれている、イデア論の土台を洗い直すための基礎作業の一環として位置づけられるであろう。

(b) イデアと個別的事象との関係について

しかしながら、この形相主義者たちの主張内容は、ここで紹介されているかたちでは、けっして『パイドン』や『国家』で表明されていたプラトン自身のイデア論と、全面的に同じものではない。たしかに、エレアからの客人が要約的に示している――

「〈生成〉(成り行き)というものと、他方〈実在〉とを区別して、別々のものとして語る」

「そして、われわれは身体により、感覚を通じて、〈生成〉と関わりをもち、他方、魂により、思惟を通じて、真の〈実在〉と関わりをもつ。その〈実在〉はつねに恒常不変のあり方を保つのであるが、他方〈生成〉は刻々に変転するものである」(248A)

というその主張の骨子それ自体には、プラトンのこれまでのイデア論と食い違う点は何もない。けれども、『パイドン』や『国家』のイデア論の基本点を述べた『パルメニデス』(128E～129A, 130B)における定式を、右の言葉に併置してみれば直ちに気づかれるように、ここには、故意にとしか思えないほど明瞭に、重要な一点が欠落しているのである。つまりそれは、『パルメニデス』では「分けもつ」「分取する」という語で述べられていたところの、〈生成〉界の〈実在〉界に対する関係のことである。代りに、両者に対する「われわれ」の関わり合い方が語られていて、それが何を意味するかがこの箇所では問題とされるのであるが、しかしこれまでのイデア論から見れば、この「関わり合い」のことならば、それ自体としては要するに、〈実在〉としてのイデアは「思惟の対象」(τὰ νοητά, τὰ λογισμῷ λαμβανόμενα, etc.)であり、〈生成〉界の事物は「感覚の対象」(τὰ αἰσθητά, τὰ ὁρώμενα, etc.)であるということを、別の言葉で再述したものにすぎない。大事な点は、この「思惟の対象」としてのイデアと「感覚の対象」との間の関係――『パルメニデス』で提起されているのを先に見た(1′)の問題――にこそあったのである。*

* ヴィラモヴィッツ(*Platon* I, S. 558–559)、グルーベ(*Plato's Thought*, pp. 296–297)、コーンフォード(pp. 242–246)、そしてブラック(p. 94)などは、プラトン自身のイデア論(と少なくとも基本的には同じ主張)がここで示されているとみなすが、とくにコーンフォードの場合('The theory of the Friends of Forms is the theory stated in the *Phaedo* and criticised in the *Parmenides*', p. 243)、『パルメニデス』に見られるイデア論の定式と比べれば明瞭に目につくところの、イデアと感覚の対象との関係を述べる言葉の欠落を、少し安易に無視しすぎているように思われる。ブラックも('The views attributed to the idealists are in full accord with what had been Plato's theory')この点には何も触れていない。

『ソピステス』に見られる形相主義者たちの主張が、それ自体としてはプラトンのそれまでのイデア論と食い違う点は何もないにもかかわらず、プラトン自身ではなく別の人々の見解であるとみなされることがあるのは、主としてこの点ゆえである。* しかしわれわれは先述のように、この形相主義者(イデア論者)の立場と物体主義者の立場

との対置がここで正式に取り上げられていることのうちに、『テアイテトス』以来行なわれているイデア論の基礎固めの仕事との関連を見た。それならばなぜ、イデア論そのものの内に内包されていた右の重要な点が、ここで語られていないのであろうか。もし当面の文脈の中での問題関心が別のところにあったからだというのであれば、それならそもそも、『パルメニデス』においてあれほど集中的に問われたイデアと感覚的個物との関係の問題——先述の(1′)の問題——は、どこへ行ってしまったのであろうか。『テアイテトス』では、少なくとも直接的なかたちでは、この問題は取り上げられていない。『ソピステス』では？ 当然それが語られてよいはずの形相主義者(イデア論者)の主張の紹介にそれが見られないとすれば、他のどこに見出されることが期待できるであろうか。しかし、転機としての『パルメニデス』におけるイデア論争の中心問題であったこの点が、かりに不問にされたままであるとするならば、われわれはどうして、それ以後のこれらの対話篇が「イデア論の基礎固め」を課題とする対話篇であると、充分な意味において言うことができようか。

* とくに、プラトンのイデア論を誤り解した弟子たち、とみなされる場合(P. Natorp, *Platos Ideenlehle*, S. 284, 292–293; C. Ritter, *Platon* II, S. 131–134; Campbell, *ad. loc.*, p. 125, Introduction, p. lxxv)。——ディエス(pp. 294–295)もこのイデアと感覚物との関係の記述が欠落している点に注意して、形相主義者たちの主張の基本はプラトン的でなくエレア派的であるとみなすが、結局この人々の立場は歴史的に実在した特定のどの学派・人物の立場でもなく、une création littéraire であるとする。

しかしながら、われわれは逆に、形相主義者(イデア論者)の主張の定式的なかたちでの紹介のなかに明瞭に欠落しているこの点の問題こそ、まさに『ソピステス』全篇の最も主要な中心問題であったと、みなすことができるのではないだろうか。あるいは、それが他方において全篇中にそのような取扱いを与えられているからこそ、その点への言及があえてこの箇所に欠落せしめられているとさえ、言えるように思われる。では、イデアと感覚的事象と

の関係は、どのような意味で本篇の中心問題であると言えるのか。この点を明らかにするためには、本篇で取り上げられる諸論題の間の連関構造の大局的な見きわめと、さらにその背景にある、前期から後期にわたるプラトンの対話篇全体における思考の動きへの周到な目配りが必要である。いまはしかし、最小限必要な事柄を述べるだけにとどめたい。

『饗宴』や『パイドン』においてプラトンのイデア論が本格的な形をととのえて提示されて以来、イデアと感覚的事象との関係は、もっぱら、個々の事物がそれぞれのイデアを「分けもつ(分有する)」「分取する」(μετέχειν, μεταλαμβάνειν)という言い方と、個々の事象はイデアを原型・模範(παράδειγμα——以下「原範型」と呼ぶ)とするその似像(εἰκών, εἴδωλον, ὁμοίωμα, μίμημα etc.)であるという言い方と、この二種類の用語によって記述されてきた。

『パルメニデス』において焦点が当てられたのは、このうちの、「分けもつ」という言い方による事態の把握の仕方である。この記述方式は、もう少し詳しく言うと、主役のパルメニデスが批判に先立って、先に見たようなソクラテスの述べるイデア論を要約的に確認している言葉(130B)の中に明確に示されているように、

(i)イデア、たとえば「〈類似〉そのもの」(以下Φで表わす)

(ii)感覚的個物に内在する性質、たとえば「われわれのもっている類似性」(Fで表す)

(iii)イデア(Φ)を分けもち(μετέχει)、性質(F)をもっている(ἔχει)ところの個々の事物(xで表わす)

という三つの項からなっている(これに対してもう一つの、似像とその原範型という記述の仕方は、FとΦとの間の関係だけを述べるものである)。ここに見られるような「〃xはFである〃=〃xはFをもつ(ἔχει)〃(=〃Fがxに内在する〃)、そしてこの事態は〃xがΦを分けもつ(μετέχει)〃ことによって成立する」という記述方式は、『パイドン』(100C〜103B)において確立されていたそれと、正確に対応する。「もつ」と「分けもつ」が厳格に区別されて使われていることに、注意しなければならない。*

* 以上および以下に述べられる諸点については、私の論文 "Ἔχειν, Μετέχειν, and Idioms of 'Paradeigmatism' in Plato's Theory of Forms, *Phronesis* 19 (1974), pp. 30 sqq. のなかに、プラトンのテクストの調査報告や、その哲学的意義についての詳しい議論が与えられている。この主題はさらに、拙稿「形而上学の存在理由」(『哲学』第24号、一九七四年)において、別の広い問題連関のもとに論じられた。

この記述方式がどのような誤解と混同をまねきやすい不都合な点をもっているか、そしてそうした点がどのように、『パルメニデス』で発せられるいくつもの批判的難問(アポリアー)の中に組みこまれているか、ということについては、右に注記された論文で詳しく論じたので、ここでは繰り返さない。

ただ一つ、最も基本的な点——そして先に見られた事柄と密接に関連する点——としてここで指摘しなければならないのは、感覚の世界の流転性・変動性ということがイデア論における一貫した認識としてある以上、個々の感覚的事物(〃x〃に対応する「この或るもの」)を主語とし、それを不可欠の要素として要求するこの記述方式は、本来イデア論の根本モチーフにそぐわない性格をもっているということである。そして事実、われわれは、『テアイテトス』の感覚=知識説批判から『ソピステス』における形相主義者と物体主義者との対置へとつながる基礎作業によって、「物」的実体が「動きつつある成り行きの過程」の中に解消されて、〈実在〉としての資格を否定されるのを見た。ということはつまり、『ソピステス』においてプラトンは、最終的には実体的なものとして残りえないものを不可欠な要素として最終的に残すこの記述方式を、もはやイデア論について正式に使うことのできない段階にあった、ということを意味するであろう。またげんに、「分けもつ」「分取する」という用語は、この『ソピステス』において、これまでと違ったイデア相互間の関係——〃x〃に対応するような感覚的個物を含まない、したがって「分けもつ」という言葉の使用が存在論的誤解を招くおそれのない関係——に限定されて使用されているほかは、プラトンの対話篇のなかで、もはやそれまでのようにイデアと感覚的事象との関係については、一度も用いられて

いないのである。その関係を表現するための言葉として代りに保持されるのは、むろんもうひとつの、xに言及することなくFとΦとの関係をそれとして記述する「似像—原範型」のイディオムでなければならなかった。*

＊　イデア—個物の関係を「分有」関係と見ることが（或る誤解のもとにではあるが）いわゆる「第三の人間」の困難に巻きこまれる可能性の余地を残しているのに対して、「似像—原範型」という把握は、最初からその可能性を閉すものである。このことは、『パルメニデス』における質問（132C12〜D4）の中でのその扱われ方によって逆照明されている。この点については、H. Cherniss, The Relation of the *Timaeus* to Plato's Later Dialogues (in Allen (ed.) *Studies in Plato's Metaphysics*, pp. 365–366 および私の前掲論文（"Ἔχειν Μετέχειν, etc., pp. 49–50）を参照。

感覚の世界の内にある「この或るもの」(x)を主語とする世界記述の方式を正式に破棄するとともに、似像をうつす「座」(ἕδρα)または媒体としての場・空間(χώρα)の導入によって、この「似像—原範型」による世界記述の方式を完成するのは、『ティマイオス』(48E〜52D)である。* それまでにも、このイディオムによる感覚的事象とイデア的真実性との関係の記述は、『ポリティコス(政治家)』(285D〜286A)に見られるが、われわれの『ソピステス』では、そのような記述は直接的なかたちではなされていない。この対話篇において行なわれているのはそのためのもっと基本的で大がかりな作業なのである。いったい、この対話篇全体の主題であるソフィストの定義が、〈影像〉や〈似像〉の概念そのものに内包される困難に行き当って大きく中断され、そのために、そもそも〈影像〉や〈似像〉というものの存在が論理的不透明なしに許容できるかどうかということが、パルメニデスの根本命題との対決によって、対話篇の大半をついやして正面から考察されているという事実は、何を意味しているであろうか。疑いもなくそれは、この対話篇が、たとえば『国家』の「線分」や「洞窟」の比喩におけるイデア論的形而上学の解明の基盤そのものであった原範型—似像という関係のロゴス的根拠をあらためて問いかつ確認することを、まさに中心課題として据えていることを示すであろう。

＊『ティマイオス』および『クリティアス』が本篇や『ポリティコス(政治家)』の後に書かれたプラトンの後期著作であることは疑えない。古代ギリシア以来(cf. Plutarchos, *Solon*, 32)のこの見方に対して、プラトンの文体研究が確立される以前、主としてドイツの学者たち(D. Peipers, 1883 ; Teichmüller, 1881-1884 ; Susemihl, 1884 など)が、プラトン哲学に対する各人の主観的解釈にもとづいて、『ティマイオス』を本篇よりも前の比較的早い時期に位置づけた一時期があったが、文体統計学的研究は、古代以来の見方の正しさをふたたび客観的に確立した。一九五三年になってＧ・Ｅ・Ｌ・オゥエン(The Place of the *Timaeus* in Plato's Dialogues, *Class*, *Quart*., n. s. 3)は十九世紀のドイツの学者の風潮を復活させて、『ティマイオス』(および『クリティアス』)を『パルメニデス』以前の著作であると論じた。彼の論文は、問題提起としてすぐれた着眼点をいくつか含んでいるが、しかし事柄自体については彼の主張は所詮無理であろう。オゥエンの提出した諸論点は、文体に関する面と思想内容の面の両方からＨ・チャーニスの前掲論文(The Relation of the *Timaeus* to Plato's Later Dialogues, 1957)によって拒けられ、その後オゥエンからの正式な再反論はない。cf. W. G. Runciman, Plato's Parmenides, in Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, p. 152 ('Most of Owen's arguments have been very strongly disputed by Professor Cherniss' etc.)

そもそも〈影像〉といい〈似像〉というのは何のことなのか。この問に対して、「水や鏡にうつった像、さらにまた絵に描かれた像や彫刻につくられた像、その他すべてこれに類するもの」(239D)と答えることは、もはや『国家』の「線分」の比喩におけるようには(cf. 510A)、また同じく『国家』第一〇巻のイデア論によるミーメーシス批判におけるようには(cf. 596D sqq.)、ここでは許されていない。当面の相手であるソフィストは、「自分は鏡も水も知らないし、またそもそも見るということさえも知らない」といったふりをして、「純粋の推論(ロゴス)の結果得られるものだけを要求」(240A)してくるからである。

テアイテトスがこれに対して答えた、〈影像〉ないし〈似像〉とは「真実のものに似せられた別のそのようなもの」である、という定義(同箇所)は、「別のそのようなもの」(ἕτερον τοιοῦτον)という言い方が「ほんとうにあるのではない」ということを含意することを指摘されて、困難に追いこまれた。〈似像〉ないし〈影像〉という概念の中には、

「それは、ほんとうにあるものではないけれども、われわれが似像と呼ぶものでほんとうにあるのだ」という「まことに奇妙な」仕方で、〈あらぬ（ない）もの〉と〈あるもの〉とが絡み合わされているということが注意される。「真実のものに似せられた別のそのようなもの」という、この〈似像〉ないし〈影像〉の規定の言葉そのものの意味がさらに充分な解明を与えられるのは、『ティマイオス』（48E～52B, esp. 52A～D）を待たなければならない。『ソピステス』はその前にむしろ、〈似像〉〈影像〉概念の中に含まれる右のような〈ある〉と〈あらぬ〉の絡み合いにあくまで注目しながら、〈似像〉や〈影像〉であることの資格をさらに根底から洗い直そうとする。すなわち、ここで、

「われわれは自衛のためにどうしても、父なるパルメニデスの言説を吟味にかけて、〈あらぬもの〉（非有）が何らかの点であること、他方逆に〈あるもの〉（有）が何らかの仕方であらぬということを、力ずくででも立証しなければならないことになるだろう」（241D）

ということが予告されたのち、まず〈あるもの〉（有、実在）についての諸見解の検討を手始めに、対話はこの「危険多き議論」（242B）の中に突入して行くのである。

まことに、プラトンが中期著作におけるイデア論の確立から必然的に導かれる帰結として、たとえば『国家』第五巻（475E sqq.）において、われわれが感覚と経験により直接関わる事物を、一方における〈完全にあるもの〉（477A）〈純粋にあるもの〉（478D）と、他方における〈まったくあらぬもの〉（477A）〈完全にあらぬもの〉（478D）との中間者と規定して以来、プラトンのイデア論は、いつかはこのパルメニデスの根本命題と対決しなければならない宿命のもとにあったといえる。「あるものは（どこまでも）あり、あらぬものは（あくまでも）あらぬ」という厳格な裁断の上に立つパルメニデスの哲学によるかぎり、いかなる意味においてもその中間的なものは許容されず、完全な〈ある〉に少しでも欠けるものは、まったくの虚妄として否定し去られなければならないからである。事実、われわれの住むこの感覚と経験の世界は、そのような全き虚妄と宣告された（Fr. 8）。われわれは、このように世界観全般

に関わる問題として、いつかは行なわれなければならなかったパルメニデスの根本命題の正式な吟味、批判ということが、まさにこの『ソピステス』において、〈似像〉が〈似像〉としてあることの最も基本的なロゴス的根拠を救うためにこそ、果されていることに注目しなければならない。そしてそれは、「分けもつ」という言葉によるイデアと感覚物との関係の記述が、当のパルメニデスを主役とする『パルメニデス』篇において批判的設問を集中された後を承け、またその「分けもつ」の主語に対応する感覚的個物の資格が徹底的に再審査された後を承けて、登場人物としての同じエレア派の哲学者の主導のもとに、なされたことであった。

問題の「〈あらぬもの〉が或る意味ではある」ということの立証は、先にも見られたように、ほかならぬイデア相互間の結合関係の調査にもとづいて行なわれている。このようにして、『ソピステス』のなかでは、『パルメニデス』で課題として示された先の(1)―(1′)―(2)の問題が、上述のような意味を担った物体主義者と形相主義者との対置や、このイデア相互間の結合関係の吟味や、虚偽の言表と判断(すなわち、あらぬものを語り考えること)等々の論題のかたちで、互いに密接に連関し合いながらその考察を進められ、そして全体は、パルメニデスの根本命題との対決という、イデア論成立以来の宿題であったことを大きく取りこみながら、〈似像〉概念の根拠づけの作業のなかに包括されているのである。

こうした一連の事実はまた、先にも示唆されたように、本篇でその結合関係が調査されている〈類〉〈形相〉〈イデア〉が、感覚的事象をその似像とする原範型(パラデイグマ)としてのイデアであることを、あらためてわれわれに告げるものである。これをたんなる普遍概念とみなし、その結合関係をたんなる「述語づけ」や class-inclusion の問題と見るときに実際のテクストの解釈において行き当らざるをえないさまざまの困難は、そのことを間接的に裏づけているといえよう。*

* この点の注意ぶかい指摘は、ブラックの注釈書(cf. pp. 113, 122 n, 131, 142, 148 sqq., 160)のすぐれた点である。ただし

ブラック自身は、イデアがパラデイグマとしての機能と普遍概念としての機能とを併せもっているとみなす。

そしてまた、そのようなものとしてのイデア界における結合・非結合の関係構造は、直ちに、この自然・万有のあり方とそれについての理論にひびくものと考えられていること(252A～B)を知らなければならない。一般に、「もろもろの〈類〉に従って分割する」能力をもつ哲学者(ディアレクティケーの知識を有する者)は、イデア界の関係構造を見てとることのできる者であるが、このイデア界の構造を明確に把握するということは、とりもなおさず、「いかにしてそれぞれのものが関係をもち合うことができるか、またいかにしてできないかを、〈類〉に則して識別することを知っているということにほかならない」(253D～E)と言われている。この「それぞれのもの」(ἕκαστα)というのが、その前の文章全体を通じて〈イデア〉(ἰδέα)という女性名詞によって表わされていたものと区別されなければならない「個物」を表わすとするならば、この文章は、イデア界の関係構造のあり方が感覚的事象のあり方の根拠になっていること、後者を誤たずに把握するためには、前者のあり方への認識がなければならぬことを示していると解される。このことは、やはり、イデアと感覚的事象との関係が、原範型と似像との関係としてみなされてこそ、最もよく理解できるであろう。*

* ブラック(p. 131)および253Eに対する注1参照。

このようなイデア界の構造と感覚的事象におけるあり方との関係は、言表(ロゴス)が「〈形相〉相互の組合せにもとづいて成立する」(259E)ことが確認されたのち、その言表における真偽の問題の考察が、まったく何の断わりもなしに、いわゆる普遍ならぬ「個物」(テアイテトス)についての言表を例として行なわれていることによって、さらに確かめられる。そして、そのような個物についての言表における虚偽の規定——テアイテトスについて「じっさいにあるのとは異なっているところの、あるものを語っている」ということ——は、先に行なわれた〈類〉〈形相〉〈イデア〉の結合関係についての考察結果によって、根拠づけられている(263B)のである。事実また、この虚偽の

規定で言われていることは、右に触れた箇所でディアレクティケーの知識に属する事柄として語られていた、「同じ〈形相〉を異なった〈形相〉と考えたり、異なった〈形相〉を同じ〈形相〉と考えたりしないこと」(253D)という言葉と、明らかに連絡し合っている。

この「解説」は、言表や判断における真と偽の問題が以上のような観点から、さらに詳しくはどのように理解されなければならないか、またプラトンが以上のような意味でのイデア論のなかで、とくに否定の陳述——いわゆるnegative predication——をいかに取り扱っているか、といった点に立ち入って論じる予定であった。しかしいまは、最初に言ったように、プラトンがそれらの問題を含めてさまざまの多岐にわたる論題を取り上げながら、本篇全体を通じて解明を意図した最も基本的な課題は何であったかということを、大局的な視野からできるだけ見とどけたところで終えることにしたい。それが最も肝心な点であると同時に、論者たちの意見が最も大きく分かれている点であるのが実情であって、個々の論題についての議論も、この基本見解のいかんによって甚だしく左右されているのが見られるからである。

主な使用文献(訳本文の注、解説、補注において書名なしに著者名だけで言及されるもの)

G. Stallbaum, *Platonis opera omnia*, vol. VIII, sect. II, Gothae, 1940.
L. Campbell, *The Sophistes and Politicus of Plato*, Oxford, 1867.
O. Apelt, *Platon Sophistes* (2 Auflage), Leipzig, 1922.
A. Diès, *Platon Œuvres Complètes*, Tome VIII, 3 Partie, *Le Sophiste*, Paris, 1925.
F. M. Cornford, *Plato's Theory of Knowledge*, London, 1935.

A. E. Taylor, *The Sophist and the Statesman*, London, 1961.

R. S. Bluck, *Plato's Sophist*, Manchester, 1975.

『ポリティコス(政治家)』解説

水野有庸

登場人物

ソクラテス(Socrates)　『テアイテトス』および『ソピステス』における者とまったく同じ。本篇では、最初の導入部で四回発言する以外は、最後まで沈黙の同席者である。ただ、本篇最後の言葉はこのソクラテスが述べたものであると主張する学者もある。この主張については、311C注1を参照。

テオドロス(Theodoros)　『テアイテトス』および『ソピステス』における者とまったく同じ。ソクラテスと同様に、本篇では最初の導入部で五回発言する以外は、最後まで沈黙の同席者。266Aには、この者を意識しているらしい内容の、中心的対話者による発言がみられる。同箇所への注1を参照。

エレアからの客人　『ソピステス』における者とまったく同じ。同篇冒頭における会話によって紹介されているとおり神のごとく偉大な哲学者。もちろん、この客人は、ほぼ全面的にプラトン自身の代弁者であるとしてプラトンが設定した者と見なされうる。本篇の258B sqq. では、その哲学的問答を推進する唯一の指導的主役者である。

若いソクラテス　本篇の対話設定年代の前以来、その後長年にわたりプラトンの学園アカデメイアにおける熱心な学徒であったかとも想像されよう。本篇の258B sqq. の対話は、エレアからの客人が展開する難解な論究をほとんどつねに深く理解して、そのつど適切な返答や質問や承認の言葉を返すことにより、この大考究全体の完結のために可能なかぎりの大きな貢献をはたす唯一の返答者であるが、この時点ではこの者がまだ稚気の抜けぬ若者であったことは、265A, 268E, 283Bなどの箇所からも明らかである。しかもこの若者は、客人の表現が普通以上に難解なときには自分の無理解を正直に告白してい

るところが、いかにもすがすがしい(280B, 286B, 306A, Dなど)。またこの若者の返答は、かならずしもつねに短い言葉なのではなくて、ときに的確きわまる指摘を含む比較的長い言葉を雄弁に述べるものでもあって(292E, 299A～B, E, 303Cなど)、そういう言葉を通じてこの若者のいかにも聡明闊達なところがうかがわれうる。この若者は、この対話篇に登場した時点の約四〇年後にあたる前三六〇年ころに書かれたらしい「第十一書簡」358Dでは、プラトンの代理としてエーゲ海北部のタソス島へ、植民都市建設のためにほんらいならおもむくはずの人物ではあるが、病気のためにその旅行の不可能なことが述べられているので、五十数歳になっても依然として政治的関心の強い人物であったかと想像される。なお、この若者はその青少年期に数学上の重要問題についてテアイテトスと議論したことのある者として、『テアイテトス』147Dで、その名を挙げて言及されている。『ソピステス』218Bにもこの者の名が見られる。

(なお、正式の登場人物としては、右記の四名のみを数えるのが一般のならわしであるが、じつは、このほかに、すくなくとも青年テアイテトスが本篇の対話を黙って聞いていたことが、本篇の257C, 258A, 266Aにおける言葉から見て、明らかである。言うまでもなく、このテアイテトスは、『テアイテトス』と『ソピステス』とにおいての哲学的問答の主要返答者として活躍した人物である。)

本篇の対話設定年代

『ソピステス』の時点と同じ。すなわち、前三九九年。詳しくは『ソピステス』の解説参照。そして、『ソピステス』で主要返答者として大活躍したテアイテトスをしばらく休息させよう、という本篇257Cにおける客人の提案からも理解されるように、『ソピステス』の対話がおこなわれた日とたぶん同じ日のこの対話終了後の暫時ののちに、本篇の対話の全部がおこなわれたことになっている。

本篇の執筆年代

まず(i)、本篇が『ソピステス』の執筆完成を前提していることは、本篇の257A～258B, 266D, 284B～C, 286B, 303C,

311Cなどの言葉がまさにこの点を直接間接に示唆しているゆえ、明らかである。またつぎに(ii)、文体論の見地から見られるとき、本篇と『ソピステス』とが母音連続(hiatus)を避けようとする傾向の顕著であるという特色などにおいて、本篇と『ソピステス』とが文体上非常に類似しているとともに、この両篇がプラトン後期作品のうちの『法律』以前に書かれた重要な二著作であるという点、この点をプラトン全著作にかんする言語統計学的研究が発見して、この点をプラトン著作活動の時間的前後関係についての一常識としてさえ確立した以上、われわれもこの常識に従い、本篇と『ソピステス』との執筆時期が、すくなくとも『国家』や『テアイテトス』よりも以後であるとともに『法律』以前である、と断定することだけは許される。そして以上の(i)と(ii)との二点以外のすべては、それらについてのプラトン諸学者間の意見が不一致なことのみであり、臆測の域を出ないことのみであるから、この解説の筆者もP・ショーリーと類似した態度で解釈し、本篇の執筆時期については、いまの(i)と(ii)との二点のみを確実視して、「これ以上の決定が必要であるなどと断言することは真理の独断的な確定を強行することにほかならない」と主張するにとどめることとする(Paul Shorey, *The Unity of Plato's Thought*, p. 3参照)。またE・バーカーも、本篇執筆時期にかんする確実な真理の「発見を望むことは不可能に近い」と述べている(本解説末尾記載のバーカーの著作三一四ページ参照)。

ゆえにまた、プラトンが第三回シケリア旅行から帰国した前三六〇年以前に本篇が書かれたか、逆にその旅行以後に書かれたか、そのどちらが真実であるかについても、筆者は不問に付することにする。この旅行をはじめとするプラトンのシケリア問題への政治的介入の事実と本篇の内容の意味との関係にかんする筆者の見解については、この解説の**六**を参照。——ただ、ほぼ正しそうな推定をやや大胆に述べることにすれば、本篇は前四二七年生誕のプラトンが六十数歳になったころに(つまり前三六〇年代に)執筆された作品であると言えるかもしれない。

なお、本篇がプラトンの偽作ではなくて最重要な真作群の一つであることは、現代においては、奇異な新説ないし迷説のたぐいの主張するところを除けば、まったく疑う余地なき定説である。

一

その若き日に、劇詩人たることをと同時に、その高貴な家系と稟質とのゆえにか、ソクラテスの薫陶をうけなかったとしたら、政治家としての輝かしい人生行路を歩むことを夢みていたプラトンにとって、愛知の重大な意味にめざめて、真理探究者として未踏の新領域における深遠にして不滅な著作のかずかずを発表しつつ六十数歳の高齢に達したのちにおいても、その若き日の夢の強烈な一角をしめるものでありながらみずからはそれになることを断念したあの政治家というものの真姿の全貌に、こんどは哲学の視点からあらたな光線を投じて、これを白日のもとに明示しようとする知的作業は、たぶん、すくなくともかれの壮年期以来の至上の課題のひとつとして意識されていたことと思われる。けれども、およそなにごともそのきっかけを必要とする。すでに政治論上の一大作『国家』を書きあげたあとにおいても、「政治家」という一見自明に近い現実活動体のものでありながら、その真姿の規定への意志を強めれば強めるほどその不可解度を高くするようなこのしろものを真に哲学的に明確化するための大作業にとりくむためには、いってみれば、その時が熟さなければならなかった。そのものについて著作するにふさわしい状況があらかじめつくられていなければならなかった。すくなくとも、そうなっているほうが望ましかったはずである。政治家について本格的に論じうるためにふさわしいこの状況、これは、プラトンが『ソピステス』を完成したという時間的に直前の既成事実であった。そう解するのが、まず穏当であろう。

すなわち『ソピステス』の冒頭部に明言されているとおり、真の哲学者は、ときにソフィストのようにみえ、ときにはまた政治家のようにもみえるものであるから、ソフィストと政治家と哲学者とは順次にその姿を解明されていって、三者の区別を真に明確にする必要が、『ソピステス』執筆の時点でプラトンにあらためて痛感されていたのである(『ソピステス』216C～217A)。この三部類の者の相互間の深い関連は、『ポリティコス(政治家)』のやは

り冒頭部の257A～Cにおいても、適切な言葉によってくりかえし述べられているのである。

かくして、時はいまや熟した。エレアからの客人、疲れを知らぬこの哲学の巨匠は、ソフィストの真姿を描きあげたうえ、たぶんその同日に、たぶん僅少の休憩ののち息もつかせず、その対話法による論究の相手たるべき優秀な青年のほうだけをテアイテトスから若いソクラテスへと取りかえて、みずから主導しつつ言論のみによるこんどは政治家の描出に着手する。そしてその論考の途中でソフィストの最終的排除にも成功する(303C～D)。

二

まず、本篇の内容の全体は、一見したところとはじつは異り、無駄の極度にすくない、内的統一性が高度な、緊密に一体化された作品である。けれども本篇は、これをひとつの山岳にたとえれば、その頂上附近の真の登攀(とうはん)部に比してその裾野のほうの部分が相当に長い作品である。この裾野の部分つまり序説部(Ⅰ)は本篇の初めから全篇の五分の三近くまで続いて、ようやく287Aから、本篇の圧巻とも言うべき哲人王の活動法や、法律の必要性の意味や、種々の政体の比較などを含む、まことに印象強烈な叙述が徐々に始まるのであるが(Ⅱ)、このⅡの部分がまた、その最初のところに(287A～292A)国家とその統治とに関係しつつも真の意味の政治家自体とは峻別されるべき諸事項についての論考を含んでいる(以下三のⅡの(1)(2)(3)の箇所)。ゆえに、本篇のまさしく本領をなす部分は292B～311Cの部分(Ⅱ(4)以下)、すなわち本篇末尾の約三六パーセントの部分であるとみることができよう。

――なお、序説部(Ⅰ)の最後は、それに先行する二種類の測定術についての論究をうけて、この測定術と関係づけながら(285A)、対話法にかんするかなり詳細な説明が一種の挿話的脱線として付加されているけれども(Ⅰ(7)の箇所)、この脱線部がけっして無意味な逸脱などではないことは、本稿がやがて多面的に解説するであろう。

三

そこで、かくのごとき多面的解説をおこなうためには、その解説の前提的素材となる本篇の論旨そのものの要点を、あらかじめやや詳細に順次述べておく必要がある。本篇の、ゆえにやや長い**梗概**は、以下のとおりである。なお、この**三**での〔　〕は本稿の筆者による補足的指摘部である。

I　序説部

(1)導入部としての会話――257A～258A――。ソクラテスとテオドロスとのあいだの機知に富む応酬に続き、エレアからの客人が求めに応じて、若いソクラテスを単独返答者としながら『ソピステス』に続くべき論究にとりくむことに決定する。

(2)比較的稚拙な二分割法による政治家の定義の一応の試み――258B～268D――。政治家は知識を持つ者の一種であるとの根本的大前提を承認のうえ、王者ないし政治家の持つべき知識とは、純知的知識のうち、命令の最高決定の知識ないし技術のうち、人間なる二足獣の動物群(つまり人間集団)を牧養ないし飼育する知識ないし技術である、という定義が、極度に緻密な論考課程を経て結論される(267Cまで)。ところが静かに考えると、人間集団を牧養飼育する技術なら、これはけっして王者ないし政治家のみの占有技術ではなく、他にも多数の部類の連中(267E)がこの種の技術の所有者と自称しうるゆえに、いま得られた定義は失敗であると確認される。[1] なおこの箇所で、本篇での主要用語たる王者にふさわしい人や政治家などの意味の概要が示される。

(3)神話の物語(ミュートス)＝一種の壮大な宇宙論――268D～274E――。当時のギリシアに残存していた断片的諸伝説の綜合により雄大な神話を復元して、宇宙の巨大な周期が二種類あることを客人は詳論する。一方

は神クロノスが宇宙周行を直接に主導する理想の平和な時代。この神政の時代には万事が神と諸神霊との善き配意により完璧に整えられていたので、不幸は皆無であり、政治なる営為も完全に不要であった。しかるにこの理想境終焉後の宇宙の他方の周期、つまり神ゼウスの時代と呼ばれる現在の宇宙周期では、神が宇宙を放置しているゆえに、宇宙の物質性に淵源する悪と病弊が宇宙に充満し、人類も不幸苛酷な境遇中に呻吟するにいたる。

(4)以上の論考全体への反省と、別の新定義の試み――274E～277A――。直前の長大な宇宙神話での人間集団の善き牧者たる神という高次元存在を現代の現実での政治家と混同するは不可。この混同を犯すと、政治家特有の活動方式はついに理解されえないからである。ここでの要点は政治家がたんに人間にすぎぬ事実の再認定である。また、さきに政治技術を動物群飼育術と規定したために、政治家たることを自称する多数の競合者が出現したのだから、飼育術なる名称を捨てて動物群世話術こそ政治技術なりと訂正すべきである。その訂正のうえで、世話が強圧的か否かにより専制僭主と王者(つまり真の政治家)とを区別すれば、政治技術の本質規定は得られたと考えられそうであるが、ほんとうはこれではまだきわめて不十分な規定が得られたにすぎないことが示される。

(5)類例というものの意味規定――277A～279A――。王者ないし政治家の真姿というきわめて理解困難なもの〔それはじつは政治家のイデア的理想体である〕を完全に理解するには、この研究対象と類似した機能を持つ卑近些細で理解容易な別個のしかるべき事象を類例に選び、この類例を深く注視する必要がある。この必要性が、字母の学習課程なるものの論理と心理とをあらたに分析してみることにより発見される。

(6)機織り術の定義――279A～283A――。

(a)279A～C――。政治技術なる高遠な対象の理解のための卑近な類例として、羊毛製の織物を作る機織り術

を選んでみることが同意される。

(b)279C~280E——。人間の日常生活の必要を満たす物品全体の連続的な二分割により、着物製作術ないし機織り術が一応定義される。

(c)281A~282A——。しかるに機織り術と関連諸技術との関係をさらに認識すべきである。まず、本来の機織り術から区別されるべきは、とくに、毛梳き術などをはじめとする解きほぐす技術。この技術類は機織り術の中心作業自体ではないがこの中心的技術に絶対不可欠のものとされ、この一群に属する諸技術が確認されていく。この確認・区別された一群の諸技術に加えて、機織り術に奉仕してこれに各種の道具類を調達する諸技術が加えられ、この全体を客人は補助原因と呼んで(281C~E)、これが、糸を織り合わせる本来の機織り術の諸部門をその内容とする直接的な原因(281D~E)たるべき諸技術から峻別される。

(d)282B~283A——。この後者、つまり羊毛紡績術の全体が、分離する技術と結合する技術とに二分割されるべきこと、結合する技術の一種が機織り術たること、糸を堅く結合する縦糸紡績術と糸を緩く結合する横糸紡績術とが区別されるべきこと、この縦糸と横糸とを均一に織り合わせる技術こそがまさに機織り術たること、以上が順次示される。

(7)測定術の二種類と対話法。これらの必要性——283B~287B——。

(a)283B~285C——。この機織り術の説明とさきの宇宙論とが長すぎて対話者自身が多少自己嫌悪を覚えたことの反省として、万事の限度を考えておく必要から、大と小とのたんなる相互比較のみをなす平凡な測定術とはべつに、適正な限度や中庸に準拠しつつ各事象の大きすぎや小さすぎを判定しうる〔哲学的で高級な〕測定術が存立すべきこと、そして後者の測定術の適用によってのみ、万事万人の優劣を判定しうる真の技術や知識が存立しうることが確証される。〔適正や中庸こそ善の条件たる理念的なものであるから、この論考

はやがて始まるイデア論的論究と見られうるものへの序章のごときものとも考えられる。〕
(b)285A～287A(直前の(a)と部分的に重複する)――。あの機織り術の定義もやがて始まる政治家ないし王者の定義も、たんに当の特殊対象のみの理解を目ざすものではなく、その諸論究は対話法全般に通暁することを目ざしていることが宣明される。そして対話法こそが、測定術との緊密協力により、測定術万能主義の欠陥を補足しつつ完全な哲学を樹立しうること(285A～B, 286D～287A)が宣言される。逆に言えば、超感覚的真実在〔政治家のイデア的理想体など〕をいつまでも無視していてはならない(285E～286A)。

Ⅱ　本論

(1)政治技術と国家との成立条件としての補助原因類――287B～290C――。機織り術の構造を類例として国事成立のための補助原因類が提示される。それはつぎの二種に大別される。
(a)287B～289C――。国家の持つべき所有物七種類が列挙される。〔このさいの分類法は二分割法ではなく、多数物への分割法であることに注意。〕さらにこの分類の網に洩れた若干の物品が軽く言及されるが(289B～C)、そこに、前記Ⅰ(2)の箇所で詳論された動物群飼育術の国家内での真の位置づけなどもみられる。
(b)289C～290C――。つぎは人間類。まず奴隷や召使各種。さらに日雇い労働者や小売商人や貿易商人など。これらの人々のうちには、本格的な意味で自分らが真の政治家ないし王者たることを僭称する者はいないから、これらの除外による考察進展の正当性が指摘される。
(2)国家構成者のうち、自己を政治家なりと僭称する恐れのある要注意の人間類――(289Cにその伏線的表明があるが、一応)290C～291C――。政府の下級吏員、神意をきく予言者、その風采の輝きが荘厳な神官などはこの種の要注意人物であるが、しかし祭政一致の外国エジプトなどを別とすれば、これらは真の王者や政治家で

はありえない。また過去の制度での高位のなごりをその「バシレウス(王)」という称号にとどめているのみのアテナイの高官も同様である。――ところが以上のほぼ同列者たる恐るべき者として、諸怪獣同然の性格をやどすソフィストらがいる。とくにこれらにたいして最大の警戒心が必要であり、これらを真の政治家と混同しないことがきわめて重要。

(3)諸政体の予備的分類――291D～292A――。客人はここで突如として、単独支配者政体二種、少数者による統治体制二種、多数者による支配体制一種の計五種の支配形態が現存する事実を暫定的に導入して〔これは予備考察終了後ゆえに、不自然な導入ではない〕、支配者や政体の真なるものが持つべき資格の判定考察のための用意をする。

(4)知識ないし技術のみを自由自在に発揮し、善のみを目ざしつつ活躍する真の政治家ないし王者の雄姿の、力感にあふれた最初の描写――292B～297B――

(a)292B～293E――。右記五種の政体のどれが正当な政体であるかを判定するための基準は、支配者の人数の如何(いかん)でもなく、支配者の貧富でもなく、支配者が強圧手段を行使するか否かでもなく、本篇初頭(I(2))で前提されたとおり、国家統治のひとえに知識ないし技術を支配者が持っているか否かの一点たることがまず強調される。そして総じて高級な知識・技術の完全所有は多数者には不可能な以上、正当な政治権力の座は一人またはきわめて少数の知者のみにより占められるべきことが示される。〔(立憲)君主政体が地上では最上の政体なり、との後出の見地もこの洞見にもとづく。〕ゆえに、まさにこの知者たる真の王者〔つまり哲人王〕や真の政治家の統治とは、その王者が国民の自由意志による服従の有無をも、成文法や慣習をも顧慮せず、自己の持つ真の意味での知識・技術のみを自由に駆使して、配下の全国民の善ないし利益をのみ熱望しつつ〔ゆえにいかなる私心をも抱かず〕おこなう統治のことである。ゆえにまた、かかる王者は国家の病変

改善と健全維持とのためには、真の知識を基礎とする処置であるかぎり、一見極端な内政処置をさえ取ることを許される。王者のこの活動方法の意味は、医者の真に医者たりうる資格が外的諸条件にはなく、ひとえに知性的な医療知識技術のみに存する事実からも理解できる。

（b）293E～296A――。続いて、法律や慣習に依拠しない柔軟自由な哲人王の統治の特色と、この自由の逆体たる法律の本質的劣等性ないし限界性とが、さらに逆に立法の必要なることの諸理由の一つの表明とともに述べられる。――まず若いソクラテスが法律を用いない統治なるものの可能なることの理由の説明を〔常識の立場から〕求めたことに答えて客人は、国家社会を構成する各個人間のほとんど無限数の相違点と、個人および社会集団の不断の流動・変動とこそが厳然たる事実であるゆえ、常時最善の方策を個人と社会とに授けることの不可能性を、かくのごとき社会学的根本認識の基盤に立ってまず説明する。ゆえにまた、単純不変な公式類にすぎぬ法律は、右記の本質のものたる個人と社会とのためには完全無欠な実効性を絶対に持ちえず、法律はたんに国民大多数にだいたいのばあいに適用可能の大ざっぱな公式にすぎぬとも判定される。この指摘は同時にまた、大ざっぱな公式たる法律が、集団たるかぎりの国家にとって或る限られた必要性を持つとの積極的主張にもなっている。また祖先伝来の慣習も法律と同一の実効性のみを持つ。――ゆえに法律は、これを無限に凌駕するものたる知識や技術の常時活用者なる王者が自国内に不在であるようなばあいなどにおいて直接的統治活動をなしえぬときにのみ、暫定的覚え書きとして効力を持つものであるにすぎない。ゆえにまた真の政治家は法律の桎梏で拘束されることなく、国家社会の変動に柔軟に対処し、そのつど知識・技術のみを活用して臨機応変の立法をなす。この種の真の政治家を国外から迎えるときも、その善き助言を仰いで法律をより善きものへ改変するのも推奨に値する処置である。〔プラトンがシケリア島の中心都市シュラクサイのために同種の助言をなした事実は『書簡集』が伝えるとおり。〕真の医者も患者の容態

に応じて処方の柔軟な変更をなすものたることが、王者の柔軟性の正当を示す例証とされている。

(c)296A～297B――。善のために知識・技術のみを用いる政治家は、国家社会の不良状態たるその病変の改善のためなら、或る強制的暴力をも揮うべきである。もちろんこの暴力主義は、改善のための立法にさいしては前もって当の国家をかならず説得すべし、との一般の穏健な常識に正面衝突する。この見地の表明を始める客人の語調にさえも躊躇(ちゅうちょ)と昂奮との混合の色がみえる(296B)。しかし客人は断乎として述べる。法律違反へと国民が強制されても、国民が改善されていれば、国民はこの暴力的政治家から自分が不正を受けたとだけは称しえないと。これは、真の医者が患者を説得せず医学教則書を無視して以前よりも善き医療を患者にたいして暴力的に強制したさいにも、非技術的処置を受けたとだけは患者は非難しえないのと同じ。船と水夫を知性的航海技術のみの発揮により支配する船長のばあいとも同じ。

(5)唯一の正当な政体(〔イデア的〕理想政体としての政体)の強い是認と同時に表明された、法治主義もまた必要なりとの見地――297B～E――。この理想的支配者治下の唯一の国家政体以外の全政体はこの理想政体の模写にすぎないが、模写によるこれらの諸政体を肯定的に存置させるべく次善の方策を選ぶことにすれば、極度に厳重な法治主義の立場のみが正しい、と客人は述べて、法律や法治の諸問題の論考を開始する。

(6)極端な民主主義的法治国の必要とその不幸――297E～299E――。

(a)297E～298B――。まず、強力な技術を持っている医者や船長が〔哲人王のように善を目ざすかぎり、万事は理想的だが〕、ひとたび私利私心に駆られるなら、患者や同船者の蒙る害悪は言語に絶するにいたる。〔ゆえに国家でも、有能政治家の私利私欲から国民を守るために法律が必要となる。社会病弊を癒(いや)す知性の柔軟性と同等に国民の安全性も不可欠。〕

(b)298C～299E――。かくて、知性の自由を誤解した知識・技術の万能主義に立つかぎり、絶大な被害を政

治技術者から国民がこうむる恐れがある以上、知識・技術の自由を否定すべき法律が徹底的な猛威を揮うような国家を作ってみる必要がある。その結果、専門的有識技術者は法律により全部が活動を厳禁される。そして医術や航海術などの全規則は、これを非専門家たる素人の群集が集会の決議によって定め、つまり民主主義的に法律を制定し、これを不磨の大典として銘記して永久不動に存続させ、これを効力不変の慣習法として固定する。かくしてこの民主主義の制定した法律に違反する医療や船舶操舵をなした者は、法廷尋問のうえ厳罰を受けることとする。また分野の如何を問わず学問的新研究への没頭者には民主主義的法治国アテナイがソクラテスに加えたと同じ罪状を帰してこれを告発し極刑に処する。かくて全新研究を禁じるこの法律が全技術を根絶するにいたる。同時にここでは全人生も窒息してしまう。〔ゆえに立法は民主主義的に群集がなすべきでないことが、鮮やかに暗示される。いな、すでに294Aや295Eの末尾などの箇所が立法は哲人王のなすべき仕事たることを簡単にながら述べていたのである。〕

(7)法律と哲人王との共同活動——300A～E——。ゆえに立法にかんする有識者たる真の政治家が善意のかぎりをつくして真理を写し表わしつつ多数の試行錯誤をへて立てた法律なら、また時宜に応じて修正されるべく立てた法律なら、これは可能なかぎりの真理の成文化なるゆえ、いかなる点でも違反されるべからざるものとして遵奉されるべきである。このときにのみ政治理想は、地上で可能な限度にではあるが、かろうじて実現されうると言えるかもしれない。ところが必要な知識を欠く立法者が哲人王を模倣して成文法に違反することは、民主主義的法治以上の悪として非難されるべきである。

(8)哲人王治下の政体以外の不完全諸政体——300E～303D——。

(a)300E～301C(三九章末まで)——。〔地上の歴史に出現する諸政体は前記II(3)で列挙された諸種であるが、哲人王出現をそこに望むことは現実的には不可能に近いゆえ、これらが多少とも善き政体たりうるため

には、これらが哲人王治下の理想政体を写し表わすい以外に手段はない。具体的には、真の正義の写し表わしにより成文化された法律や不文律たる慣習を遵奉する以外にこれらが善き政体となる手段はない。」そこで、法律の部類を遵奉しているか否か、または哲人王の持つ知識に近い知識を持ちうるか否か、という点を基準として地上の諸政体をその名称とともに列挙すれば、まず法律遵奉的な単独支配者政体〔つまり立憲君主政体〕と、無知で利欲的な単独支配者政体（つまり専制僭主政体）とが一対の両極をなす。つぎに少数支配者の政体では、支配者が富裕である上流者支配政体と、法律無視的な少数者専制政体とが一対の両極をなす。しかるに原文のこの部分では、客人は民主政体については、民衆全体が政治知識を習得しえぬことと（300E）、法規や慣習に違反するは不可なることと（301A）のみを述べているにすぎない。

（b）301C～302B（四〇章全部）――。このように現実に出現する諸政体の無数の国家は、まったくの例外以外はすべて、哲人王の支配下にはなく、法律や慣習という脆弱（ぜいじゃく）きわまるものの基礎上にあるにすぎない。まさにこれが、現実の歴史のほとんど大部分は諸国家沈没の連続のみから成るという事実を招いている原因である。しかるに哲人王は自然発生もせず、またかりに発生せんとしても、技術に依拠せるその権力強大のゆえ、万人はこの発生を危険現象とみて恐れている。ゆえに、その基礎の脆弱な技術製品のばあいと同様に、地上の諸国家の沈没はほとんど不可避的である。

（c）302B～303B――。前記Ⅱ（8）（a）で列挙された全諸政体は、そこで暮らす国民を多かれ少なかれ不幸にする不完全政体ではあるが、しいてその良否の程度を比較すれば――

単独支配者政体は、

法律遵奉的であれば最良の政体であり、

法律軽視的であれば最悪の政体である。

少数者が統治する支配政体は、
法律遵奉的であっても法律軽視的であっても、最良と最悪との中間の価値を持つ。
多数者が統治する支配政体(民主政体)は、
すべての法律遵奉的政体のうちの最劣等の政体であり、
すべての法律軽視的政体のうちの最優良の政体である。
以上六種の政体に比して哲人王治下の第七番の政体は、下界の人類にたいする天界の神に相当する。〔この理想政体は前記I(3)の宇宙神話での神クロノスに似た君臨者としての性格を持つもの。〕
(d)303C～D——。ゆえに六種の不完全政体での全支配者は政治家ではなく、たんなる内紛的党派指導者ないしII(2)で見られた怪獣同然のもっとも大仕掛けなソフィストなりと最終的に結論され、以上の大論究全体にもとづき、真の王者から完全に隔離されるにいたる。
(9)王者ないし真の政治家による、高度に高貴な政治営為の三技術にたいする、最終包括的直接統轄活動——303D～305E——。
(a)303D～E——。こうしてソフィストが端的に代表するにせ政治家の全部が不完全諸政体とともに排除されたあとも、王者の技術の次位にあって貴金属類のように高価値な三種の技術が王者の技術と密着して残っている。これらを王者の技術自体から分離し、王者の技術とこれらとの関係を洞見しなければならない。
(b)303E～304A——。この三技術とは、軍隊統帥法、裁判術、弁論術のことである。
(c)304A～C——。音楽という手頃な営為を例に考えることにより、自身が直接に手をくだして発揮される技術は、それが発揮されるべきか否かを決定しうるような一層高次元の別の技術の支配下に置かれるべきことが発見される。

(d)304C〜E――。まず民衆を巧妙に説得する高貴な技術たる弁論術は、それの発揮の可否を決定しうる政治知識に奉仕すべき下位技術。

(e)304E〜305A――。同じく、いかなる戦略により外国と戦争すべきかを知る特殊能力は、全軍統帥術なる強力技術から生じるが、この技術も、和戦両策のどちらを選ぶべきかを、また開戦講和などの時宜を(305D)真に洞察しうる別の高次元技術たる王者の知識の絶対至高権に奉仕すべき下位技術。

(f)305B〜C――。同じく、中立性を厳重に守りつつ、行為の正と不正との直接的裁定をなす裁判官も、王者に奉仕する下位の者。

(g)305C〜E――。かくて一方、国家の最重要営為を実地に実行する極度に高貴な特殊的政治営為技術三種が確認されるとともに、他方、この三種以上に高次元の知識・技術として、みずからは直接行動を避け、逆に直接行動的な高級三技術を全般的最終的に支配統轄する命令の最高決定の技術(260E, 267Bなども参照)すなわち政治家の持つべき技術が、単身の赤裸々な姿を(304A)われわれの眼前にようやく現わすにいたった。〔しかし政治家ないし王者は類似競合者らの大群からいまついに完全に分離抽出されおえたのみ。ゆえにつぎの最終考察がさらに必要となる。〕

(10)真の王者が絶対至上権力をもっておこなう機織り術的編み合わせ活動――305E〜311C――。

(a)306A〜307D――。王者がなす絶対権力行使を理解するには、この行使が直面すべき頑強な現実の真相をまず認識しておくべきである。この真相とは、二箇の主要美徳たる勇気と慎重との相互に絶対排他的・敵対的なる関係に根ざして人間たちのうえに発現する、相互に絶対敵視的な人間気質間の〔まずは倫理学的な〕対立闘争関係のことである。まず、それぞれ多様な現象形態をとる原質的性格としての勇気と慎重との両美徳は、時宜に応じて人間のうえに発現すれば美事なものとして称賛されるが、逆に時宜に反して発現すれば善

からぬものとして非難される。しかもこの発現形態の二群は自然のままに放置されるなら、絶対に相互混合されることなくただ相互闘争しあうのみであるのが冷厳な現実である。深い憎悪を伴うこの闘争が、まさに現実として前提される。

(b)307D～308B——。この〔倫理学的な〕気質二種間の相互排斥的敵対関係はおのずから、〔政治学が着眼すべき〕重大な帰結を招来する。つまり一方の慎重さに富む人々の国家は他方の勇気に富む人々の行動方式を憎悪して、時宜に反した悪しき慎重のみに走り極端な平和主義をとるにいたる結果、外国からの武力侵略をこうむりかならず滅亡の悲運にあう。他方、過度に勇気を尊ぶ人々のいわば軍国主義国家も必然的に全世界から敵視されるにおよび、ついに敗北し亡国の道をたどる。〔かくて、二つの原質的性格のあいだの敵対関係に根ざす現実の不幸を救いうる者は、混合を拒む本質のものを無理矢理に混合しうる者なるゆえ、神に似た絶大な能力の者たるべきことが予感される。〕

(c)308C～309B——。かくて放置されれば人類相食(あいは)む闘争と国家破滅への道を必然的にたどるにいたる現実、これの救済のための強力無比の技術者たる王者の介入を説くに先立って、客人はこの救済活動の技術性に着眼し、まず作製的な技術・知識一般の本質的一面は、自分の製品製作のために材料の選定をまずおこない、劣悪な材料を除去して優良な材料のみを利用することにある点を指摘する。しかるに政治技術の材料は人間類。ゆえにこの材料選定に完璧を期するには、将来人間となるべきものたる幼児群を選定対象とするのが最合理的。そこでさきに政治技術解明のための類例とされてその所属諸作業間の主従関係を精密に吟味された機織り術において、その中心作業に奉仕協力すべき者のひとつとして毛梳き職人が挙げられたが、この職人に該当する専門職者たる幼児教育者を王者は不断に直接監督鼓舞して、勇気や慎重などの美徳を徳性として具備しうる子供らのみを育成提供せよと命じる。同時に、天性劣悪のゆえにこれらの美徳を具備しえぬ子供

や向上の形跡なき子供ら全部を、王者は死にいたらしめ、追放に処し、あるいは奴隷化して、一掃する。〔優秀な材料のみの使用が技術の特色たることは後の309Eでも再強調される。〕かくて、優秀な子供群のみ残されたので、そのうちの勇気に富む分子を堅く引きしまった縦糸とし、慎重さに富む分子を柔らかな横糸として、両者の編み合わせによる国家組織の構築活動を王者は始める。

(d)309C〜310E――。王者のこの編み合わせ活動は、人間が魂と肉体とから成ることに応じ、国民間に二種類の強固な絆を作って国家社会を一枚の織物に織りあげる活動の形態をとる。まず(309C〜310A)、王者は詩歌の効力を活用して、優秀な男女のみの若者からなる国家の新構成者全員の魂のなかに、諸価値にかんする真理自体に根ざす思わくを共通の強固な信念・思念として植えつけ、人心の統一を完成する。これは霊的な結合具なるゆえ神聖な絆である。この絆の効能により、狂暴性へと向かうはずの勇気に富む人々は温順となり、単純なお人よしとなりはてるはずの慎重さに富む人々は善き意味で思慮深くなる。つまりこの絆は前記(a)と(b)とで見たとおりの絶対的敵対関係にあるはずの二種の気質を精神的に合体させて国家を滅亡から救う妙薬に似る。つぎに(310A〜E)、この絆の完成後、王者は国家材料たる青年群を肉体面からも合体させるため、結婚の国家統制によるたんに人間的な絆をも作りあげる。つまり一般世間の慣行によれば、勇気に富む血統の家庭も、慎重さに富む家庭も、それぞれ自己と同血統の家庭のみと婚姻を結んでいるが、この自然慣行が幾世代も続くならば、勇気の家系も完全に狂暴化して自滅し、慎重さの家系も時宜を常時逸する不能者となり自滅する。ゆえに王者はこの家系二種の頑固な閉鎖性を強権で打破し、絶対敵対的両家系間にこそ相互に新妻を取りかわさせ、両系合体の誓約保証の人質たる役割を敵方から娶られた新妻に課する。この結婚新方式による生殖の続行がたんに人間的な絆を強固に作りあげていく。

(e)311A〜C――。かくて霊肉両面にわたり全国民を完璧に合体させる均一な織り合わせ作業により王者な

いし真の政治家が作りあげる最大規模の幸福な織物たる国家組織体の完成された理想的形姿と、この織りあげ作業をその実質とする王者の理想的統轄支配方式とがいまや全面的に明示されたとして、この対話篇は終結するのであるが――、

ここで注意すべきは、この終結直前の箇所が述べる重要な一点が王者のこの超現実的な偉大さをいやがうえにも増幅して示していることである(311A～B)。すなわちそこで、王者が必要に応じて或る国家には単独支配者つまり王を、他の国家にはその支配者たる集団指導委員会を任命設置してやるべきことが述べられているが、この指摘からも明らかなように、前記Ⅱ(9)で王者として最終的に抽出されたものは、個々の王たちや少数支配者たちにとっての、一段と高位の王なのである。つまり王たちを支配する王が本篇での王者ないし政治家なのである。これこそまさに王者のイデア的理想体にほかならない。

このイデア的なるものは神同然の超現実的に巨大な権力と知識とをそなえて、心ある地上の政治支配者により写し表わされることを望みつつ諸国家の上空を濶歩している理想自体にほかならない。またイデア的理想体としてのこの王者は、それが王者の持つべき知識・技術自体たるかその所持者たるかはべつとして、地上の王たちのように地上における支配の座にはないにもかかわらず、王者にふさわしい人と呼ばれるにもっともふさわしいものにほかならない。この意味での王者にふさわしい人の真姿を言論のみでの論究で完璧に描出しあげることこそ(277B～C)、本篇が出発点での論究のおりにも目的としていたと考えられるものであり(259B)、論究がついに高調して哲人王の自由自在な活躍法の一面についての論究が始まらんとしたおりにも(293A)、論究の重要前提として再確認されたものにほかならない。つまり本篇が最初から目的としていたものが、真に間断なき知的抽出作業の一大連続のはてに、ついにその真姿を完全に現わすにいたったのである。そしてこの一例からもわかるように、本篇では論究中

の前方部でさりげなく述べられた多数の事項が後方部で深く意味づけられたり多少変形されたりしつつ目標物解明のために再着眼・再利用されているのであり、かくてこそ本篇自体が言論のまさに目のつんだ織物(310E)になって濃密な統一体たる形をなしているのである。この具体例の一つについては311Aの箇所の注1参照。その他、本稿の前記後記の諸所での、内面的関連についての諸指摘に随時注意。

四

では、かかる強固な統一性を誇るに足りる本篇の哲学的功績は、いかなるものであろうか？　けれどもしかし、その全論点を詳論することは紙面制限により不可能に近いゆえ、本稿では哲人王と法律なるものとの関係をめぐる本篇の政治思想の一端のみを中心として考察し(四―九)、その他若干の重要事項はこれを付論するにとどめることとする(一〇―一一)。以下は筆者の新視点よりの分析ないし解釈である。

本篇でのプラトンの政治哲学上の態度は、一部の解釈者の所見とはむしろ異って、冷厳苛酷な政治的現実の救済がまず不可能なことについては絶望に近い諦念のごときものを示しつつも(301C～Dや302Bなどを参照。――なお、この諦念は超現実の真実在たるイデア的なるものに主焦点を合わせ続ける哲学者の宿命であるから、この点を本篇の特色とすることは当たらない)、しかしけっして悲観主義的ではなく、あの理想国の描出たる『国家』を書いた壮年期のプラトンの態度と依然同様に、じつはきわめて理想主義に燃えたものであり、積極的意欲の横溢したものである。哲人王は、前記梗概から知られるように、『国家』におけるものに劣らず健在であり躍動的であるとみられうる。もちろん『国家』に詳論されているような哲人王育成のための教育課程、つまり数学的諸学問などを課したうえ対話法を最終完成のために習得させるというあの壮大な帝王学は、本篇ではすでに再説明不要のものとしてか、まったく言及されていない。哲人王は既成品のかたちで梗概Ⅱ(4)(a)の箇所で突如としてと形容されてよ

いかたちで、つまり比類なき超越者にふさわしい方式で出現する。しかも哲人王なる名称そのものはその箇所でもあるいは本篇末尾までの諸箇所でも、じつは一度も用いられていない。『国家』での哲人王に該当すると考えられるものを指して、本篇初頭に近い梗概Ⅰ(2)の箇所から末尾にいたるまで一貫して用いられている言葉は「真にその名に値する政治家」とか「王者にふさわしい人」とかあるいは「王者」とかであるにすぎない。

そしてなお念のためにここで一言しておけば、対話法という語は、この政治家の真姿を探索する老若二主要対話者の論究作業が限られた主題を扱うにすぎぬものであるにもかかわらず、それが同時に、対話法なる全般的なものに一層熟達するという哲学全般の学習をこころざす全般性を秘めたものなることを述べる梗概Ⅰ(7)(b)の箇所で二、三回使用されてはいても、この対話法をその精髄とする「哲学」という語自体は、本稿が後ほどわずかな言及をおこなう予定の272Cにおいて(梗概Ⅰ(3)の箇所で)一回のみ用いられているにすぎない。また哲学者という語も、ソフィストと政治家と哲学者との三種をそれぞれ主題とする対話篇三部作が順次書かれるべきことを主張する冒頭部(梗概Ⅰ(1))で二度用いられているにすぎぬから、本篇の探索の専一目標体は、むしろ哲学者とは一応区別されるべき政治家の真姿であって、哲学者は本篇とは別箇に予定されていたはずの「哲学者」なる題の対話篇のために温存されて、本篇ではこれへの言及が意識的に避けられていたけはいがある。(ただし本篇の哲学性の或る一面については、本稿一〇で言及する。――なお、プラトンは『ソピステス』『ポリティコス(政治家)』『哲学者』なる三部作関連をなすべきものとしては哲学者について作品をついに書かなかったのであるが、その理由は一応不明としておく。哲学者についてはプラトンは別の関連において、つまり『法律』の後篇たる『エピノミス(法律後篇)』において死の直前におよび書いたにすぎない。)

それにもかかわらず、本篇の一貫的に統一された大論究が明示した真の政治家ないし王者の実体は、これがその本領をみせつつ最初に登場する箇所(梗概Ⅱ(4)(a))の始めから、強力無比の知識・技術を自由自在に発揮する超

現実的支配者たる以上、『国家』におけるまさに哲人王の風貌を明らかに帯びている。だからこそ、たとえば本篇の古典的注釈を書いたキャンベルが297Dへの注釈において、唯一の正当な政体と呼ばれている政体の支配者が哲人王にほかならぬことを指摘したのも当然である(同箇所への注1参照)。——ただし本篇での哲人王はじじつ善のイデアを見るべき者なることがかすかに暗示されているとも考えられうるが(293D〜E, 296D〜E)、この点は暗黙の前提とされるにとどまっていて、けっして字面のうえでは述べられていない。本篇では、哲人王がイデアを仰ぐ方向よりも、その治下の社会へむかって力を及ぼす方向がむしろ中心問題とされている——。

しかも、この哲人王と同一視されてしかるべき人物が原則的には単独支配者としての単数の王者である旨指摘されて(292E〜293A, 304A)、地上の諸政体の一種としてはこれに似た単数者による支配政体の価値が少数者支配政体や多数者支配政体の価値と比較考察されてはいても(梗概Ⅱ(8)のほぼ全体)、この比較考察は302Bでも明言されているように一種の副次的作業にすぎないのであって、本篇がその最初から探索の中心目標として照準するものは、実質的には単数の王者の真姿であったことに異論はないであろう。たしかに、291D sqq. などにおける単独支配者政体なる語は別として、この単独支配者なる語は301Bではじめて現れる語ではあるけれども、この単数支配者なる概念は本篇初頭近くの部分(梗概Ⅰ(2))のなかの、たとえば260Eなどにみえる命令の最高決定者なる語のうちに、不完全ながらはやくも予示されていると解釈できるであろう。そしてこの、命令の最高決定者としての王者の具体的活動方式の最重要点のうちの一つが、本篇の終りに近い箇所で(梗概Ⅱ(9)の全体、とくにその末尾305C〜E)、軍隊統帥法などのような、王者の技術を除けば国家の最高諸機関にかかわる高貴な諸技術にたいする王者ないし真の政治家による最終包括的な支配統轄活動にほかならぬことが解明されるにおよんで、単数支配者としての王者なるものの深くして不滅の意味が明示されたと考えられてよい。たしかに、政府最高諸部門(つまり特殊的専門職の最高位者)の、王者による全般包括的支配統轄という概念の確立こそ、政治理念一般のもっとも重要

な真理の永久不可侵な一部分の発見なのであって、ここで確定された真理を基礎としてはじめて、たとえば現代の大多数の文明先進国での常識である文官による武官の統制(civilian control)なる概念が成立しえたと言えるであろう。おもえば、この種の統制統轄の確然たる概念は『国家』においてはまだ十分には明示されなかったものである(G. C. Field, *The Philosophy of Plato*, p. 104)。そしてまた、キケロがその名著『義務について』第一巻(二二の七七)における美しい詩行によって、「戎器はトガ〔平服〕にゆずるべし、文治のほまれに桂冠も」(泉井久之助訳・岩波文庫四六ページ参照)と簡明に歌ったのも、プラトンが発見したこの思想に準拠したものとみてよい。

そして、この単独支配者としての王者について、これと同時にさらに注意すべきは、本篇以前の著作たる『国家』においてはその第四巻末尾の445Dにおいて「君主支配政体(バシレイアー)」という語が比較的軽い意味で「最優秀者支配政体(アリストクラティアー)」と並記されているにすぎないという点、言いかえると、『国家』の所説によれば善のイデアを見ることができた国家守護者たち(phylakes)ならだれでも哲人王たりうるわけであるから、最上の支配者はかならずしも単独支配者たることを要しないことになる、という点である。また、本篇以後の著作たる『法律』でも、国家の支配機関はその第一二巻において詳述されているとおりの複数者からなる「夜明けまえに催される委員会」であるのだから、単独支配者による無類に強力な最高統轄活動の方式は、すくなくとも本篇でみられるほど明瞭ではないと解されうる。もちろん本篇においても、真の知識を持つ者は一人かあるいはきわめて少数の者のみであって〔多数者ではありえない〕という点が293Aや300Eなどで指摘されてはいても、やはり、真理の部分的反映たる地上の諸政体のうちでは〔法律遵奉的な〕単独支配者政体が最良のものであるとの価値評価の言葉からも暗に理解されうるように、理想的支配者は単独の王者であるべきだという見地が、本篇では強調的に表明されていると見てよいであろう。たしかに本篇では、真の政治家とか王者とか王者にふさわしい人とかは、だいたいにおいて単数形で書きあらわされているのであるが(2)、この事実も、本篇における王者は単数的なものとして考え

られていると見るべきことを裏づけているかと思われる。しかしそれはいったいなぜであろうか？

五

それは、端的に言えば、真実在としての王者の、したがって固い統一体たる一個のイデア的理想体としての王者の、その治下の国家にたいする権力行使の力動的な方式を、国家社会機構の分析によるその認識を基礎として明らかにすることを、本篇はその中心課題として選んでいるとみられるからである。言いかえれば、国家社会の社会改良をおこなってギリシア人社会の頽勢（たいせい）を挽回しようとするプラトンの熱情的な理想主義が、強力な権力体の手による、国家社会の、一種のいわゆる社会工学的方法による、善を目ざしての統治のメカニズムの構造解明をおこなうことを意図して書きあげられたのが、まさに本篇であったと解されるからである。このメカニズムが問題とされるとき、権力体は単独者からなっていようと少数者からなっていようと、そうやって難点がないかぎり、一個の権力体としてのみ、つまり社会の能動的一極としてのみ解されることになる。そして一個の権力体とは要するに一人の支配者、一人の政治家にほかならない。まずそれゆえに本篇では単独支配者としての王者が考察中心点をなすことになる。——つぎに、強権による統治のメカニズムが問われるとき、その強権行使者は、理論的に可能なら、可能な限度一ぱいに偉大きわまることが理想主義的理論にとっては望ましい。この第二の理由により超現実的強権を一身に集めた善なる王者が本篇の探索の一貫した目標体となる。こういう単独支配者への照準がプラトンの意図にとり必要であった内的根拠の一端が、「政治権力細分化のため、それが多数者の管轄下に配分されている政体」たる民主主義政体の全面的弱体性を述べる303Aの箇所の言葉を通じて、いわば裏面から理解されうるのではないか。

六

さらにまた、本篇が、善を目ざしての権力体による社会統治のメカニズムの詳論を課題とする哲学的作品なる以上、本篇は要点上は倫理学や宗教学や自然学などの部門の作品ではなく、むしろ理論社会学ないし政治基礎理論としての政治哲学の部門での重要問題を論じる作品として位置づけられるべきであろう。しかるに社会学的考察はかならず、社会的現実の基礎構造や基本性格の本質を把握する洞察と歴史的事実の趨勢（すうせい）についての正当な大局認識とを重要な一前提とすべきは言うまでもない。けれどもしかし、本篇のプラトンのこの意味での現実認識に多大の影響を与えた一事件が惨憺たる挫折に終ったかれの第三回シケリア旅行であったなどという気のきいた所説には、本解説の筆者はあまり信頼をおきえない。シケリア一都市への遠隔地からの政治的助言を指しているとも、考えかた如何によれば見なされうるような王者からの指示のことが、たしかに本篇に見られはするけれども（300D）、この推定が事実に当たっているとしても、プラトンの現実認識の視点が、この一回の挫折やかれの希望の星たるディオンの憤死などのたしかに痛恨なものではある衝撃的な少数事件のみによって、急激に変化したなどというような解釈は、巨大な思想家の長年にわたる経験の重みと事実把握力の的確さとを無視しすぎるものではないか。その幼少期以来この老年期まで、ペロポネソス戦争の苛酷を、祖国アテナイの屈辱的敗北を、三〇人独裁政権下の不幸を、知性と正義との具現たる師ソクラテスの刑死の不条理を、その他、ギリシアと外夷諸国家の遠い過去以来の無数の興亡を、直接間接に見聞しつづけたプラトンの事実認識の視点と内容とを推度するにあたり、本篇の執筆時がシケリア問題の失敗後であるとしても失敗前であるとしても、この失敗に過大な比重をおくことは明らかに謬見である。それはプラトンを卑小化しすぎる。ゆえに筆者はこの特定事件をむしろ考慮のそとにおく。現にプラトンはその展望の眼を、気も遠くなるほどの太古における二種の長大な循環期での宇宙の状態と、その循環の逆転時における宇宙の大異変と、神に放置された現宇宙全体内に遍在する宿命的な不和闘争の不幸へとむけている。そして万有が良好状態へと自動的・自然的に整えられていた神クロノスの御代では、人間的技術による改善の必要は皆無なるゆえ、

政治技術が完全に不要であったが、現在の宇宙循環期にあっては、まさに不幸と悲惨、病変と解体こそが全世界、全人類、全国家、全個人の根本特質なるゆえ、この惨状改善の方途を人間は独力で工夫して政治なるものを案出せざるをえぬ。破滅へと進む現実の全面的不幸、まさにこれが状況改善の営為たる政治技術を必要としている。——宇宙的規模の不幸を説いて政治の存在根拠を示す。改善への熱意を失えば政治技術もまた消失すると読者に考えこませる、——さすがにプラトンである。

それだけでない。プラトンはつねに多角的である。人間は神助によらず独力で政治技術を発見すべきことをプラトンが示唆している点への注視を筆者はいま促したけれども、この政治技術は、さらにまた、イデアに類似した原質的諸性格に根ざす人間的現実の放置されれば破滅すべき宿命についても、宇宙神話のおりとは別種の、しかし等しく現実の根底的なるものへの遠望力ある視力を活用した真の認識を基礎とする技術である。つまりあの、勇気と慎重との二種の美徳自体の敵対関係にもとづく二種の現実体の相互闘争と自滅とについての認識が、王者をうながして、この両現実の適正な(ゆえにイデア的な認識に立脚した)混合行政活動のためにその政治的強権を揮わせることとなる。ここでも深遠な現実認識、イデア的なるものを見ての事実認識が前提とされている。——さすがにプラトンである。

なお、この面での現実救済が、伝統の神話に依拠しない別種の神聖なものたるイデア的理想体としての王者、あるいは『ソピステス』(250Aなど)で最高類体五種の一つとして確定された動を本質とする躍動的王者の魂、によってなされるものであることに、あらためて注意されるべきである。つまり、イデア論者プラトンは、あらたな文明時代のあらたな神話創造者であると見られるべきであろう。たしかに、地上の不完全諸政体と次元を異にする哲人王治下の政体が神のごときものと明言されているのは(303B)、このあらたな神話の脈絡を前提としている。

そして、プラトンの時代すなわち文明の時代にあっては、国家の万事の時宜・適正を深遠に把握しえない各種の

劣等無能な連中たるえせ政治家が跳梁していて、これらが政治知識の本質を認識せず、たんに法律や慣習のごとき脆弱なもののみを頑迷に固守していること、このことのゆえに、諸国家の滅亡が終止符の打たれえないものである、という諸国家の歴史の宿命的現実を深刻に直視しておく必要がある。けれどもさらに、この面からの現実認識は、現実のこの不幸な進行を人知によりついに停止させて、現実というものに幸福ないし善を授けようとする意図に発するものである以上、不幸の主原因者たるえせ政治家どもを真の政治家から峻別隔離するための知的分離作業を先決階梯としてまず必要とし、同時にまた、不幸の他の原因者たる法律・慣習なるものの本質についての認識をも必要としている。ゆえにこそ、本篇の相当量の箇所はこのえせ政治家どもを排除する作業のために充当されているのであり、他方、法律のこの消極的否定的側面も、294E〜295E, 298C〜299E などの諸箇所において強調的に述べられざるをえなかったわけなのである。

七

するとまず、えせ政治家とはなにものなのか？　たしかに、社会改良のために正当な強権を揮いうる真の政治家をえせ政治家から排除する作業は、あまりにも無邪気にいきなり始められた(258B)、しかし相当に長くして綿密な考究が、261D において王者を牧者と混同したり、政治技術の発見を意識的に目標とする二分割法による知識なるものの分割が、いつのまにか 264A ないし 264B sqq. において動物の分割作業に変身したために、人間を豚の、政治家を豚飼いの対当物にすぎぬものとの笑止な結論にしか達しえなかったこと(266C〜D)からも理解されるように、じじつ困難きわまる作業なのである。いったい、排除されるべきえせ政治家とは、なになにであるのか？——

えせ政治家どもとは、牧者のごとく、悪に染まぬ草深いアルカディアなどの牧歌的山中で、分業によって機能する統治諸技術を、これらとは截然と区別されるべき別の独自の機能により統轄するかわりに、自己が直接に単身で

これら諸技術を兼備している文明以前の番人である(268A〜B参照)。この種の番人は人間集団を或る二足獣群としか見なしえず、人間にのみ特有の歴史の不幸にはなんら関与しないから、求められたる政治家とは程遠い。それらはまた、太古の平穏な宇宙に君臨する神政者クロノスの部類である。かかる神は治下の社会の対立的緊張をも、ゆえにまた強権的改良法をも知る必要がないからである。

それらはまた、配下の社会により自発的に受容されるごとき単純な世話という統治をなす支配者である。現実はこの支配者の期待するほど甘くはないからである。

それらはまた、祭政一致の自足を素朴に信じている神官のたぐいである。

それらはまた、異様に変身するソフィストや内紛に狂奔する各種の党派指導者である。

それらはまた、将軍や高級官僚である。かれらは特殊技術には精通するが、それの発揮の適正な時宜なる技術の真の核心(284E)を知らぬゆえ、現実の全体的把握と全面的改善との統轄技術の行使をもなしえぬからである。

それらはまた、法律慣習のみを固守する不完全諸政体の支配者である。かれらは相対物を絶対化するゆえ、国家浮沈の鍵(かぎ)たる事項の決定に臨み、かならず過誤を犯すからである。

八

ゆえにこそ、真の王者つまり社会改良のための最高権力体は法律類の本質を認識して、その実効性の限界を熟知すべきである。自己の不動性を本来望むものたるとともに限られた語数で表記されたるゆえのその表現力の局限性を特色とする法律が、社会の単位たる個人間の無限の多様性と、その全体や部分の常時変動性とを特色とする国家社会にとり有益低度のものたることは、梗概Ⅱ(4)(b)で要点的に既述したので、この点は再説しない。しかしこの不滅の真理を述べる当所(293E〜296A)をあらたに熟読すると、真の王者といえども、国民各自のそばに常時付

き添って各時最善なる改良策を厳密に指示してやるという世話術の理想活動をおこなうことは原理的に不可能なることが示唆されていることに気づかれるであろう(295A末尾から295Bへの箇所。295A初頭部。また王者でなく法律についてであるが294A末尾から294B初頭への箇所の指摘も王者につき妥当する)。王者は個人の世話をでなく多数者が作る集団の世話術者たる以上、この原理的な不可能性の障壁を王者でも克服しえない。ゆえに集団の管理・世話を任務とする王者は、じつは生徒集団指導者たる体育教師同様、集団管理の唯一手段たるべき法律の効用を、法律の本質的概約性にもかかわらず、可能なかぎり集団適応的なものへと法律を改変しつつその本質的欠陥を回避して利用することによりはじめて、その活動をなしうるのである。ゆえにこの梗概Ⅱ(4)(b)の箇所は、一見、法律の限界や弱体性を、王者の法律無視的で自由な知性的純粋活動と対比しつつ強調しているかに思われるけれども、じつは同時に、王者にとり立法活動と法律とがいかに必要なるかを、また、いかなるものとしてのみ必要なるかを、周到に説いているのである。現に、この箇所では、法律の消極面が刻明に強調されつつ、同時に、立法処置が必要不可欠なることをも(294C末尾から294D)、立法の知識が王者の知識の一要素なりとの真理(294A)の意味をも、客人は力のかぎり説明せんとしているのである。そしてこうして法律の限界自覚と法律の必要理解とを同時になすことこそ、変動の社会力学、社会改善を目的とする政治哲学の重要特色なのである。要するにこの意味での力学が正面から課題となるときはじめて、王者にとっての法律の不可欠性が理解される。だから哲人王治下の理想政体自体がじつは理想的法治主義に立脚する政体なのである。現に、真の司法官も、参照すべき法律を立法者たる王者から受領する旨の指摘がある(305B)。——ともかく以上が、法治主義の哲学的基礎付けの最重要点である。

九

かくて、知識・技術による王者の知的活動と緊密に協力すべき不可欠物として積極的に是認されてしかるべき法律なるものの存立根拠を解明したことは、本篇の貴重な哲学的業績としてきわめて高く評価されるべきであろう。ところがそれに続いて、つまり社会改良を目ざす理想的統治のメカニズムのなかで法律がはたすべき積極的機能を確立する基礎作業を一応終えたうえで、さらに別の面から法律について肯定的に承認されるべきそれの機能の意義を若干箇指摘している(これは、法治主義の哲学的基礎づけのための不可欠な補論となる)。別の面から、と筆者がいま注意したのは、真に善なる哲人王が、つまりプラトンの意欲的に意図する真の社会改良のための右記の意味での社会工学における絶対不可欠の善なる権力体という一極が、すでにまったく欠如しているのが普通であるような地上の諸政体の諸国家のばあいへ、いまやプラトンは目を転じていくからである。本篇はさきにも筆者が指摘したように、真の社会改良のための統治のメカニズムを解明することを主眼とする作品である。ではなぜ、根本的な社会改良の不可能な諸国家へプラトンは目を転じたのか？

それはひとつにはそういう不完全な諸政体の不完全性を如実鮮明に描くことによって、理想的統治の理想主義的な偉大さをいわば逆照明するためであったともまず考えられる。知識・技術のみを持ちながら善を目ざすことのない(ゆえにじつは真の技術を欠いた、——善と正義とは技術の主要素である。293B～Dを参照——)専門家たち——いわゆる政治家をも含む——の横暴から一般国民がその身の安全を守るためには——つまり天界的な理想政体以外においては——極度に厳重な法律の力により、この横暴な専門家たちの、つまりえせ政治家たちの、不正を防止することが最大の急務である(298A～B, 300A)。法律のこの意味での必要性は、不完全な諸政体における法律・慣習の唯一絶対物としての必要性と、けっきょくはほとんど同一のものである。この必要性は前述の理想政体におけ

る改善への希望の輝きに満ちた法律の明かるい必要性とは天地の差ほども異って、法律を厳重にすればするほど人生を息苦しく暗憺たるものにしてしまうような（298C～299E, 302Bなど）必要悪の暗い必要性にすぎない。もちろんここには、あの、善への意欲から発する改良への統治における動（王者の知性）と静（世話のための暫定手段としての法律）との緊張に満ちた躍動的メカニズムはほとんどまったく見られない。では、くりかえして問う。なぜ、このような暗黒と幻影との世界へプラトンは目を転じて、相当量の論究を（298A～303C）この世界の構造種々相とその相互間の価値関係との解明作業へ割り当てたのか。それはひとつには、すでに一言したように、超現実の理想政体がいかに必要なるかを逆照明法で説き、地上に真の王者が発生するようにと人々に希求させ激励することが目的であったと解釈されるべきであろう。本篇で真の王者が導入されたのは、支配者はただ知識をそなえる者であれば可なりという、対話進行上の冷静な理論的要請のみにもとづいていたのであるから（292B～293A）、そのような王者の必要性自体はその導入の箇所では、じつはあまり痛感されなかったことをわれわれは思いだしてみなければならない。ところがこんどの、不完全諸政体について論じる前掲箇所では、法律・慣習のみが支配的たるのに反し真の王者の不在であるような諸国家、つまり劣等無能なえせ政治家のみの支配する諸国家の、まさにその理由による滅亡沈没の相次ぐ歴史的現実の不幸を強調することによって、王者不在の法治主義一辺倒の欠陥を、民主主義的法治主義の窮屈を極限化して述べる先行箇所（298C～299E）との相乗効果によって読者に印象づけるとともに、地上における真の王者の発生という奇跡に近いことの実現へと（301C～E）、ギリシア語を解する全読者を奮い立たせようとするのが、プラトンの主眼であったと解すべきではないか。

そしてさらに、プラトンがこの暗黒の現実へ論究の方向を転じた第二の理由としては、理想的なるものと明知との得られがたい暗い混沌のなかへ敢然と突入して、この種のものを研究対象となしうべき学問の新分野を開拓しようとするプラトンの一貫した学風が挙げられるべきであろう。この点については、「真実に近い物語」のみがそれ

について可能な自然的宇宙についての壮大な作品『ティマイオス』を構想したプラトンの探究心とか、イデア論の不備を克服し補充するために毛髪や汚物などの反価値的なものについてもそのイデアを設定しようとして(『パルメニデス』130C〜E)、ついにいわゆるプラトン後期イデア論なるものへの道を開きうるにいたったあの意欲すさまじい新研究へのプラトンの勇気などを思いおこせば十分であろう。そして要するに、こういう暗黒のなかに残されている事物についても、それを可能なかぎり認識し、そこに多少とも善への道を模索しようとするプラトンの積極的で強靭な学風が、本篇著述ののちやがて、現実にありうべき範囲での善き国家のための詳細きわまる法規を説いた大著『法律』を産むこととなる。だからこの『法律』はもちろん、本篇『ポリティコス(政治家)』も、現実にたいするプラトンの絶望などから生まれた作品などではけっしてない。かりにこれらが絶望の作品であるとしても、プラトンによって絶望されたその現実は、たんなる空無ではなくて、その上空には眩しいかぎりの光線を放射する太陽のような理想たるイデアがその現実を照りつけている。そして暗い現実もその太陽のときとして遠いかなたで或るかすかな実在性を持ちうる。たとえば、存置されるべき不完全諸政体(297D, 302E)とは、要するにかかる実在性を持つ。それゆえにこそこの種のものも、これが「有らぬもの」に近い「有るもの」ではあっても、なんらかの処方箋をともかく必要としている。そしてかかる処方箋であることにむしろ甘んじてこそ、地上の法律というものはそのところを得ることになるのではないか。この点を本篇は297E, 300A, C, 301A, 302Eなどで多角的に説くことによって、法治主義の哲学的基礎づけをその消極面においても真に遺漏なくおこなっている。

一〇

そこでつぎにわれわれは、あの理想としての真に善き政体へふたたび目を返して、そこで不断に続けられるべき改良への統治の力学における中心的権力体たる真の王者というものが発見されうるためにとられたプラトンの学術

の方法の特色の一端を瞥見しなければならない。

とうぜんのことながら、プラトンは本篇の著作に着手するまえから、本篇に特有の課題についても、真の王者の真姿についても、ゆえにまた前記のメカニズムのことについても、熟知していたはずである。しかしこの熟知されているものについて整然たる広義の論理階梯(つまり対話法の論理)を用いて徐々に明示していくとなると、ことはかならずしも簡単ではない。――277Dにこの種の困難にかんする言及の一種がある――。

まず、厳しい方法的意識を伴う(262A～263B)二分割法(いわゆるディアイレシスのもっとも正当的な一手法)が、先行の作品『ソピステス』での方法を踏襲して、知識と動物とについて試みられる。けれどもこの二分割法は、ひとつにはそれの着眼点の誤りによって失敗する。しかしこの失敗は、動物とその飼育術とを着眼点として選んだことのみの結末ではない。それはむしろ、前記のとおりの社会力学の対象たる錯綜した諸機能の複雑な働きかたを、完全に考慮のそとに置いていたために結果した失敗であったと見るほうが正しいであろう。

それゆえにこんどは、二分割法という方法による探究法は主要方法としては一応放棄されて、力学的作製作業たる機織り術が類例(パラデイグマ)として選ばれる。たしかに、王者の統治の方法(275A, 276E)は国家組織体を作る一種の作製作業にほかならぬゆえ、この作業を解明するための手ごろなモデルとしては、着物を作製する機織り術を選ぶのが論究の最適な方途となる。そして、まず(i)、その技術の中心作業とこれに協力奉仕する従属的諸作業との分離と、これらの全技術のそれぞれの特殊機能の発見とが、本来の直接原因と補助原因とのそれぞれの概念規定をおこなうべき必要を感得させつつ、綿密きわまりなく進められていく。こうして確定された補助原因なる概念が、やがて、まず287Bにおいて本篇の本論が始まるにおよんで、国家統治活動の直接原因者にとり不可欠ではありながらそれとは異質のものを、つぎつぎに分離していく。さらに、王者の真姿が抽出されたあとにおいても、王者が混合行政のための材料を入手しようとするにさいして、中心的活動者たる王者が機織り術の中心作業部分に

比定されつつ、この王者に、機織り術の補助原因者たる毛梳き職人に対応すべき小児教育者が、機織り術のばあいと同様に、従属奉仕すべきことが明示される。さらにこんどは(ii)、機織り術の製品を中心とする面に類例としての意味が与えられる。つまり、機織り術の二部門が作製する縦糸と横糸とは、相互に異質な二種の糸でありながら、機織り術はこの二種を、自分の主製品たる織物の作製のための材料として用いること、そしてこの織物の作製とは一種の編み合わせであること、この二点の詳細な確認のうえに立って、王者の混合行政の対象者となる相互対立的な二種の気質の人間集団が、それぞれ縦糸と横糸とに類似していると見られ(309B)、またこの混合行政が機織り術の編み合わせに比定され(306A, 309B, 311B)、その結果としてできあがる王者の技術の製品たる理想的組織体としての国家もまた織物に比定されている(306A, 311A, C)。なお、編み合わせ(symplokē)とは、そのイデア論的重要性を『ソピステス』(259Eなど)で論考された重要概念であった。

ところが、機織り術を本篇が詳細に分析した意義としては右記の(i)と(ii)との、字面に見える二点のほかに、299D〜Eなどを熟読すれば突如として気づかれる意味深い一点がある。すなわち、法律がひとたび悪法となるさいに滅却されるにいたる諸技術の一つがとうぜんながらあの複雑綿密な機織り術でもあることになるとすると、この機織り術をさえもたんにささやかな技術と見なしつつ(279A)その白昼の真実自体(278E)の把握のための手段としてこれを利用した真の政治技術とは、あるいは、機織り術をさえもたんに些細な事例と見なしつつその解明のためにこれを利用した「偉大で尊厳な部類の実在」(285D〜286B)たるあの王者のイデア的理想体とは、それぞれ、なんと巨大な機構であり、なんと強力な実在であろうか、という驚異の感にわれわれは圧倒されるばかりなのである。この壮大なものへの畏敬の感によって打たれるときとくに、われわれは地上の全政体の空無に比してあまりにも巨大なあの真実在への、不断な着目のみを熱望するにいたる。同時に、地上の万事の無価値を真に知るにいたる。たしかに、万物万事にあまねくわたるようなこの種の愛知の熱望を呼び醒ますことこそ、じつは、機織り術の極度

に精密な分析が目的とする心理的効果ではなかったか。たしかに、類例たるべき機織り術の構造は、かならずしもその全部が王者の解明のために使いはたされているわけではない。それにもかかわらず、機織り術の分析にさいして無意味に論じられた事項は皆無である、との若いソクラテスの返答がある(283B)。すると、この若者はその返答のときすでに、右記のような心理効果に、たぶんおぼろげにであれ、気づいていたと考えられうるかもしれない。つまりこの若者はプラトンの論理の手法をはやくも多少は体得していたのかもしれない。いずれにしてもたしかに、プラトンの論理はほぼつねに、かくのごとくエロース的な、ことに愛知的な含みをやどしている。――そしてそれゆえにこそ、本篇がたんなる「政治家」についての特殊的考究であるのではなくて、対話法全般の活用に長じた者をつくりあげることを、すなわち哲学全般の伝授を、目標とするものであるとの決然たる表明(285D)も、まさに右記の意味でその字面どおりの、あるいはその字面以上の真実をやどした宣言として生きている。対話法にかんする言及箇所(梗概I(7)(b))の本篇における深い意味は、およそこの一点に集約されうる。

それはそうと、方法論上の問題としてあらためて注意すれば、分割法もけっしてたんに梗概I(2)の部分でのみ用いられているのではなくて、その規模に大小の差異はあっても、276A~E, 279B~280A, 281D~E, 282A~283A, 283D~284E, 287B~289C, 302C~303B, 306A~307Cなどで駆使されているのであって、分割法が機織り術なる類例と各種各様に絡(から)み合いながら、王者の真姿の発見とあのメカニズムの解明とに寄与していることに注意されねばならない。しかしそれにもかかわらず、分割法も類例も、依然として、主目標明示の不十全なたんなる方法にとどまっているのであって、これらのいわゆる論理的方法のみが本篇の全課題を解決していくのではけっしてない。これらの固定的な論理に加えて、対話法の自由な駆使によるそのつど適切な指摘があの超現実的実在を直視させつつ、本篇はその全作業をかたづけていくのである。これもプラトンの方法の特徴である。そしてまさにこのような意味において、本篇の論旨はたんなる論理学的整合性の範囲を越えた絶妙に高度な一貫性と統一性とを固く

保っている。しかもさらにこの統一性は対話者両名が、他人の思わくや他人からの非難や称賛にはいかなる考慮もはらわず(260B, 287A)、ひたすら両名の密接な協力により(258D)、自分らだけの意向に従いつつこのうえなく真実な結論を得ようとする(266D)ことによって得られた自己完結的体系性をも身上とするまことに堅牢そのもののような統一性でもある。

二

しかしである。はたしてこれだけでよいのだろうか。かつて「哲学と科学との希有の名作(rare masterpieces of philosophy and science)」のひとつであると認められてギリシア文学者スケンプにより独自の文体で訳されたこともあるこの古典の白眉は、われわれにいろいろと考えこませる。哲学自体の根底をまでも揺がすような問題点をもとりあげてみるようにわれわれを強制する。さすがに名作の作用力たるや強烈である。

まず、その縦の論理の整合性・一貫性のうえで完全に無欠陥な体系というものは、その体系が要素として含んでいる個々の主張を横の側面から個別に吟味してみると、ときに熱烈な賛同を、ときに猛然たる反撥を、読者の胸中に呼び起こすことが往々にしてあるものなのである。批判力に富む読者が本篇の対話の進行を追いつつ、はじめて読み進んでいくときに抱くはずのこの種の賛否両種にわたる反応の一部に訳者自身のかつての印象に照らして言及しつつ、哲学という高貴な営為をもたんにその一部とするような広漠とした無限定な日常的意見の視点に立って、その視点にとっての本篇のおもに部分的な、ときに全体的な意味を論じることは、本篇を誠実に訳した者にも許されてしかるべきであろう。プラトン翻訳者がかならず熱狂的なプラトン主義者たるべき規則はどこにもないからである。そればかりか、むしろこの種のいわゆる外的批評を通じてはじめて、本篇の全体的価値も本篇の真意も、不完全にではあれ、察知されうる可能性があるのではないか。

それはつまり、一度は勇を奮って反問してみなければならない点があるからである。——いったい、政治家は知識を持つものの一種である、との本篇の論理の出発点をなす根本命題(258B, 292B)自体に、なにかの欠陥があるのではないかと。考えてみれば、長大論究の末の重要な一結論が、優秀な国家社会を構築すべき知識・技術は死刑類似処分その他の極刑による劣悪分子の一掃作業という単純作業的なるものに終ったことや(308E〜309A——なお、三八六ページの補注Cを参照)、あるいは、知識・技術にさえ適合した医療処置であれば、医者は患者を説得することなしにでも患者に強制すべきであるという見地は(296B〜C)、われわれを完全には承服させえない物騒なところをどこかに持っていると感知するのが健全な意見ではないだろうか。じじつ、本篇後に書かれた『法律』IV. 720B〜Eでは、このような強制のみをおこなう医者は奴隷を診療する医者であって専制僭主に似ており、自由市民の治療にあたるべき医者なら、患者やその友人たちとよく相談するような加療法を選ぶべきだ、と説かれている。あるいはまた、王者の治下の国民が、本篇初頭部分で(261D sqq.)牧者が牧養すべきものを指して頻繁に用いられた動物群なる名によって依然として呼ばれていることも(295E)、あるいは、その同じ国民が機織り術の材料たる糸類なる無生物に比定されていることも(309B sqq.)、どちらもなにか人間蔑視の臭いがすると感じる或る民主主義的人権主張のがわも、イデア論否定の傾向にはあるけれども、多少の正当性は持つのではないか。——ともかくこうして、帰結の諸部分に幾分かの不穏当なところを見せる理論体系は前提のなかになにかの誤謬を含むのかもしれないと疑いつつ、われわれは始めから一度考えなおしてみるべきではないか。

つまり要するに、政治が知識の一種であるとの前提から出発してその主知主義的帰結のみを導くにとどまった本篇の全体は、じつは、あたかも『パルメニデス』第二部(137C sqq.)が「もしも〈一〉が〈有る〉なら」などの種々の仮説から純粋論理によってそれぞれ各様の帰結を導いてみせたような純粋体系に類似したものを、政治理論の一種として提示してみせた巨大な試論であるにすぎないのかもしれないのである。だから『パルメニデス』第二部でも

種々の仮説が考えられたように、「政治」の本質究明のためにも種々の仮説が考えられうるのかもしれない。いな、ことによれば、他の仮説もまた可能であることに人類が気づいて政治理論を一層発展させることを、長大な本篇の著述によってプラトンは期待したのかもしれない。たんに「政治は最高貴の知的営為である」などと箴言ふうにのみ述べることの無意味を本篇が二度も暗示しているように(281C〜D, 283B)、主知主義的政治理論が精細の極みをつくして詳論されおえたときはじめて、その理論の欠陥も察知されうることとなる。

それではいったい、どのような政治理論が真に正当なのか？　この真の奥義については、本篇はとうぜんながらまったく沈黙している。だからわれわれは考える。「本篇の大論考は真剣な遊戯であったのだろうか？　真理の一部はたしかに述べられたが、全真理は……けっきょくわからない」と。そして、これが『書簡集』「第七書簡」のあの有名な言葉の、つまり「〔哲学の奥義については〕わたしの著書というものは存在しないし、また、いつになってもけっして生じることはないであろう」という言葉の(341C, cf. 344C)ほんとうの意味であったのか、とわれわれは思うばかりであろう。――後期著作群中の名作たる本篇も、若き日のプラトンと同様に、しかし格段に大規模に、こうして無知の知をついに教えているようである。そして、この無知の知が哲学再肯定への道へ通じていこうと、あるいは、ときに哲学からの離反の道へ通じていこうと、それは一応各自の自由というものであろう。そして、はたして「愛知のいとなみ」が272Cで説かれているほどに人間のもっとも幸福な営為であろうか、と反問しつつ、もしもこの離反の道を進むことにすれば、あの強力な社会改善のためのイデア論的模索はすべて放棄され、われわれの社会は「な望みそ不死のいのちは」とのホラティウス『抒情詩集』第四巻第七歌七行での訓戒に従い、国家の興亡流転のなかにただ身をまかせて、「つつましく人住む小路」でのほそぼそとした一市民的詩歌などをひそやかに開花させるのみとなることだろう。――しかし、こんどもまた、それだけでよいのだろうか？

(1)　この箇所は、全体としては小供じみた論理遊戯としての二分割法による序論の部類のものに近いとみなすべきであろう。

ただ、この箇所の論旨の中心点について一言すると、ホメロス以来のギリシア人の通念によれば、アガメムノンのような典型的な王者というものは、直訳的に言えば「国民の牧者」のことであるとみられていたので(たとえば『イリアス』第二巻二四三行などを参照)、そのような常識の不備を論理的吟味によってあらかじめ暴露しておこうという意図が客人にあったのかもしれない。——しかしいずれにしても、この箇所の論旨は本篇の核心からはほど遠い。したがって、たとえばロス(D. Ross, *Plato's Theory of Ideas*, p. 118)などのように、本篇におけるプラトンのイデア論の精髄をこの箇所の考究のなかだけにあるかのような説を立てることは、本篇全体の論旨に反する不十分な解釈であると、筆者としては考えざるをえない。しかし一般の傾向として、ロスに近い見地をとる学者は少くない。

(2) 「王」、「王者」、「王者にふさわしい人」、「政治家」などをあらわす原語は、それらの単語が単独で用いられているばあいに限って筆者が調べたところでは、総計六六例あらわれる(290Dの「国王」(単数)は含めない)。この六六例のうちの五六例は単数形で書かれている。複数形であらわれるのは、したがって一〇例のみであるが、そのうちの六例は、「一般に王者(政治家、その他)の部類に所属するようなすべての者」とか、「王者(その他)なるもの」とかの含みを多かれ少なかれ持っている。また、「現実の地上にいる政治家(王)たち」のような意味で自然に複数形が用いられている例が二例ある。また、「えせ政治家たち」は二例みられるが、これを複数形で書くのが自然なことは言うまでもない。——ゆえに、「当の種のもの」の意味で用いられた右記六例を除き、「真の王者」や「真の政治家」はすべて単数形で書きあらわされていると結論されうる。

主要な使用文献

Bekker, I.: *Platonis dialogi Graece et Latine*, partis secundae volumen secundum, Berolini, 1817.
Stallbaum, G.: *Platonis opera omnia*, vol. IX, sect. I, Gothae, 1841.
Baiterus, I. G.・Orellius, I. C.・Winckelmannus, A. G.: *Platonis opera quae feruntur omnia*, Turici, 1839.
Campbell, L.: *The Sophistes and Politicus of Plato*, with a revised Text and English Notes, Oxford, 1867.

Apelt, O. : *Platons Dialog, Politikos oder Vom Staatsmann,* übersetzt und erläutert, Leipzig, 1914.

Diès, A. : *Platon, Œuvres complètes,* tome IX, 1re partie, le Politique, texte établi et traduit, (collection des universités de France, publiée sous le patronage de l'association Guillaume Budé—société d'édition《les belles lettres》), Paris, 1950.

Skemp, J. B. : *Plato's Statesman,* a Translation of the Politicus of Plato with Introductory Essays and Footnotes, (Rare Masterpieces of Philosophy and Science), (Routledge & Kegan Paul), London, 1952.

Gigon, O. : *Platon, Spätdialoge,* Theaitetos • der Sophist • der Staatsmann • Kratylos ; eingeleitet von Olof Gigon, übertragen von Rudolf Rufener, (die Bibliothek der alten Welt—Artemis Verlag), Zürich und Suttgart, 1965.

Taylor, A. E. : *Plato, The Sophist and the Statesman,* Translation and Introduction, (Dawsons of Pall Mall), Folkestone & London, 1971.

Astius, D. F. : *Lexicon Platonicum,* Lipsiae, 1835.

Barker, E. : *Greek Political Theory, Plato and his Predecessors,* (Methuen), reprinted 1964.

Popper, K. R. : *The Open Society and its Enemies,* vol. I : *The Spell of Plato,* (Routledge & Kegan Paul), London, reprinted 1969.

ヤ　行

ラ　行

ワ　行

マ　行

ナ 行

ハ 行

タ 行

サ　行

カ 行

『ポリティコス(政治家)』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

マ　行

ヤ　行

ラ　行

ナ　行

ハ　行

サ　行

タ　行

『ソピステス』索引

数字と ABCDE は，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字と BCDE(A は数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行